京都府遺跡調査概報

第40冊

1. 桑飼上遺跡
2. 国道9号バイパス関係遺跡
   (1) 千代川遺跡第15次
   (2) 八木嶋遺跡第1次
   (3) 小谷遺跡・小谷17号墳
3. 木津地区所在遺跡
   (1) 上人ヶ平遺跡
   (2) 瓦谷遺跡
   (3) 瀬後谷遺跡
4. 長岡京跡左京第216次・右京第343次
   (1) 長岡京跡左京第216次・向日工区
   (2) 長岡京跡左京第216次・長岡京工区
   (3) 長岡京跡右京第343次・大山崎工区

1990

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，本年で10年目を迎え，特別展覧会・特別講演会の開催，論文集の刊行などの事業を計画・実施しているところであります。これらの諸事業の遂行にあたりましては，皆様方の御協力を賜り，厚く御礼申し上げます。ふりかえってみますと，この10年間に，公共事業は年々増大し，それに伴い，発掘調査は，単に件数の増加だけでなく，近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは，こうした状況に対応するため，徐々にではありますが，組織・体制の強化を進め，調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果については，『京都府遺跡調査報告書』をはじめ，『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また，毎年，「小さな展覧会」・「研修会」を開催し，出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して，一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は，平成元年度に実施した発掘調査のうち，建設省近畿地方建設局・住宅都市整備公団関西支社・日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した，桑飼上遺跡・千代川遺跡・八木嶋遺跡・小谷遺跡・小谷17号墳・上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡・瀬後谷遺跡・長岡京跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として，また埋蔵文化財を理解する上で，何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに，発掘調査を依頼された各機関をはじめ，京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・八木町教育委員会・木津町教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会などの関係諸機関ならびに，調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚く御礼申し上げます。

平成２年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本書に収めた概要は，下記のとおりである。

　1.　桑飼上遺跡　　2.　国道9号バイパス関係遺跡　　3.　木津地区所在遺跡

　4.　長岡京跡左京第216次・右京第343次

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	平元.4.18～平2.2.27	建設省近畿地方建設局 福知山工事事務所	細川康晴 岸岡貴英
2.国道9号バイパス関係遺跡			建設省近畿地方建設局 京都国道工事事務所	引原茂治 鵜島三寿
(1)千代川遺跡第15次	亀岡市千代川町	平元.4.17～9.5		
(2)八木嶋遺跡第1次	船井郡八木町八木嶋	平元.12.12～平2.3.9		
(3)小谷遺跡・小谷17号墳	船井郡八木町本郷	平2.1.10～2.27		
3.木津地区所在遺跡			住宅・都市整備公団	石井清司 伊賀高弘
(1)上人ヶ平遺跡	相楽郡木津町市坂	平元.4.13～平2.3.8		
(2)瓦谷遺跡	相楽郡木津町市坂	平2.1.9～2.26		
(3)瀬後谷遺跡	相楽郡木津町市坂	平元.8.5～11.27		
4.長岡京跡左京第216次・右京第343次			日本道路公団・大阪建設局	戸原和人 竹井治雄 中川和哉 三好博喜
(1)左京第216次・向日工区	向日市鶏冠井町南金村 京都市伏見区羽束師町イカダ	平元.11.8～平2.1.22		
(2)左京第216次・長岡京工区	長岡京市神足大張	平元.4.4～平2.3.9		
(3)右京第343次・大山崎工区	乙訓郡大山崎町円明寺井尻・百々	平2.1.8～3.8		

3.　本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目　次

1.　桑飼上遺跡平成元年度発掘調査概要……………………………………………………… 1
2.　国道９号バイパス関係遺跡平成元年度発掘調査概要…………………………………25
　(1)　千代川遺跡第15次………………………………………………………………………27
　(2)　八木嶋遺跡第１次………………………………………………………………………32
　(3)　小谷遺跡・小谷17号墳…………………………………………………………………36
3.　木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要……………………………………………41
　(1)　上人ケ平遺跡……………………………………………………………………………41
　(2)　瓦谷遺跡…………………………………………………………………………………53
　(3)　瀬後谷遺跡………………………………………………………………………………59
4.　長岡京跡左京第216次・右京第343次発掘調査概要……………………………………65
　(1)　長岡京跡左京第216次調査・向日工区 ………………………………………………68
　(2)　長岡京跡左京第216次調査・長岡京工区 ……………………………………………72
　(3)　長岡京跡右京第343次調査・大山崎工区………………………………………………122

挿　図　目　次

1.桑飼上遺跡

第 1 図　遺跡所在地…… 1
第 2 図　調査地位置図…… 2
第 3 図-1　遺構検出図…… 3
第 3 図-2　遺構検出図…… 3
第 4 図　竪穴式住居跡12(竪穴12)実測図…… 4
第 5 図　竪穴式住居跡13(竪穴13)実測図…… 5
第 6 図　竪穴式住居跡14(竪穴14)・溝18実測図…… 6
第 7 図　竪穴式住居跡15(竪穴15)実測図…… 7
第 8 図　竪穴式住居跡16(竪穴16)実測図…… 8
第 9 図　竪穴式住居跡17(竪穴17)実測図…… 9
第 10 図　竪穴式住居跡12(竪穴12)出土土器実測図……10
第 11 図　竪穴式住居跡12(竪穴12)出土土器実測図……11
第 12 図　竪穴式住居跡13(竪穴13)出土土器実測図……12
第 13 図　竪穴式住居跡14(竪穴14)・溝18出土土器実測図……13
第 14 図　竪穴式住居跡14(竪穴14)出土土器実測図……14
第 15 図　竪穴式住居跡15(竪穴15)出土土器実測図……15
第 16 図　竪穴式住居跡15(竪穴15)出土土器実測図……16
第 17 図　竪穴式住居跡16(竪穴16)出土土器実測図……17
第 18 図　竪穴式住居跡16(竪穴16)出土土器実測図……18
第 19 図　竪穴式住居跡17(竪穴17)出土土器実測図……19
第 20 図　桑飼上遺跡竪穴式住居跡と土器……20

2.国道9号バイパス関係遺跡

第 21 図　調査地周辺遺跡分布図……26

(1)千代川遺跡第15次

第 22 図　千代川遺跡調査区配置図……27
第 23 図　No.29区遺構平面図……28
第 24 図　No.32区遺構平面図……29
第 25 図　出土遺物実測図……30

(2) 八木嶋遺跡第1次
第 26 図　八木嶋遺跡トレンチ配置図……32
第 27 図　第7・8トレンチ遺構平面図……33
第 28 図　出土遺物実測図……34
(3) 小谷遺跡・小谷17号墳
第 29 図　小谷遺跡トレンチ位置図……36
第 30 図　小谷遺跡2トレンチ断面図……37
第 31 図　小谷17号墳地形図……38
第 32 図　出土遺物実測図……39
3.木津地区所在遺跡
(1) 上人ケ平遺跡
第 33 図　調査地位置図……42
第 34 図　上人ケ平遺跡調査区配置図……43
第 35 図　上人ケ平遺跡遺構配置図……44
第 36 図　西地区遺構配置図……45
第 37 図　東地区遺構平面図……46
第 38 図　出土遺物実測図……51
(2) 瓦谷遺跡
第 39 図　瓦谷遺跡調査区配置図……54
第 40 図　瓦谷75番地地区遺構実測図……56
第 41 図　出土遺物実測図……57
(3) 瀬後谷遺跡
第 42 図　瀬後谷遺跡調査区配置図……59
第 43 図　A－1トレンチ東区遺構配置図……60
第 44 図　出土遺物実測図……61
4.長岡京跡左京第216次・右京第343次
第 45 図　調査地位置図……65
第 46 図　長岡京条坊図……66
(1) 長岡京跡左京第216次・向日工区
第 47 図　向日工区6ブロック12－1・12－2トレンチ平面図……69
第 48 図　掘立柱建物跡SB216101実測図……70
第 49 図　溝SD216101実測図……71

第 50 図　向日工区６ブロック出土遺物実測図……72

(2)長岡京跡左京第216次・長岡京工区

第 51 図　長岡京工区調査地字切図……73
第 52 図　６ブロック調査トレンチ配置図……74
第 53 図　６ブロック調査トレンチ平・断面図……75
第 54 図　６ブロック第８トレンチ出土遺物実測図(1)……76
第 55 図　６ブロック第８トレンチ出土遺物実測図(2)……77
第 56 図　６ブロック第21トレンチ出土遺物実測図……78
第 57 図　７ブロック調査トレンチ配置図……79
第 58 図　７ブロック第９トレンチ平面図……80
第 59 図　７ブロック第９トレンチ溝・柵列・平断面図……81
第 60 図　７ブロック第９トレンチ長岡京条坊遺構……81
第 61 図　土坑 SK 216047平・断面図……82
第 62 図　７ブロック第９トレンチ出土遺物実測図(1)……83
第 63 図　７ブロック第９トレンチ出土遺物実測図(2)……84
第 64 図　７ブロック第22トレンチ平面図……85
第 65 図　７ブロック第22トレンチ長岡京条坊遺構(1)……88
第 66 図　７ブロック第22トレンチ長岡京条坊遺構(2)……89
第 67 図　７ブロック第22トレンチ出土遺物実測図(1)……90
第 68 図　７ブロック第22トレンチ出土遺物実測図(2)……91
第 69 図　７ブロック第10トレンチ平面図……93
第 70 図　７ブロック第10トレンチ長岡京条坊遺構(1)……95
第 71 図　７ブロック第10トレンチ長岡京条坊遺構(2)……96
第 72 図　古墳時代河道ＳＲ216049平・断面図……97
第 73 図　古墳時代竪穴式住居跡ＳＨ216009平・断面図……97
第 74 図　弥生時代竪穴式住居跡ＳＨ216036平・断面図……97
第 75 図　弥生時代土坑平・断面図……98
第 76 図　７ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(1)……99
第 77 図　７ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(2)……100
第 78 図　７ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(3)……101
第 79 図　河道 SR 216049出土土錘実測・法量分布図……102
第 80 図　河道ＳＲ216049出土木製品実測図……103

第 81 図　7ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(4)……104
第 82 図　竪穴式住居跡SH216036出土石器実測図……105
第 83 図　7ブロック第23トレンチ平・断面図……106
第 84 図　7ブロック第23トレンチ長岡京条坊遺構……106
第 85 図　7ブロック第23トレンチ出土遺物実測図……107
第 86 図　8ブロック調査トレンチ配置図……108
第 87 図　8ブロック調査トレンチ平・断面図……109
第 88 図　8ブロック第11トレンチ出土遺物実測図……110
第 89 図　8ブロック第24トレンチ出土遺物実測図……111
第 90 図　9ブロック調査トレンチ配置図……111
第 91 図　9ブロック調査トレンチ平・断面図……113
第 92 図　9ブロック第12・25トレンチ出土遺物実測図……115
第 93 図　10ブロック調査トレンチ配置図……116
第 94 図　10ブロック調査トレンチ平・断面図……117
第 95 図　10ブロック第13・26トレンチ出土遺物実測図……118
第 96 図　11ブロック調査トレンチ配置図……118
第 97 図　11ブロック調査トレンチ平・断面図……119
第 98 図　11ブロック第14・27トレンチ出土遺物実測図……120
第 99 図　Aブロック調査トレンチ配置図　調査トレンチ平・断面図……121

(3)長岡京跡右京第343次

第100図　調査地周辺調査位置図……124
第101図　トレンチ配置図及び平面図・土層柱状図……125
第102図　15・16トレンチ平・断面図……126
第103図　出土遺物実測図(1)……128
第104図　出土遺物実測図(2)……129
第105図　出土遺物実測図(3)……130

図　版　目　次

1.桑飼上遺跡

図版第１　(1)竪穴式住居跡11・12・13(東から)
(2)竪穴式住居跡11・12・13(南から)

図版第２　(1)竪穴式住居跡13(南から)　(2)竪穴式住居跡14(南から)

図版第３　出土遺物(1)

図版第４　出土遺物(2)

2.国道9号バイパス関係遺跡

(1) 千代川遺跡第15次

図版第５　(1)29区全景(南から)　(2)32区全景(南から)

図版第６　(1)32区柱穴完掘状況(北から)　(2)32区島状部分南端完掘状況(東から)

(2) 八木嶋遺跡第1次

図版第７　(1)調査地遠景(南西から空中写真)　(2)調査地遠景(南東から)

図版第８　(1)No.７トレンチ遺構検出状況(北から)
(2)No.７トレンチ建物１検出状況(東から)

図版第９　(1)No.８トレンチ遺構検出状況(北から)
(2)No.13トレンチ遺構検出状況(東から)

(3) 小谷遺跡・小谷17号墳

図版第10　(1)小谷遺跡調査前全景(北西から)　(2)小谷遺跡７トレンチ(南西から)

図版第11　(1)小谷17号墳調査前全景(北から)　(2)小谷17号墳玄室(北東から)

図版第12　(1)小谷17号墳玄門部(南東から)
(2)小谷17号墳閉塞石前遺物出土状況(北西から)

3.木津地区所在遺跡

(1) 上人ケ平遺跡

図版第13　(1)SH102・103・104及び19号墳全景(北から)　(2)SH102全景(西から)

図版第14　(1)SH104全景(東から)　(2)SH103全景(東から)

図版第15　(1)SH105全景(南から)　(2)SH133全景(南から)

図版第16　(1)SB106全景(南から)　(2)SB107全景(西から)

図版第17　(1)18号墳全景(南から)　(2)18号墳完掘状態(北から)

図版第18　(1)18号墳鉄器出土状態(南から)　(2)18号墳周溝内土器出土状態(西から)

図版第19　(1)A建物跡群全景(南から)　(2)SB304全景(西から)

図版第20　(1)SB301・302全景(西から)　(2)C建物跡群全景(南から)

図版第21　(1)SB310全景(東から)　(2)SB314全景(西から)

(2) 瓦谷遺跡

図版第22　(1)IKW 4 bt全景(南東から)　(2)IKW 5 bt全景(南東から)

図版第23　(1)IKW24bt-1全景(西から)　(2)IKW24bt-2全景(西から)

図版第24　(1)IKW24bt-3全景(北西から)

(2)IKW28btトレンチ北壁断面(南西から)

図版第25　(1)IKW27bt調査区全景(南西から)　(2)IKW75bt木樋検出状況(南から)

(3) 瀬後谷遺跡

図版第26　(1)A-1トレンチ東端部全景(北から)

(2)A-1トレンチ東端部溝内堆積状況

図版第27　(1)B-1トレンチ全景(西から)　(2)C-1トレンチ掘削状況(北西から)

4. 長岡京跡左京第216次・右京第343次

(1) 長岡京跡左京第216次・向日工区

図版第28　(1)向日工区10ブロック　第12-1トレンチ

(2)向日工区10ブロック　第12-2トレンチ

図版第29　(1)向日工区溝SD216101

(2)向日工区掘立柱建物跡SB216101

(2) 長岡京跡左京第216次・長岡京工区

図版第30　長岡京工区　垂直写真(1)

図版第31　長岡京工区　垂直写真(2)

図版第32　長岡京工区　垂直写真(3)

図版第33　長岡京工区　垂直写真(4)

図版第34　(1)長岡京工区6ブロック第8トレンチ(北から)

(2)長岡京工区6ブロック第8トレンチ河道SR216033(北から)

図版第35　(1)長岡京工区6ブロック第21トレンチ溝SD216034(東から)

(2)長岡京工区6ブロック第21トレンチ溝SD216034(西から)

図版第36　(1)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216002(南から)

(2)長岡京工区7ブロック第9トレンチ柵列SA216008(南から)

図版第37　(1)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216003(東から)

(2)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216003(南から)
図版第38 (1)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216004-1(東から)
(2)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216004-2(東から)
図版第39 (1)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216004-3(東から)
(2)溝SD216004出土円面硯(東から)
(3)溝SD216004出土土馬(東から)
図版第40 (1)長岡京工区7ブロック第9トレンチ溝SD216048・土坑SK216047(南から)
(2)土坑SK216047遺物出土状況(南から)
図版第41 (1)長岡京工区7ブロック第10トレンチ溝SD216015(南から)
(2)溝SD216015断面(東から)
図版第42 (1)河道SR216049出土遺物-1(北から)
(2)河道SR216049出土遺物-2(北から)
(3)河道SR216049出土遺物-3(北から)
図版第43 (1)古墳時代竪穴式住居跡SH216009(左下が北)
(2)弥生時代竪穴式住居跡SH216036・土坑SK216045(左下が北)
図版第44 (1)弥生時代土坑SK216052(左下が北)
(2)弥生時代土坑SK216044・SK216050・SK216051(左下が北)
図版第45 (1)長岡京工区7ブロック第22トレンチ全景(北から)
(2)河道SR216042(南から)
図版第46 (1)環濠SX216060遺物出土状況-1(南から)
(2)環濠SX216060遺物出土状況-2(南から)
図版第47 (1)長岡京工区7ブロック第23トレンチ河道SR216013(南から)
(2)長岡京工区7ブロック第23トレンチ(北から)
図版第48 (1)土坑SK216012-1(西から)
(2)土坑SK216012-2(西から)
図版第49 (1)長岡京工区8ブロック第11-1トレンチ溝SD216069(南から)
(2)溝SD216069断面(東から)
図版第50 (1)長岡京工区8ブロック第11-2トレンチ溝SD216067・土坑SK216068(北から)
(2)長岡京工区8ブロック第11-2トレンチ(南から)
図版第51 (1)長岡京工区8ブロック第24-2トレンチ(北から)
(2)掘立柱建物跡SB216070(南から)

図版第52　⑴長岡京工区９ブロック第12トレンチ溝SD216072(南から)
⑵河道SR216046(南から)
図版第53　⑴長岡京工区９ブロック第25トレンチ(北から)
⑵河道SR216046(南から)
図版第54　⑴長岡京工区10ブロック第13トレンチ(左上が北)
⑵長岡京工区10ブロック第26トレンチ(左上が北)
図版第55　⑴長岡京工区11ブロック第14トレンチ(南から)
⑵長岡京工区11ブロック第14トレンチ中・近世溝(南から)
図版第56　⑴長岡京工区11ブロック第27トレンチ(南から)
⑵土坑SK216085・SK216086(南から)

⑶長岡京跡右京第343次・大山崎工区

図版第57　⑴調査地遠景(南から)　⑵７トレンチ掘削状況(南東から)
図版第58　⑴15トレンチ掘削状況　⑵16トレンチ掘削状況(東から)
図版第59　出土遺物１
図版第60　出土遺物２
図版第61　出土遺物３
図版第62　出土遺物４
図版第63　出土遺物５
図版第64　出土遺物６
図版第65　出土遺物７

1. 桑飼上遺跡平成元年度発掘調査概要

1.はじめに

舞鶴市桑飼上遺跡の発掘調査も，今年度で3年目を迎えた。

この遺跡は，近年，重要文化財「景初四年銘鏡」が出土した広峯15号墳や，北近畿最大の巨大円墳である私市円山古墳などで知られる由良川のほとりにあり，河口から15kmの自然堤防上に立地する。

第1図　遺跡所在地

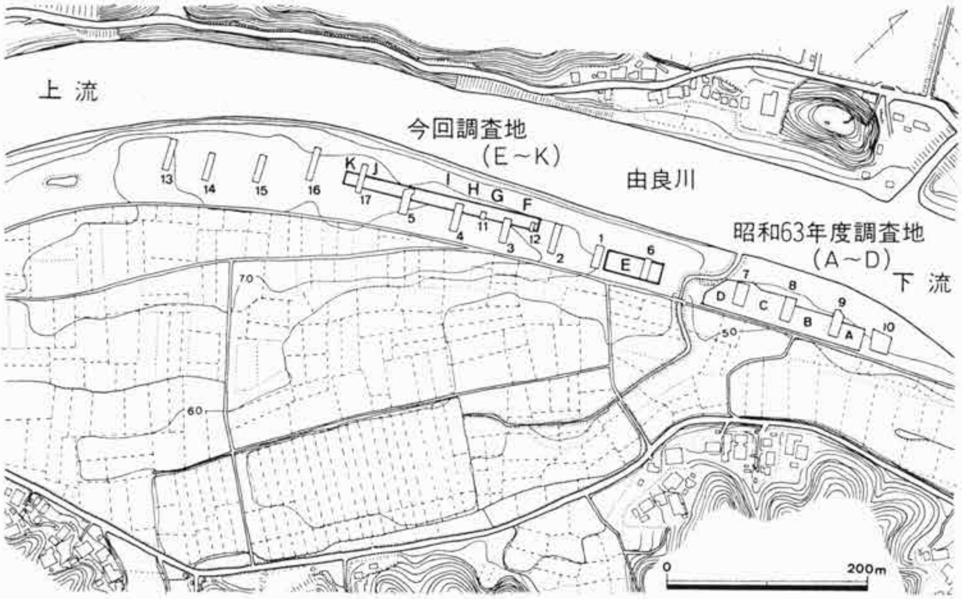
この調査は，由良川河川改修工事に先立ち，建設省近畿地方建設局福知山工事事務所の依頼を受けて，当調査研究センターが継続して行っているものである。今年度は，昨年度の本調査(面的な調査)に引き続き，遺跡内の中間部にあたる地域について調査を行った。

現地調査は，当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美，同調査員細川康晴，石崎善久，森島康雄が担当した。調査期間は，平成元年4月18日～翌2年2月27日を要し，調査面積は4,000㎡である。整理作業は，細川及び調査第2課調査第1係調査員岸岡貴英が分担して行った。

調査に際し，建設省近畿地方建設局福知山工事事務所・同舞鶴出張所・舞鶴市教育委員会社会教育課・京都府教育委員会など，多くの関係諸機関の御協力をえた。地元，桑飼上地区をはじめ，有志の方々には作業員・整理員・調査補助員として調査に従事していただいた(注1)。また，多くの方々には現地調査や整理作業に御指導・御教示を賜った(注2)。記して感謝の意を表したい。なお，調査に係わる経費は，建設省近畿地方建設局が負担された。

2.調査の経過

調査地は，標高7m前後の桑畑や水田となっており，遺構面に達するためには，1.5m以上の堆積土を除去しなければならない。このため，遺構面に達する直前まで重機で掘削し，



第2図　調査地位置図

その後人力により遺構面の精査につとめた。したがって，遺構検出面は標高5m前後となり，水面との比高差は4m程度しかない。基本的層序は，遺構の上面が削平されているため，同一平面で各時代の遺構が検出される。すなわち，Eトレンチでは，茶褐色粘質土(地山)をベースとし，遺構埋土はこれよりわずかに黒味がかった土で，識別は困難である。

一方，FトレンチからJトレンチ北半部では黄褐色粘土(地山)がベースとなり，遺構埋土は茶褐色砂質土を基本とする。南半部は，青灰色粘土の南側からの堆積があり，これは弥生時代から奈良時代の遺物を含む包含層を形成している。この包含層自体もある時期の遺構面を形成していた可能性もある。また，その上層から掘り込まれた遺構が検出できる場合もあるが(Iトレンチの掘立柱掘形)，概して遺構の遺存状況は浅く，遺構埋土も識別しにくい。ほかに，Jトレンチでは，数条の溝状遺構を検出しているが，遺構の残存している範囲が限定されているので，遺構全体のつながりが把握できず性格は不明である。

(細川康晴)

3.検出遺構

主な遺構として竪穴式住居跡6基を検出した。個々の数値は付表のとおりであり，問題点を提示するにとどめ，概観したい。なお，竪穴式住居跡は，竪穴として以下表現する。

Eトレンチでは，昭和62年度の試掘調査段階で竪穴式住居跡1基(竪穴11)を確認していたのでこれを拡張した。他に，竪穴式住居跡2基を検出したが，試掘の1基を含めてもすべて時期が異なり，同時併存しないばかりか，土器型式も不連続なものであった。

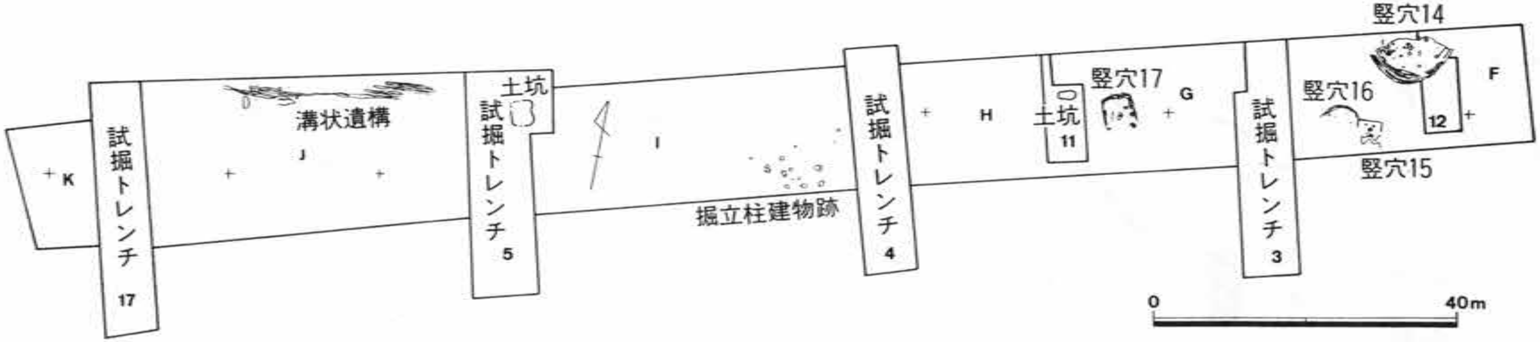
付表 主要竪穴式住居跡一覧表

( )は現存値

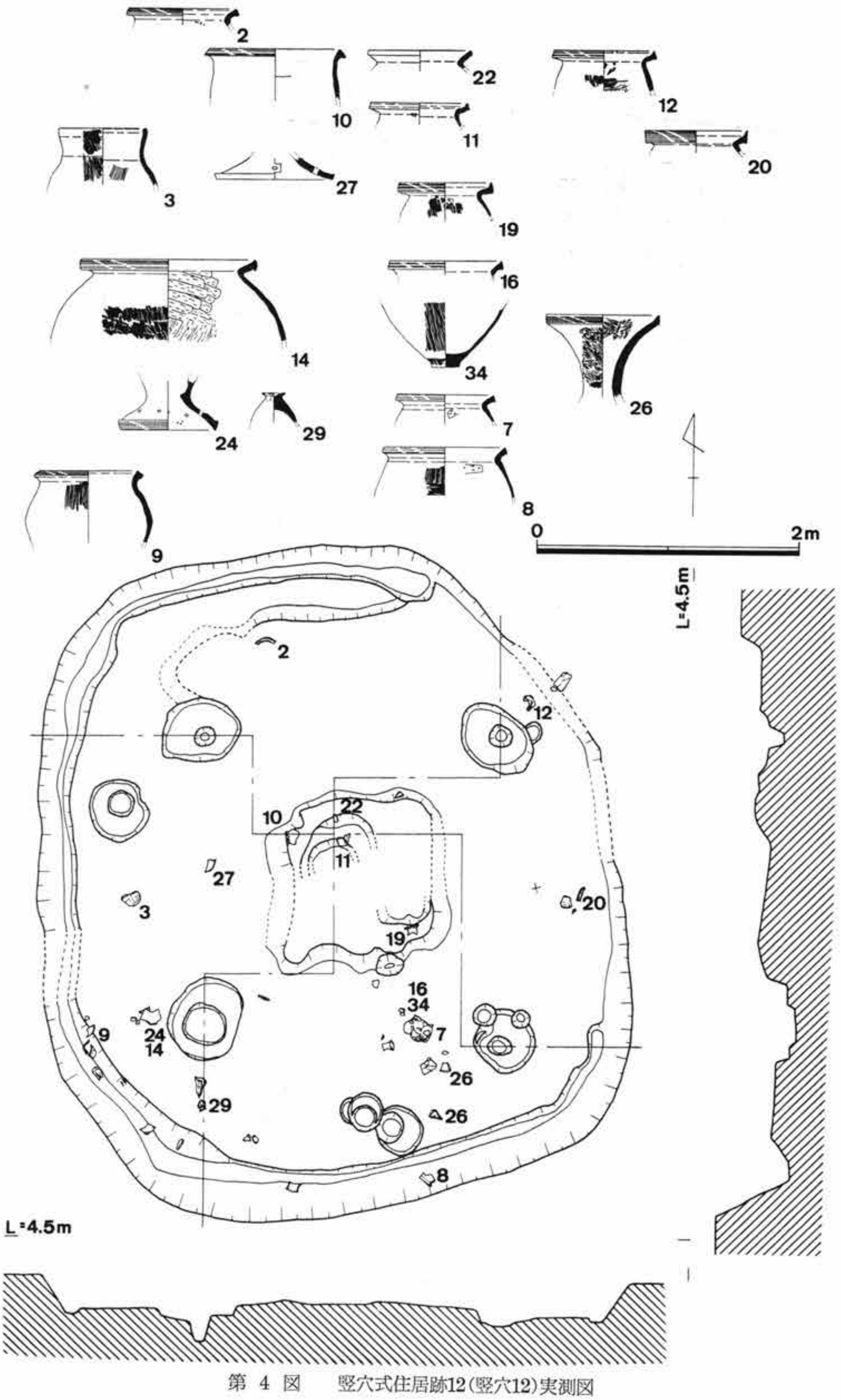
竪穴式住居跡番号	形	規模(m) 東西 南北 深さ＊	出土遺物 土器	出土遺物 玉類	時期	備考
竪穴11	□	4.4×(4.0)0.18	○		古墳時代前期	62年度試掘調査
竪穴12	□	4.4×(5.0)0.27	○	ガラス玉	弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴13	□	3.2×(4.2)0.19	○		古墳時代前期	元年度発掘調査
竪穴14	○	10.5×(6.0)0.28	○	ガラス玉	弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴15	□	3.2× ? 0.11	○	管玉	古墳時代前期	元年度発掘調査
竪穴16	○	6.0× ? 0.27	○		弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴17	□	4.2×(3.8)0.25	○		弥生時代後期	元年度発掘調査

＊□(方形)は一辺の長さ，○(円形)は直径，深さは残存高を表す。

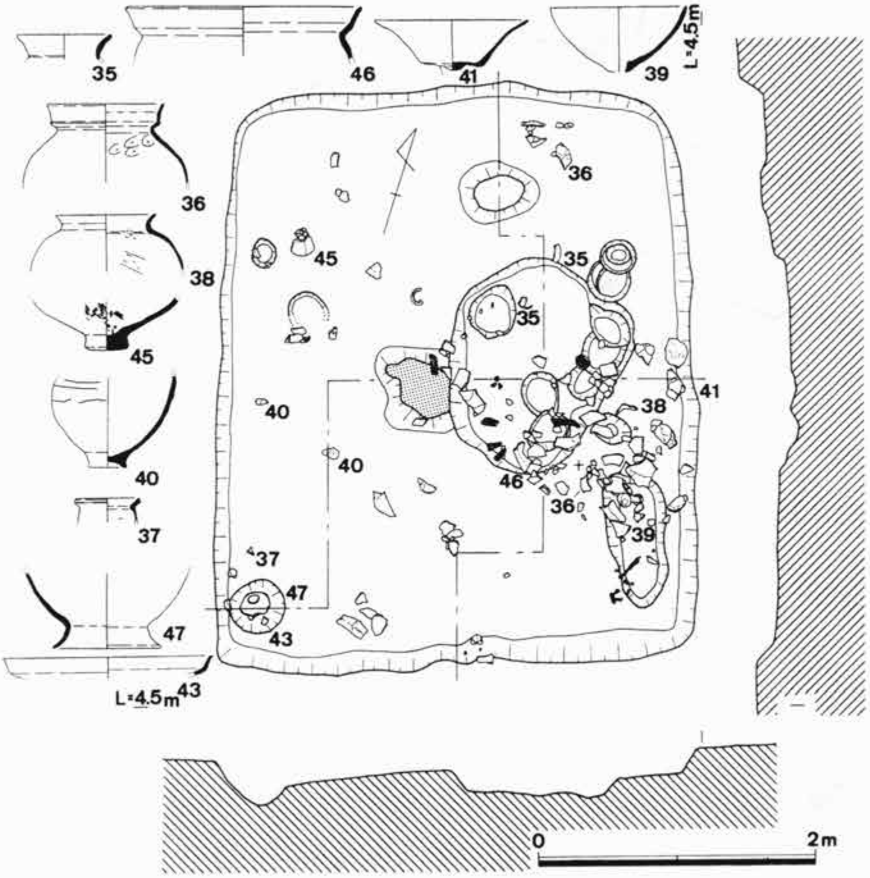
第3図−1　遺構検出図



第3図−2　遺構検出図



第 4 図　　竪穴式住居跡12(竪穴12)実測図



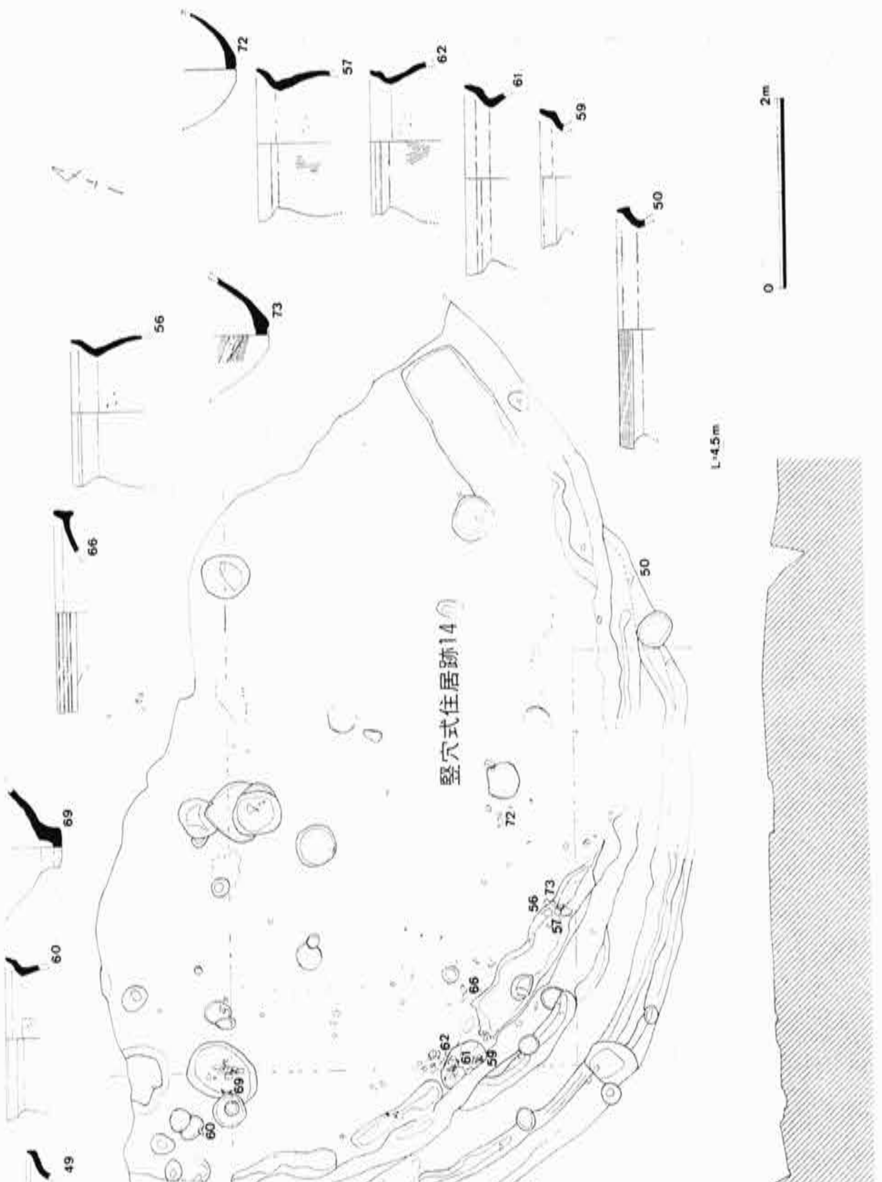
第 5 図　竪穴式住居跡13(竪穴13)実測図

竪穴12は，隅丸方形プランを持ち，主柱穴は基本的に4本柱である。ただ，竪穴掘形の主軸とずれていることは注意を要する。床面遺物は少なく，わずか3点であり，ガラス小玉(図版第4-b)も埋土中から出土した。

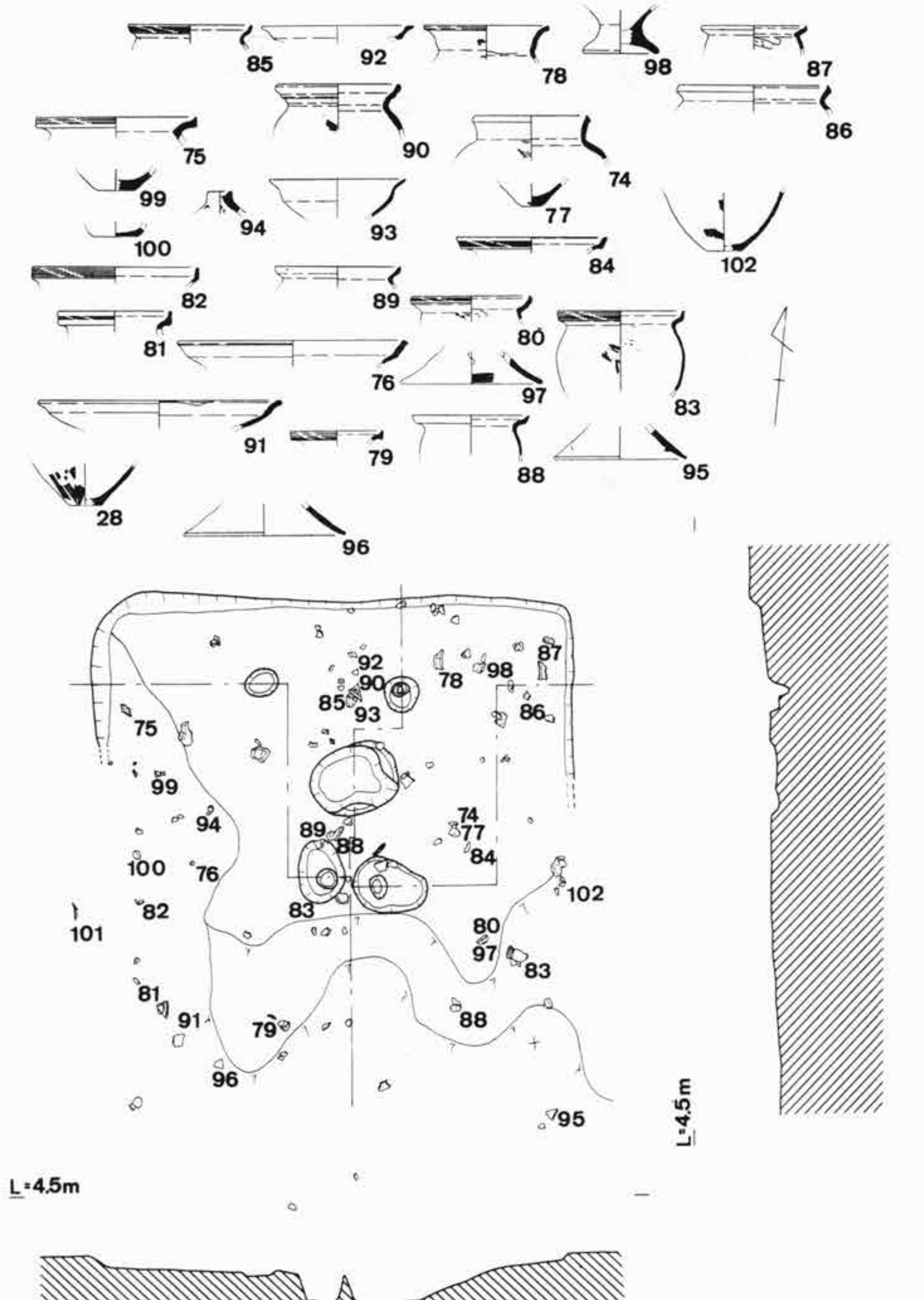
竪穴13は，長方形プランであるが，主柱穴は確認できない。土器の大半は，中央付近に掘られた土坑埋土上層で検出した。西南隅に掘られた土坑(柱穴か？)からは，壺の上半部1個体が逆位で出土した。

FからGトレンチにかけては，上記以外の竪穴式住居跡と溝18を検出したが，いずれも完全な形ではなかった。溝18は，竪穴14の外側南西部分にかけてめぐっている。土器は，ほとんど竪穴式住居跡の埋土からの出土である。

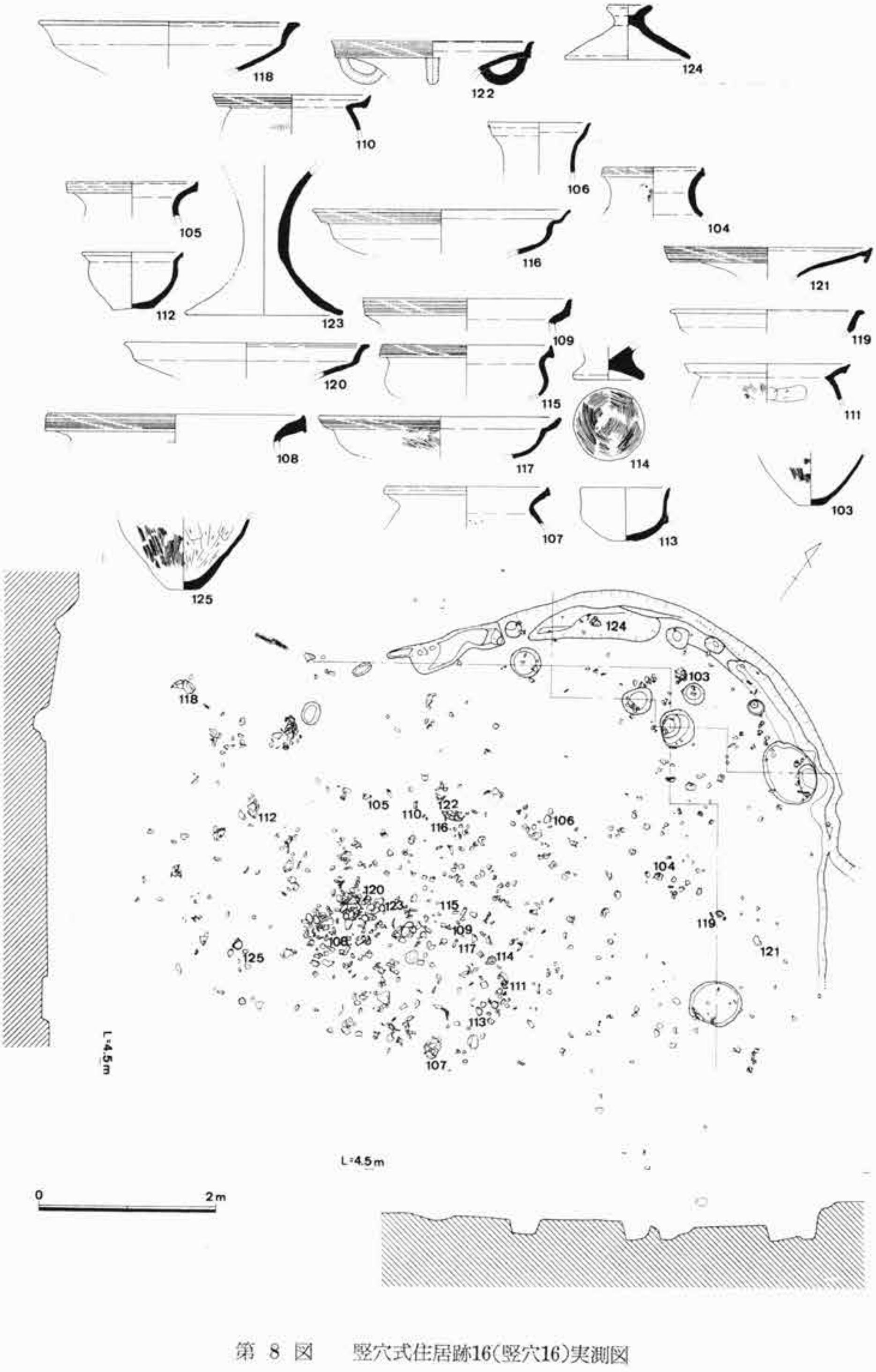
（細川康晴）



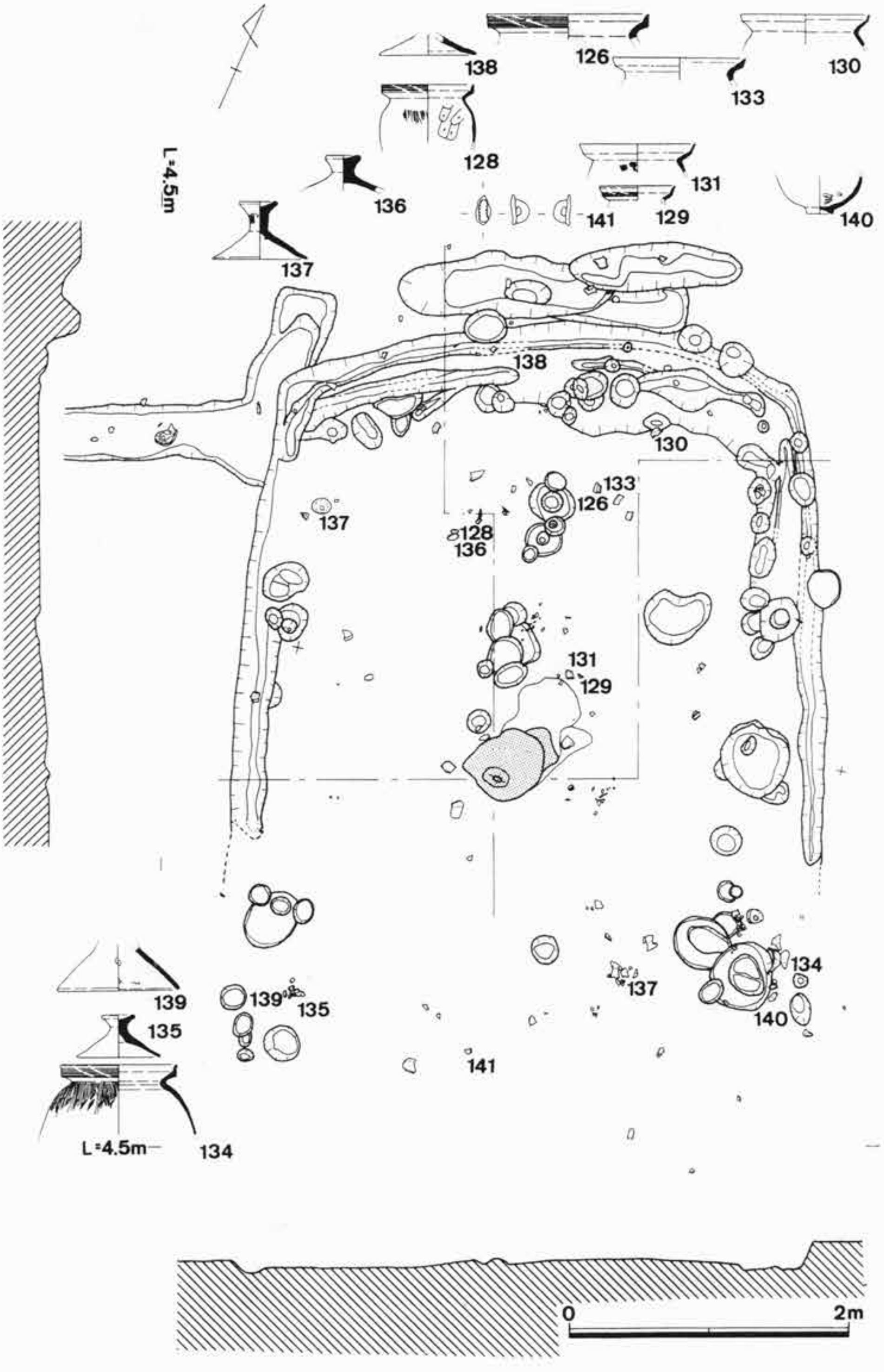
第 6 図　竪穴式住居跡14(竪穴14)・溝18実測図



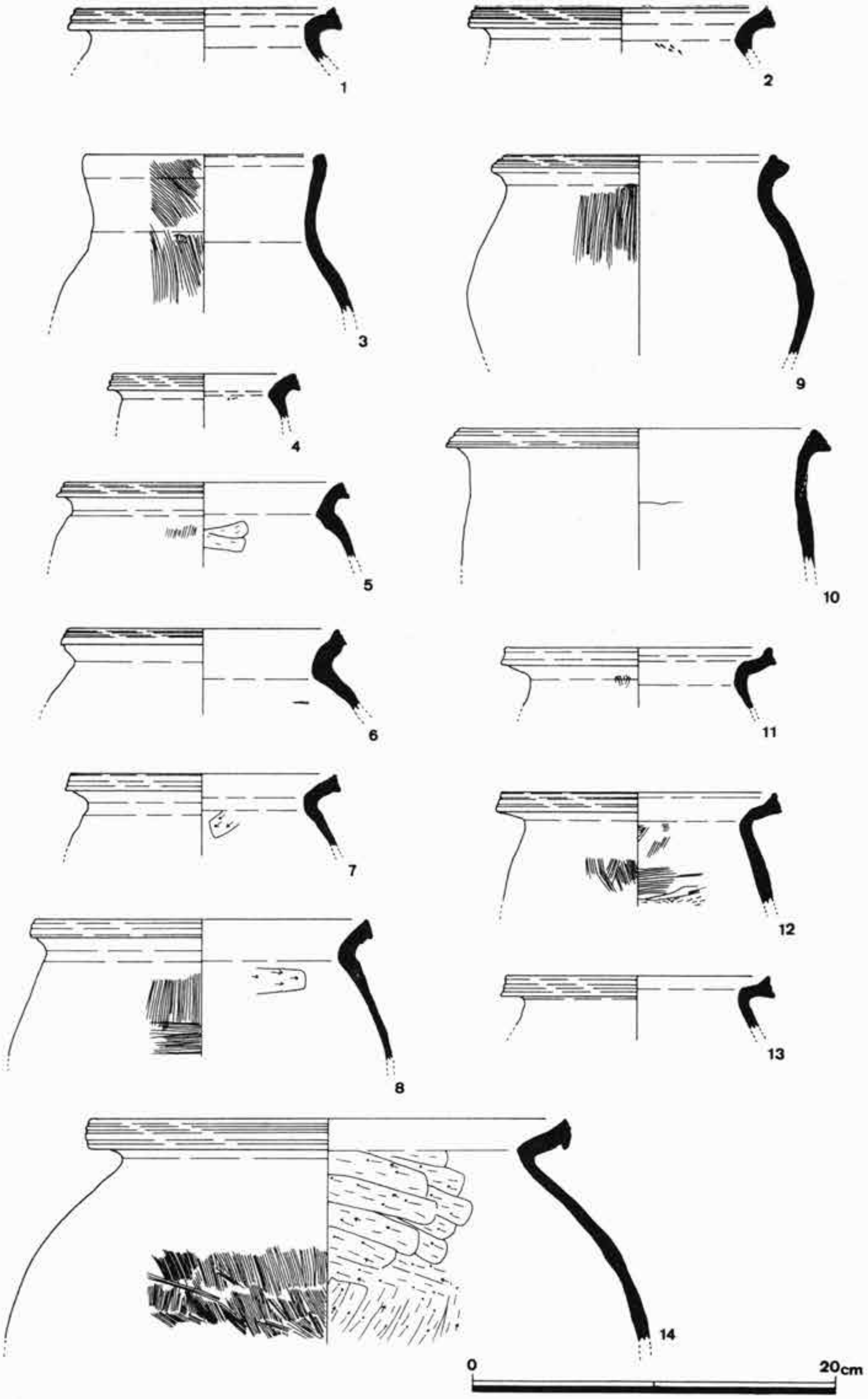
第 7 図　　竪穴式住居跡15(竪穴15)実測図



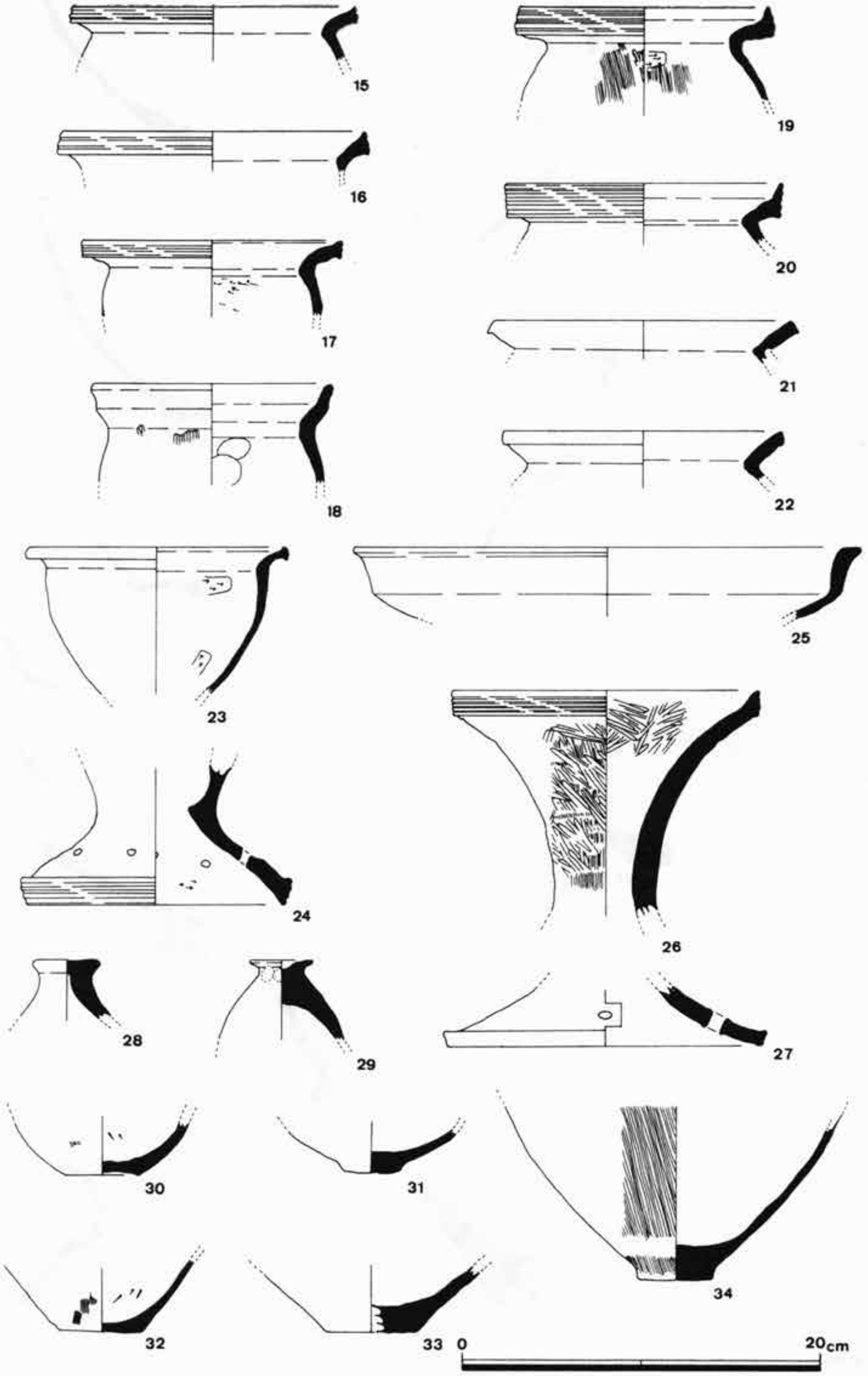
第 8 図　竪穴式住居跡16(竪穴16)実測図



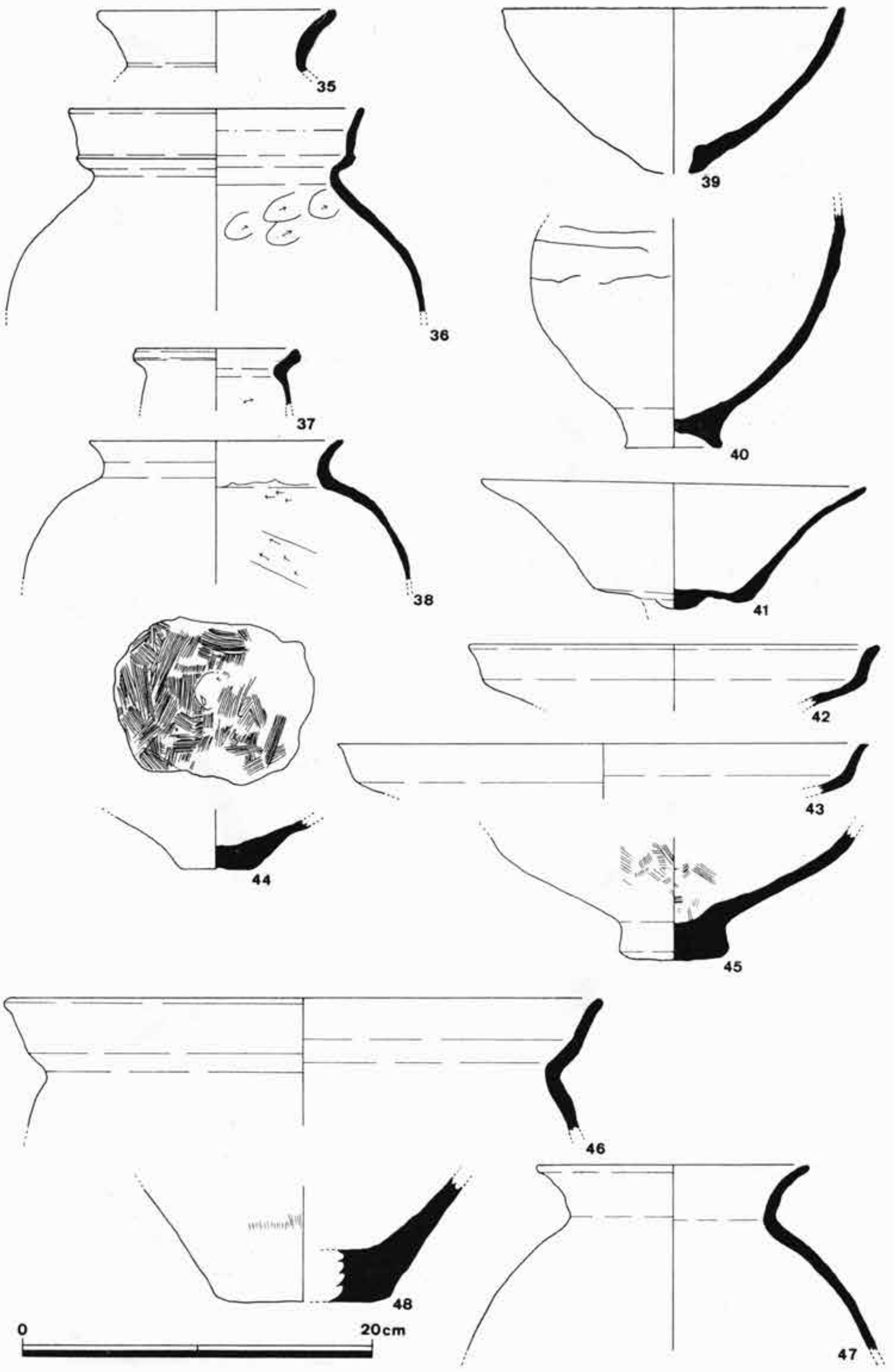
第 9 図　竪穴式住居跡17（竪穴17）実測図



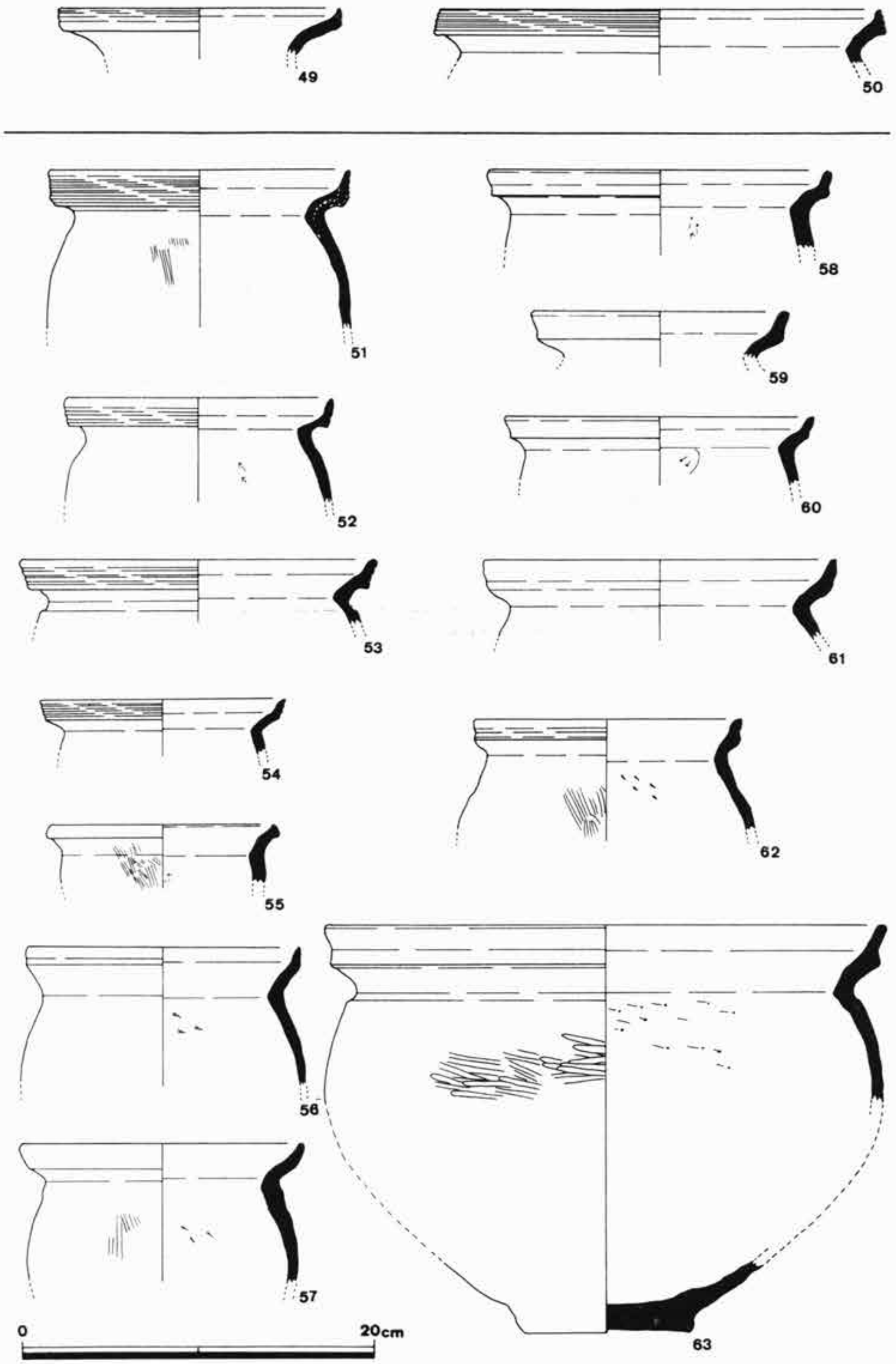
第 10 図　竪穴式住居跡12(竪穴12)出土土器実測図
2・12：床面，1・3〜11・13・14：埋土



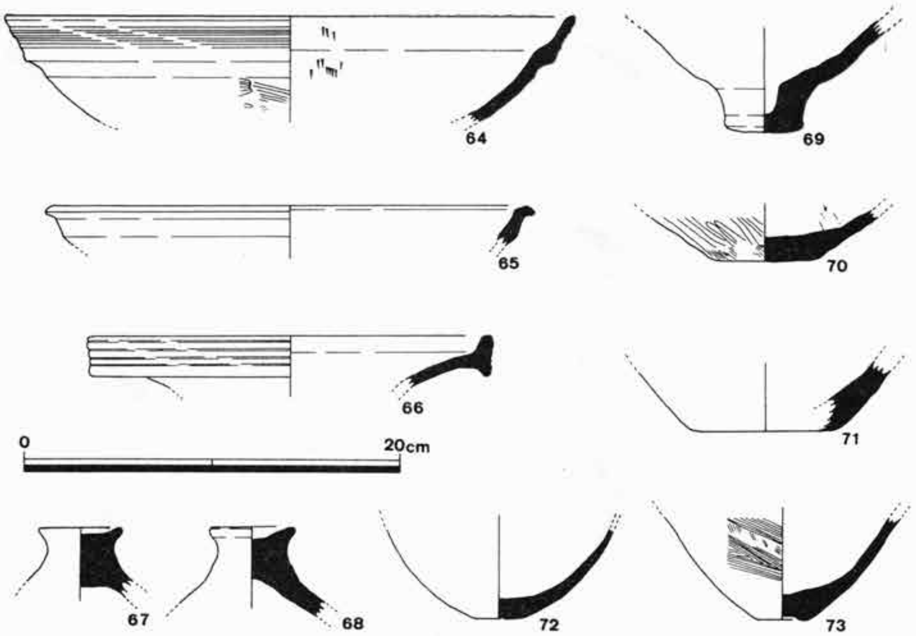
第 11 図　竪穴式住居跡12(竪穴12)出土土器実測図
15～34：埋土



第 12 図　　堅穴式住居跡13(竪穴13)出土土器実測図
47：ピット内，35～46・48：埋土



第 13 図　　竪穴式住居跡14(竪穴14)・溝18出土土器実測図
49・50：溝18埋土，51～63：竪穴14埋土



第 14 図　　竪穴式住居跡14(竪穴14)出土土器実測図
64～73：埋土

4.出土遺物

これらの竪穴式住居跡や溝からは，弥生土器・玉類等が出土している。以下，出土遺物のうち，土器にしぼって遺構ごとに述べる。

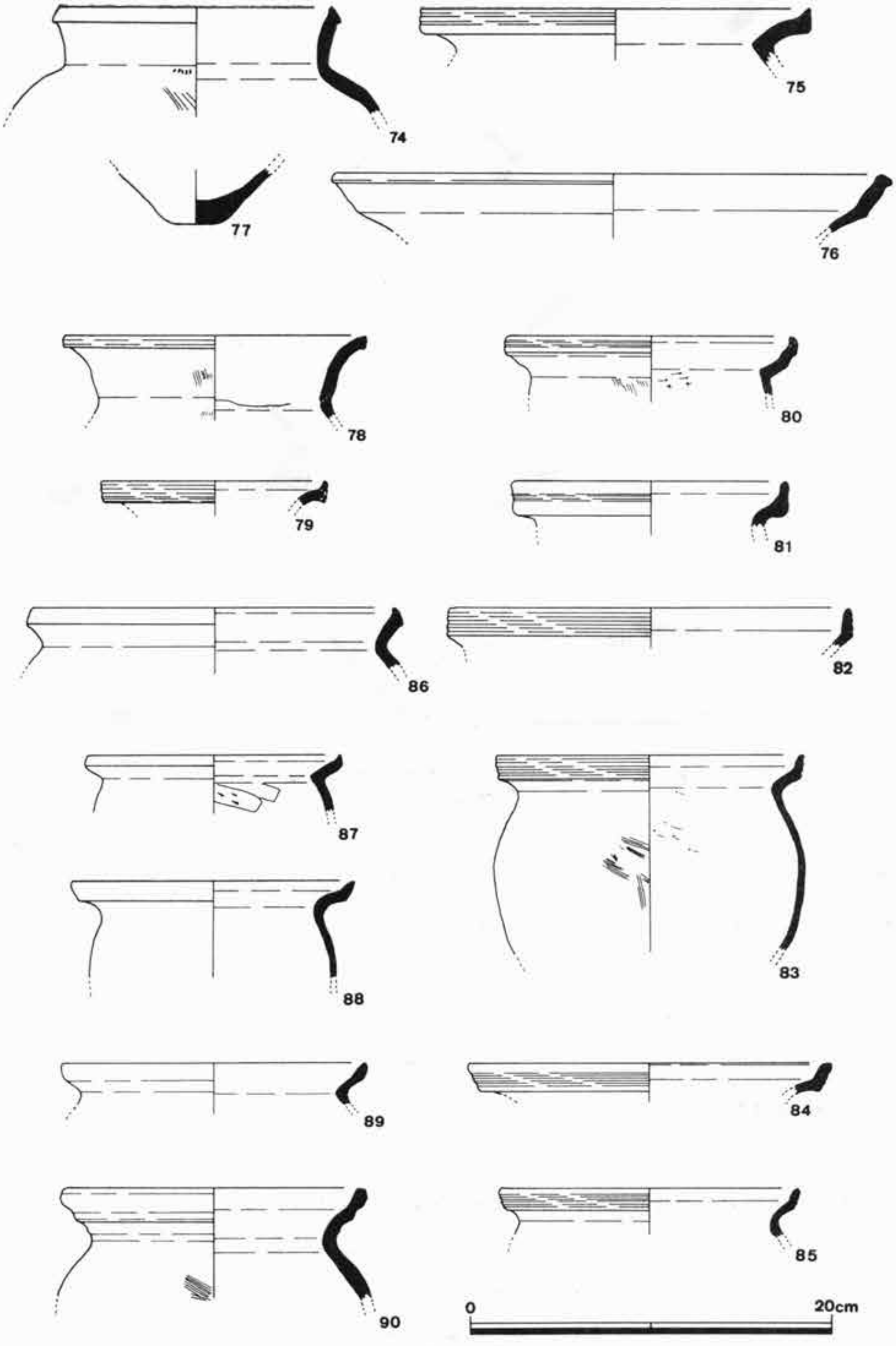
竪穴12出土土器(第10・11図)

出土土器は，床面・埋土のものをあわせると，30個体ほどになる。その中では甕が多数を占める。壺3は，直口壺である。口縁部外面に注目すると，ナデが施された後，体部外面のハケが口縁部にまで及んでいる。体部内面にはケズリが認められる。甕は，口縁部の形態から,内傾もしくは直立ぎみの口縁に2条から3条の擬凹線を施すもの(1・2・4～17・19)，やや外開きぎみにのびる複合口縁に擬凹線を施すもの(20),複合口縁を呈するが擬凹線を施さないもの(18)，単純「く」の字口縁をもつもの(21・22)に分けられる。

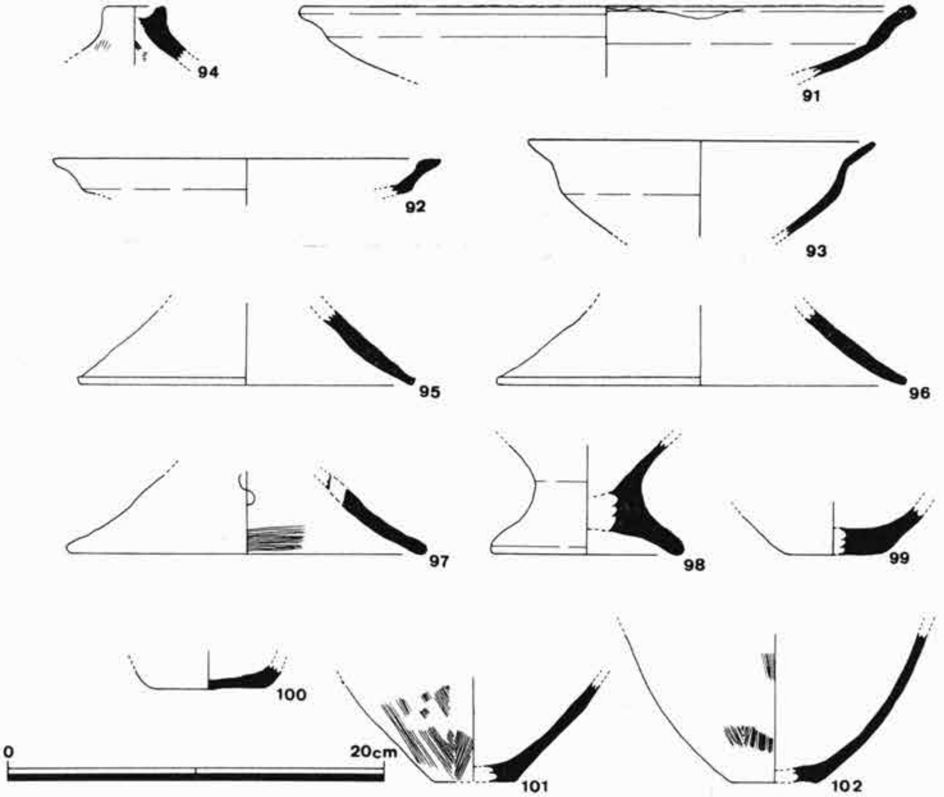
これに加えて，鉢(23・24)，高杯(25)，器台(26)，蓋(28・29)，高杯もしくは器台の脚部(27)，壺もしくは甕の底部(30～34)が見られる。

竪穴13出土土器(第12図)

出土した土器は，床面・埋土出土のものを含めて10数個体ある。また，かなり変化に富んだ器種が見られる。壺は,単純「く」の字状に外反する口縁をもつもの(35・47)と「5」の字状口縁をもつもの(36)に分けられる。甕は小型で,口縁部に擬凹線を施すもの(37),体部が球形で外反する口縁をもつもの(38)，大型の複合口縁をもつもの(46)が見られる。鉢



第 15 図　　竪穴式住居跡15(竪穴15)出土土器実測図
74・77：床面，75・76・78～90：埋土



第 16 図　　竪穴式住居跡15(竪穴15)出土土器実測図
91～102：埋土

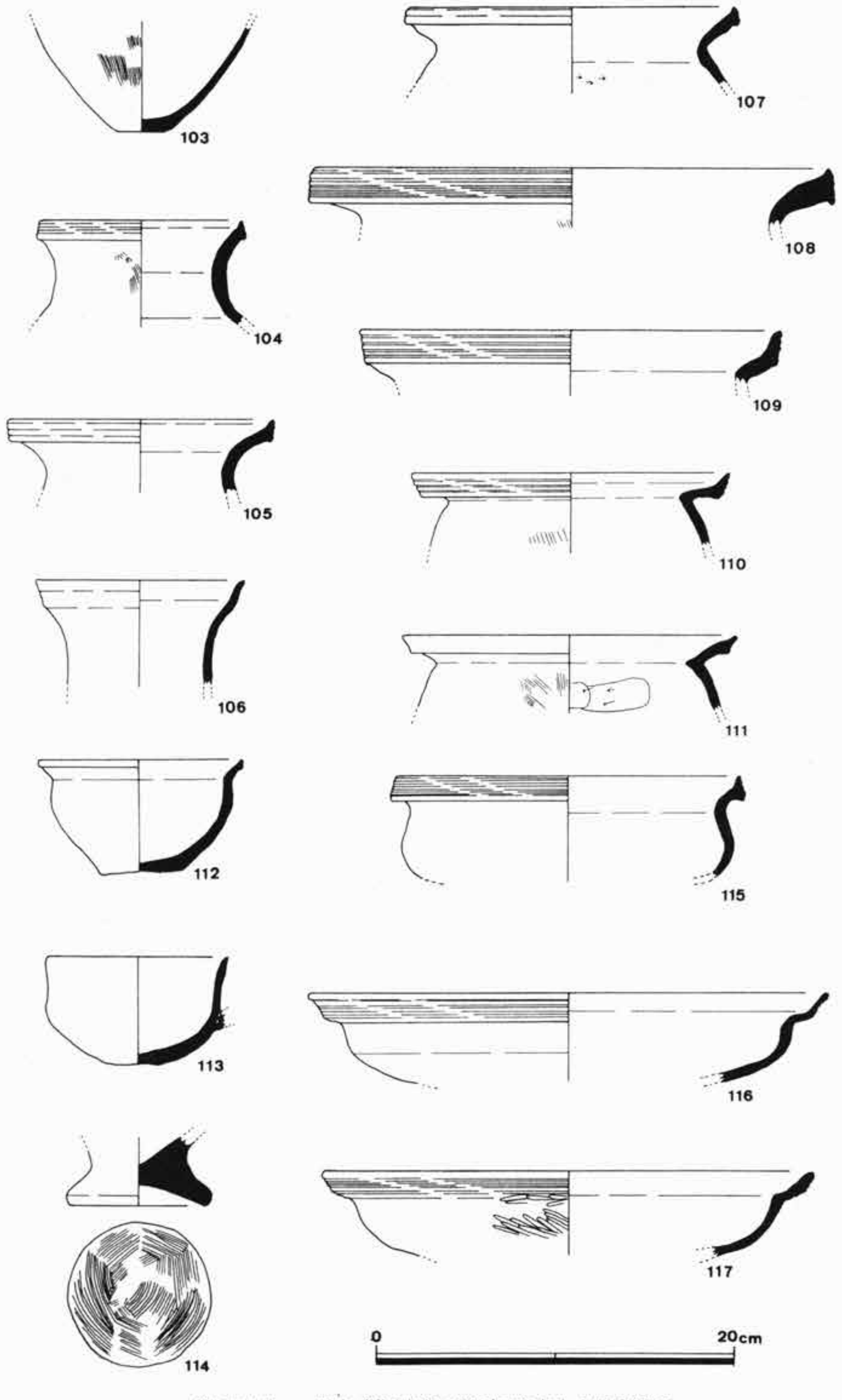
には，椀状の杯部に小さくほとんど開かない脚部がつく台付鉢(40)と有孔鉢(39)がある。高杯は，深い杯部を有し口縁部にかけて大きく外反するもの(41)と，浅い皿状の杯部から屈曲してやや斜め上方に口縁部が立ち上がるもの（42・43）に分けられる。底部(44・45・48)にはさまざまな形態がある。

溝18出土土器(第13図49・50)

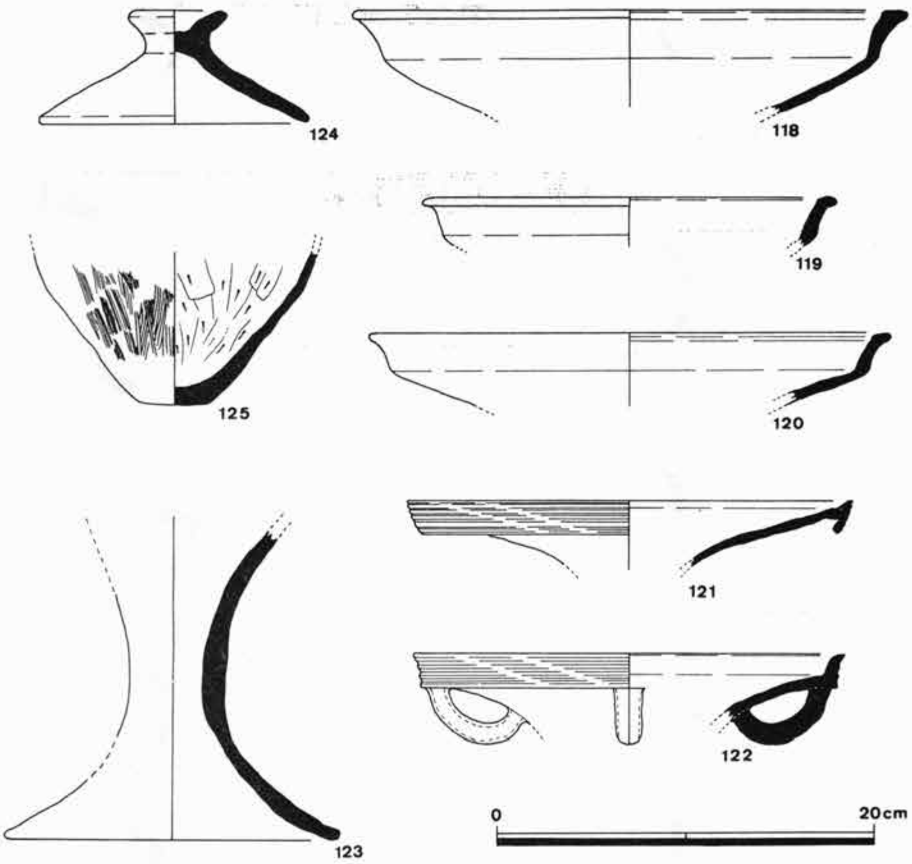
いずれも，複合口縁に擬凹線を施した甕である。

竪穴14出土土器(第13・14図)

出土土器を見ると，完形となるものは少ないが，器形のわかるものも含めて，全体で約30個体以上に及ぶ。器種構成は，壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋があり，そのうちの大多数は甕である。甕は，複合口縁に擬凹線を施すもの(51～54)，複合口縁に擬凹線を施さないもの(56～62)，口縁部をあまり拡張しないもの(55)に分けられる。63は，大型の鉢である。平底の底部から立ち上がって少し肩の張る体部をなし，さらに屈曲してナデを施す複合口縁に至る。外面調整を見ると，タタキの後にミガキが施されている。



第 17 図　竪穴式住居跡16(竪穴16)出土土器実測図
103〜117：埋土



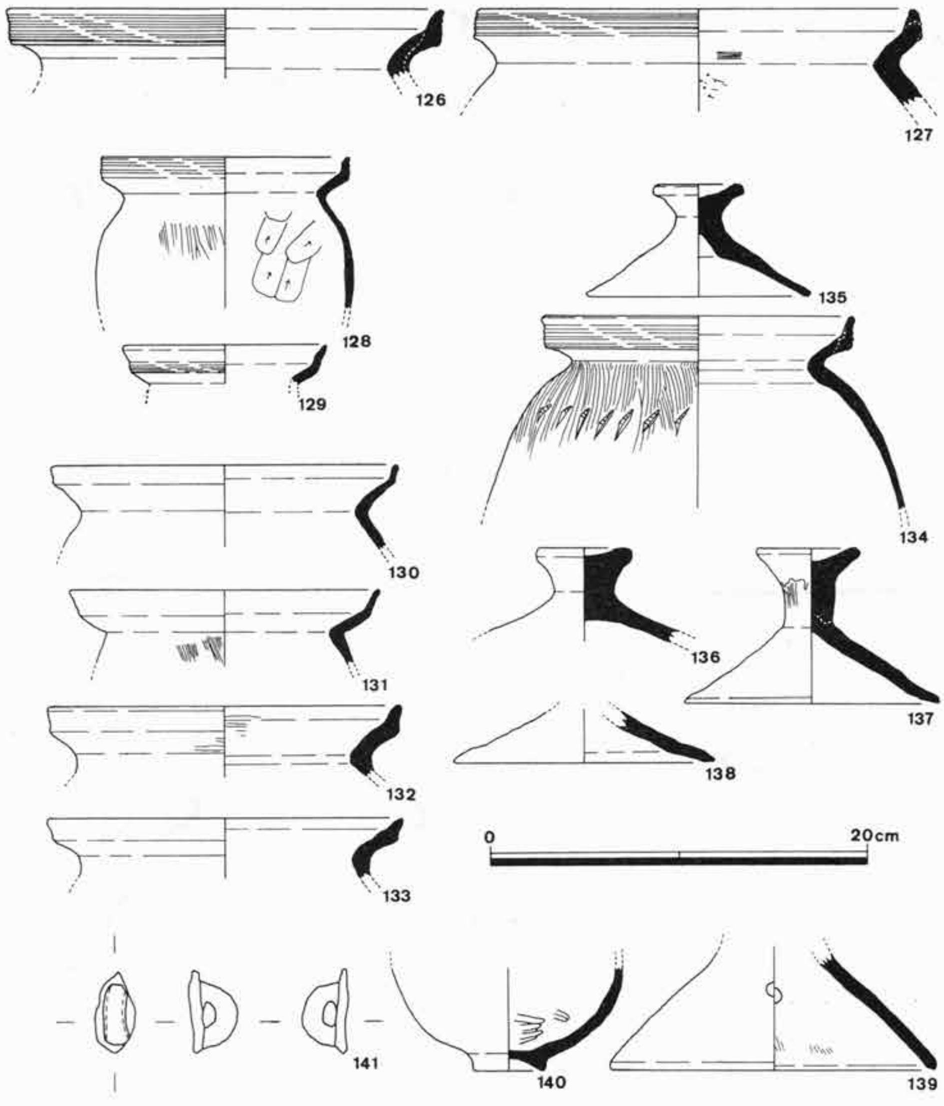
第 18 図　　竪穴式住居跡16(竪穴16)出土土器実測図
124：周壁溝出土，　118～123・125:埋土

これらに加えて，高杯(64・65)，器台(66)，蓋(67・68)，壺もしくは甕の底部 (69～73) がある。

竪穴15出土土器(第15・16図)

出土した土器は，破片資料がほとんどである。それでも，器種構成のだいたいの傾向は，つかむことができる。ここでも甕が大多数を占めるのは，他の住居跡と同様で，その他，壺・高杯・蓋等も出土している。

壺には，頸部から口縁部にかけて直立ぎみにのびる短頸壺(74)，大きく外反し口縁部に擬凹線を施す広口壺(78)，口縁端部を上方に拡張し複合口縁に擬凹線を施す壺(79)がある。甕は，複合口縁に擬凹線を施すもの(75・80～85)，複合口縁に擬凹線を施さないもの(88～90)，単純「く」の字状口縁をもつもの(86・87)に分けられる。高杯には，浅い皿状の杯部から口縁部にかけて外反ぎみにのびるもの(91・92)，深い杯部から屈曲して外上方へ大きく外反するもの(93)がある。また，高杯93は，91・92に比べ胎土はかなり荒い。その他，



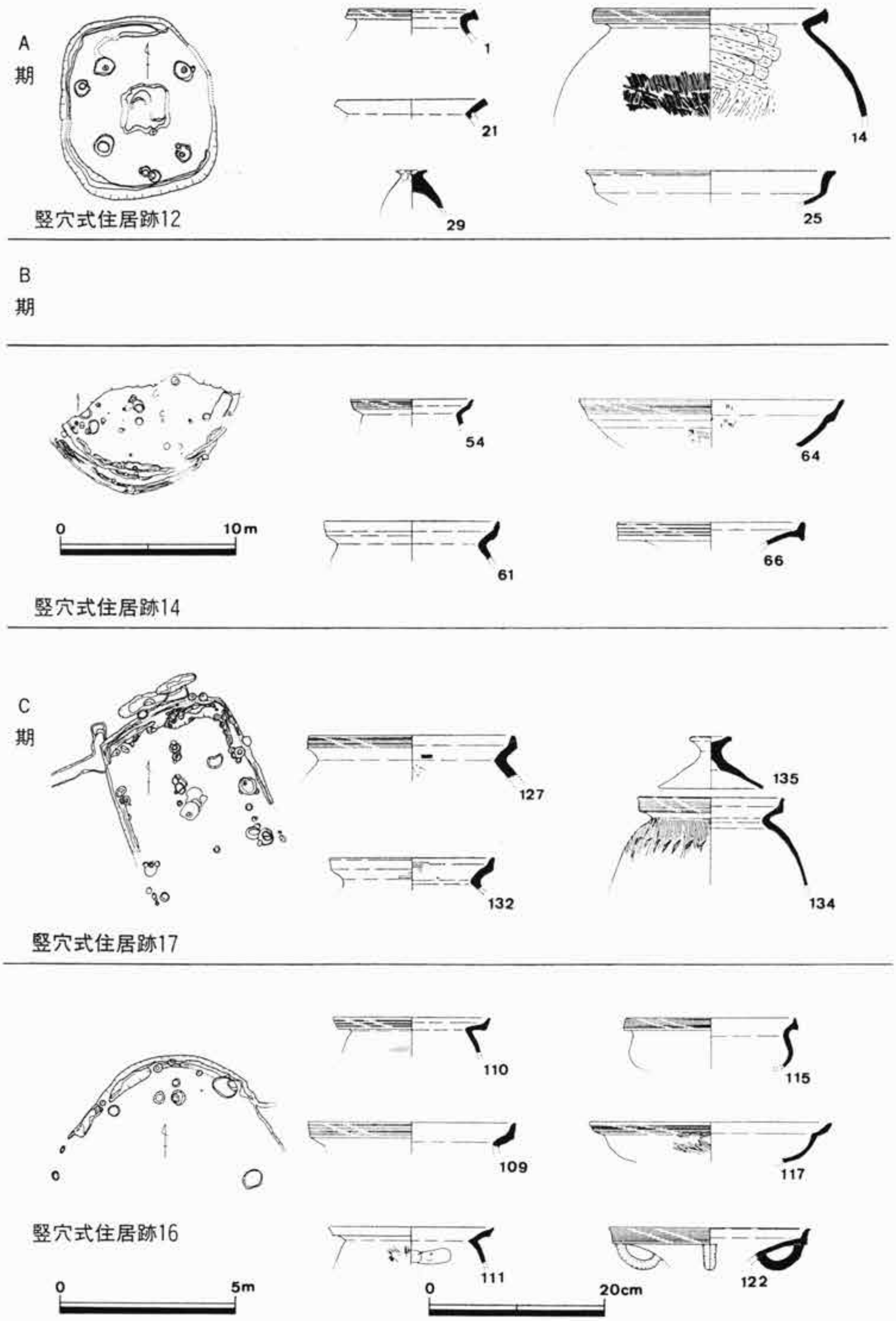
第 19 図　竪穴式住居跡17(竪穴17)出土土器実測図
126：床面，127～141：埋土

蓋(94)，脚部(95～97)，底部(96～102)がある。

竪穴16出土土器(第17・18図)

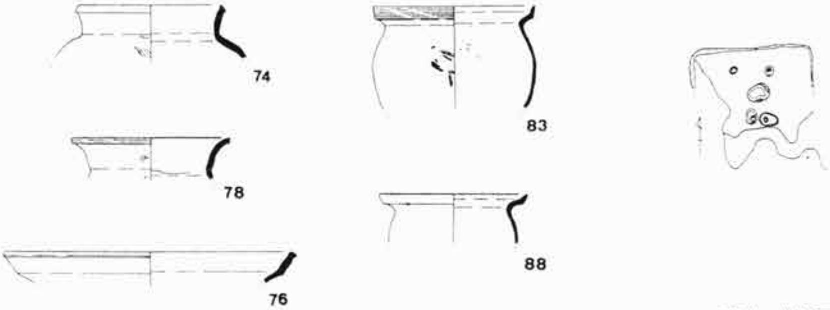
土器は，他の住居跡に比べてかなり多数出土しており，床面・埋土を含めると，整理箱約10箱ほどになる。器種は，かなり豊富であるが，甕が多いことに変わりがない。

壺は，頸部から外反して口縁部に至り擬凹線を施す広口壺(104・105)，長頸壺(106)がある。甕(107～111)には，口径が28.8cmにもなる大型のもの(108)が存在する。鉢には，平底



第 20 図　　桑飼上遺跡竪穴式住居跡と土器

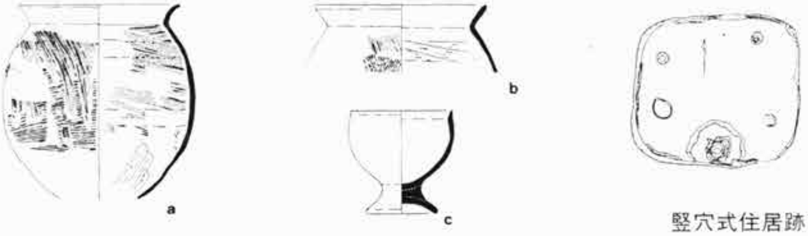
D期



竪穴式住居跡15

E期

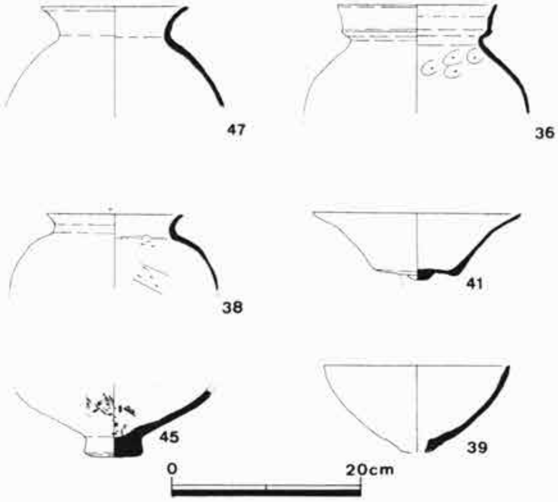
F期

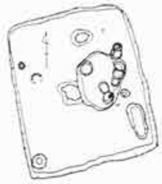


竪穴式住居跡11

G期

H期





竪穴式住居跡13

0 5m

の深い杯部から「く」の字状にまがる頸部をもつもの(112),把手のつくもの(113),台のつくもの(114)がある。高杯は，深い杯部に内傾する複合口縁がつき，擬凹線が施されるもの(115)，比較的浅い杯部に外上方にのびる複合口縁がつき，口縁部に擬凹線が施されるもの(116・117),浅い皿状の杯部をもつもの(118～120)に分けることができる。器台(121～123)は，口縁部の形態から見ると，下方に拡張して擬凹線を施すもの(121)と，上方に拡張して擬凹線を施し，把手のつくもの(122)に細分することができる。

その他，蓋(124)，底部(103・125)もある。

竪穴17出土土器(第19図)

出土土器を見ると，完形に近いものは4・5点で，残りは破片資料ばかりである。それでも器種構成は，壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋からなり，豊富である。形になるもののみ図示した。

甕は，複合口縁に数条の擬凹線を施すもの(126～129・134)と，擬凹線を施さないもの(130～133)とがある。140は,突出した平底をもつ鉢である。蓋にはつまみの頸部の長いもの(137)と，短いもの(135・136)がある。その他に，脚部(138・139)，把手(141)が見られる。141は，壺・鉢・器台のどれかにつくものである。

（岸岡貴英）

5.まとめ

今回の調査は，桑飼上遺跡の本調査(面的調査)の2年目にあたる。主な成果としては，すでに述べてきたように，弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴式住居跡6基を新たに検出したことである。これらの住居跡からは，いずれも床面資料を含む土器が出土しており，この時期の土器編年と住居形態の変遷を考える上で有効な資料と言える。この問題については，その見通しの一部をすでに報告しているが[(注3)]，今回，さらに資料を追加して考えてみた。

今回，整理作業の進行に伴い，資料を追加できるのは，C・D期についてである。器種構成について見ると，C期とした竪穴式住居跡では壺の様相が不明であるが，想定されるべき壺の一形態は，D期とした竪穴15出土の壺(78)の前段階の頸部をもつものではないかと考えている。一方，甕についてみると，統計処理を行ったものではないが，口縁部に擬凹線を施したものと，そうでないものが伯仲している様相が窺える。しかし，口縁部の傾きは，内傾するものから外傾するものまであり，複雑な様相を呈する。また，甕に伴うと考えられる壺形土器は，この段階に含まれていないが，全体の個体数が数少ない中では次の段階まで残存するものか否か判然としない。

竪穴16出土土器(124)は，周壁溝内出土であり，胎土精良な精製品である点は注意を要する。高杯については，前段階から続く無文で口縁端部が肥厚しているもののほかに，浅い椀状の杯部に外反する口縁部を継ぎ足した複合口縁の高杯（117）が出現してくる。しかし，一方で杯部の深いもの(115)もある。

以上の様相は，竪穴式住居跡15出土土器の様相と単純には比較できないが，遺構の重複の先後関係により時間差として捉えておきたい。

以上，C期の土器を取り上げてみたが，中心とする相対年代は，弥生時代後期末葉とするのが最も妥当であると考える。

（細川康晴・岸岡貴英）

注1　調査に参加した方がたは以下のとおりである(敬称略)。
荒賀正之，臼井三郎，臼井信夫，倉橋吉雄，佐藤健一，佐藤　哲，佐藤孝雄，新宮又健，土井康雄，真下朋之，吉岡勇治，吉岡　譲，芦田歌子，井上久子，臼井あき子，梅原トシ江，瓜生初枝，河合美智子，河合好乃，河崎和子，嵯峨ひさ江，迫田美美，佐藤弘美，佐藤文子，佐藤修子，佐藤ミドリ，佐藤増江，佐藤ヤス子，佐藤佳美，新宮久野，新宮ヒサノ，新宮久野，新宮　操，新宮美代子，谷口成美，土井淑子，中村ひろみ，野田雅美，真下朝野，真下トメ子，真下幸江，水口和子，矢野千代子，山下記代子，野田友子，荒賀敏貴，荒堀裕巳，岡本泰典，加藤晴彦，佐藤宏典，辻川哲朗，仲川隆，野間一宏，松本達也，芦田佐和子，沼辺　香，小谷弥太郎，畠なをみ，井之本知美，長田京子，真下春美

注2　御指導・御助言いただいた方がたは次のとおりである(敬称略)。
坪井清足，田中　琢，都出比呂志，堤圭三郎，赤沢徳明，近沢豊明，吉岡博之，肥後弘幸

注3　細川康晴「桑飼上遺跡の竪穴式住居跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第36号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1990.6

2. 国道9号バイパス関係遺跡 平成元年度発掘調査概要

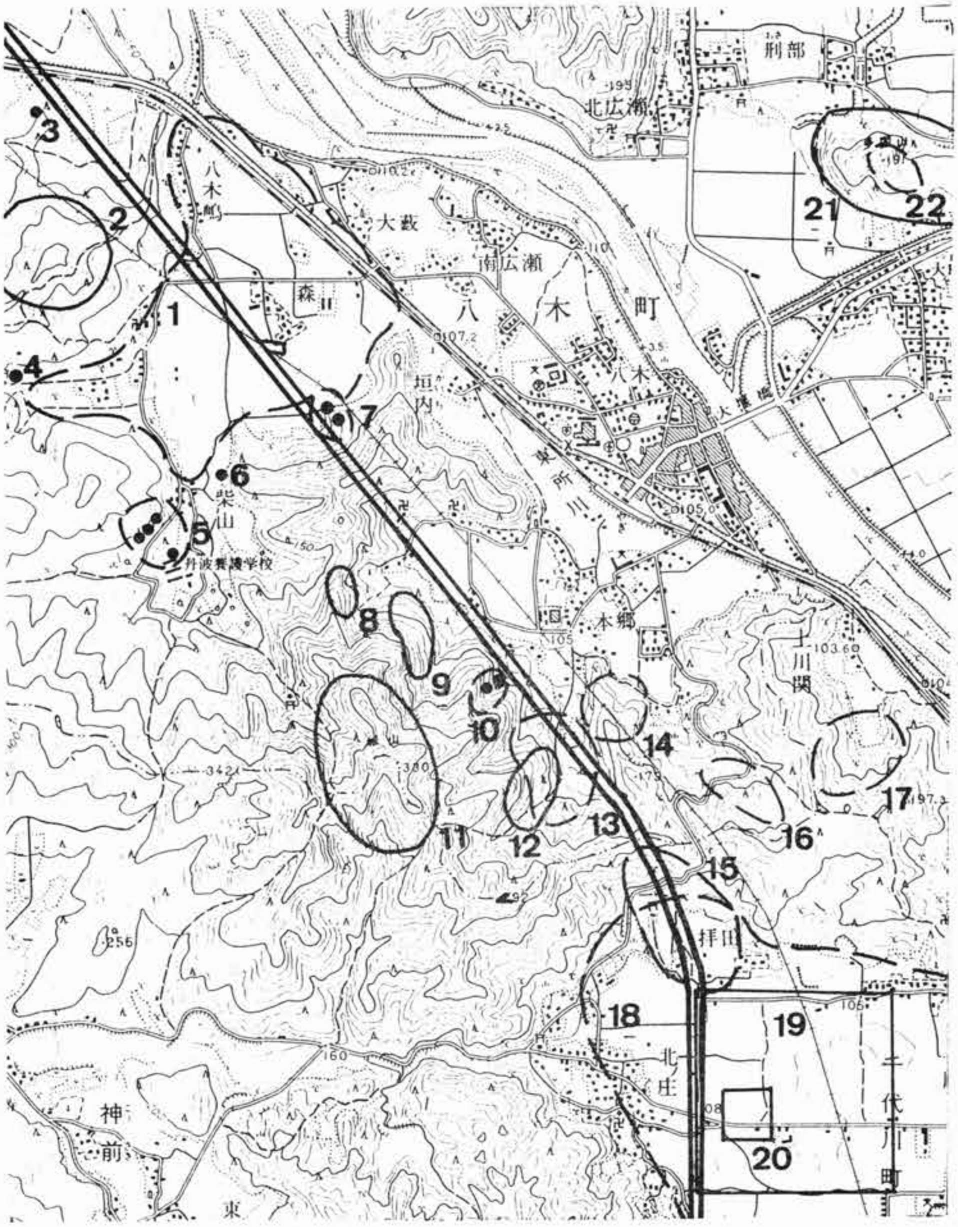
はじめに

国道9号バイパス関係遺跡は，建設省近畿地方建設局の依頼を受けて，国道9号バイパス(京都縦貫道)建設に伴い調査を行う遺跡の総称である。バイパス予定路線は，京都市右京区大枝沓掛町から亀岡市・船井郡八木町・園部町を経て丹波町須知へ至る全長約32kmである。これに係る遺跡の発掘調査は，昭和50年度から行っており，その成果は京都府教育委員会・当調査研究センターが刊行している発掘調査報告書・概報で報告している。

今年度発掘調査を実施したのは，千代川遺跡・小谷遺跡・小谷17号墳・八木嶋遺跡である。千代川遺跡は，縄文時代から鎌倉時代にわたる長期的な集落遺跡であり，その北半部は，丹波国府跡推定地や桑寺廃寺を含み込む大規模な複合遺跡の様相を呈している。バイパス予定路線は，丹波国府跡推定地の西辺部にあたり，昭和59年度に試掘調査を行い，その成果をもとに，翌昭和60年度より面的に調査を進めてきた。今年度はその5年目にあたる。小谷遺跡・小谷17号墳は，八木町と亀岡市の境にそびえる城山(標高330m)から，東方にのびた丘陵の谷部に位置する。当遺跡は，予定路線確定時に，再度分布調査を行ったたところ，人工的に造成されたと思われる段状を呈した平坦面に土器の散布が認められたため，試掘調査を実施することとなった。また，この遺跡の付近には，古墳状隆起も確認されたため，試掘調査を行い，その結果をもとに，小谷17号墳とした。八木嶋遺跡は，大堰川に流れ込む東所川の堆積作用により形成された扇状地上に位置する。当遺跡も分布調査を行ったところ，広範囲に遺物の散布が認められたため，遺構・遺物の分布状況を確認するため，試掘調査を実施することとなった。

千代川遺跡の現地調査は，平成元年4月17日から9月5日まで，約2,200㎡を対象として実施した。小谷遺跡・小谷17号墳は平成2年1月10日から2月27日まで，約300㎡を対象に，八木嶋遺跡は，平成元年12月12日から翌年3月9日まで，約1,500㎡を対象に実施した。調査は，調査第2課第2係長水谷寿克，同主任調査員引原茂治，同調査員小池寛，鵜島三壽が担当した。調査に際し，亀岡市教育委員会・八木町教育委員会・京都府教育委員会・京都府南丹教育局・亀岡市文化資料館・口丹波史談会の諸機関から多大な協力をいただいた。また，地元有志の方々や学生諸氏には，作業員・整理員・調査補助員として参加協力があった。記して謝意を表したい(注1)。なお，発掘調査に係るすべての経費は建設省近畿地方建設局が負担された。本書は，各遺跡の調査担当者が執筆し，文末に名を記した。

(鵜島三壽)



第 21 図　　調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1：八木嶋遺跡　2：八木城出城跡　3：大島羽池古墳　4：神田古墳　5：坊田古墳群　6：柴山古墳　7:森古墳群　8：堂山窯跡　9：古谷窯跡　10：西所古墳群　11：八木城跡　12：内山窯跡　13：小谷古墳群　14：内山古墳群　15：拝田古墳群　16：大法寺古墳群　17：上川関古墳群　18：千代川遺跡　19：丹波国府跡推定地　20：桑寺廃寺　21：刑部城跡(鞍谷山)　22：多国山古墳群

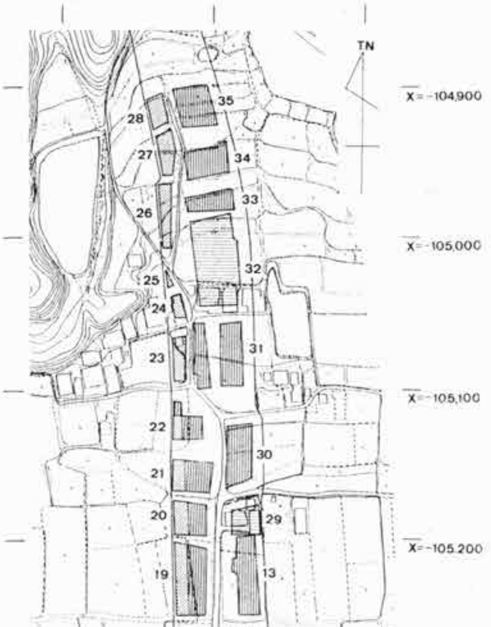
(1) 千代川遺跡第15次

1.はじめに

千代川遺跡は，亀岡市千代川町に所在し，亀岡盆地北西部にそびえる行者山(標高471m)の北東麓に位置している。遺跡の範囲は，この行者山からの堆積作用により形成された扇状地上のほぼ全域(東西約1.2km・南北約1.8Km)に及んでいる。

千代川遺跡を縦貫するバイパス予定路線のうち，国府推定地以南の部分については，すでに調査が終了している。第2・5次調査において，弥生時代終末期～古墳時代・奈良～平安時代という2時期を中心とした集落跡を検出するなど大きな成果を収めている。国府推定地部分に関しては，昭和59年度の試掘調査以後，奈良～鎌倉時代の遺跡・遺物を多数検出している。多くの墨書土器・緑釉陶器・灰釉陶器をはじめとして，第13次調査における「承和七年三月廿五日」の紀年をもつ木簡，井戸枠に転用されていた扉片，第14次調査で出土した石帯などは注目すべき資料といえる。

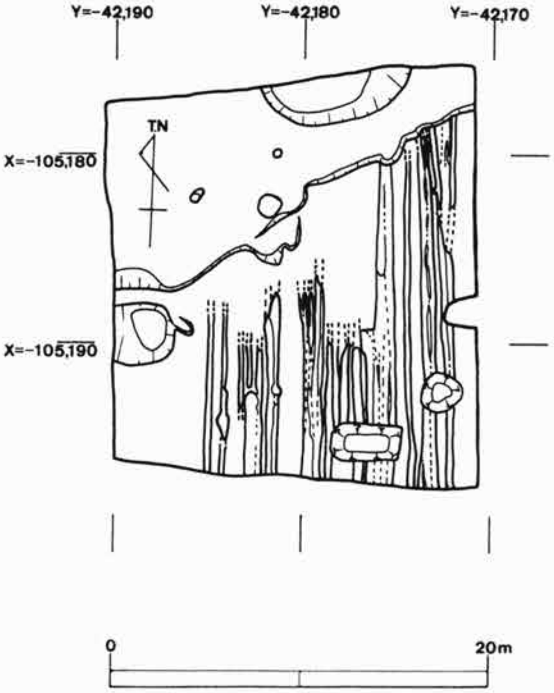
千代川遺跡の発掘調査は，昭和60年度より，府道千代川・北ノ庄停車場線以北部分で，計35か所の調査区を設定し面的調査を進めてきた。昨年度までに，33か所の調査を終え，今年度は残る2か所，No.29・32区を対象として実施した。今回の調査をもって，国道9号バイパスに関係する千代川遺跡の発掘調査は終了することとなる。



第22図　千代川遺跡調査区配置図(1/5,000)

2.調査の概要

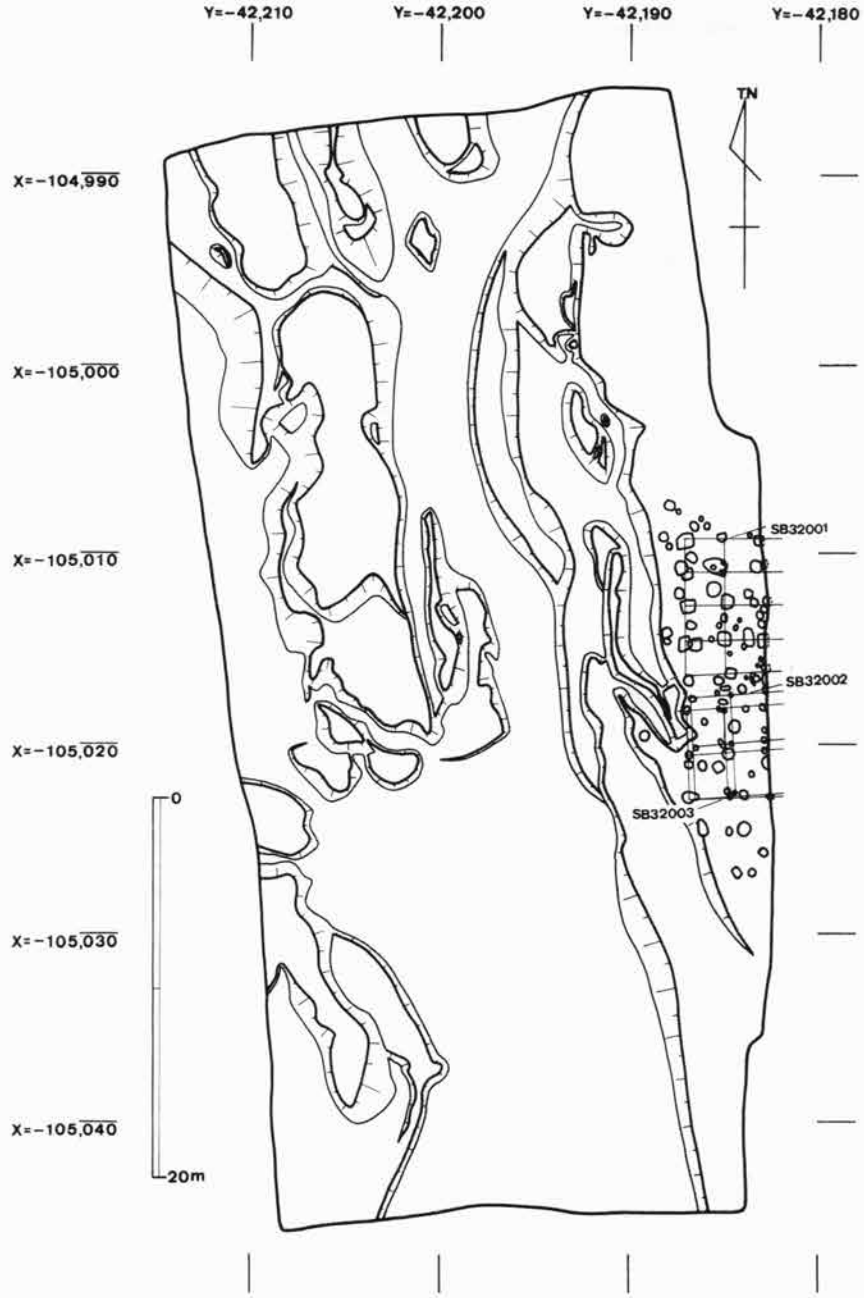
29区　昨年度調査した13区の北側に隣接する調査区である。13区においては，調査区中央部で東西方向に流れる自然流路跡を検出した。この流路の最下層からは，布留式併行期の土器や木製品が出土し，上層からは鎌倉時代の瓦器などが，若干ではあるが出土している。流路の北側の平坦地は，南北方向にのびる素掘り溝が重複するように掘られていた。以上のような13区の状況を踏まえ調査を進めると，調査地南側では，13区で検出した中世素掘り溝の延長部を確認した。幅約10～30cm・深さ約5～10cmを測る。溝内からは，磨滅した瓦器・土師器の細片が少量出土した。調査区北側では，南から北に向かって落ち込む溝状遺構を呈する。しかし，この溝状遺構の埋土中から，遺物などは確認されていないが，中世素掘り溝を切り込んでいるため，近世頃に掘られたものと思われる。



第 23 図　№29区遺構平面図(1/400)

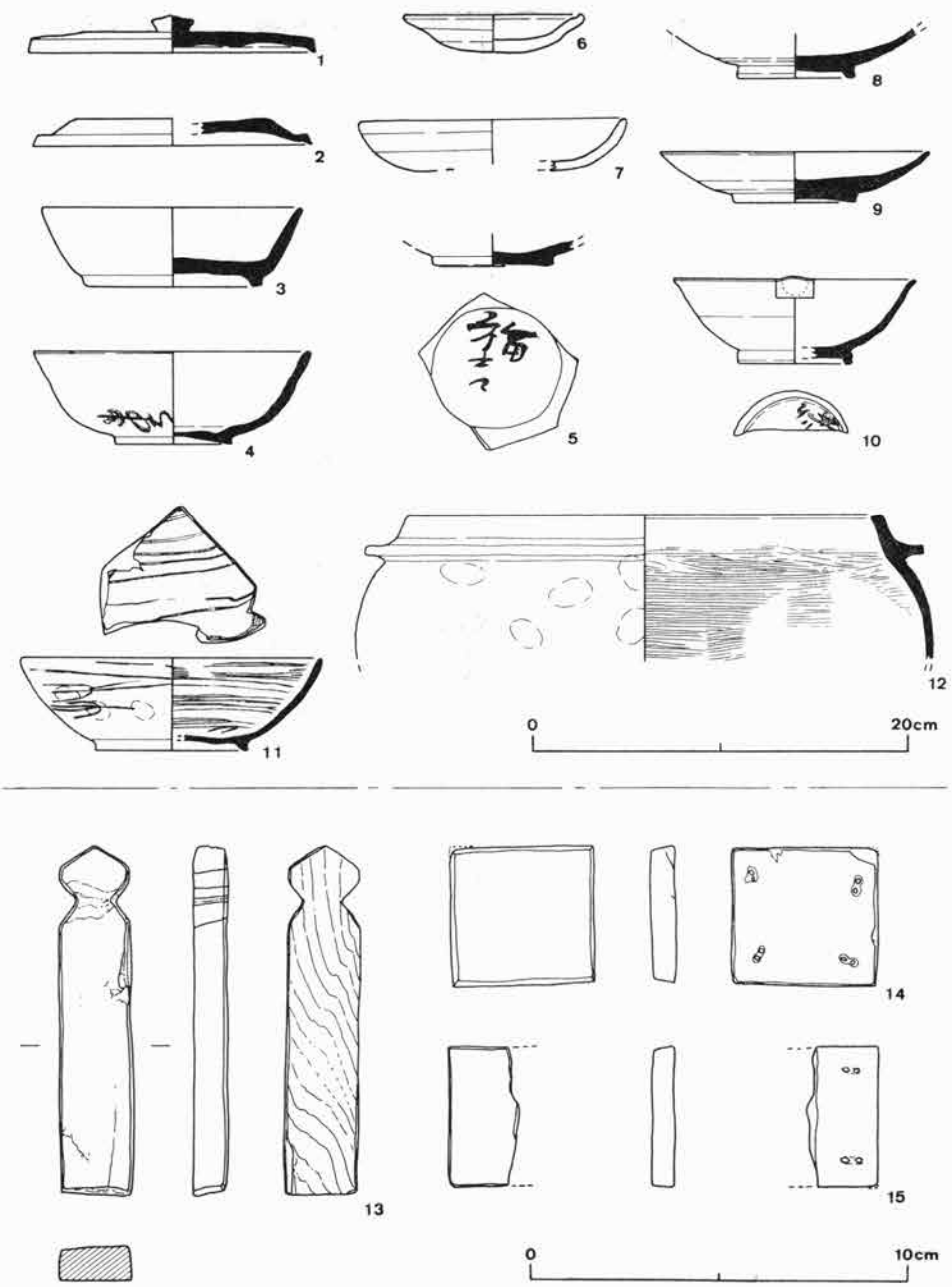
32区　この調査区は，昨年調査した33区の南側に隣接する。33区では，南北にのびる丘陵に，意識的に斜めに掘られた溝1条，自然流路跡1条などを確認していた。以上の点をふまえて調査を進めると，やはり，33区より流れる溝・自然流路跡を確認した。32区は，中央で複雑な島状地形を呈しており，調査区東辺では，平安時代の掘立柱建物跡3棟を確認した。以下，この3棟の建物跡について概述する。

SB32001は，東西2間×南北4間の規模をもつ建物跡である。柱掘形は，一辺約60cmを測る隅丸方形で，深さ約20～40cmを測る。確認した柱穴のうち，柱穴底部に石を敷いているものが2例認められた。SB32002は，東西1間×南北2間の規模をもつ建物跡である。柱掘形は，直径30cm前後を測る円形で，深さ約20～30cmを測る。SB32003は，東西2間×南北2間の規模をもつ建物跡である。柱掘形は，一辺約40cm前後を測る隅丸方形のものが多い。これら3棟の建物跡は，調査地東辺で確認したため，さらに東に向かってのびる可能性が高いと言える。3棟の建物は，いずれも青灰色粘土の地山から，黒灰色粘砂土や茶褐色粘質土などを用いて整地した後建てられている。



第 24 図　No.32区 遺 構 平 面 図 (1/400)

遺物的には，この調査区から，貴重な遺物が多く出土している。自然流路跡から木簡，島状地形の平坦部から石帯などが出土した。建物跡横の落ち込みからは，墨書土器，緑釉陶器などが，約30点ずつ出土した。



第25図　出土遺物実測図

3.出土遺物(第25図)

32区出土の遺物は，今回の調査のみならず，これまでの千代川遺跡の調査全体から考えても重要と言える。そのため，32区出土の遺物にしぼり図示した。遺物は，全般的に平安時代の遺物が多く，須恵器に比べ土師器の出土点数が圧倒的に少ないのも特徴的である。

１～５は須恵器である。杯蓋１は，平坦な天井部からまっすぐにおわる口縁端部をもつもの，杯蓋２は屈曲する口縁部をもつ。杯身３は，底部と杯部の屈曲部内方に高台がつく。椀４は，底部糸切り，体部外面に墨書されたものである。墨書は判読できない。椀５は，糸切り底部外面に「福□（言カ）」と墨書されている。６は土師器皿である。いわゆる「て」の字状口縁をもち，口縁部はヨコナデする。８～10は緑釉陶器である。９は円盤高台をもつ皿である。釉色は黄緑色を呈する。10は削り出し高台をもつ椀である。底部外面に墨書されているが判読不能である。11は瓦器椀である。三角形の高台をもち，内面の暗文は平行でやや疎，外面にも疎らに暗文を施す。12はいわゆる摂津型の羽釜である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，水平に鍔をはりつける。13は木簡である。長さ9.2cm・幅2.0cm・厚さ0.9cmを測る。赤外線カメラを通してみたが文字は書かれていなかった。14・15は石帯である。ともに巡方で，透しをもたないタイプである。14は縦3.6cm・横3.8cm・厚さ0.7cmを測る。裏面の潜穴は，直径１㎜の円形で，斜め方向に穿つ。表面はきわめてていねいにみがかれている。15は一辺3.7cm・厚さ0.6cmを測る。14・15ともに石材は大理石である。

4.小　結

千代川遺跡は，これまでに15回の発掘調査が行われており，古墳時代から鎌倉時代までの遺構・遺物が多数確認されている。今回で国道９号バイパス建設に伴う千代川遺跡の発掘調査は終了するので，国府関連事項にしぼり，これまでの成果を簡単にまとめておく。

①国府推定地西辺部の調査であり，面的調査を実施したのは，その中でも北半分である。調査の結果，幅20～30ｍとかなり大きな自然流路が２条，国府推定域へと流れ込むことが判明した。そのため，整然とした建物群は形成されていないと思われる。

②歴史地理学の面から提唱されていた，国府北限の溝といわれる堀状の落ち込みに続く溝を確認した。この溝は，調査地以西，すなわち国府推定域外にむかってのびている。当地に国府が存在したとするならば，国府域はさらに西へ広がることとなる。(注２)

③石帯は，昨年度調査において出土した３点をあわせると，計５点出土している。この中で，１点のみ国府推定北限の溝の延長部から出土しているが，他はすべて包含層出土である。この５点は，すべて国府推定域以北からの出土である。32区・34区で確認した平安時代の建物跡や32区の多くの墨書土器と考えあわせると，拝田谷部にも国府に関連するような建物が存在していたことは確実である。

（鵜島三壽）

(2)　八木嶋遺跡第1次

1.はじめに

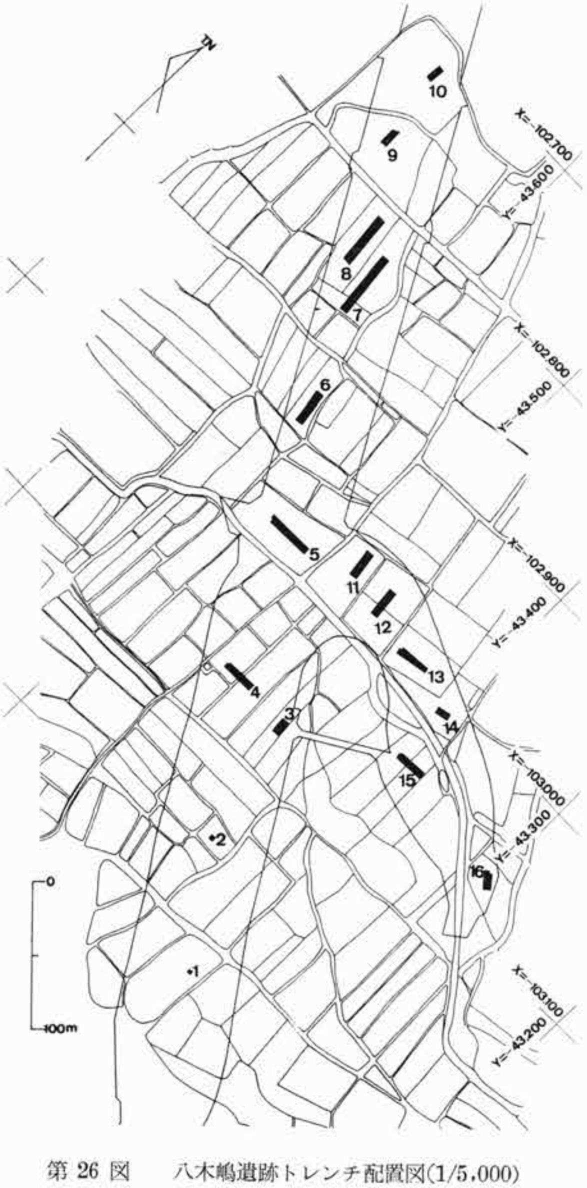
八木嶋遺跡は，船井郡八木町八木嶋に所在し，亀岡市との境界にそびえる城山(標高330m)の北麓に位置している。遺跡の範囲は，この城山から流れる東所川の堆積作用により形成された扇状地上のほぼ全域に及んでいる。

八木嶋遺跡の位置する扇状地の周辺には，八木城出城跡，森古墳群，神田古墳，柴山古墳，坊田古墳群などがある。坊田古墳群中の坊田5号墳は，1978年に京都府教育委員会により，発掘調査が行われている(注3)。この古墳は，横穴式石室をもつ，直径16mの円墳である。時期は，6世紀末から7世紀初頭である。口丹波地方は，横穴式石室の調査が少ないこともあって，貴重な成果をあげた古墳といえる。

八木嶋遺跡は，発掘調査を開始するにあたって，周辺に古墳群が存在することや，分布調査の成果から古墳時代の遺構が広がっているのではないかと期待された。

2.調査の概要

発掘調査にあたっては，まず，遺跡や遺物の分布状況を把握するため，対象地内に16か所の試掘トレンチを設けた。トレンチは，幅5mで，任意の長さとした。



第26図　八木嶋遺跡トレンチ配置図(1/5,000)

以下，各トレンチ（以下トレンチを「tr.」と略す）の状況を概述しておく。

1 tr. 耕作土下には黄褐色粘質土が10cmほど堆積し，その下層は，礫を多く含む灰色粘質土，濁灰褐色粘質土であった。このトレンチから，遺物は全く出土していない。

2 tr. 1 tr. と同じような土層の堆積状況であり，遺構・遺物は全く出土しなかった。

3 tr. 耕作土を除去すると，すぐに茶褐色シルトからなる地山を確認した。かなり後世の削平を受けているものと思われ，遺構は確認し得なかった。

4 tr. 耕作土下の濁青灰褐色粘質土を掘り進めると，南北方向に流れる自然流路跡を一条確認した。流路内より，須恵器・瓦器の細片が少量出土した。

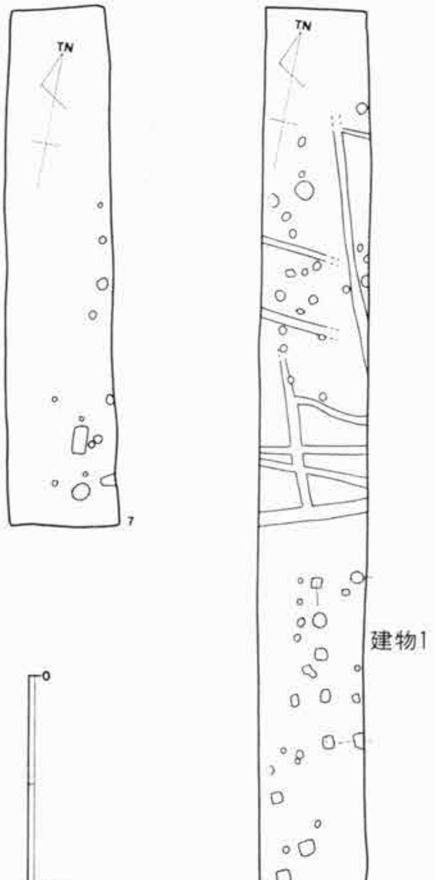
5 tr. 耕作土・床土を除去すると，黄褐色粘質土の地山を確認する一方，トレンチ南西隅を東西方向に流れる自然流路跡を検出した。ここからは，古墳時代後期の甕片が多量に出土した。それ以外には奈良・平安時代の須恵器・土師器，緑釉陶器や灰釉陶器なども出土した。

6 tr. 耕作土除去後，すぐに濁灰色粘土質土の上面で，直径約40cmを測る円形の柱穴を多数検出した。柱穴の中には，柱痕を残すものもあった。

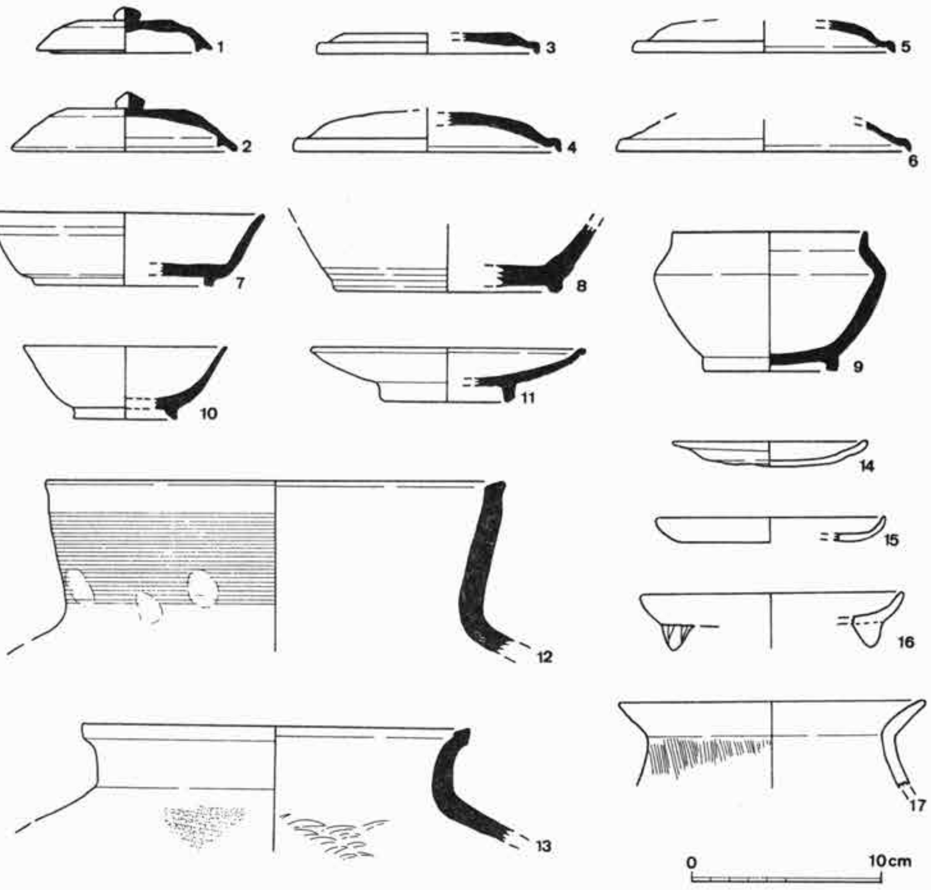
7 tr. 最も良好な状態で遺構を確認し得たトレンチである。耕作土直下の黄褐色粘質土の上面で，柱穴・溝なども検出した。南半部では，一辺60cm前後を測る隅丸方形の柱穴をまとまって検出し，建物跡を1棟確認した。

8 tr. 7 tr.とほぼ同様な状況を呈している。ただし，7tr.のように，建物跡を確認するまでには至っていない。

9 tr. 近世の盛土を除去すると，青灰色粘土を確認した。この粘土は厚さ1.5cm以上堆積しており，このトレンチからは，遺構・遺物はなかった。



第27図　第7・8トレンチ遺構平面図



第28図　出土遺物実測図

1・16:15tr.　2:3tr.　3～5・8・12・13:5tr.　17:7tr.　6:8tr.　10:11tr.
11:12tr.　7・9・14:13tr.　15:16tr.

10tr.　9 tr.と同様な状況を呈しており，遺構・遺物はなかった。

11tr.　耕作土を除去すると，わずかに遺物を包含する灰褐色粘質土が約30cmの厚さで堆積している。その下層の地山である濁黄褐色粘質土上面で，遺構は確認し得なかった。

12tr.　11tr.と同様な堆積状況を呈している。地山を切り込み，東西方向に流れる溝を一条確認した。

13tr.　耕作土除去後，暗茶褐色土上面で，鎌倉時代の瓦器・土師器片を含む柱穴や南北方向にのびる溝を一条確認した。

14tr.　耕作土下に，須恵器・土師器・瓦器の細片を含む灰色粘質土が，約40cm程堆積している。その下層の濁灰褐色砂層が地山であるが，遺構を確認し得なかった。

15tr.　耕作土下に，14tr.と同様な遺物を包含する灰褐色粘質土がぶ厚く堆積している。

その下層の青灰色粘砂土では，遺構・遺物などは確認していない。

16tr.　14tr. と同様な堆積状況を呈する。このトレンチでも遺構は確認し得なかった。

3.出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち，遺構に伴うものはほとんどなく，図化し得るものの大半は包含層出土のものであった。ここではその中から主なものを図示した。

1～6は須恵器の杯蓋である。1・2は，宝珠つまみを有し，口縁部にカエリをもつもの，3～6は屈曲する口縁部をもつものである。7・8は須恵器杯身である。7のように，杯部と底部の屈曲部内方に高台が付くものと，8のように屈曲部に付くものがある。1～8のような蓋杯は，まんべんなく遺物を確認した各トレンチから出土した。9は緑釉陶器椀である。色調は緑色を呈し，胎土はやや軟である。近江系のものと思われる。10は灰釉陶器片である。口縁端部はやや外反し，高台はまっすぐに終わる。11・12は須恵器壺，13は須恵器甕である。14～16は土師器皿である。14はいわゆる「て」の字口縁をもつ皿で，口縁部はヨコナデされている。16は三角形の脚をもつ皿である。17は土師器甕である。体部外面は，縦方向のハケを施している。

以上のように，古墳時代の遺物も出土してはいるが，奈良～平安時代を中心とする遺物が圧倒的に多いのが特徴と言える。

4.小結

今回の発掘調査の結果，八木嶋遺跡は，おおよそ弥生時代～鎌倉時代にわたる複合遺跡であることがわかった。弥生時代の遺構・遺物に関しては，甕の底部片を数点確認したにとどまる。古墳時代については，No.5トレンチの自然流路跡から須恵器甕が多数出土している。出土遺物を器種的にみると，ほとんど須恵器甕であることも特徴である。奈良～平安時代については，遺物の出土したすべてのトレンチから，この時期のものを確認している。なかでも10点近くを数える緑釉・灰釉陶器の出土は，No.7・8トレンチで検出した一辺約60cmを測る隅丸方形の柱穴とあわせて，この遺跡の性格を考える上での重要な資料を提供したと言える。鎌倉時代に関しては，No.13トレンチにおいて，溝・柱穴などを検出した。また，他のトレンチからも瓦器・土師器・輸入陶磁器の細片が出土している。

（鵜島三壽）

(3)　小谷遺跡・小谷17号墳

1.はじめに

小谷遺跡・小谷17号墳は，八木町南端部の亀岡市との境となる丘陵の北側谷部に位置する。この丘陵には多くの古墳がある。丘陵南側の亀岡市側には，南丹地域では最古式とみられる横穴式石室をもつ前方後円墳の拝田16号墳を含む拝田古墳群[注4]などがある。北側の八木町側には，小谷古墳群や内山古墳群などが存在する。今回の調査地は，小谷古墳群の範囲内に位置する。なお，小谷古墳群のうち２号墳は古墳ではないことが判明している[注5]。

小谷遺跡は，谷底部にあたり，人工的に造成されたと思われる段々状の地形が認められた。また，土器片なども散布しており，何らかの遺跡である可能性があるため，試掘調査を行った。また，谷の東側斜面に古墳状の隆起があり，これも試掘調査を行った結果，横穴式石室を内部主体とする古墳であることを確認したので，小谷17号墳とした。

2.小谷遺跡

段々状の平坦地部分に，７か所の試掘トレンチを設定して掘削した。その結果，顕著な遺構は存在せず，南から北へ向かって下降する谷状の旧地形を確認したのみであった。

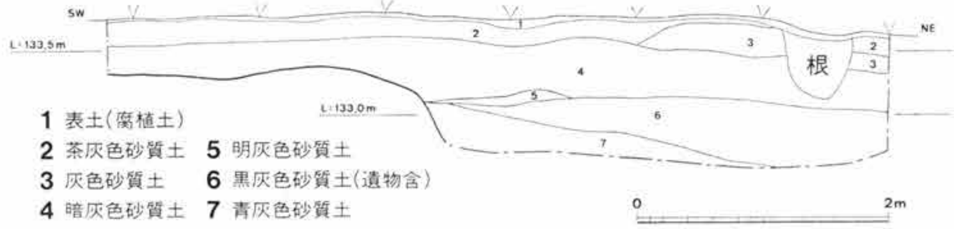
(1)1トレンチ

古墓状の盛り上がり部分を中心に掘削したが，墓壙等の顕著な遺構はなく，その周辺からも花崗岩の露頭を検出したのみであった。出土遺物はない。

(2)2トレンチ

トレンチ東半部が傾斜して下降しており，谷状になる。この部分の堆積土中から若干の遺物が出土した。これらの遺物は，中世の瓦器椀片・土師皿片が主たるものである。ただ，

第29図　小谷遺跡トレンチ位置図



第30図　小谷遺跡2トレンチ断面図

円筒埴輪片とみられるものが1点含まれている。これらの遺物は，軽いローリングをうけており，上方から流出して堆積したものとみられる。顕著な遺構はない。

(3)3トレンチ

花崗岩の露頭を検出したのみで，顕著な遺構はない。出土遺物もない。

(4)4トレンチ

3トレンチと同様に花崗岩の露頭のみで，顕著な遺構・遺物はない。

(5)5トレンチ

低い石垣状の石積みを検出したが，後世の植林もしくは開墾に伴うものとみられる。顕著な遺構・遺物はない。

(6)6トレンチ

トレンチ東半部が落ち込んでおり，谷状になる。このほかには顕著な遺構・遺物はない。

(7)7トレンチ

一面に花崗岩の露頭を検出したのみで，顕著な遺構はない。ローリングをうけた須恵器片が数点出土したのみで，顕著な出土遺物もない。

(8)出土遺物(第32図)

瓦器椀7は，口縁端部が肥厚し，断面三角形の貼付高台をもつ。内面のミガキはやや粗く，外面にはミガキはみられない。見込みにはジグザグ状の暗文をもつ。瓦器椀8は，肥厚する口縁部をもつ。内面のミガキはやや密で，外面にもわずかにミガキの痕跡が残る。瓦質羽釜9は，口縁部が内傾気味である。埴輪10は，円筒の一部とみられる。タガは，低い。調整の詳細は不明であるが，わずかに斜め方向のハケ目がみとめられる。

3.小谷17号墳

古墳状の部分に，試掘トレンチを設定して掘削した結果，横穴式石室を検出し，古墳であることを確認した。石室の天井石はほとんど抜き取られていたが，玄門上の一石のみ残存していた。なお，石室内を掘削したが，玄室側壁の石積みが大きくずれており崩落する

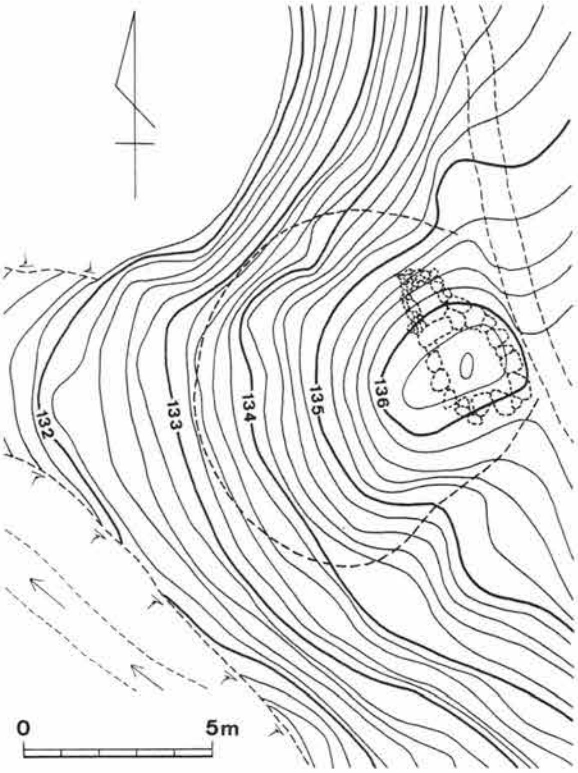
危険性があるので，現状を記録した後，残存していた天井石とともに側壁部の石材若干を除去した。

(1)墳丘

この古墳は，斜面部に築かれた，直径9m前後の円墳とみられる。高さは，斜面上部にあたる東側で約60cm・谷に面した西側で約3mである。東側には，墳丘を斜面から区別するための周溝を設けているものとみられるが，その部分に現在使用されている林道があるため確認できなかった。

(2)石室

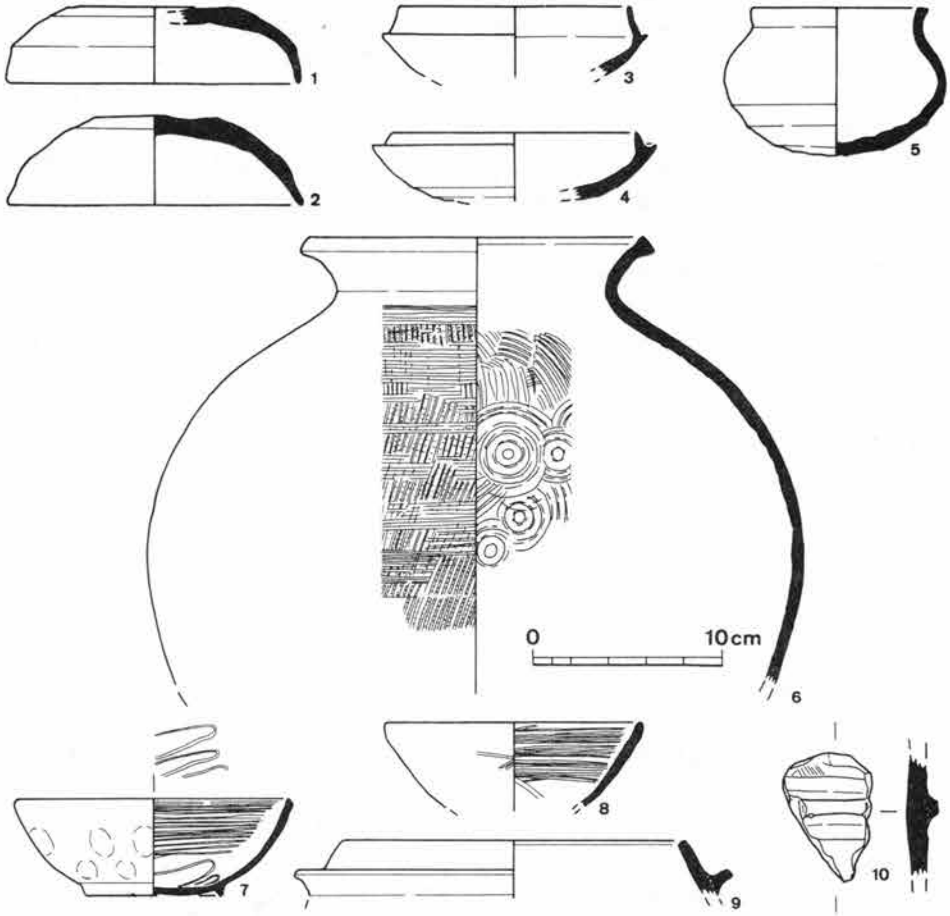
北西方向に開口する横穴式石室である。上述のとおり，天井石は玄門上の一石のみ残存している。石室の床面までは掘削していないので，石室規模については推定の域を出ないが，全長3.3m・玄室長2m・玄室幅1.7m・羨道長1.3m・羨道幅80cm程度とみられる。奥壁側から向かって右側にやや広い袖部をもつ右片袖式の石室とみられるが，あるいは，左側にもわずかな袖部をもつ両袖式の石室であるかもしれない。なお，玄室床面には敷石があるものとみられる。羨道床面には敷石はない。玄室と羨道の境には，框石がある。玄室壁は上半部に比較的大きい石が積まれ，下半部は小形の石を木口積みもしくは平積みする。羨道部壁の石積みは比較的良好に残存する。開口部の閉塞石も下半部はよく残っている。



第31図　小谷17号墳 地形図

(3)出土遺物(第32図)

出土遺物は，墳丘部及びその近辺からのものである。須恵器杯蓋1・2は，厚手であり，稜はない。口縁端部は丸く終わる。須恵器杯身3は，直立気味に高めに立ち上がる口縁部をもつ。陶邑編年のTK10型式期に併行するものとみられる。須恵器杯身4は，口縁部の立ち上がりが低い。TK43型式期併行か。須恵器短頸壺5は，外反気味に立ち上がる口縁部をもち，端部は平坦である。体部下半はヘラ削りである。須恵器甕6は，外面格子タタキ・内面に同心円状のタタキが残る。閉塞石外側から出土した。



第32図　出土遺物実測図
1～6：小谷17号墳　7～10：小谷遺跡

4.小　結

今回の試掘調査において，まず，小谷遺跡では顕著な遺構がなかった。ただ，13世紀頃のものとみられる土器片が出土しており，付近に何らかの遺跡があるものとみられる。また，一片であるが埴輪片が出土しているのが注目される。過去の調査で，付近に埴輪をもつ古墳の存在が報告されているが(注6)，それに関連するものか。

小谷17号墳は，明確ではないが，その石室形態や周辺からの出土遺物からみて，亀岡市医王谷3号墳(注7)や園部町天神山1・2号墳(注8)と同様に南丹地域でも最も古い横穴式石室をもつ古墳である可能性が考えられる。上述のとおり，古い横穴式石室をもつ前方後円墳である拝田16号墳が付近にあり，それぞれの関連や位置的なことなど，興味深い古墳であり，今後の調査成果が期待される。（引原茂治）

注１　秋田文夫・秋田文子・入船弘幸・石井晶子・大西智也・大宮和恵・岡本竜三・岡本美和子・荻野冨紗子・小田栄子・大槻益子・柏尾依子・組頭敦史・郡司佳代子・熊倉和江子・黒田茂子・黒田美代子・小槻小福・澤田みどり・斉藤清三・白井真澄・杉森美佐紀・薗田由美・薗田　綾・武田和哉・高橋一義・谷口明子・田鶴谷京・土井正文・中西　宏・長田康平・長関達哉・中尾友子・西川悦子・橋本　稔・波部幸子・波部京子・原田敦子・橋本正博・波部良和・疋田季美子・平井律子・広瀬由美子・広瀬　務・広瀬彦一・広瀬弘治・広瀬義夫・広瀬八重子・広瀬二三乃・広瀬洋子・広瀬古と・広瀬フジ子・広瀬恵子・広瀬泰子・広瀬洋子・広瀬ゑみ子・広瀬美也子・広瀬友次・広瀬伝治・広瀬伊太郎・広瀬敏夫・福嶋美代子・福嶋鈴代・福嶋チエ子・藤本城次・福田倫子・本田　香・堀　源一・堀はるの・牧野當子・松下道子・松浦寛一・俣野よ志江・杉山晃子・松本末野・三澤繁忠・南　彰・宮崎紗和子・村上典子・森　初江・八木知子・八木やす子・八木和子・山本和之介・八木千代江・八木美恵子・八木よし子・八木すて・八木淑子・山本浩史・八木妙子・八木菊枝・吉原淑子・吉岡嘉代子

注２　今回の調査後実施された千代川遺跡第16次調査において，国府推定地を大きくはずれる西側からも，何時期かにわたる掘立柱建物跡や墨書土器なども出土している。このため，国府推定地外にも，かなりの遺構の広がりが確認されることとなった。
竹原一彦「千代川遺跡第16次」（『京都府埋蔵文化財情報』第36号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990

注３　堤圭三郎「坊田５号墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1979-3)』　京都府教育委員会）　1979

注４　拝田古墳群については，1978年度から1980年度にかけての『埋蔵文化財発掘調査概報』（京都府教育委員会)に，８～10号墳の調査概要が報告されている。

注５　安藤信策ほか「昭和51年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』　京都府教育委員会）　1977

注６　堤圭三郎　「９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会）　1976

注７　引原茂治ほか　「医王谷３号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第７冊　(財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

注８　『天神山古墳群現地説明会資料』　園部町教育委員会　1985

3. 木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要

はじめに

この調査は，住宅・都市整備公団の依頼を受け，関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査である。平成元年度は，昨年度に引き続き木津町大字市坂にある上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡・瀬後谷遺跡の試掘及び発掘調査を行った。

上人ケ平遺跡は，昭和59～62年度にかけて行った試掘調査(注1)の結果を踏まえ，昭和63年度は台地の南半分を中心に発掘調査(調査面積4,800㎡)を行い(注2)，本年度は台地の北半分を中心に発掘調査(調査面積約7,500㎡)を行った。発掘調査の結果，古墳時代の竪穴式住居跡(6基)と倉庫跡(2棟)，3基の古墳のほか，奈良時代の掘立柱建物跡や土坑などを検出した。この奈良時代の掘立柱建物跡は，後述するように，瓦生産に係わる建物群と考えられ，出土した瓦などから，平城宮の造営に関連した官営瓦工房であることが明らかとなった。

瓦谷遺跡では，上人ケ平遺跡に隣接した瓦谷75bt地区と，瓦谷古墳に隣接した地区について試掘調査を行った。75bt地区では，古墳時代の土器とともに半截した松を溝状に刳り抜いた木桶が出土した。瓦谷古墳に隣接したトレンチでは，遺物を少量含む旧河道と少量の埴輪片が出土した。

瀬後谷遺跡は前年度実施した磁気探査の結果をふまえ，南側丘陵斜面に調査区を設け掘削調査を行った。その結果，一部で須恵器や窯壁片・焼灰層の出土をみたが，それに係わる窯本体は調査区内には遺存していなかった。

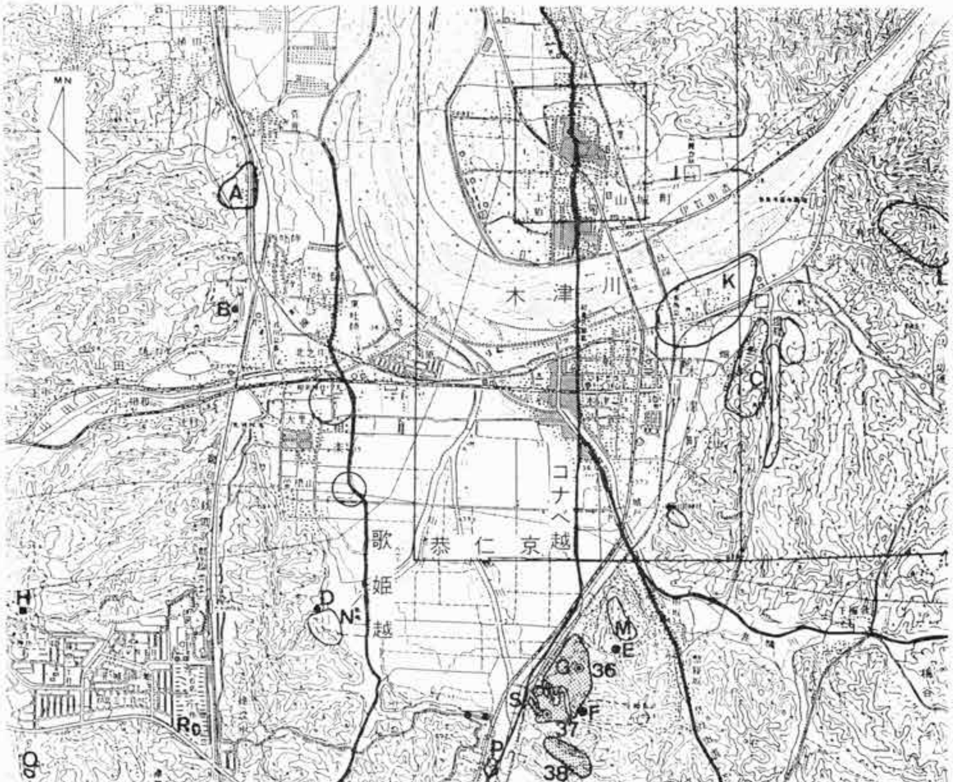
以上の3遺跡について概要説明を行うが，上人ケ平遺跡については整理作業が進んでおらず，また次年度以降，上人ケ平遺跡の調査報告書の刊行を予定しているため，簡単に概要のみの説明にとどめる。調査は当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人，同主任調査員石井清司，同調査員伊賀高弘が担当し，多くの補助員・整理員が補助した(注3)。

なお，本調査に係わる経費は，住宅・都市整備公団が負担された。

(1) 上人ケ平遺跡

1.調査の経過

上人ケ平遺跡が立地する台地の南半分では，5号墳(造り出し付き円墳，径25m)を中心に7基の方墳が近接して築かれていること，台地の東側斜面には，古墳へ製品(埴輪)を供給したと思われる埴輪窯が築かれていることが，昭和63年度の調査で明らかとなっている(注4)。

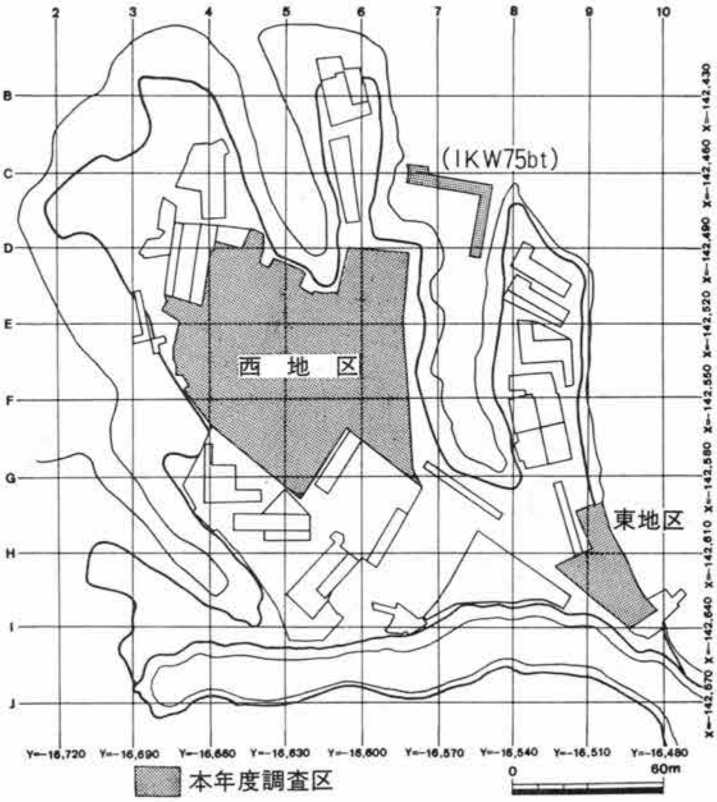


第33図　調査地位置図

A：吐師七ツ塚古墳群　B：白山古墳　C：内田山古墳群　D：音如ケ谷古墳　E：西山塚古墳
F：幣羅坂古墳　G：瓦谷古墳　H：カザハヒ（石のカラト古墳）　J：高麗寺跡　K：上津遺跡
L：鹿背山城跡　M：西山遺跡　N：音如ケ谷・歌姫西窯跡群　P：歌姫瓦窯　Q：奈良山51・52号窯
R：奈良山53号窯　S：市坂瓦窯　**36：瓦谷遺跡　37：上人ケ平遺跡　38：瀬後谷遺跡**

本年度は，昨年度その一部を検出していた掘立柱建物跡(SB 301)の規模を確認するとともに，台地中央部での遺構を確認するため，昨年度調査地の北側約7,500㎡を対象に発掘調査を行った(西地区)。また，1号埴輪窯に近接して，新たに埴輪窯がある可能性があるため，台地東端にトレンチを設定した(東地区)。

(石井清司)



第 34 図　上人ケ平遺跡　調査区配置図

2.遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は，両調査区あわせて竪穴式住居跡6基・掘立柱建物跡15棟・古墳4基・溝・土坑などである。これらは古墳時代前～中期前半(布留式併行期)，古墳時代中期後半～後期，奈良時代後半期の三時期に大別でき，時代を追って集落→墓地(古墳)→瓦生産工房と順次変遷していることが明らかとなった。

以下，各時期ごとに検出遺構の概要を略述する。

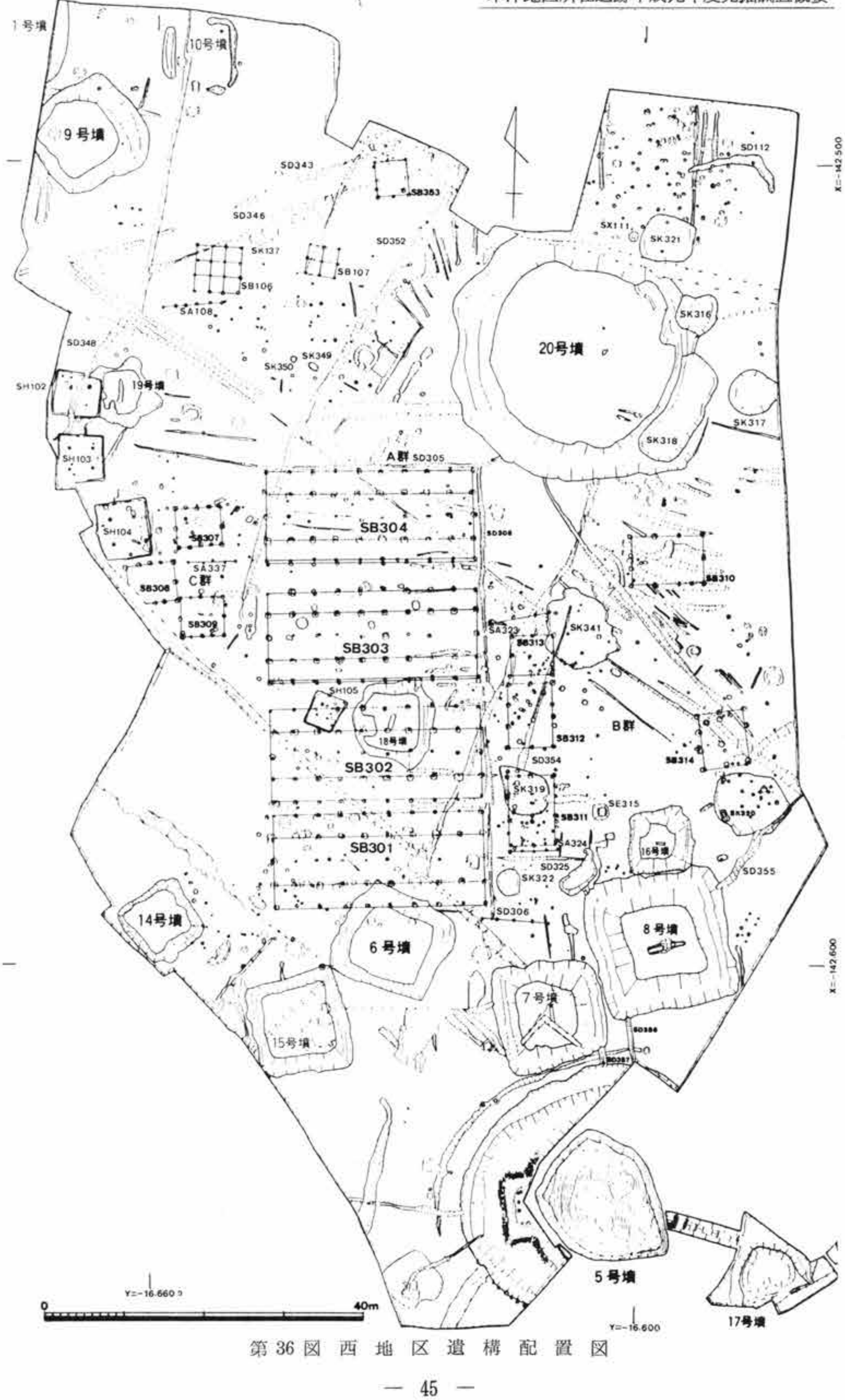
(1)古墳時代前～中期前半の遺構

竪穴式住居跡・掘立柱建物跡(2棟)・土坑があり，集落遺構としての性格が考えられる。

SH102・103・104　西地区西端の台地縁辺部に作られた竪穴式住居跡群で，各住居跡は主軸方位をほぼ北に揃え，南北方向に隣接するように並列している。各住居跡間には重複関係はない。各住居跡は，いずれも正方形プランを基本とし，一辺6m前後(SH102東西5.5m～SH104南北7.0m)の規模を測る。

この地区は検出面が東から西側に緩く傾斜していることもあって，各住居跡とも壁高は

第35図　上人ヶ平遺跡　遺構配置図



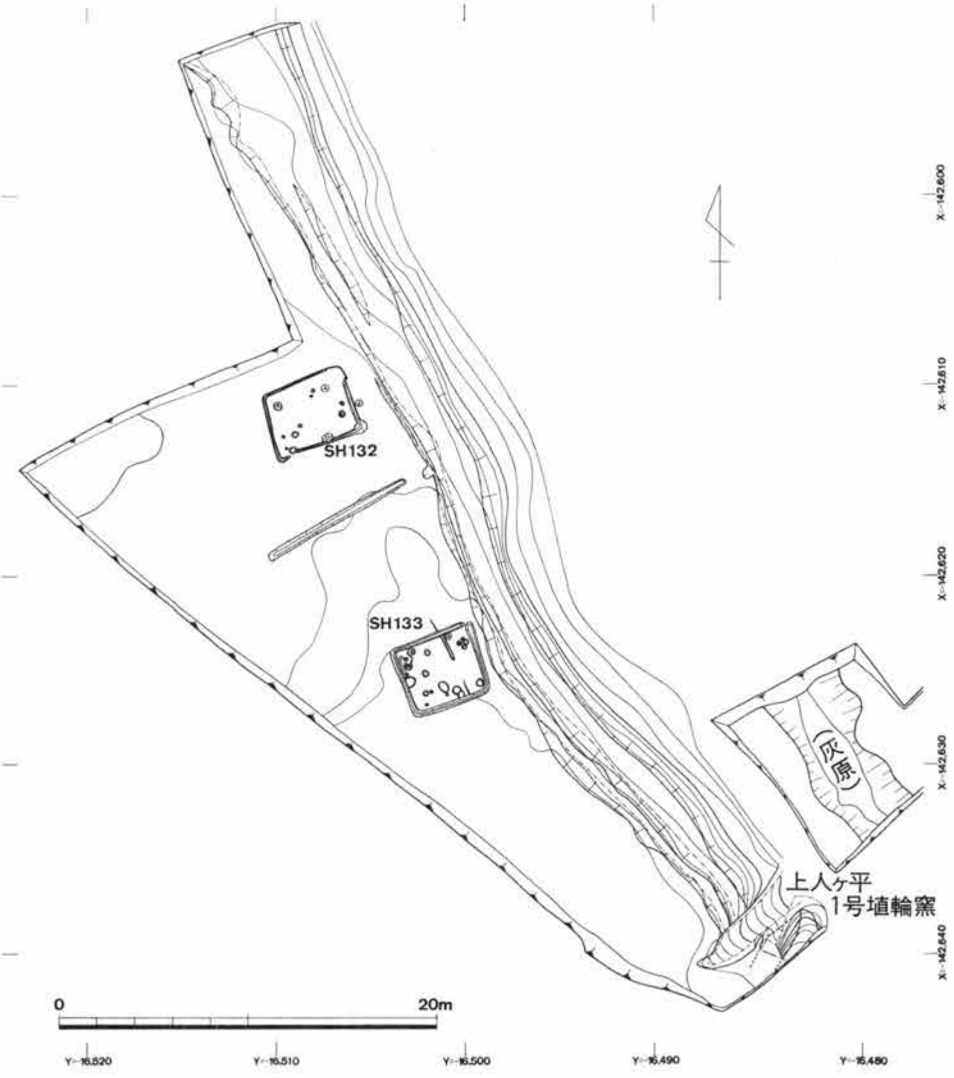
第36図 西地区遺構配置図

東側ほどよく残っており，35～50cmを測るが，西側はほとんど残っていない。

各住居跡内埋土は2層に大別でき，上層には奈良時代の遺物が含まれている。下層及び床面からは，細片化した土師器がややまとまって出土している。土器類は，布留式の中段階を前後する時期のものと思われる。

建物構造は，竪穴壁の辺に並行する4本柱形式を基本とし，径30cm前後の円形掘形に径約10cmの丸柱を柱間2.3～3.1m間隔で，竪穴中央部寄りに配している。

周壁溝は，壁に接した位置に幅20cm・深さ5cm前後の規模で途切れることなく完周するが，SH 103・104は床面が削平されて西側半分が残っていない。SH 102の南辺中央・SH



第37図　東地区遺構平面図

103及びSH104の東辺中央の壁寄りに，長辺1m前後の楕円ないし隅丸長方形の土坑(特殊ピット)がある。

この他，SH102の特殊ピットの東に接して，床面が底径70cmにわたって不整円形に掘り残され(床面からの高さ10cm)，この上面に大型の二重口縁壺の口縁部が倒立した状態で据えられていた。

SH105 前記SH104の南東30mに位置する方形プランの住居跡である。主軸は磁北からやや東に振っており，南北4.5m×東西4.0mの規模を測る。SH105は，後述する奈良時代の大型建物の造成に際し，削平を受け，壁高も最大30cmを残すにすぎない。竪穴のかなり中央寄りに四主柱(径25～30cmの円形掘形内に径10cm前後の柱痕跡を残す)を柱間1.5m等間で配している。

東辺中央の壁に接して楕円形(0.7m×1.0m・床面からの深さ20cm)の特殊ピットがある。

周壁溝(幅20cm・深さ10cm)は，北・東・南辺にみられ，西辺は中央付近で途切れる。

SH132・133 東尾根の基部(東地区)で検出した竪穴式住居跡である(第37図)。

南北に約15mの間隔で並列しており，どちらも東西にやや長い方形プラン(4.5m×3.9m)を呈し，両者とも主軸方位は北でやや西に振っている。SH132・133は後世の削平を受け遺存状態が悪く，わずかに数cmの壁の立ち上がりを残すのみである。

床面に穿たれた複数のピットの中から主柱を特定することは困難であるが，SH133では東西に柱間寸法を長くとった四主柱形式とみることもできる。

周壁溝は，両住居跡とも共通して北東隅部をわずかに掘り残す以外は完周する。SH133は南壁中央際に特殊ピットが1基存在する。

SB106・107・SA108 西地区の北西部で検出したピット群で，この中から建物跡2棟・柵1条を容易に抽出できた。

SB106は3間×3間の総柱建物跡(東西5.7m・南北5.6m)である。柱穴は径30～60cmの円形掘形で，径10cm前後の柱痕穴を残すものも多い。柱間寸法に厳密な企画性はなく，1.7～2.0mを測る。

各柱穴から布留式段階の土師器が出土したが，特に北側柱列東第1柱の掘形底付近で，小型丸底壺2個が口縁部を重ねた合せ口の状態で出土しており，その中から炭化米と滑石製臼玉が1点出土した。

SB106の東8mに位置するSB107は，2間×2間の総柱構造(東西3.7m・南北3.9m)を呈し，柱穴の規模・形状はSB106に準ずる。建物主軸がSB106(N3°30′E)より5°20′東へ振っている。遺物の出土は，柱穴内からはSB106に比べ少ないが，同時期の土師器の細片が出土した。

SA108，SB106の南前面を画する柱列（5間）で，方位はSB106の方位に斜交する。柱穴の規模や埋土はSB106に類似する。

この他，この周囲ではピットや，土器が出土する土坑を多数検出している。

(2)古墳時代中期後半～後期の遺構

18号墳　調査区のほぼ中央，盟主墳である5号墳の北北西約40mで検出した小規模な方墳である。18号墳は，奈良時代の建物敷地と重複するため遺存状態が悪く，墳丘面が検出面まで削平されている(残存深約30cm)。

墳丘主軸はほぼ磁北と一致し，一辺(対向する周溝中軸線間の距離)8.5mの正方形プランを呈する。周溝は「U」字形断面を呈し，上位より暗黄灰色土(奈良時代の遺物を含む)，暗茶灰色土・黄茶色土(墳丘流土)が堆積している。内部施設として墳丘検出面のほぼ中央で，主軸を南北にとる埋葬施設1基を確認した。埋葬施設は底部が平坦な形式の木棺(組合式木棺)を直葬したものと思われる。墓壙は最下部のみ遺存しており，長辺2.6m・幅0.5～0.8mの長方形プランで，深さ10cmを測る。棺内のほぼ中央で先を南に向けた鉄剣1振りが，壙底から遊離した状態で出土した。そのほか北辺周溝の東隅部で，溝底をさらに掘り込んだ土坑を1基検出した。この土坑は南北2m・東西1mの楕円形プランを呈し，坑底は舟底形で古墳の周溝底から10cm掘り込まれている。土坑の内部から完形の須恵器壺・𤭯が据えられた状態で出土し，その上部を墳丘流土が覆っている。このことから，この土坑は古墳の付属施設（土器供献土坑）と思われる。18号墳の墳丘及び周溝からは埴輪の出土は全くない。

19号墳　北西地区で検出した小規模な古墳である。後世の削平などを受け，周溝幅に変形を生じているが，墳丘主軸を南北にとる方墳(一辺約7m)と考えられる。墳丘の大半は削平されており，20cmの高さを残すにすぎないが，その中央で南北に主軸をとる木棺直葬の痕跡1基(長さ3m・幅0.5m・深さ0.1m)を検出した。内部施設・周溝内とも古墳に関連する遺物の出土は皆無であった。

なお，この古墳は，その西辺溝が布留式段階の竪穴式住居跡(SB102)と重複関係にあり，断面観察の結果，住居が廃絶して埋没した後，埋土面から古墳の周溝を掘削している状況が判明した。

20号墳　調査区の北側東寄りで検出した中規模の円墳である。現状では，周溝東半分が奈良時代の改変を受けて大きく変形しており，北縁部は東西の地境溝で欠失しているが，ほぼ正円形プランを呈し，直径20mの墳丘規模を測る。墳丘は後世の削平を受けて，検出面レベル(周溝底より20cm残存)で地山が露出している。このため内部施設は残存しない。周溝は他の小規模古墳と同様，下底平坦面を設けない「U」字形を呈する。溝内埋土は上

位より淡黄灰色粘土(自然埋没)・黄茶色土(墳丘流土)を基本とし，後者から若干の布留式併行期の土師器が出土した。

なお，昭和61年度報告した布留期の合せ口土器棺(注5)は今回の調査で20号墳の北側周溝内にあったことが確認され，20号墳周溝内に設けられた付属施設の可能性が高くなった。

10号墳　北西端に位置する小規模な方墳である。これまでの調査で一部を確認していたが，(注6)今回その全貌が明らかになった。主軸方位を南北に揃える一辺８ｍの方墳で，周溝は削平のため断続的に残るにすぎない(幅１ｍ・深さ10cm前後)。ただ，西辺溝は当初から両端が陸橋により独立している。周溝内より川西編年Ⅴ期(注7)(焼成は甘い)の埴輪類が出土しており，墳頂部の樹立が想定される。内部施設は墳頂部削平のため残存しない。

(伊賀高弘)

(3) 奈良時代の遺構

昭和63年度の調査で，梁間２間×桁行９間で南北に各１間分の廂をもつ東西棟の掘立柱建物跡SB301のほか，井戸SE315や瓦を多量に含んだ土坑SK319などを確認している。

今年度は，奈良時代の遺構として新たにSB301と同規模の建物跡３棟のほか，２間×３間の建物跡４棟，２間×４間の建物跡３棟(うち１棟は昭和59年の調査で確認)，溝状遺構・土坑などを検出した。ただ，奈良時代の遺構については，なお詳細な検討が必要なため，現在までに確認できたことについてのみ，その概要を報告する。

掘立柱建物跡は，その規模・敷地内における占地状況・建物構造などからＡ・Ｂ・Ｃの３群に分けることができる(第36図)。

A群は，これらの建物跡群の中央部にあり，昨年度調査したSB8839(今回遺構名を変更し，ＳＢ301と記す)を含め，４棟の建物跡が南北に整然と並ぶ(南からSB301・302・303・304)。

A群の建物跡は，東西約25.83～26.15m(９間，柱間約2.9m)×南北約11.48～11.64m(身舎２間＋南北両面廂，柱間約2.9m)で棟通りにも小さな柱穴がある。掘形の平面形は隅丸方形あるいは円形で，掘形の規模は身舎部分で一辺50～80cm，廂部分で一辺約40～60cmを測る。また，掘形内に残る柱痕は，身舎部分で直径約20～30cm，廂部分で直径約15～20cmを測り，柱の用材をその使用する部位ごとに区別している。

A群の４棟の建物跡は，直接の切り合い関係はないが，各建物跡に付随する溝(SD305・306)により，一部前後関係が考えられる。すなわち，SB304・303・302を画する溝SD305を切ってSB301を画する溝SD306がある。また，建物跡の基準尺をみると，SB304・303がほぼ2.91mであるのに対し，SB302・301は2.87mとみられる。このことから４棟の建物は，まず北の２棟(SB304・303)を築いたのち，南側のSB302を築き，さらにSB301を築い

たものと思われる。

B群の建物跡は，井戸(SE8837を改めSE315と記す)を囲むように，5棟の建物跡がある。B群の建物跡は，SB313の2間×2間の建物跡を除き，他の4棟は，2間×3間である。棟の方向は，SB310が東西である以外は，他は南北棟である。B群の建物跡もA群の建物跡と同様，方位及び建物の占地関係より先後関係が考えられるが，十分な検討は行えなかった。

C群の建物跡は，A群の西側に近接した3棟の建物跡群で，それぞれ2間×4間の規模をもち，長辺5.3～6.15m，短辺4.8m前後を測る。C群の建物跡では，SB309の掘形を切ってSB308の掘形がある。方位もSB307がA群の建物跡に近いが，SB308・309は西にやや振れている。なお，SB308に近い方位のものは，トレンチの北の端で確認したSB353のほか，B群のSB314がある。C群のSB307と309の間には柵列SA337がある。SA337はA群のSB304の北廂延長線上に位置する。

土坑は，SK316・317・318・320・322・341があり，奈良時代の土器や瓦を含む。そのうち，SK320からは土器や瓦のほか，萬年通寳(初鋳760年)1点，神功開寳(初鋳765年)2点が出土している。

溝状遺構は，前述の建物跡を区画するSD305・306のほか，道路の両側溝と思われるSD343・346や，5号墳と7号墳あるいは5号墳と8号墳を繋ぐ奈良時代の溝(SD357・356)や8号墳に溜まった水を谷に流し込む溝(SD355)などがある。また，主要建物跡を切るかたちで方位が大きく東に振れる溝などもある。

(石井清司)

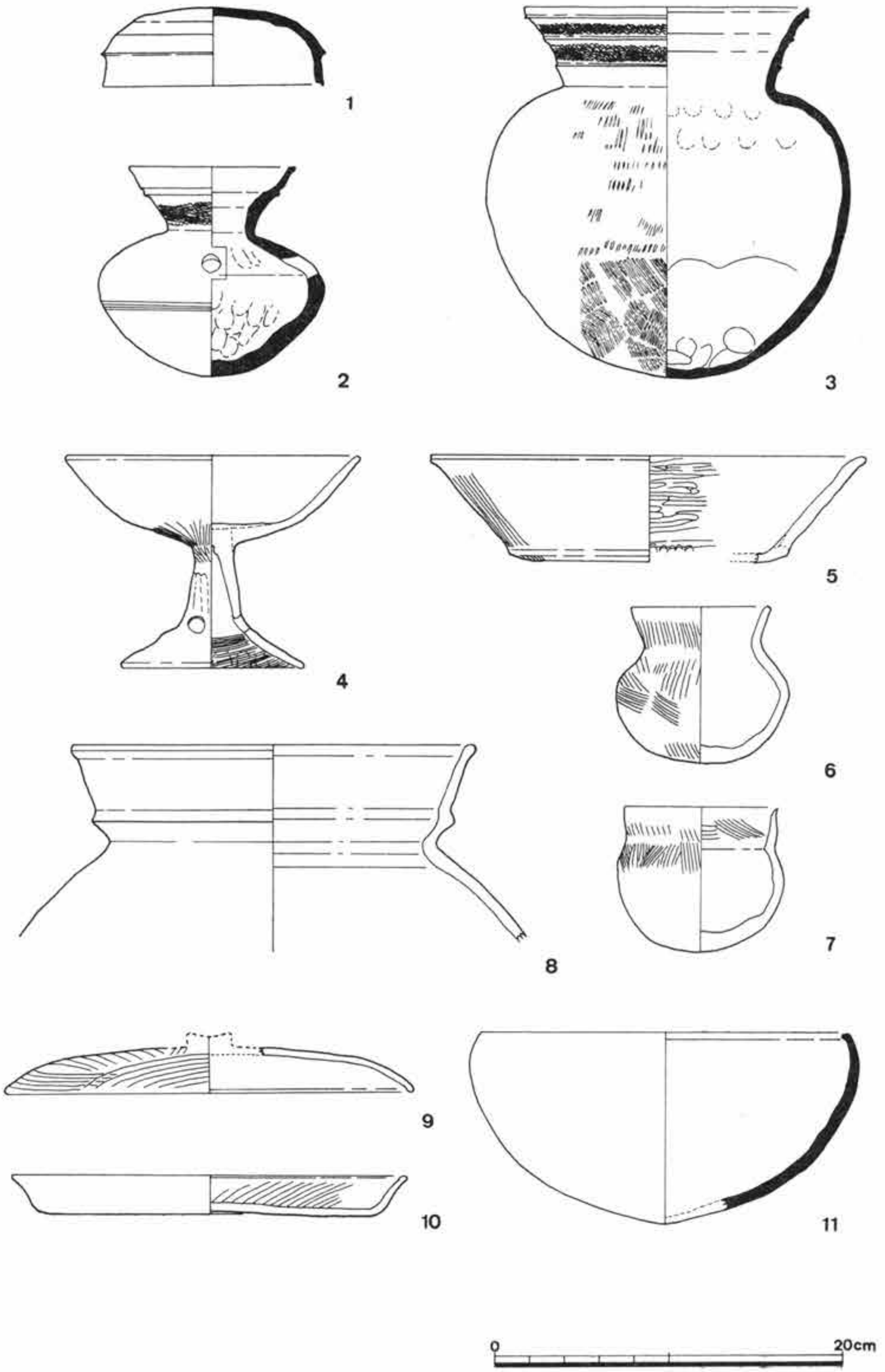
3.出土遺物

今回の調査では，古墳時代の土師器(布留式併行期)・須恵器(初期須恵器)・鉄器，奈良時代の瓦・土器類(土師器・須恵器)・銭貨などが出土した。とりわけ瓦磚類を中心に多量に出土しており，現在整理を進めている。ここでは一部の遺物を紹介するにとどめる。

(1)古墳時代の土器 (第38図1～8)

須恵器　杯蓋　1は，天井部が丸みをもち，口縁部はやや外反ぎみに垂下する。屈曲部には短く鋭い稜をひねりだす。口唇部は内傾し，明瞭な段を有する。天井部外面の1／2程度に回転ヘラ削りが施される。6号墳の北周溝内より出土した。TK 47併行か。(注8)

須恵器　𤭯　2は，小型の壺形𤭯である。体部最大径が口縁部を凌駕し，体部高さの上部1／3以上あって，肩の張った形状を呈する。口縁部は，頸部が外反した後，さらに，外上方にやや内湾ぎみに立ち上がり，その屈曲部には稜線が1条めぐる。口唇部は端面が



第38図　出土遺物実測図

ややくぼんだ水平面を呈する。口頸部外面に櫛描波状文による文様帯を，また体部最大径付近に櫛による平行沈線数条をめぐらせる。器面に薄く自然釉がかぶり，調整の詳細を知り得ないが，体部外面上半に回転カキ目痕跡が残る。

須恵器　壺　3は肩の張った体部に大きく外反する口縁がとりつく広口長頸壺である。口頸部外面に鋭い稜線が3条めぐり，その間に櫛描波状文が2段にわたって施される。調整は，最終的にはナデによって体部内外面を磨り消しているが，外面下半には先行する縦基調の平行タタキが，また底部内面には指頭圧痕が顕著に残る。

2・3は，18号墳周溝内の土器供献土坑から出土した。いずれもTK208前後(注9)に比定できる。

土師器　高杯　4は，裾部と柱状部の境が「く」字形に折れる脚柱部に，底部と口縁部の屈曲が緩慢な杯部が挿入付加される形態を示す。脚柱屈曲部に円孔が等間隔で3か所穿孔される。杯部内外面をヨコナデで最終調整するが，外面から脚柱上端にかけて先行する放射状ハケが残る。脚柱部外面は，面取り様のタテミガキの後，裾部をナデ調整する。内面は裾部に「クモの巣」状ハケが施される。6・7とともにSB106柱掘形内から出土した。

5は，脚部の底部と口縁部の屈曲が鋭く，その境界に擬口縁状の低い突帯がめぐる。器面は複数のていねい(ハケやミガキ)な調整で仕上げられる。SH103から出土した。

土師器　小型丸底壺　6は，扁球形の体部に外上方に内湾ぎみにのびる器高の1／3の高さの口縁部を具備する。外面全体をハケ調整(縦方向)した後，口縁内外面と底部外面をナデで仕上げる。体部内面は粗いヘラケズリをした後は調整していない。

7は，球形に近い体部上端を直立ぎみにひねり出して口縁部とする特異な形態を呈する。手ずくねで全体形を造りだし，頸部付近をタテハケで屈曲させて口縁部を造形する。最後に口縁部内外をヨコナデするが，先行するハケを消しきっていない。内面に非常に粗いケズリが施される。

土師器　壺　8は短く外反する1次口縁に外上方に直立ぎみに立ち上がる2次口縁を付加するように口縁をつくった二重口縁土器である。SH133床面で出土した。

(2)奈良時代の土器（第38図9～11）

土師器　蓋A　9は，天井部に丸味を残し，端部を内方に丸く肥厚させる。外面調整は全面に不整方向のハケメを施した後，口縁部に横方向のていねいなヘラ磨きを加える。SB353柱穴掘形内から出土した。

土師器　皿A　10は，口縁部が緩く外反し，端部を内に丸くおさめる。口縁部内面に1段の斜放射暗文が認められる。

須恵器　鉢A　11は，底部を失うが，尖底状の鉄鉢形を呈するものと思われる。内湾す

る口縁部の内部は水平方向に面取りする。内外面とも横位のナデで最終調整する。SB302の西方に下る谷地形埋土から出土した。

（伊賀高弘）

4.小　　結

上人ケ平遺跡の調査も6年目を迎え，調査対象地の90%近くの調査を終え，遺跡の全容がほぼ明らかになってきた。上人ケ平遺跡は，大きく三時期に大別でき，弥生時代後期後半～古墳時代中期前半にかけての竪穴式住居跡や倉庫を含む集落が形成され（Ⅰ期），古墳時代中期後半～後期には古墳が築かれる（Ⅱ期）。そののち，一時期の空白期間をおいて奈良時代には瓦生産工房として大きく造成される（Ⅲ期）。Ⅰ期の集落は，その分布から2グループに大別できる。また，古墳も5号墳と1号墳の円墳を盟主墳にしてその周辺に小規模な方墳を配しており，その性格についてさらに検討が必要である。奈良時代には調査前には予想もしなかった大規模な建物が整然と並び，出土遺物からみて，聖武天皇の平城宮への遷都を契機としてこれらの建物を含めた瓦生産工房が築かれたものと思われる。このように上人ケ平遺跡は，各時代ごとにいろいろな問題をなげかけている。

（石井清司）

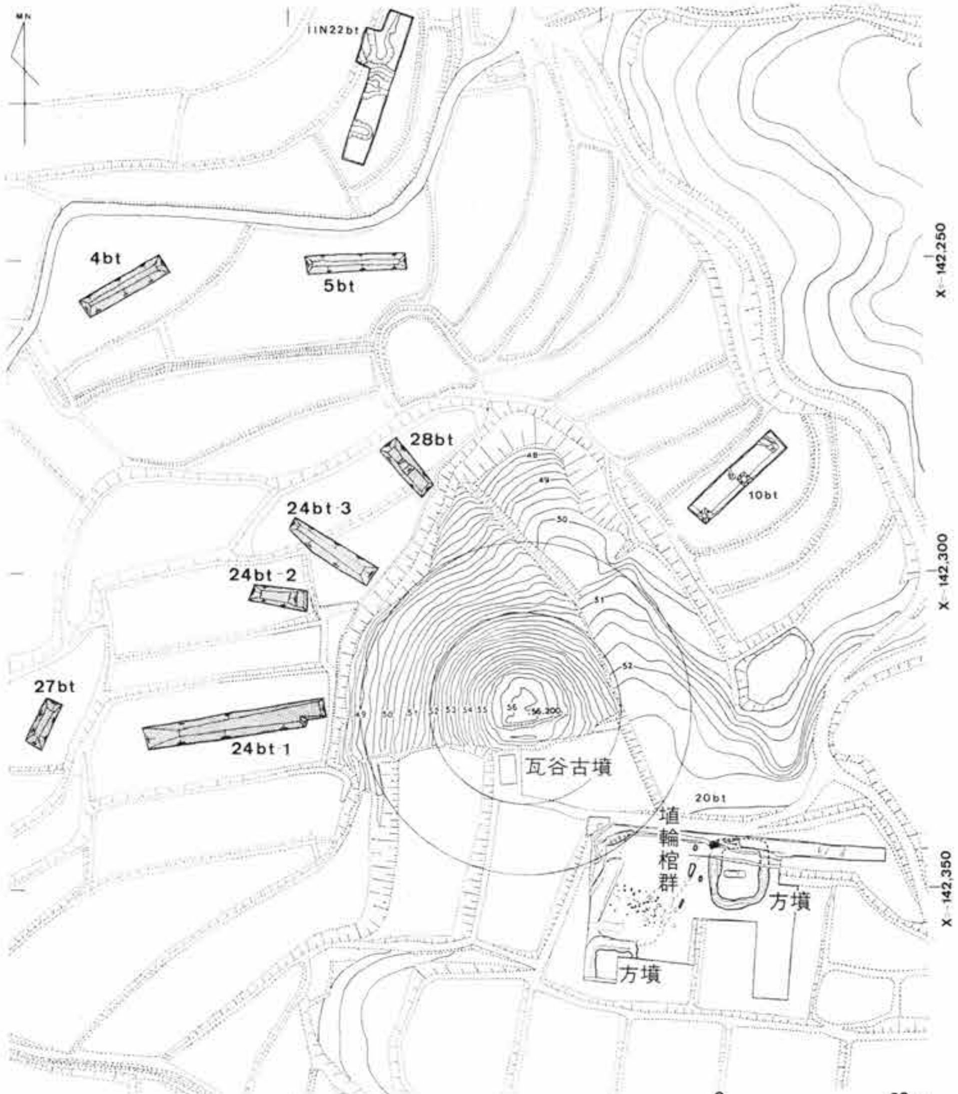
(2) 瓦　谷　遺　跡

1.は じ め に

瓦谷遺跡は上人ケ平遺跡の北東側に接する遺跡である。その立地は，平城山（ならやま）丘陵の裾に形成された比較的規模の大きな開析性扇状地の大半を占め，一部丘陵部の突端やそれに続く段丘性台地にもまたがっている。

この遺跡の調査については，昭和61年度より継続的に実施しており，今年度で4年目を迎える。この間，試掘トレンチを拠点的に設けて遺跡の実態究明にあたった結果，その内容が大略明らかとなってきた。

すなわち，過去の調査結果をもとにその概要を触れると，遺跡の西側の段丘部に隣接あるいはこの台地を開析する小規模な谷部で，自然河道及び埋積した谷地形を検出し，多量の土器や木器資料が出土した。遺物の内容は古墳時代前～中期（布留式期）を中心とするが，唐櫃転用井戸や埴輪窯の灰原なども検出し，概ね台地上の遺跡との関連を窺わせる資料と評価できる。（注10）



第39図　瓦谷遺跡 調査区配置図

一方，遺跡の東半部では，直径30m前後の瓦谷古墳の周辺で顕著な遺構・遺物を検出している。特に，古墳の立地する台地上には他に埴輪棺群や小規模な方墳が複数存在し，さらにその南側に展開する谷水田部では，布留期遺物を多量に包含する数状の自然河道を検出している。西側地区と同様，谷部で多量の遺物が出土することが隣接する台地(この場合，谷の北側に位置する一定の平坦部をもつ段丘性台地)に遺構が存在することを示すとすれば，今後注意を要する地区といえる。(注11)

これら両地区に挟まれた扇状地中央部では，一部で樹枝状に分れて合流する自然河道を

検出したにすぎず，遺構・遺物は前二者に比べ希薄であることが判明している。(注12)

このように瓦谷遺跡については，遺構・遺物の広がりが，扇状地形の周囲に続く台地もしくはこれを開析する小規模な谷に集中することが，これらの調査で明らかとなっている。

2.調査の概要

平成元年度の調査は，次年度調査を予定している瓦谷古墳の周囲にひろがる耕作地のうち，その実態が不明であった古墳の北東側を対象とし，7か所の試掘トレンチを設定して調査を行った。また，別に遺跡の西地区で，唐櫃転用井戸や遺物を多量に包含する埋積谷が検出されていた地区(IKW74btトレンチ)の北に接する耕地に試掘坑を設け，その下流延長部のようすを窺った。

以下，各地区ごとに，調査の概要を略述する。

(1)瓦谷古墳北西側隣接地区(24bt-1・24bt-2・24bt-3・28bt・27bt・4bt・5bt，第39図)

瓦谷古墳の立地する丘陵は，比高差1～2mの崖で周囲に広がる沖積地(扇状地)と画されており，この平坦面は，現在棚田として土地利用されている。ただ，この耕地部分を詳しく観察すると，特に今回の対象区である古墳の北西側については，北東側が明瞭な谷地形を示すのに対し，耕地造成のときに丘陵末端部を人為的に削平し，丘陵地形と切り離した感が強い。このため古墳の外郭施設がこの地区に及ぶことが予想されたので，特に丘陵に近接した地点に重点を置き調査を行った。

調査の結果，丘陵に接する調査区(24bt-1・24bt-2・24bt-3・28bt)で，埋没した丘陵斜面を検出し，その堆積土中から埴輪が多量に出土した。

各調査区の層序は，基本的には上位から表土(耕土)・床土・耕地造成土・基盤層となる。

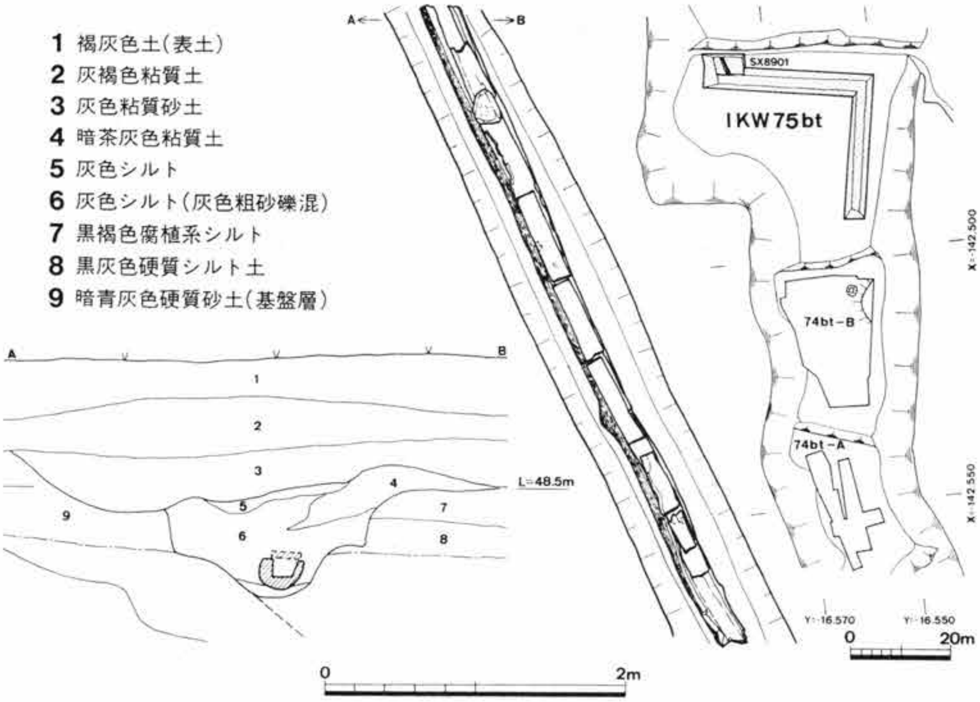
このうち基盤層は青灰色のグライ化した土壌で，24btの各トレンチと28btの丘陵寄りで確認したにとどまる。また，丘陵から離れた4・5・27bt地区や24・28btの丘陵埋没部分の上層で，部分的に奈良時代～中世の遺物細片を包む暗褐色系粘質土が造成土下位に堆積している。24・28btで確認した丘陵斜面は，例えば24bt―2でGL-2.5mまで追求したがさらに下方に傾斜している。この斜面を覆う埋土は，主として青灰色シルト系土であるが，最下層に暗灰色腐植土の薄層が堆積し，特に28btでは炭混じりの同層の堆積が顕著であった

丘陵寄りの調査区で埴輪片が若干出土した。出土層位は，床土から斜面埋土までさまざまで，磨耗を受け全体のわかる個体は少ない。

各調査区とも顕著な遺構は検出されなかった。

(2)上人ケ平遺跡立地の台地を開析する谷部の谷口部(75bt，第40図)

耕地に逆「L」字形トレンチを設定した。その結果，調査区の南北部分の南寄りと東西



第40図　瓦谷75番地地区 遺構実測図

部分の西端で，埋没した谷地形の斜面を確認した。ただし，谷底部分は調査範囲の関係で，GL－3mまで追求したにとどまる。谷内埋土は南接する74bt地区と基本的には変わらない。(注13)

出土遺物は相対的に少なく，布留式併行期の土師器を主体にコンテナ数箱分出土した。その他，調査区の西端で，木樋を使用した暗渠を検出した(SX8901)。

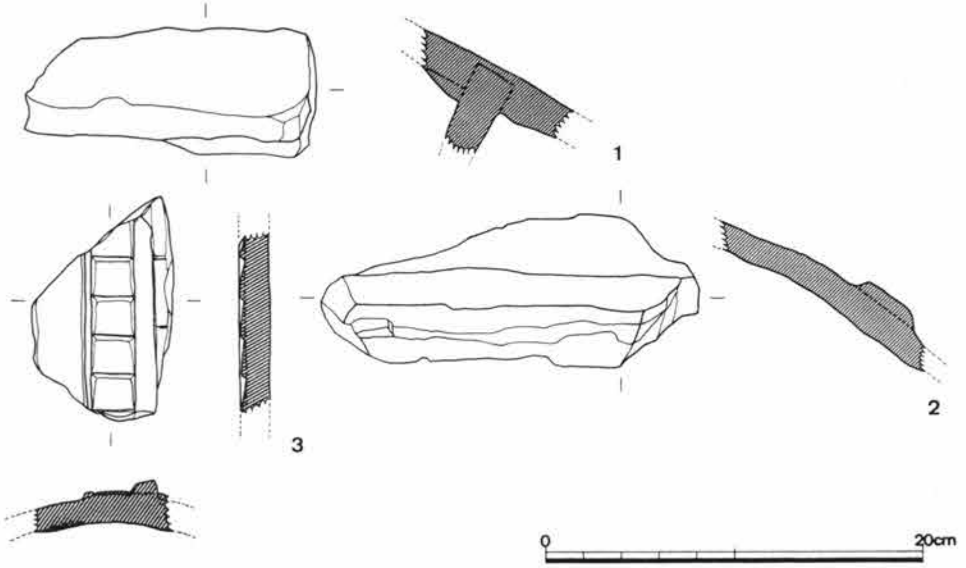
SX8901　現地表下1.5mに設置されたたもので長さ4.7mにわたって遺存していた。その構築は，谷部に腐植土がある程度埋没した段階で，丘陵斜面に近接した位置に平行するように(木樋の主軸方位N20°W)横断面が2段構造の掘形(現状で上縁幅1.4m・深さ0.6m)を穿って木樋を据え付けている。木樋本体は，直径20～28cmの樹皮を剥いだ松(二葉松)の一木を，断面箱形に内刳りしたものを身とし，上部に緩い円弧を残す長方形の板材(スギ)を間隙なく連続的に載せて蓋としている。また，一部蓋板の上に子供の人頭大の自然石を置いて安定をはかっている。木樋の両端は欠損しており，本来はもっと長かったと推定されるが，後世の攪乱等のため，これ以上遺存しない。ただ，南端の延長部で大小の孔を穿った板材が出土しており(第41図-4)，この地点に取水施設等の存在が推定できる。

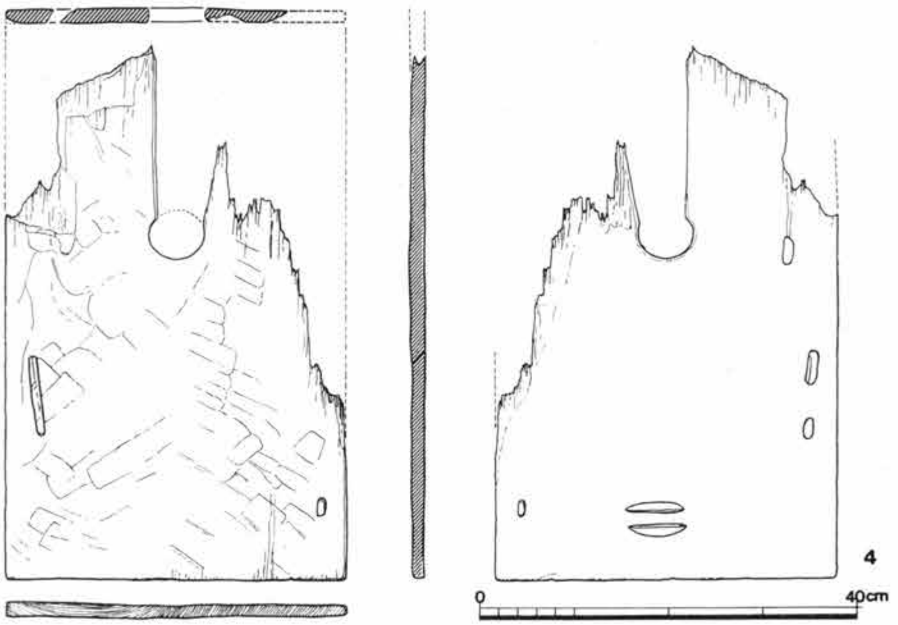
この暗渠の帰属時期に関しては不明な点が多い。ただ，布留式併行期の遺物を若干包含する7層(第40図)をベースに掘り込んでいることや，遺構上面を瓦器などの包含する3層が覆っていること，さらに周辺調査区の谷内堆積状況などを勘案すれば，古墳時代とみる

のが妥当と思われる。

3.出土遺物（第41図）

今回の調査では，瓦谷古墳周辺地区で埴輪片が，75bt地区で木製品と布留式併行期の土師器がそれぞれ少量出土した。この内，図示したものに若干の説明を加える。





第41図　出土遺物実測図

1・2は，蓋形埴輪の笠部の破片で，1は円筒基部との接合部付近である。

2は，笠部外面に幅3.5cm・高さ0.7cmの底平な突帯を貼り付け，さらにこれより突出度の低い縦方向(放射状方向)の突帯を下方に派生させている(注14)。同一個体の確証はないが，いずれもかなり大型の個体に復原でき，笠部外面中位の突帯の貼付位置が，笠部と円筒基部との接合部に一致しないという造形上の特徴を指摘し得る。

3は，緩く湾曲する板状部の一側面に大小2条の平行する突帯を設け，その突帯間に断面鋸歯状の板を積み重ねるような立体的造形を連続させている。このような表現は古手の形象埴輪に通有のモチーフであり，家形埴輪の屋根棟部の可能性がある(注15)。

4は，幅36cm・厚さ1.5cmの長方形の板材(残存長36cm)で長軸ライン上に直径5cm×6cmの円孔を，さらに長側寄りの数か所に長円形の小孔を穿っている。また，短側寄りに長半円形を截断面で合わせたような刳り込みがある。杉の板目材で，一側面に加工痕が顕著に残る。木樋本体の南延長部で出土した。

この他，鰭付円筒埴輪や布留式併行期の土師器などが出土しているが，細片のため図化していない。

4.小　結

今回の調査では，瓦谷古墳の周辺の特にその北西側の実態が明らかになった。

つまり，古墳の領域を追求する目的で調査した結果，この古墳の立地する丘陵の下半延長部が現地表下に埋没している状況が明らかとなった。そして，そこには周濠や外堤といった古墳に関連する施設は存在せず，少なくとも瓦谷古墳が地表上に丘陵地形として現出している範囲を越えないことが判明した。

また，出土した埴輪資料は，いずれも川西編年の(注16)Ⅱ期に属するもので，古墳の築造時期を特定できる手がかりになる。また，埴輪は古墳の北東側の10bt地区にまで転落していることから(注17)，一方で古墳に樹立されていた埴輪が墳丘面の大規模な削平を受けて広範囲に移動している可能性も予想される。

一方，75bt地区の調査成果は隣接する調査区と同様に，その遺構・遺物の内容が上人ケ平遺跡と密接な関連性のあることを指摘したが，今回の木樋を用いた暗渠状遺構も，唐櫃転用井戸などとともに，一連のものと捉える必要があると思われる。

（伊賀高弘）

(3) 瀬 後 谷 遺 跡

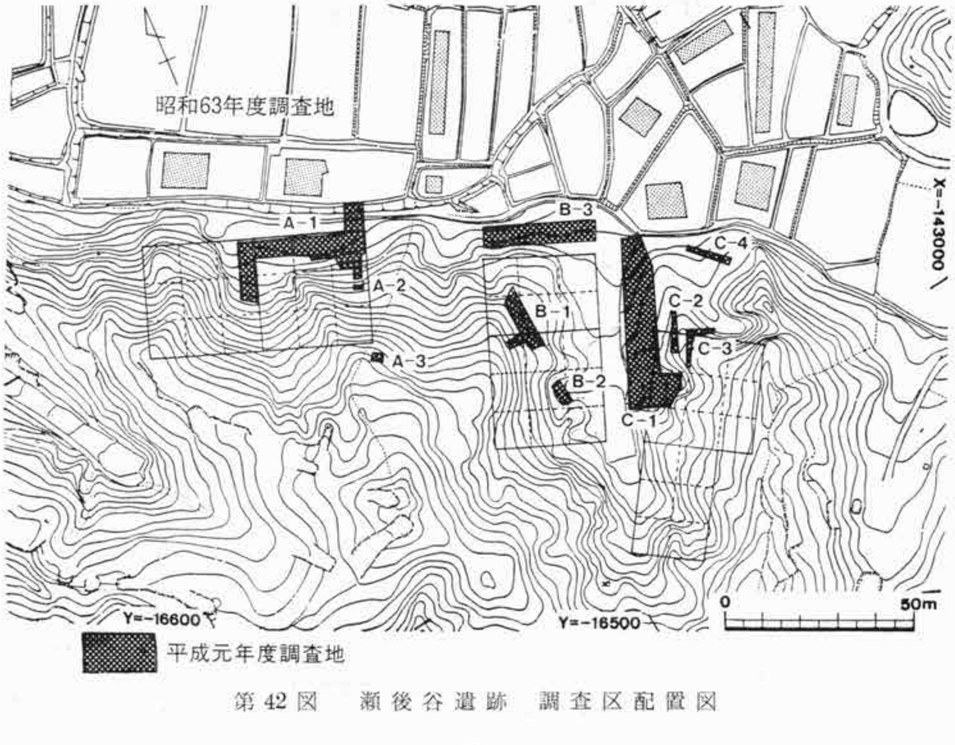
1.は じ め に

瀬後谷遺跡は，上人ケ平遺跡の立地する丘陵の南側の谷筋にある。この谷の南に続く尾根の稜線が奈良県との境界であり，地形的には丘陵の南側に東西に展開するやや規模の大きな谷地形が広義の平城山丘陵(奈良市北方丘陵)を南北に区切っている。

この付近一帯の丘陵は，洪積層(大阪層群の最下部と下部)の隆起によって形成され，特に崩落しやすい砂礫層(梅谷砂・礫層)が顕著に広がっている。このため丘陵はなだらかな地形を呈し，現在各所に砂防指定地区が設定されている。したがって，大規模な地形の自然改変を考慮する必要のある地域といえる。

この遺跡に関連する調査は，昭和62年度より継続的に実施しており，今年度で3年目を迎える。

過去の調査内容を簡単に触れると，初年度は，土器類や瓦が採取されたことから，谷水田部に試掘トレンチを配して発掘調査を行った。その結果，顕著な遺構は検出されなかったが，南側の丘陵寄りの各調査区で，深く埋没した丘陵斜面の下半部を確認し，一部の調査区ではこの斜面上に炭層の堆積がみられた。また，この調査区周辺から奈良時代の土器



第42図　瀬後谷遺跡　調査区配置図

(須恵器)や瓦磚類がややまとまって出土し，周囲に生活空間を想定できないことから，当該期の瓦などの生産遺構が近くに存在することを予想させる成果を得た。(注18)これを受けて，63年度は，窯跡が想定される谷部の南側の丘陵斜面で磁気探査調査を実施したが，窯の存在を示すはっきりしたデータは得られなかった。(注19)

2.調査の概要

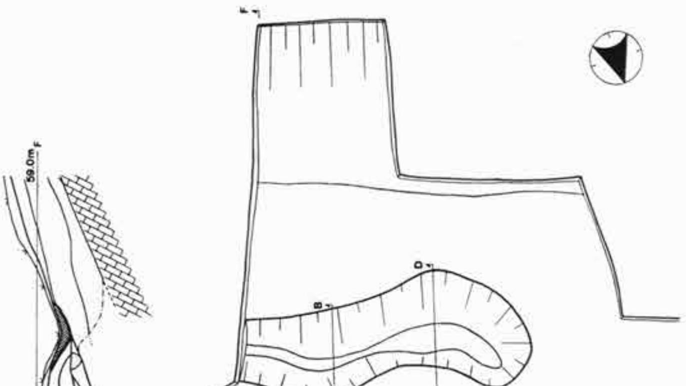
今年度は，先の磁気探査調査の結果，わずかな変動のみられた地区を中心に，南側の丘陵斜面に試掘トレンチを設定し，掘削調査を実施した。

調査は，炭層の堆積がみられた水田に南面する地区(A地区)と，その東方で丘陵斜面が南北に大きく開析され扇状地状に広がる地区(B・C地区)に，それぞれ数か所大小の試掘トレンチを設けて実施した(第42図)。

その結果，対象地区東半部のB・C地区では，いずれも表土直下が基盤層で，遺構・遺物は検出されなかった。

一方，A地区では，現在の丘陵裾付近に設けたA-1トレンチの東端で炭層の堆積する溝状遺構が検出され，付近で若干の奈良時代の布目瓦・須恵器などとともに窯壁の断片が散乱した状態で出土した(第43図)。

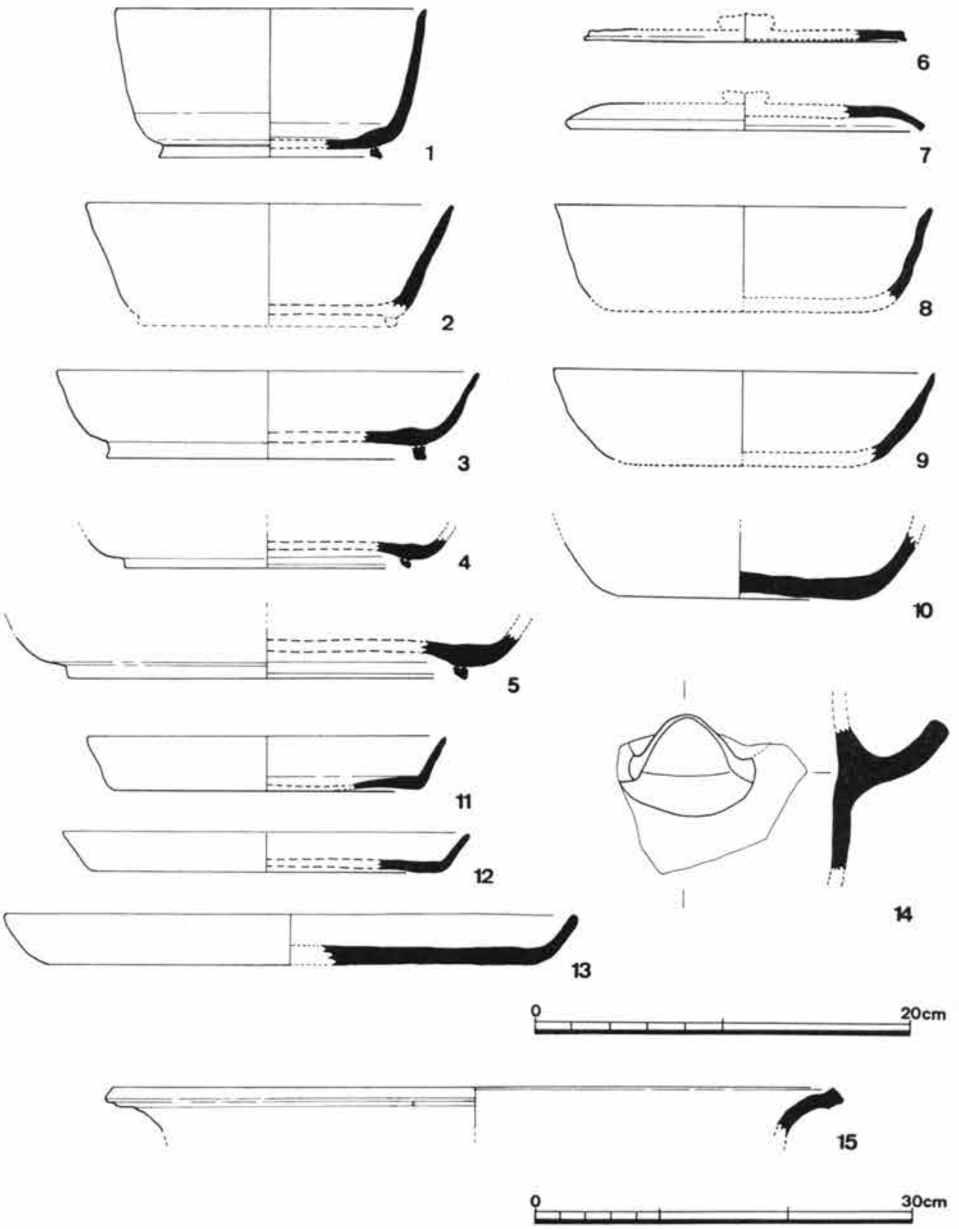
この溝状遺構は，主軸が等高線方向と平行し，現地表下わずか10cmで検出され，現地表面にもその痕跡が残っている。検出面で幅2m・最大深さ0.3mで内部に炭と焼土が互層になって数単位堆積している。奈良時代の遺物の大半はこの炭層から出土している(第43図)。



第43図　A－1トレンチ東区遺構配置図

この溝の周囲の地形をみると，より丘

陵上位(南)側は，表土下で地山となり，小規模な開析地形が刻まれた急斜面となっているが，そこには窯体の痕跡はみられない。反面，溝の北側は南北5mにわたって水平面(テラス状地形)が形成されており，溝はこの面を基盤として掘り込まれている。ところが，断ち割り調査の結果，このテラス状地形は水平を基準とする数次にわたる土層の堆積により形成されたことがわかった。窯壁の断片は，この土中からまとまって出土している。実際，



第44図　出土遺物実測図

溝以南でみられる地山(あるいは古い時期の堆積層)は，このテラス状地形の下位でも，南側とほぼ同一の勾配で傾斜しており，このテラスの上半部が人為的な盛土によって形成された可能性が高い。そうすると，この人為的なテラスをベースに掘り込まれた溝状遺構は，窯体が破壊されて以降のものといえよう。

いずれにせよ，調査区内では，より上位にもうけたA-2・A-3トレンチも含め窯体は残存せず，灰原の一部が土器類とともに近年になり小規模な溝内に流れてきたと考えられる。

3.出土遺物(第44図)

今回の調査では，A-1トレンチ東端部で，須恵器・布目瓦(細片)が出土した。須恵器には杯A(1～5)，杯蓋(6・7)，杯B(8・9)，皿(11～13)，把手(14)，甕(15)などがある。いずれも細片が多く，高熱で焼き歪んだり，溶着した個体も少なくない。

4.小　　結

今年度は過去2年間の調査成果をもとに，丘陵斜面部分の発掘調査を実施した。

その結果，磁気探査でわずかな変動値のみられた地区で，焼土・焼灰の堆積と土器・瓦・窯壁が出土した。このことから，調査地内あるいはその周囲に，瓦や須恵器の窯跡が存在することは明らかである。特に，焼け歪んだり，溶着した須恵器や，高温を受けて硬化した窯壁が出土したことは，これを裏付ける有力な根拠となる。しかし，実際は，窯体そのものはその残骸すら検出されず，焼灰の堆積も二次的な可能性が高い。おそらく，窯体が残存しなかった理由としてはじめにも記したように，軟弱地盤に帰因する地形の大規模な変形(例えば大規模な地滑りなど)に原因を求められるかもしれない。

(伊賀高弘)

注1　「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注2　「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注3　調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

五百磐顕一・井上直樹・泉　晶子・遠藤七都子・大谷健二・鎌田敏文・木村晶子・小村　勉・正寿敦・筒井崇史・豊福　孝・中井英策・服部直美・森武千恵・八瀬正雄・山田哲也・吉田悦子・

若松美智子・渡辺康子・有馬三喜子・川本由香・木村絹子・坂田千晶・島原みどり・新谷二三代・谷口ゆかり・辻　道子・中西　修・中村久登・早川和子・林　恵子・林　益美・芳谷興子・古川良子・藤内朱實・吉永清美・和村裕紀子

注4　注2に同じ。

注5　「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第26冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注6　「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第26冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987
「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第32冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

注7　川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号）　1976

注8　田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」（『研究論集』第10号　平安学園考古学クラブ）　1966

注9　注8に同じ。

注10　「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第32冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989
「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第35冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

注11　「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第26冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注12　注10に同じ。

注13　「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第32冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989　本文49・50頁・第33図参照

注14　放射状方向の突帯は，佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪の笠部外面下半にみられるような板を重ねるような表現とみることもできる。

注15　佐紀盾列古墳群西群に位置するマエ塚から近似する埴輪片が出土している（『大和考古資料目録』前期古墳資料(1)第11集　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1983）。

注16　注7に同じ。

注17　注11に同じ。

注18　「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第32冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

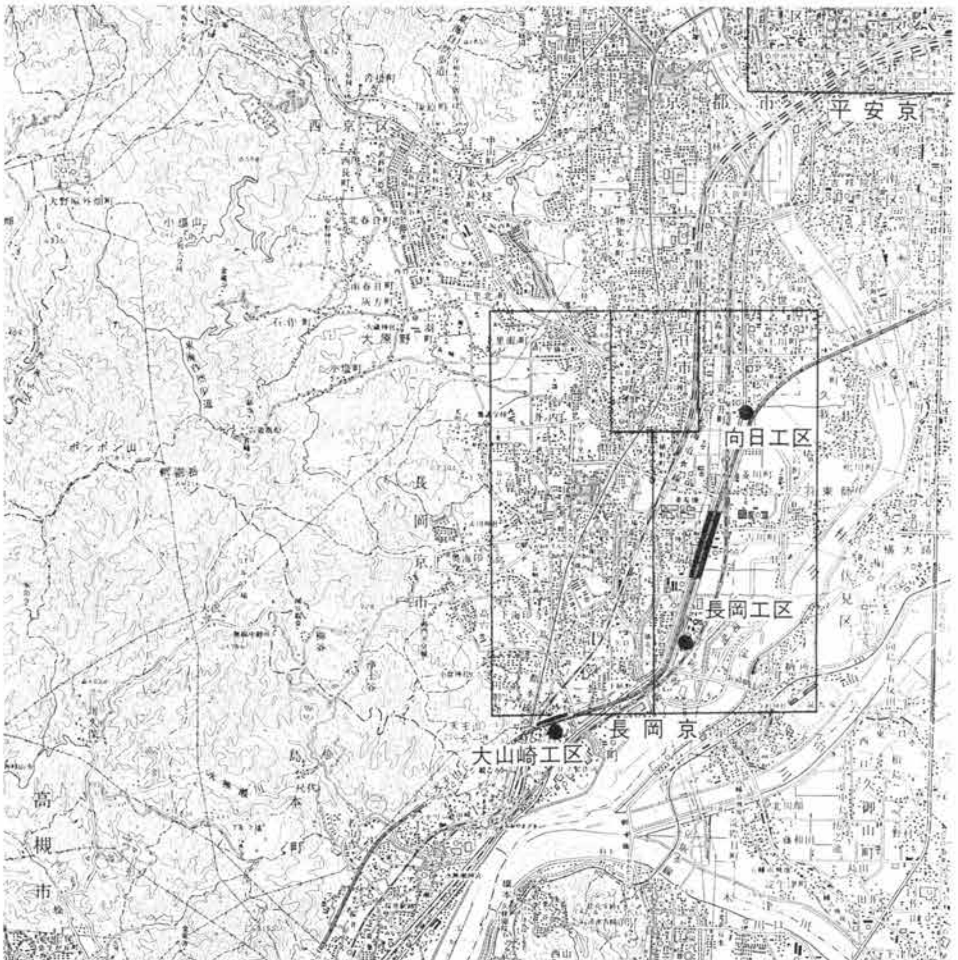
注19　注2に同じ。

4. 長岡京跡左京第216次・右京第343次発掘調査概要

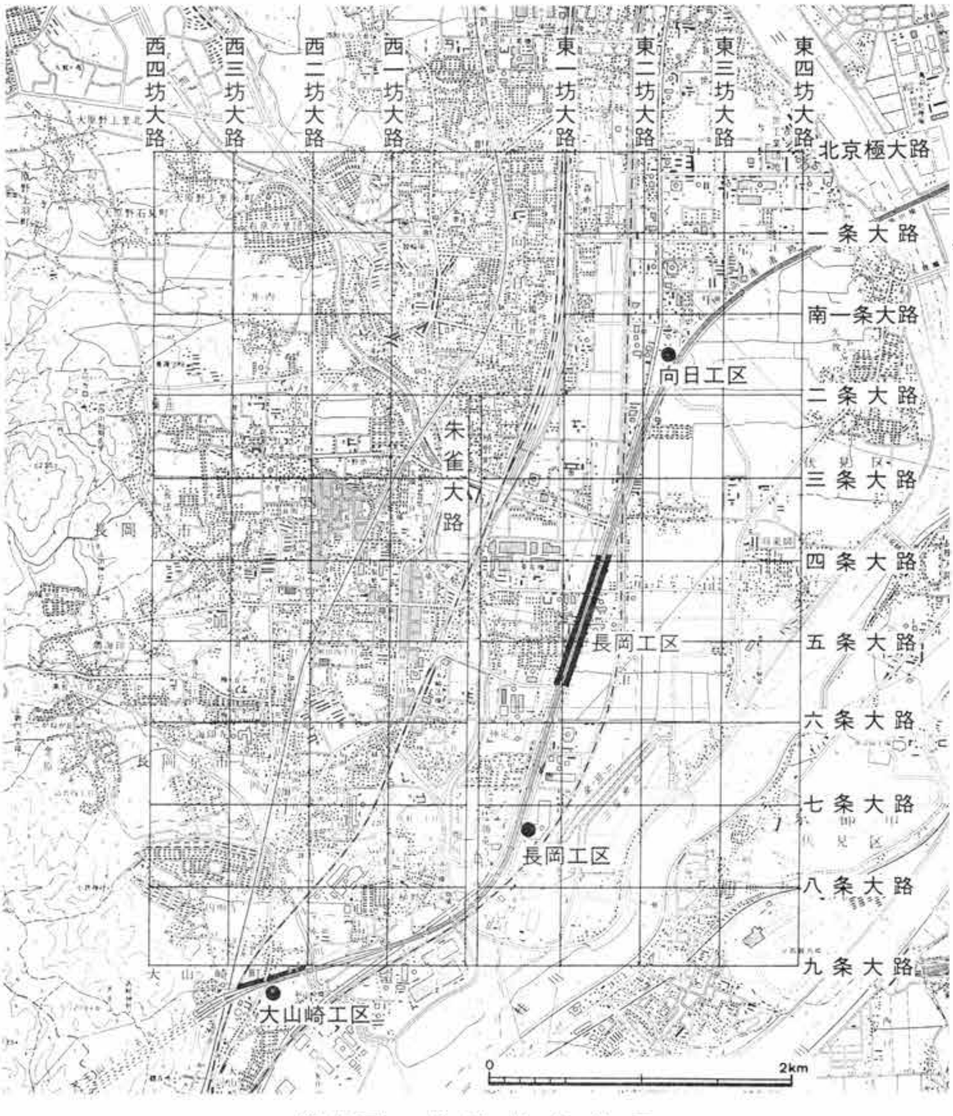
はじめに

中央自動車道西宮線，通称名神高速道路は近年の交通量の増加による慢性的な交通渋帯と，天王山付近で多発する事故を改善するため，日本道路公団によって，大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の走行車線の拡張工事が計画された。

名神高速道路の走る京都市西南部及び旧乙訓郡(向日市・長岡京市・大山崎町)は，桂川，



第45図　調査地位置図



第46図　長岡京条坊図

宇治川，木津川の3河川が合流して淀川となる合流点の北に位置し，西側には西山と呼ばれる低い山々が連なっている。道路部分の大半は，低位段丘面及び沖積平野を横切って走っており，この地域では，ほぼ全域が長岡京域に含まれるだけでなく，点々と周知の遺跡が分布している。今年度の調査対象地は，長岡京の条坊復原によると条では，二条第二小路と四条大路から六条条間小路が，坊では，東二坊第一小路と東二坊坊間小路が想定される地点である。また，大山崎町では百々遺跡，長岡京市では雲宮遺跡，向日市では鶏冠井清水遺跡等の遺跡も調査対象地内に含まれている。

発掘調査区名は，道路公団側の工事区に合せ大山崎工区・長岡京工区・向日工区の３区に分けた。このうち，向日工区・長岡京工区は長岡京跡第216次調査として行い，大山崎工区は長岡京の右京域に含まれるため右京第343次調査とした。また，検出した遺構番号は，向日工区で100番台とし，長岡京工区を90番台までとした。現地での発掘調査は，平成元年４月４日～平成２年３月９日まで行った。調査面積は延べ約4,350㎡となった。本調査に係わる経費は，日本道路公団大阪建設局による。

調査には，当調査研究センター調査第２課調査第３係長小山雅人，同主任調査員戸原和人，同調査員竹井治雄・三好博喜・中川和哉があたった。本書の執筆は，１向日工区を戸原・竹井，２長岡京工区を戸原・中川・広瀬時習，３大山崎工区を三好が担当した。

調査を行うにあたり，日本道路公団，大山崎町教育委員会，長岡京市教育委員会，(財)長岡京市埋蔵文化財センター，向日市教育委員会，(財)向日市埋蔵文化財センター，(財)京都市埋蔵文化財研究所等の関係各機関をはじめ，各大学の学生諸氏の協力を得た。謝辞を述べたい。(注1)

歴史的環境

調査の対象となる名神高速道路の敷地は，大部分が長岡京域内に含まれている。長岡京は，桓武天皇により延暦３(784)年に平城京から遷都され，延暦13(794)年には平安京に遷都された短命の都である。従来，都の存続期間が10年間と短期間であったために，未完の都，幻の都とされていたが，昭和30(1955)年以来，中山修一氏を中心として各機関による発掘調査が継続的に行われてきた。

これまでの発掘成果の蓄積により，長岡宮内はもとより京域に至る広い範囲で都が造営されたことが明らかとなり，都としての機能だけでなく，大都市としての賑いも想定できるほどである。しかし，長岡京全体の条坊施工の面ではまだ不明な点も多く，特に，五条以南については条坊の解明がはじまったばかりである。たとえば，昨年度の調査で確認した六条大路側溝は，過去に確認された五条大路の座標から計算して南側溝と考えたが，(注2)その後の長岡京市埋蔵文化財センターの左京第245次調査により北側溝の可能性が指摘され，(注3)京都市埋蔵文化財研究所の左京第251次調査により北側溝であることが確認された。(注4)新しい資料の蓄積によって，これまで想定されていた長岡京の条坊復原を考え直す段階に来ている。一例をあげると，従来の復原条坊では，大路になる東西方向の道路が，発掘調査によって小路幅しか持たないことが明らかとなってきたものが存在する。このことから，条坊が南北いずれかに２町ずれることが考えられるようになったが，現在まで結論は出てい

ない。名神高速道路の調査では，これら状況の存在を明らかにし，資料の積み上げをすることが大きな課題となっている。

調　査　の　方　法

今年度調査地のうち，長岡京工区と向日工区については，長岡京の条坊に係わる遺構の調査に限定して調査することとし，条坊の復原計画線の座標周辺にトレンチを設け，条坊遺構の検出に努めた。調査トレンチ設定地域では，安全対策上，名神側でH綱と矢板を用い，国道171号線側ではシートパイルによる土留め支保工を行った。この結果，調査地内での全体写真の撮影が困難となったため，対応策として，条坊関連遺構を検出した地点については，条坊の全体を一連のものと記録する方法として，門型ステーションによる垂直撮影の後，H綱部分を取り除いたモザイク写真を作成した。

(戸原和人)

(1)　長岡京跡左京第216次調査・向日工区(7ANEMR•WID)

1.はじめに

向日工区における今年度の調査は，当初，3ブロック・5か所のトレンチ調査を計画したが，工事工程等の都合により最終的には1ブロック・2か所のトレンチ調査となった。

2.調査概要

向日工区10ブロック(7ANEMR・7ANWID地区)

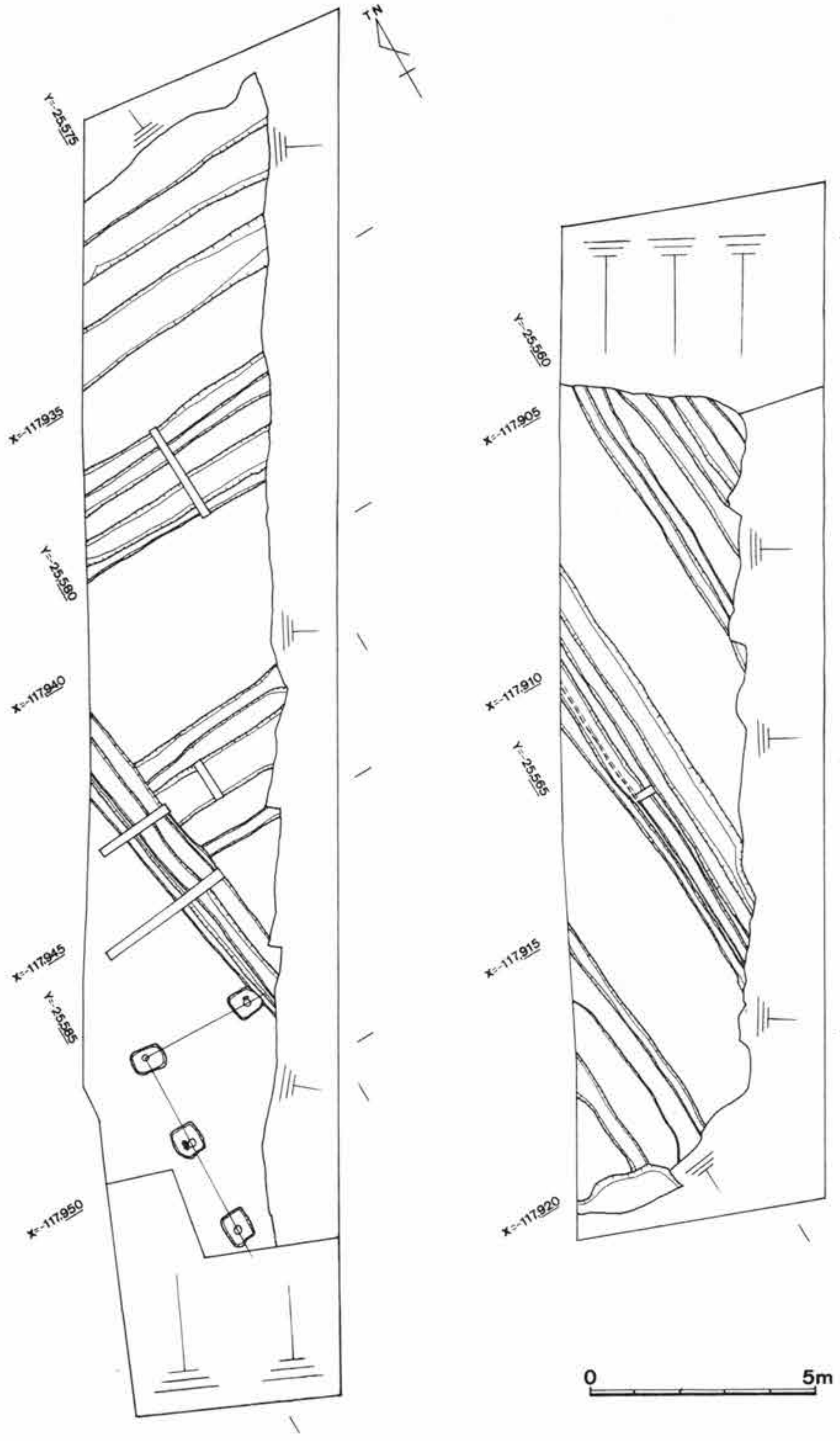
二条第二小路の検出を目的とした調査区である。向日市鶏冠井町の南金村と，京都市伏見区羽束師町イカダで2か所のトレンチを設定した。調査は，11月8日から開始し，平成2年1月22日までの期間を要した。調査面積は約300㎡となった。

A.検出遺構

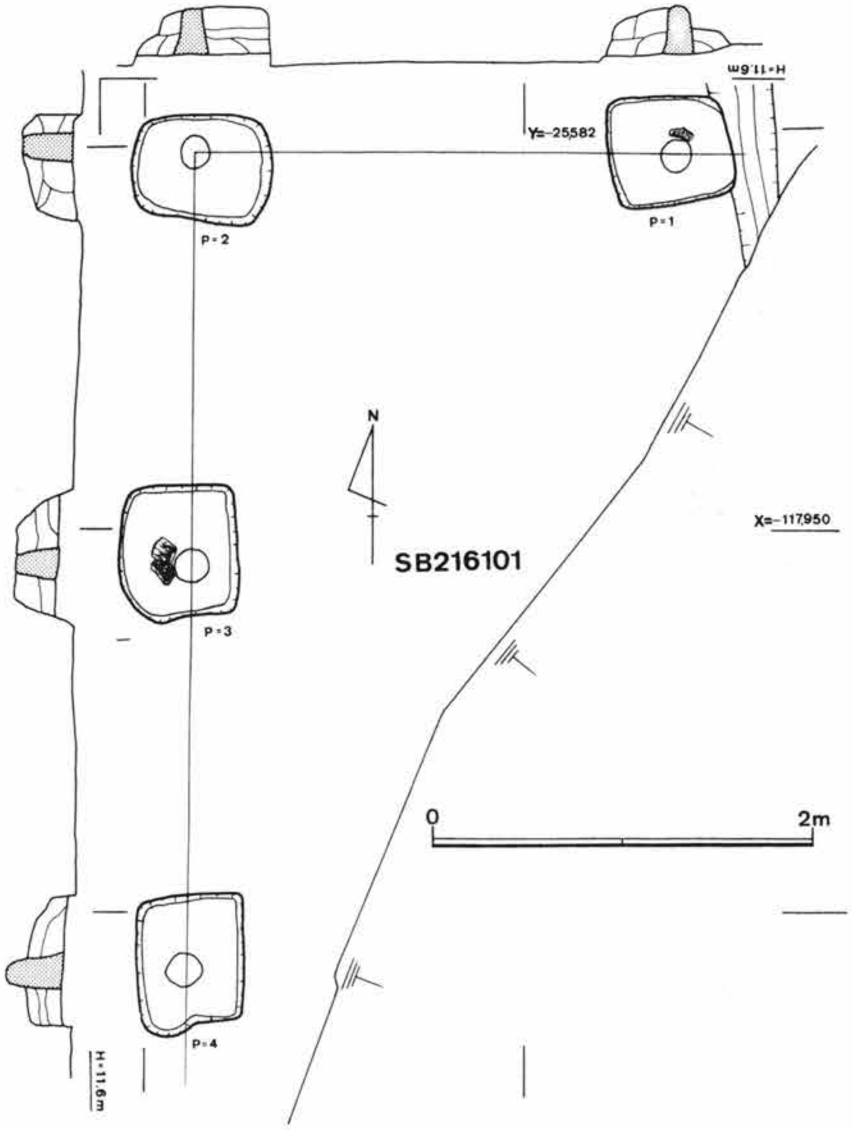
①**第21-1トレンチ**(第47図・図版第28・29・30)

長岡京期の遺物が出土する幅約1.0mの東西溝(SD216101)1条と，1間以上×2間以上の掘立柱建物跡(SB216101)を検出した。その他，第21-1トレンチ及び第21-2トレンチで検出した溝から中世の遺物が出土した。長岡京廃都後の水田耕作に伴う溝と考えられる。

建物跡SB216101(第48図・図版第29-(2))　トレンチ南端部で検出した東西1間以上×南北2間以上の掘立柱建物跡である。柱間寸法は東西2.53m(8.5尺)，南北2.1m(7尺)等間



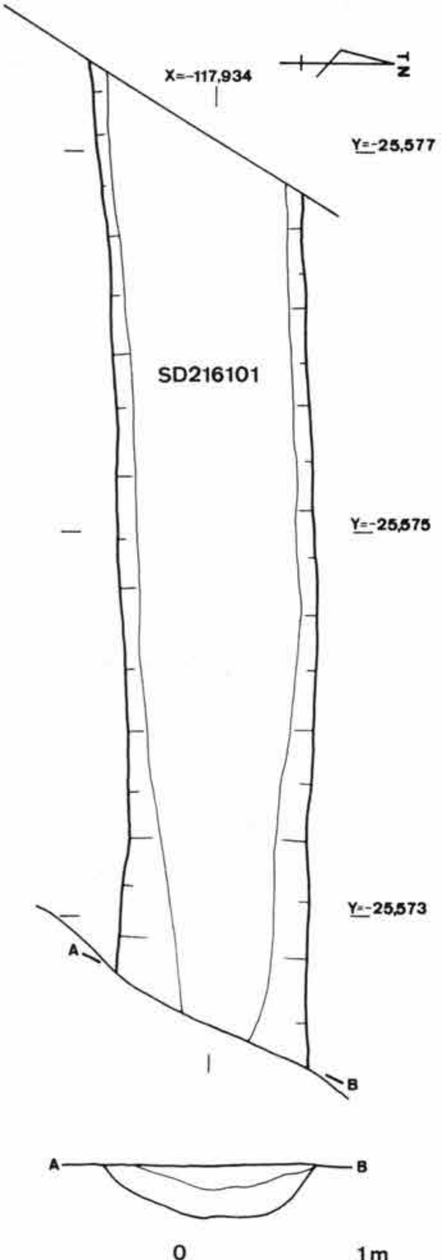
第 47 図　　向日工区 6 ブロック第12-1・12-2トレンチ平面図



第 48 図　掘立柱建物跡ＳＢ216101実測図

である。柱掘形は隅丸方形を呈し，長軸0.7m・短軸0.5mを測る。柱穴内の堆積土(埋土)は暗褐色土と青灰色粘質土を混ぜ合わせてたたきしめている。P-1・P-3には，柱材片が柱根付近に置かれている。柱根の直径は0.51m，基底部の標高は11.2mでほぼ一定している。出土遺物は，P-4の埋土中に土師器皿がある。P-2の座標はX=-117,947.960,Y=-25,583.740,建物跡の主軸はN8′Eである。

溝SB216101（第49図・図版第29-(1)）トレンチ北端部で検出した幅0.9～11・0m・深さ0.3



第49図　溝ＳＤ216101実測図

～0.4ｍを測る東西溝である。断面は皿状を呈し，主に暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物には，土師器・須恵器の細片がある。溝の中心座標はX＝-117,934.00，Y＝-25,575.00，方位はN30′Eであるこの溝は左京二条条間小路の側溝であろう。

素掘り溝　遺構番号を記していない遺溝は，幅0.2～0.3mの断面「U」字形を呈する素掘り溝群である。検出した溝の数は，南北３条，東西11条である。この素掘り溝は，水田耕作に伴うものであるが，東西溝は暗渠排水溝，南北溝は畔道に沿って掘られた開削溝である。瓦器椀が出土していることから，時期差が認められるものの，ほぼ中世に属するものである。方位はN3°W～N5°Wとばらつきがある。

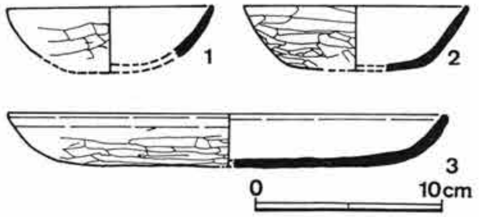
②第21-2トレンチ（第47図-2・図版第28-(2)）

トレンチ全域から水田耕作に伴う素掘り溝を13条検出した。溝幅は，0.3～0.4m・深さ0.2～0.3mを測り，すべて南北方位である。溝の堆積土は，淡青灰色粘質土，淡褐色土等からなる。これらの溝は2.2～2.5mの間隔をもって３グループに分かれ，数状の溝が一群をなす。一群の溝は切りあいがあり，時期差が認められる。１条の溝が排水溝として機能しなくなると，再び掘削され溝が作られたようで並存していない。

B.出土遺物（第50図）

包含層より出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，須恵器杯A，杯Ｂ４，須恵器壺，壺M底部のほか，布目をもつ平瓦数点がある。中世の遺物としては，瓦器椀片，瓦質の羽釜片が出土している。17世紀後半～18世紀中葉の遺物として青磁椀などがある。このほか，古墳時代の須恵器杯身などがある。

１・２は掘立柱建物跡ＳＢ216101・Ｐ-4から出土した土師器皿・杯である。１は，口径



第50図　向日工区6ブロック出土遺物実測図

23.45cm・器高2.7cmを測り，外面の口縁下段までヘラ削りを施す。2は，口径12cm・器高3.4cmを測り，外面の口縁端部までヘラ削りを施す。3は，溝SD216101から出土した土師器椀で，口径11cm・器高3.6cmを測り，外面の口縁下段までヘラ削りを施す。

3.小　結

今年度の調査では，二条第二小路に伴うと考えられる東西溝1条を検出した。しかし，調査区の中央を暗渠水路があり，調査区が二分されたため，明確な形で遺溝を検出するには至らなかった。第21－1トレンチ南では，掘立柱建物跡(SB216101)を検出しており，この地域が宅地内に入ると考えられるため，検出した溝は，二条第二小路の南側溝の可能性があり，今後の検討が必要である。なお，鶏冠井清水遺跡に関する下層遺構については，今回の調査では検出し得なかった。

（竹井治雄・戸原和人）

(2)　長岡京跡左京第216次調査・長岡京工区 (7ANMOR-2・MTD-2・MKY・MMO-2・MKK-2・LRB・LMD-2)

1.はじめに

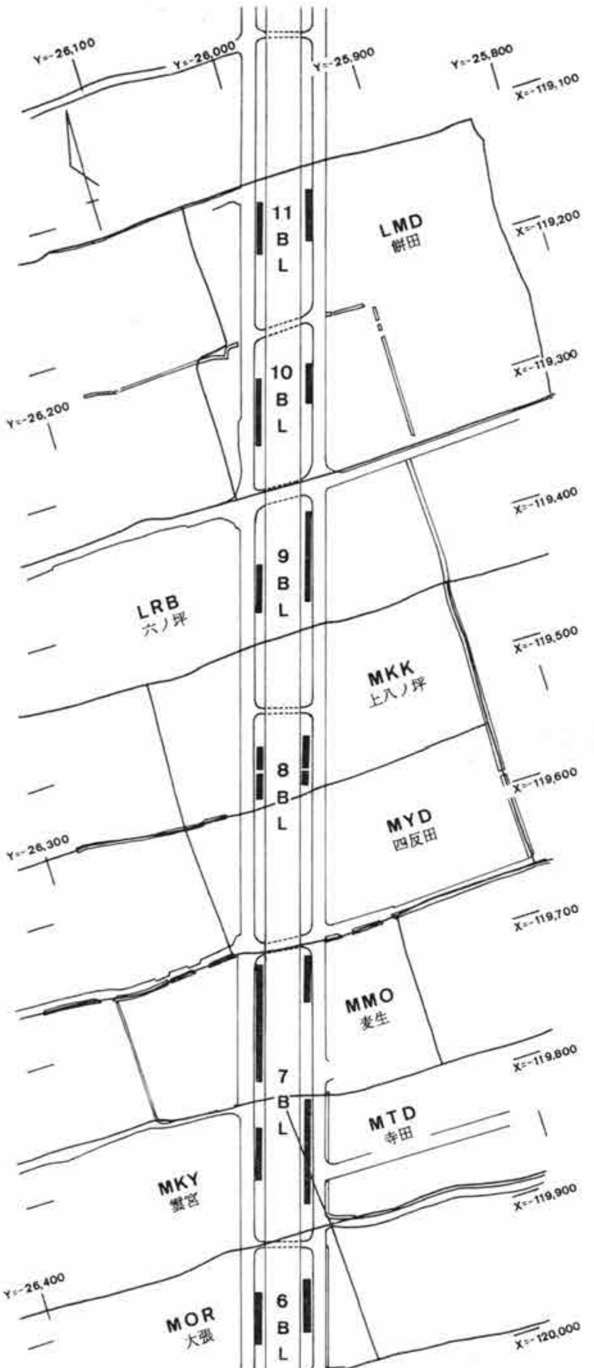
長岡京工区での調査は昭和63年から開始し，本年度は2年目である。

今年度の調査は6ブロックから11ブロックまでの16トレンチについて行った。調査は，4月4日から開始し，平成2年3月9日までの期間を要した。また，検出した雲宮遺跡については，遺跡の規模，出土遺物の量ともに膨大であったため，調査の一部を次年度に繰り越すこととなった。調査面積は延べ約3,350㎡に及んだ。

2.調査の概要

1)長岡京工区6ブロック(7ANMOR－2地区)(第53～56図)

神足の大張で2か所のトレンチ各200㎡をそれぞれ設定し，六条条間小路の検出につとめた。調査は，第8トレンチを5月22日から開始し，8月18日，第21トレンチを4月20日から開始し，8月18日までをそれぞれ要した。



第 51 図　　長岡京工区　調査地字切図

①検出遺構

a．第8トレンチ（第53図・図版第34）

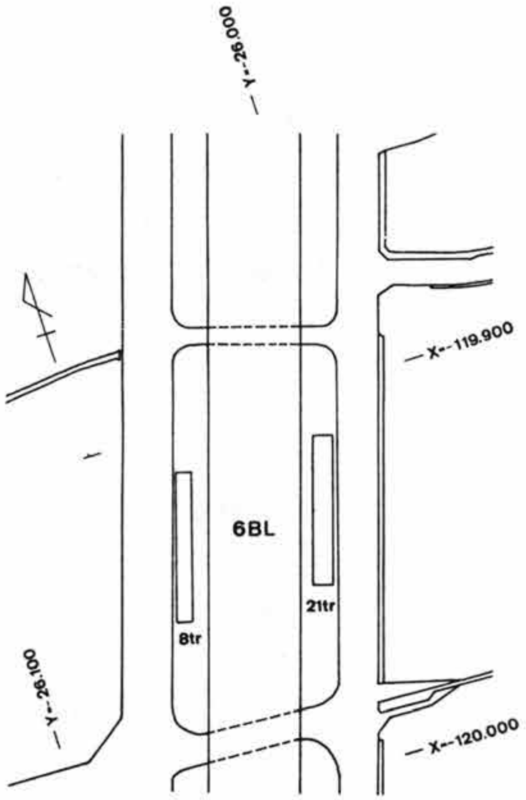
トレンチの地表面における標高は約12.9mで，地表下約1.8mまでが盛り土であった。

溝 SD216031　トレンチ内を南北に横切る溝である。検出長は約3.5m・幅約0.45m・検出面からの深さ約0.13mをそれぞれ測る。

溝 SD 216032　南北方向の溝である。検出長約6.5m・幅約0.45m・検出面からの深さ約0.16mを測る。

南北方向にのびる溝ＳＤ216031とＳＤ216032の双方の溝からは，ほとんど遺物が出土していないため時期決定の根拠に乏しいが，真北方向にのびることと，包含層遺物層位から長岡京期のものと想定できる。

旧流路 SR 216033　トレンチのほぼ中央を横切る旧流路と考えられる。検出長約3.1m・幅約2.7mを測る。流路の最深部は，深さがトレンチをとり囲む鋼矢板の許容範囲を越えるため，掘削しなかった。溝内の遺物から長岡京期以降のものと考えられる。



第 52 図　　6ブロック調査トレンチ配置図

b．第21トレンチ（第53図・図版第35）

トレンチの地表面の標高は，約12.9mで，地表下約2.4mまで盛り土が堆積していた。

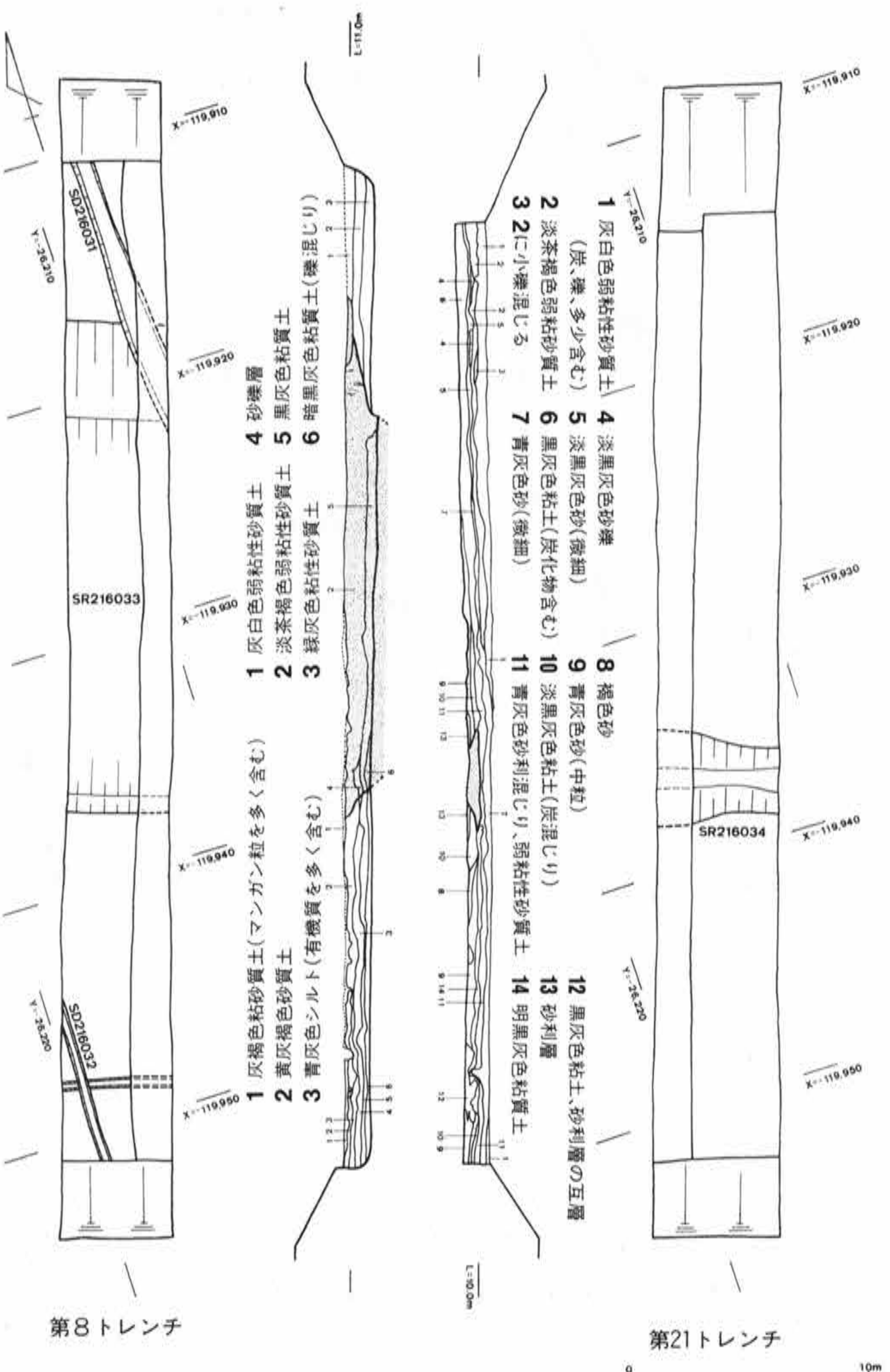
旧流路SR216034　中央部を南東に向かって流れる旧流路である。検出長約1.9m・幅約2.7m，検出面からの深さ約0.5mを測る。出土遺物から，長岡京期以降に埋没したと考えられる。他の人工的な遺構は全く検出できなかった。

②出土遺物

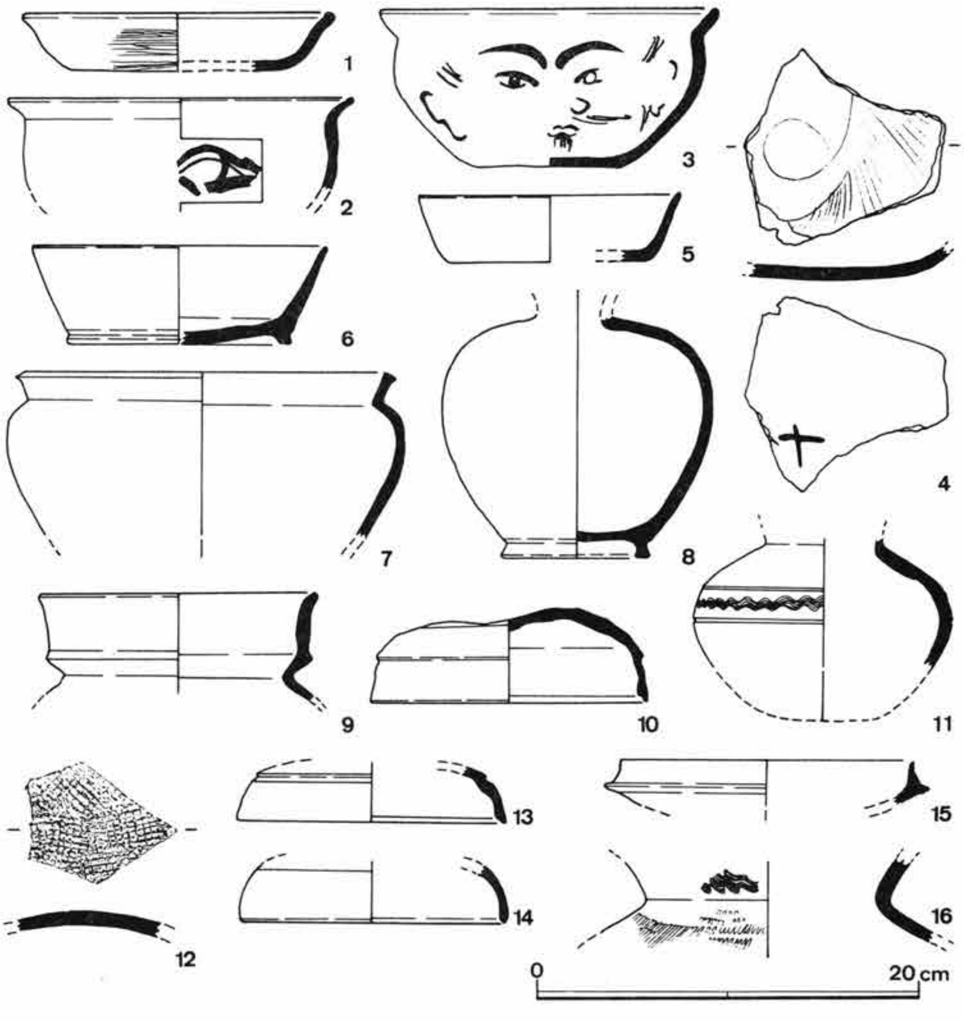
a．第8トレンチ（第54・55図・図版第59）

旧流路SR216033　1は外面がヘラミガキによって調整された土師器の皿である。4は土師器の皿で内面には暗文が施され，底部外面は未調整で，「＋」字が墨書されている。長岡京期より古いものと考えられる。2・3は土師器の墨書人面土器である。2は目の部分のみで，3はほぼ完存する。5は須恵器の杯Aである。6は須恵器杯Bである。9は二重口縁の土師器甕である。口縁部内外面はナデ調整で，頸部くびれ部から胴部にかけてはヘラケズリが見られる。古墳時代前期のものと考えられる。10は古墳時代中期後半の須恵器杯蓋である。口縁端部は内傾する明瞭な段を持つ，天井部は大きく歪んでいる。11は須恵器の小型の壺，もしくは𤭯と考えられる資料である。胴部には二条の沈線によって区画された中に波状文が施されている。12は格子タタキを外面に持ち，内面は同心円タタキが残る。色調は内外面が灰白色であるのに比べ，断面は赤灰色を呈している。古墳時代でも比較的古い須恵器の甕の胴部と想定できる。

包含層　13・14・15は古墳時代の須恵器の杯身・杯蓋である。16は古墳時代の甕である。頸部外面はナデ調整の後，波状文が施されており，胴部外面には並行タタキが認められる。胴部内面は同心円タタキののち，ていねいにナデ調整する。比較的古い須恵器と考えられる。



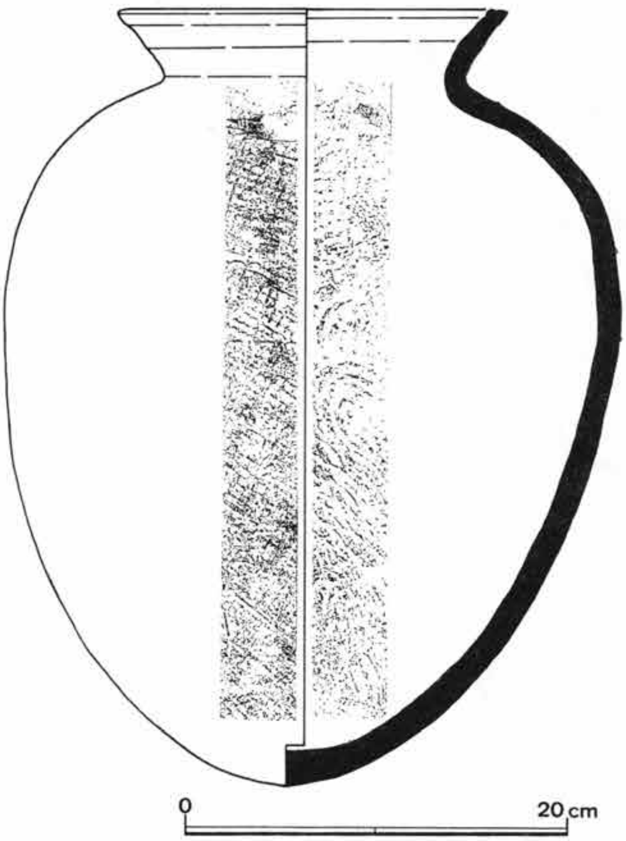
第 53 図　　6ブロック調査トレンチ平・断面図



第 54 図　　6ブロック第8トレンチ出土遺物実測図(1)

b.第21トレンチ(第56図)

旧流路 SR 216034　1は土師器の椀である。2は土師器の杯Aである。外面はc手法である。2は土師器の杯Bである。底部のみ出土のため内外面の調整は不明である。3・5・6・7・8は土師器の皿である。3・8はb手法の1つで，4・5はc手法である。7は外面にヘラ磨きを施す。17は墨書の認められる土師器の皿の底部である。断片であるため判読できない。9・10は土師器の甕である。外面は縦ハケ調整の後，ナデが施され，口縁部内面は横ハケ調整である。11・12は須恵器杯Bの蓋である。13・14・18は須恵器杯Bである。18の底部外面には綾杉状の文様が墨書されている。15・16は古墳時代の土師器の高杯である。両者ともに杯部の欠損部位に接合の痕跡が認められることから，杯部に段



第55図　6ブロック　第8トレンチ出土遺物実測図(2)

を持っていたものと考えられる。

包含層　19は青磁の椀である。第55図は，旧流路SR 216033から出土した甕である。長岡京期に投棄された製品と考えられる。

2)長岡京工区7ブロック(7ANMKY・MMO-2・MTD-2地区，第57図)

神足の雲宮・麦生・寺田で4か所のトレンチを設定した。五条大路，六条第一小路，東二坊第一小路の検出を主眼とし，下層遺構である古墳時代・弥生時代の遺構の検出につとめた。本地区は，雲宮遺跡のうち，下層で弥生時代前期の遺構が集中する地域に当たる。

調査は，4月4日から開始したが，途中工事工程のため調査を中断し，6ブロックの調査を行うなど，8ブロック以降をも含めた全体工程の中で調整した。第22トレンチの南半で，特に弥生前期の遺構が集中した地点を除き，最下面の弥生時代遺構面の調査が終了したのは12月22日であった。

a.第9トレンチ（第57～61図・図版第30・36～40）

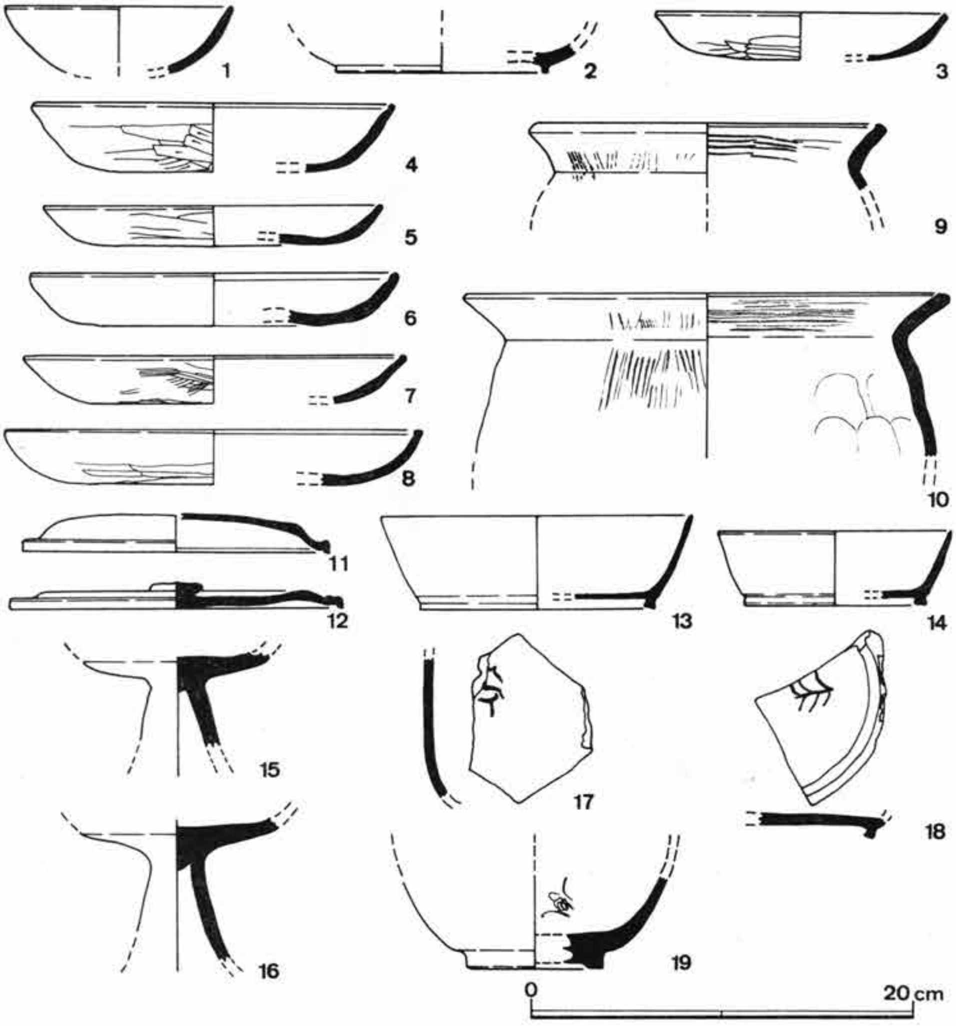
地表面の標高は約13.1mである。

①検出遺構

ア.中世

溝 SD 216001　南北方向にトレンチを横切る，いわゆる中世の素掘り溝である。検出長約6.5m・幅約0.3m・検出面からの深さ約0.1mを測る。

溝 SD 216002　SD216001に並行する溝である。検出長約6.2m・幅約0.3m・検出面からの深さ約0.1mを測る。両方の溝とも出土遺物から鎌倉時代以降と考えられる。



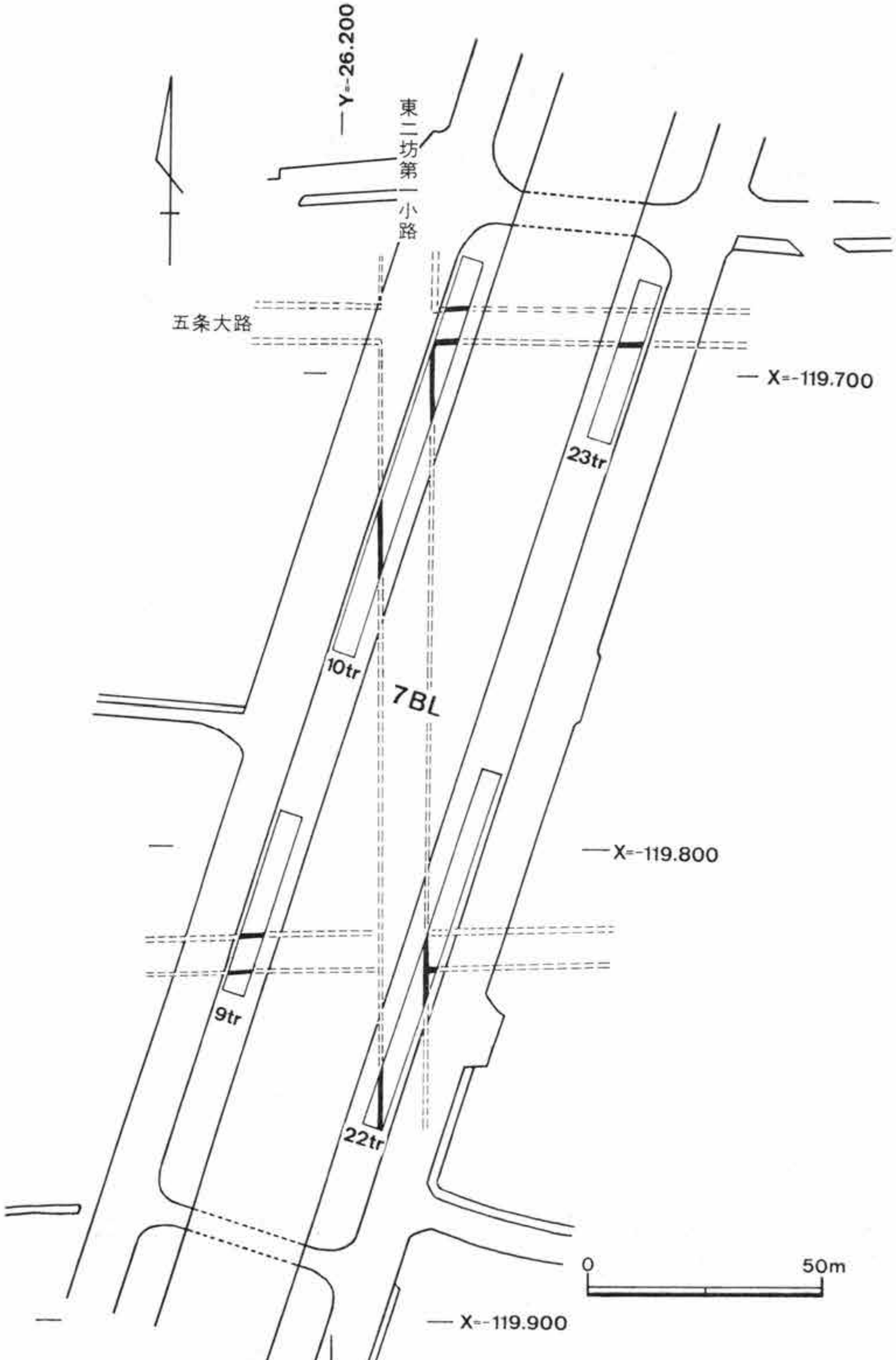
第 56 図　　6ブロック第21トレンチ出土遺物実測図

イ.長岡京期(第57～60図)

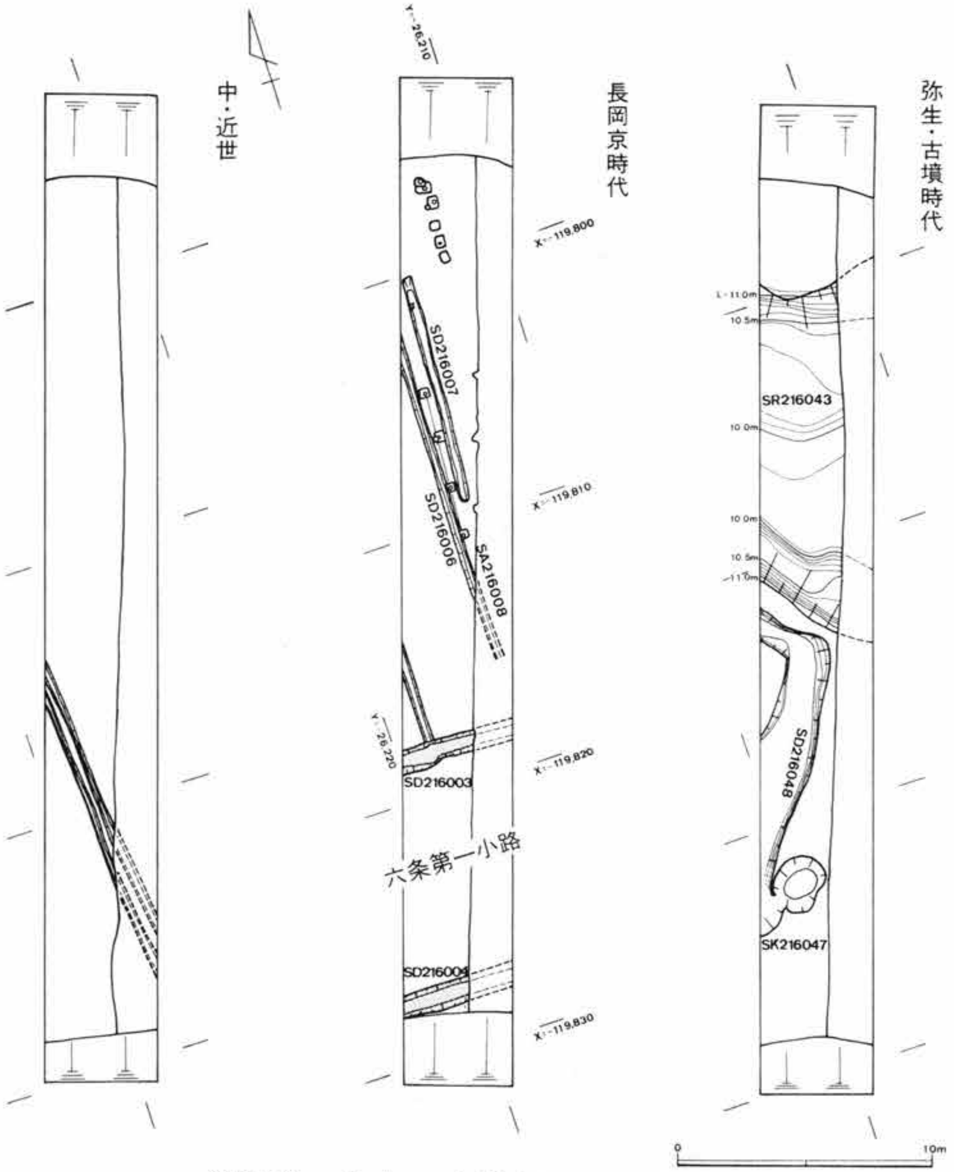
五条大路，六条第一小路，東二坊第一小路などの条坊遺構と，それらの遺構に隣接する水路や築地もしくは柵列などの遺溝を確認した。

溝SD216003　トレンチを東西に横切る溝で，溝の位置及び出土遺物から六条第一小路の北側溝と考えられる。トレンチ内の検出長約2.6m・幅約0.92m・検出面からの深さ約0.3mを測る。座標値はX=-119,818.4で，Y=-26,218.0である。

溝SD216004　SD216003に並行する東西溝で，六条第一小路南側溝と考えられる。検出長約2.3m・幅約1.0m・検出面からの深さ約0.7mを測る。座標値はX=-119,82.7で，Y=-26,221.0である。



第57図　7ブロック調査トレンチ配置図



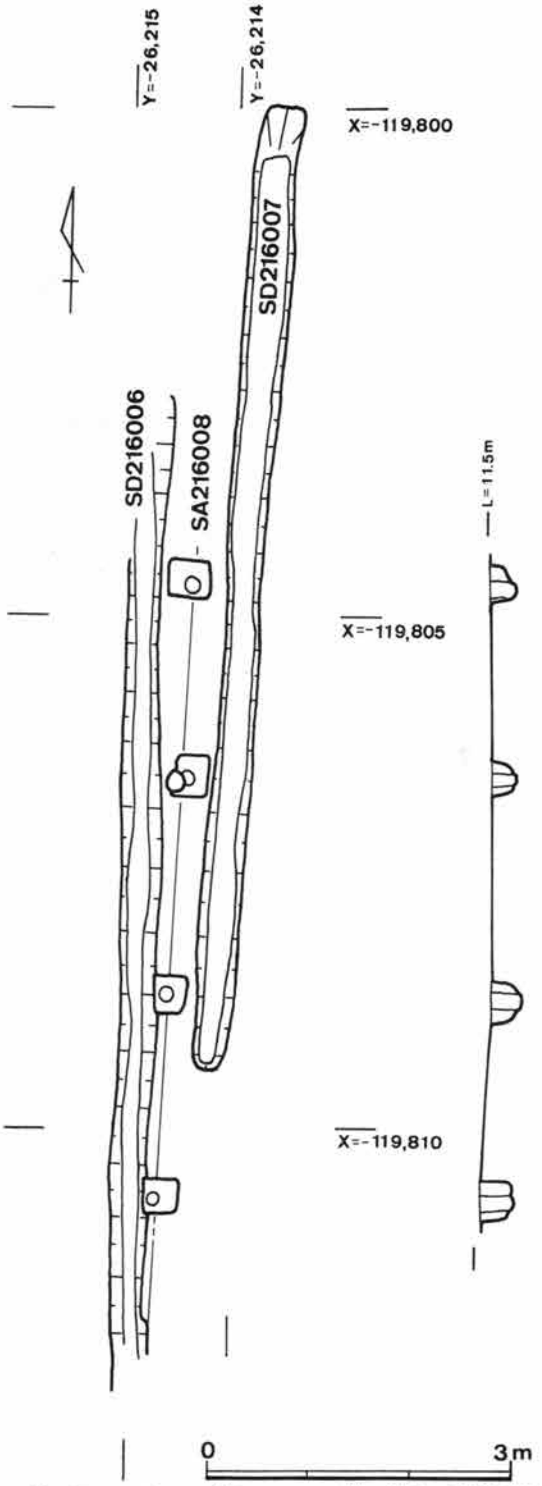
第58図　7ブロック第9トレンチ平面図

溝SD216006　SD216002に並行する南北溝である。検出長約7.5m・幅約0.35m・検出面からの深さ約0.09mを測る。

溝SD216007　SD216006に並行する南北溝である。検出長約7.8m・幅約0.35m・検出面からの深さ約0.11mを測る。

柵列SA216008　SD216006・SD216007に挟まれた4つの柱穴からなる南北方向の柵列である。遺溝の切りあい関係からSD216006より新しいと考えられる。

トレンチ北部の柱穴群　南北に方向性をもつ柱穴群で，少なくとも2時期想定できる。



第59図　7ブロック第9トレンチ溝・柵列・平断面図

トレンチ内での検出範囲が限られているため，あえて遺構番号は付けなかった。

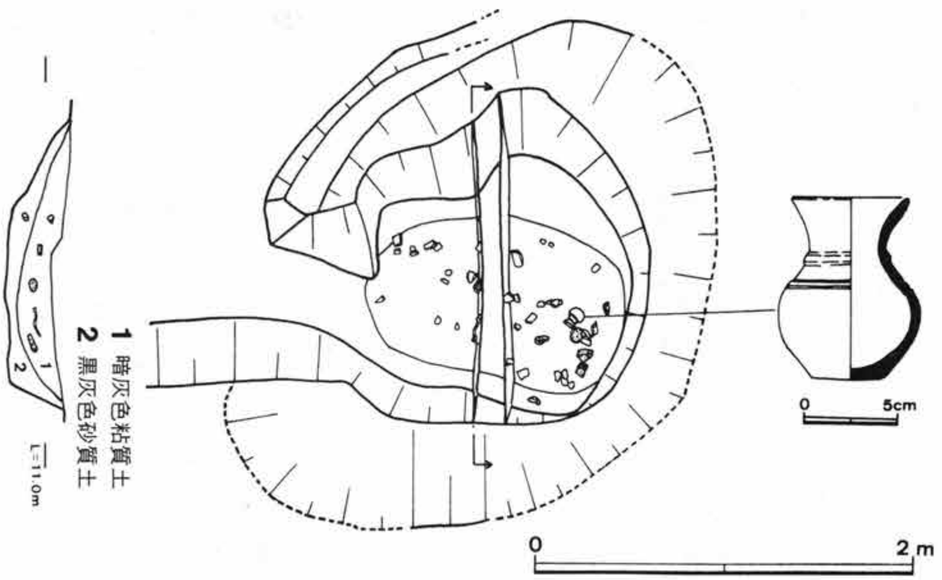
ウ.古墳時代(第58図)

旧流路SR216043　トレンチを東西方向に横切る旧流路である。検出長約3.25m・幅約15.6m・検出面からの深さ約1.2mを測る。出土遺物から古墳時代中期に埋没したと考えられる。

エ.弥生時代(第58・61図)

土坑SK 216047　SD 216048に取り付く弥生時代第1様式の不定形土坑である。最大直径約2.3m・検出面からの深さ約0.28mを測る。

第60図　7ブロック第9トレンチ
長岡京条坊遺構



第61図　土坑ＳＫ216047平・断面図

溝SD216048　トレンチ内で直角に曲がる溝である。出土遺物から弥生時代第1様式のものと考えられる。方形周溝墓の周溝である可能性が指摘できる。トレンチ内での最大幅約2.5m，検出面からの深さ約0.3mを測る。

②出土遺物

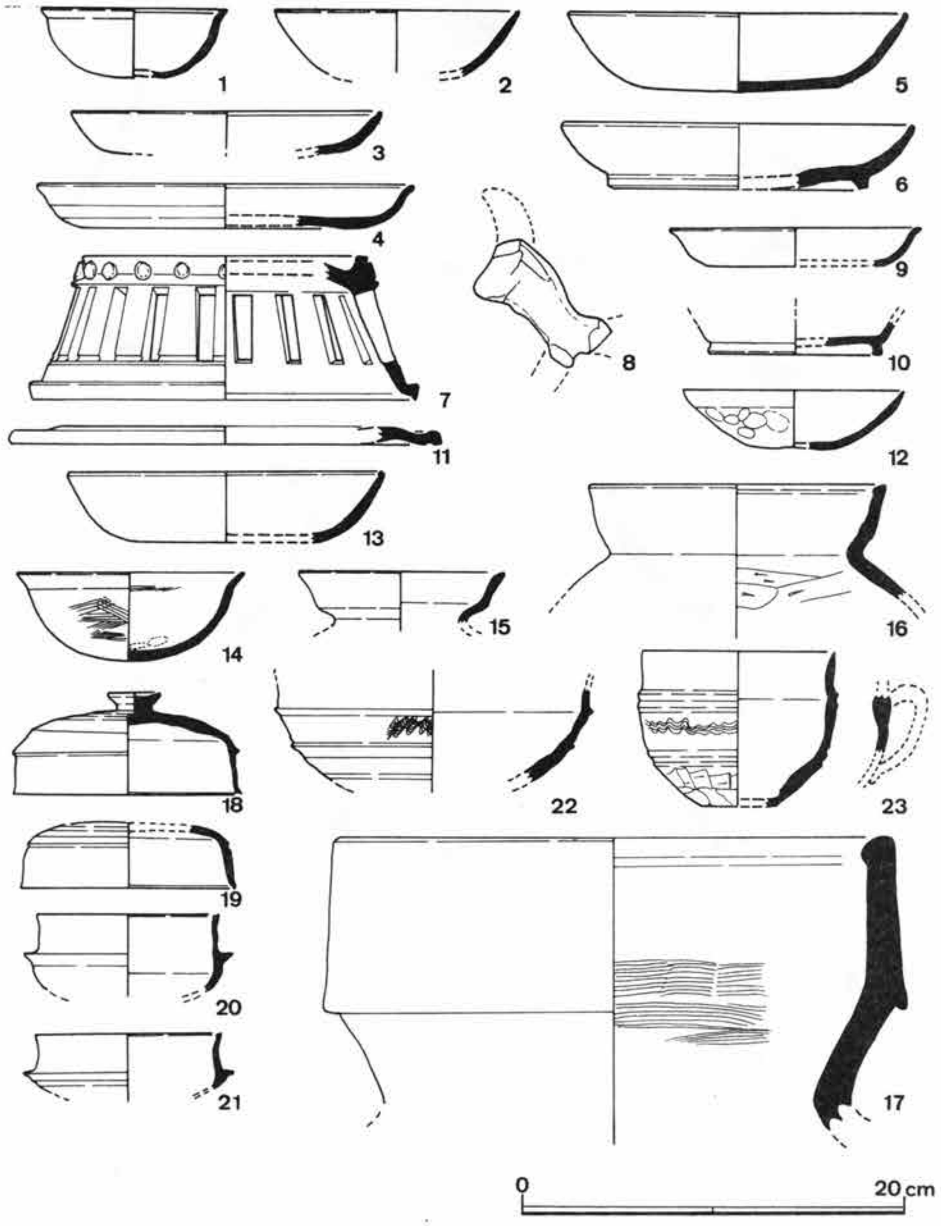
ア.長岡京期(第62・63・67・68図・図版第60)

溝SD216003　1は口縁が外反する土師器の椀である。内外面の剥離のため調整は不明である。2は土師器の椀である。調整は不明である。3は，b手法で製作された土師器の皿Aで，口縁端部を丸める。4は，c手法で製作された土師器の皿Aである。土師器には他に杯A・甕B，須恵器には他に壺L・蓋A・甕がある。

溝SD216004　5は土師器の杯Aである。6は須恵器の皿Bである。胎土は粗く砂粒に富む。7は須恵器の円面硯である。脚の部分には長方形の透かしが穿たれ，上部外面には粘土塊を取り付けて連珠文が施されている。8は土馬である。頭部，前足，胴部以下を欠くが，長岡京期に特徴的なものと考えられる。土師器には他に甕・椀，須恵器には甕，蓋A・杯B，瓦片などがある。

溝SD216006　9は口縁が外反する土師器の皿である。10は杯Bの底部である。11は須恵器杯B蓋である。他に，土師器には椀・壺・甕，瓦には丸瓦片・平瓦片が図化したもの以外にある。

溝SD216007　12は土師器椀Cである。e手法による外面調整が施され，下半部には指頭圧痕が目立つ。他には土師器の杯，須恵器の甕の細片，木片がある。

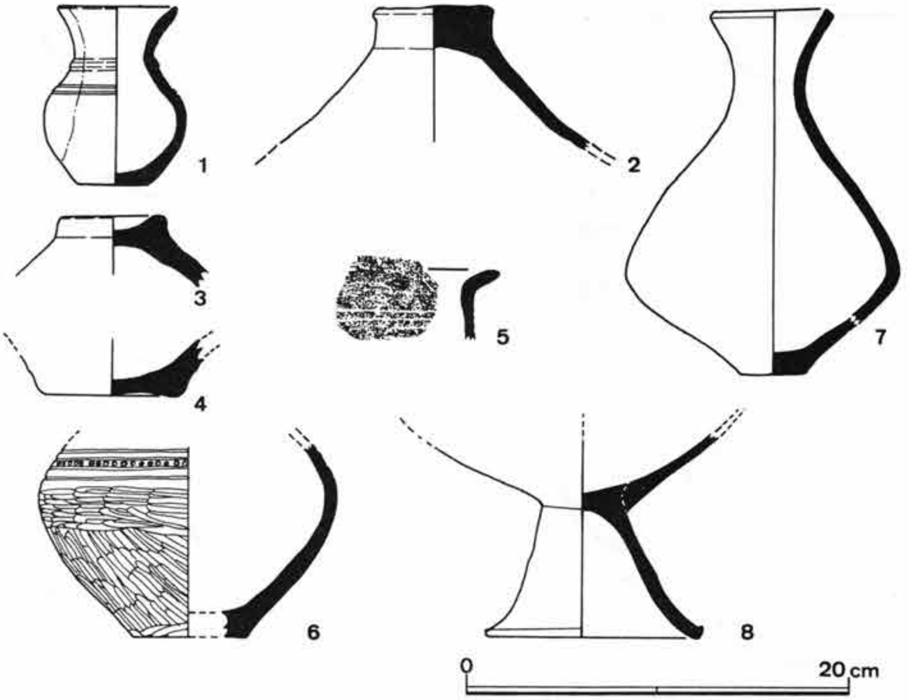


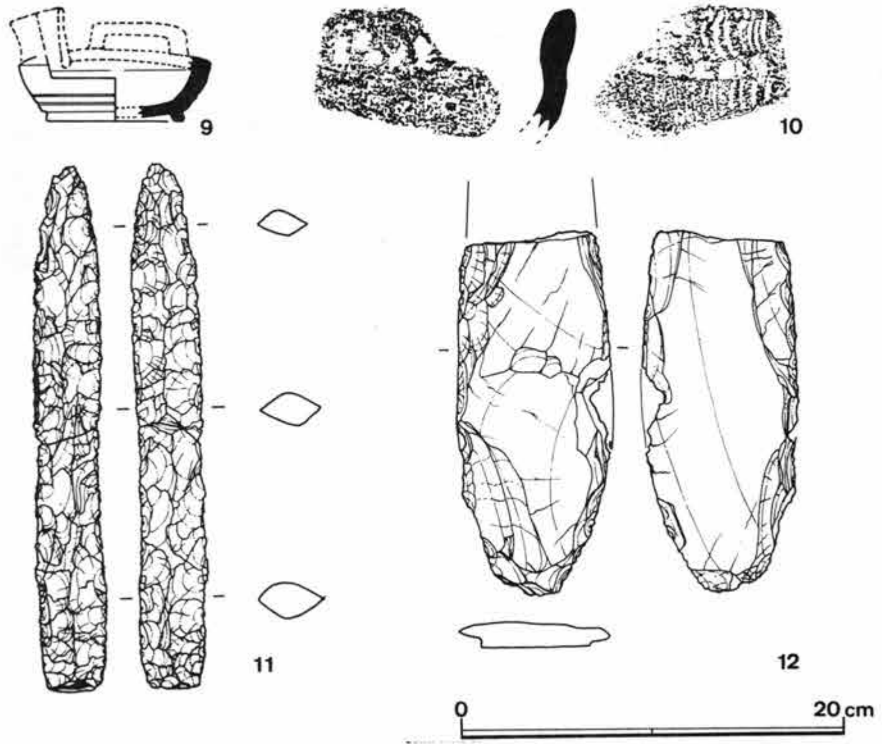
第 62 図　　7ブロック第9トレンチ出土遺物実測図(1)

柵列 SA 216008　13は，土師器の杯Aである。口縁端部を内傾させる。

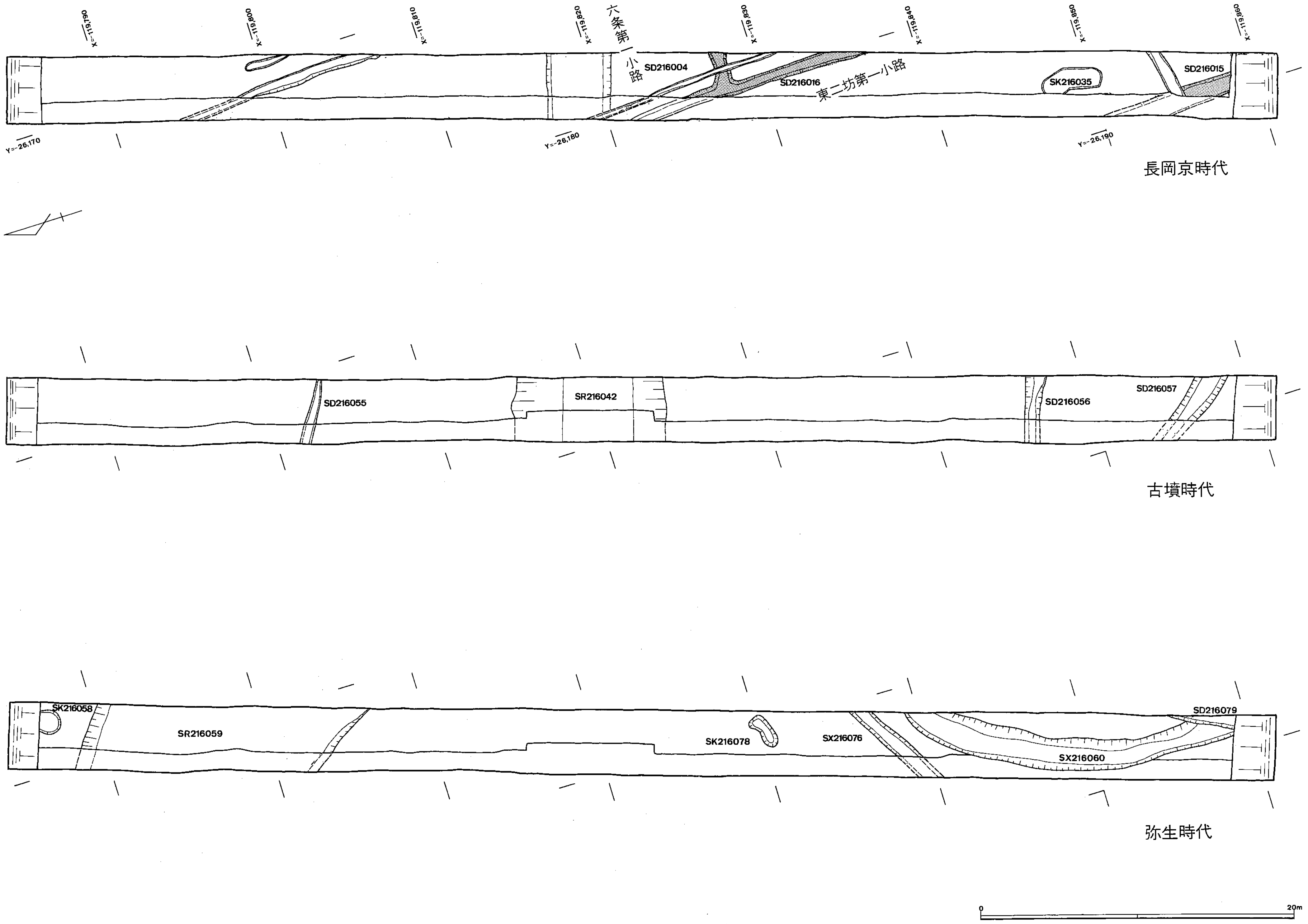
イ.古墳時代(第62・63・67・68図・図版第60)

旧流路 SR216043　14は古墳時代の土師器の鉢である。口縁部は強いナデにより外反する外面には荒いハケ調整が認められ，内面には頸部にハケ，指頭圧痕が見られる。15は二重口縁の土師器甕である。16は布留式土器の甕である。17は古墳時代前半の土師器の二重





第 63 図　　7 ブロック第 9 トレンチ出土遺物実測図(2)



第64図　7ブロック第22トレンチ平面図

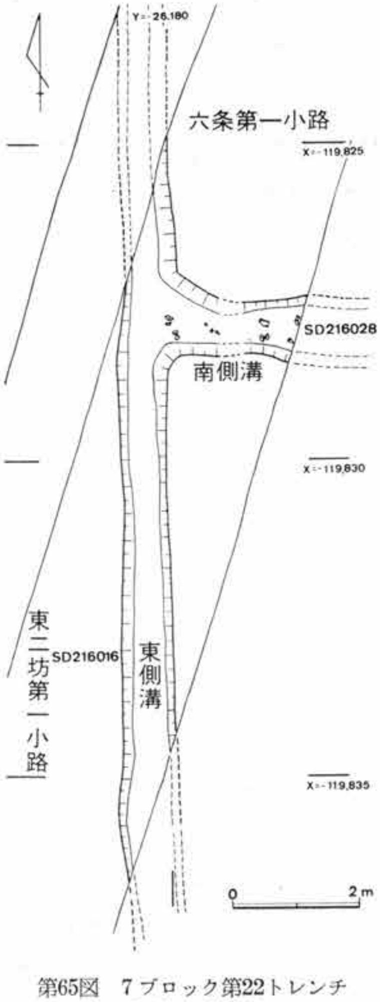
口縁部をもつ大型の甕である。口縁部内面には横方向の荒いハケ調整が認められる。18は有蓋高杯の蓋である。つまみの一部を欠損するのみのほぼ完形品である。19は須恵器の杯蓋である。天井部は比較的平らで，外面の回転ヘラ削りが稜の近くまで及んでいる。20・21は須恵器の杯である。両者とも口径が小さく，立ち上がりが高く，口縁端部をわずかに内傾させて凹面をなす。胎土は良好で，焼成もよく暗青灰色を呈する。22は無蓋高杯の杯部である。口縁端部と，脚部は欠損する。杯部の底部外面には回転ヘラ削りが見られる。23は須恵器の椀である。把手は欠損しているが，接合部片から把手の存在が認められる。口縁部は上端部内面が外反しており，端部は鋭く終わっている。体部外面下半には横方向の手持ちヘラ削りが見られる。胎土は良好で，焼成もよく灰白色を呈する。第63図10は，縄文時代中期の船元式土器の口縁部である。外面は爪形文が連続的に施文され，内面は器面が荒れているが，連続するくぼみの痕跡からアルカ属の貝の背面による圧痕文が施されていた可能性が高い。器形はキャリパー状になると想定できる。

ウ.弥生時代(第63図・図版第60)

土坑 SK 216047　1は畿内第1様式の小型壺である。頸部には削り出しによる凸帯が見られ肩部には二本の沈線が回る。外面はヘラ磨きが施されており，黒斑が認められる。2は蓋と考えられる弥生土器である。水平な頂部を持ち，裾部は下方に大きく開く。調整は表面が剝落しているため不明である。3は頂部がくぼむ弥生土器の蓋である。11はサヌカイト製の断面が菱形を呈する細身の石槍である。本資料は中央部で折れて先端部がＳＫ216047から，下半部が包含層から出土した。折れ面の風化は他の二次調整の剝離面とは肉眼的には変わらないことから，製作時と同時代に破損したと考えられる。

溝 SD 216048　4は弥生土器の底部であるが，器面の剝落のため調整は不明である。5は甕の口縁部片である。沈線は少条で3条が確認できる。6は第1様式と考えられる壺の胴部である。胴部には四本の沈線が回り，上から二本目と三本目の沈線間には竹管文が認められる。胴部下半にはヘラ磨きにより調整されている。

包含層　9は高台をもつ須恵器の平瓶である。非常に小型品であるため，ミニチュアとも考えられるが，水滴として実用されたとも考えられる。愛知県猿投窯産の製品で，長岡京内からは3点目の出土である。8は弥生時代後期前半の高杯である。調整は内外面の剝離のため不明である。7は弥生時代中期の細頸壺と考えられる。胴部の張りが底に近いので，東海地方の影響が認められる。外部表面に施文はなく，調整も剝離のため不明である。12は粘板岩製の石剣の未製品と考えられる。周縁には整形の加工痕が残り先端部は欠損する。他に長岡京期の土師器，須恵器が多く認められた。



第65図　7ブロック第22トレンチ
長岡京条坊遺構(1)

b．第22トレンチ(図版第33・45・46)

六条第一小路及び東二坊第一小路の検出を目的としてトレンチを設定した。

①検出遺構

ア．長岡京期(第64～66図)

10トレンチと同時に条坊の溝を検出したため遺構番号を統一した。

溝 SD 216015　東二坊第一小路西側溝に当たる。トレンチ内での検出長は，約4m・幅約1.3m・検出面からの深さ約0.2mを測る。溝心での座標値は，X＝-119,856で，Y＝-26,189.6である。

溝 SD 216016　東二坊第一小路東側溝と考えられる。六条第一小路の道路面を横切る溝である。検出長約10m・幅約1m・検出面からの深さ約0.15mを測る。座標値はX＝-119,700で，Y＝-26,181.19である。

溝 SD 216004　六条第一小路南側溝と考えられる。東二坊第一小路東側溝と接続するが東二坊第一小路を横切らない。検出長約2m・幅約1m・検出面からの深さ約0.23mを測る。座標植はX＝-119,830で，Y＝-26,180である。なお，六条第一小路北側溝は現代の攪乱で破壊されて検出できなかった。

土坑 SK 216035　東二坊第一小路道路面で見つかった浅い土坑である。長軸4.0m，短軸1.7mを測り，検出面からの深さ約0.15mを測る。

イ．古墳時代(第64図)

古墳時代中期の旧河道SD216042，溝SD216055～216057を検出した。

旧流路 SR 216042　トレンチ中央部を横切る古墳時代前期から中期までの遺物を含む川である。検出長約2.8m・幅9.8m・検出面からの深さ約2.1mを測る。

溝 SD 216055　古墳時代中期の遺物を含む溝である。トレンチ内での検出長約3.5m・幅約0.7m・検出面からの深さ約0.1mを測る。

溝 SD 216056　古墳時代の遺構面から検出した溝である。検出長約2.9m・幅約1.0m・検出面からの深さ約0.35mを測る。

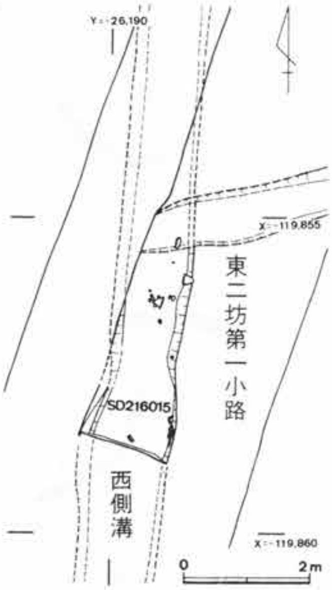
溝 SD 216057　トレンチ南端で検出した溝である。検出長約3.4m・幅約2.1m・深さ約0.4mを測る。

ウ.弥生時代(第64図)

土坑SK216058，旧流路SR216079，弥生時代前期の沼状遺構SX216059や，土坑SK216078，濠SX216060・216076などを検出した。

土坑 SK 216058　トレンチ北端で検出した一辺約1.1m・深さ3cm程度の浅い落ち込みである。土坑内からは，弥生土器の小片が出土したが，時期を確定できるものは確認されていない。

旧流路 SR 216079　トレンチ南端で検出した砂及び礫によって埋まっている流路である。検出面からの深さ1.2mを測るが，流路の西肩を検出したのみで，その規模については明らかでない。弥生時代前期の濠SX216060を削り込んで流れていること以外に時期を確定する資料は得ていない。



第66図　7ブロック第22トレンチ長岡京条坊遺構(2)

沼状遺構SX216059　トレンチ北寄りで検出した青灰色の粘質土によって埋まっている幅約15m・深さ1.0m以上の規模を持った地形の落ち込みである。堆積層は，2層に分類でき，上層が黄褐色系の粘質土で，下層が明るい青灰色の粘土層になる。青灰色粘土層上面及び青灰色粘土層中より，弥生時代前期の土器が出土している。

土坑 SK 216078　トレンチ南寄りで検出した長辺2.2m・短辺0.8m・深さ0.3mの土坑である。遺構内からは弥生時代前期後葉の壺，甕などが出土している。

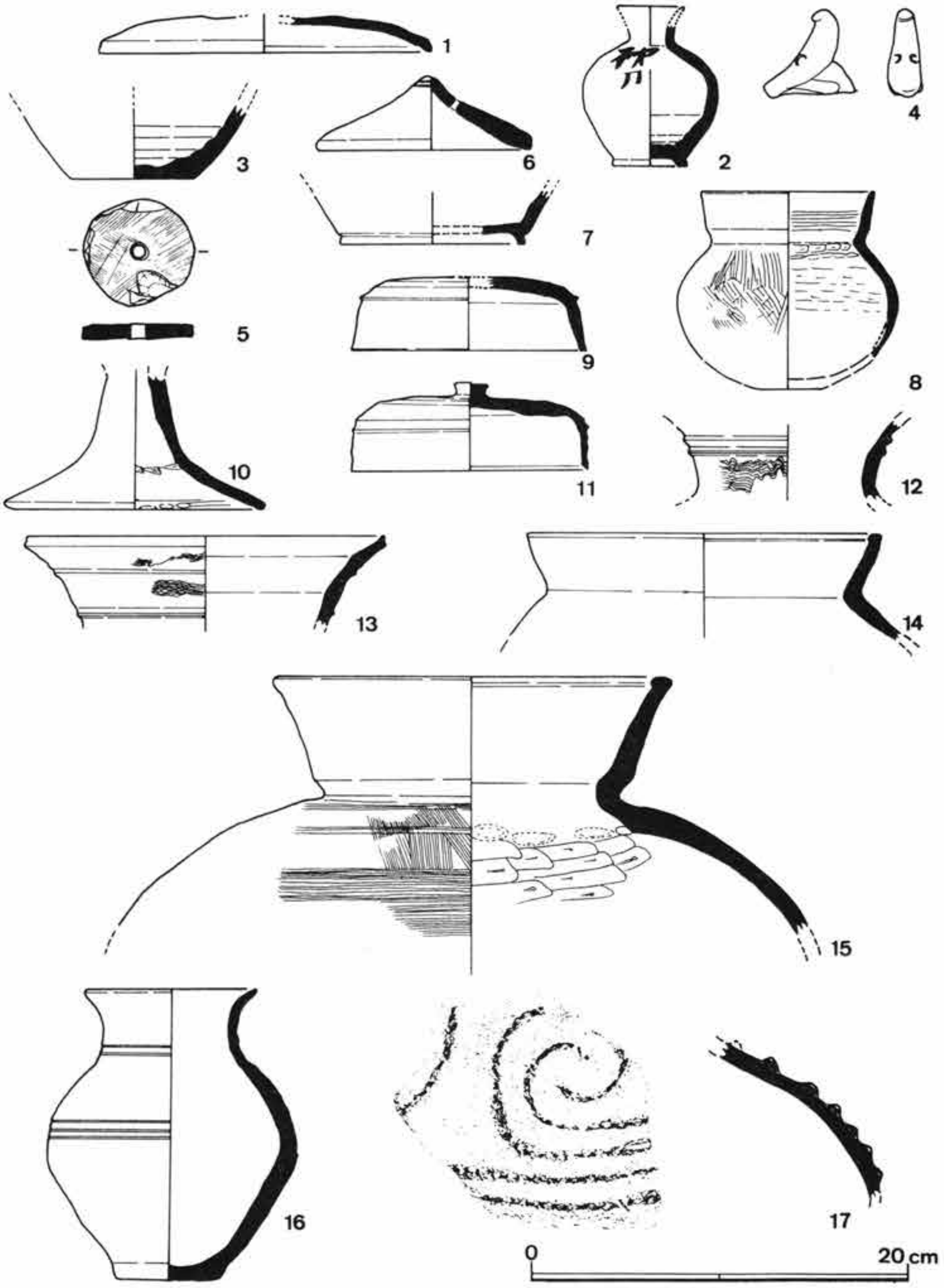
濠 SX 216060　トレンチ南寄りで検出した弧状に巡る濠である。幅約2.4mを21mにわたり検出した。

濠 SX 216076　濠SX216060とともに集落を囲む濠(環濠)と考えられる遺構で，幅1.0m・深さ0.3mを4.5mにわたり検出した。濠SX216060・濠SX216076は，いずれも第1層の調査にとどまっているため，詳細については次年度以降に報告する。

②出土遺物

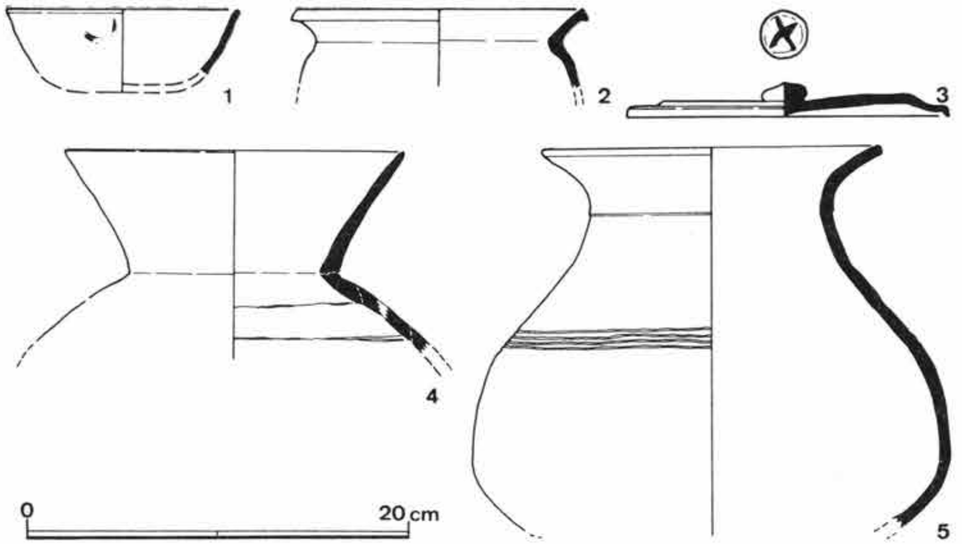
ア.長岡京期(第67図)

溝 SD 216015　1は須恵器の蓋である。器高は比較的高く，口縁端部が直立する。2は須恵器の壺Lである。体部には「神部(みわべ)」と墨書されている。3は須恵器の壺の底部である。内面には水引線が強く残る。4は土馬の頭部である。5は黒色の粘板岩を素材



第 67 図　　7ブロック第22トレンチ出土遺物実測図(1)

とする紡錘車である。6は弥生時代畿内第1様式の壺の蓋である。頂部には二条の沈線が巡る。東二坊第一小路西側溝が下層の弥生包含層を掘削しているため，5・6のような弥生時代の遺物が混入する。他に長岡京期の土師器の椀・高杯・甕，須恵器の杯・甕・皿の



第 68 図　7ブロック第22トレンチ出土遺物実測図(2)

片が出土した。

イ.古墳時代(第67図)

旧流路 SR 216042　8は土師器の小型壷である。体部外面はハケによる調整が見られ頸部には強いナデ調整が行われる。内面は口縁部には横方向のハケ調整，体部上半にはヘラケズリが認められる。10は土師器の高杯の脚部である。14・15は土師器の甕である。口縁端部内面に比高する。15は大型の甕で内面には黒漆状の付着物が認められる。土師器は布留式土器の範疇で捉えられる。

11は須恵器の有蓋高杯の蓋である。小型のつまみをもつ。天井部は比較的平らで，ヘラケズリは稜近くまで及んでいる。端部は内傾する段をもつ。12は須恵器の壺あるいは𤭯と考えられる資料である。13は小型の須恵器甕である。須恵器はすべて5世紀後半のものと考えられる。

溝 SD 216056　9は須恵器の杯蓋である。天井部は比較的平らで稜が明確である。

ウ.弥生時代(第67図)

溝 SX 216060　16は上層から出土した畿内第1様式の小型の壷である。頸部に2条，胴部に3条の沈線が巡る。内外面の調整は表面の剥離のため明らかではない。下層には膨大な第1様式の資料がある。詳細は本報告に譲る。

土坑 SX 216078　17は畿内第1様式の中型壷の胴部である。貼り付け凸帯によって加飾され，凸帯上に刻み目が入る。凸帯が上方に円弧を描く文様から播磨地域の影響が想定できる。

包含層(第68図)　1は外面に墨書の認められる須恵器の杯である。断片であるため判読はできない。2は歴史時代の土師器甕である。3は須恵器の蓋である。つまみには「+」字に墨書されている。4は古墳時代前期の壺である。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。5は弥生土器畿内第1様式の壺である。

c．第10トレンチ(図版第32・41～44)

五条大路及び東二坊第一小路の検出を目的としてトレンチを設定した。地表面の高さは13.2mである。

①検出遺構

ア.長岡京期(第69・70・71図・図版第32・41)

溝SD216005　トレンチを東西方向に横切る溝で，五条大路北側溝と考えられる。検出長約3.2m・幅約0.8m・検出面からの深さ約0.2mを測る。座標値はX=-119,684.3で，Y=-26,175.0である。

溝SD216027　トレンチ内でSD216016と交わる東西方向の溝で，座標値及び出土遺物から五条大路南側溝と考えられる。検出長約3.4m・幅約1.0m・検出面からの深さ約0.28mを測る。座標値はX=-119,693.25で，Y=-26,180.0である。この結果により検出した五条大路は，溝心々で約8.95mの小路幅しか持たないことが指摘できる。シートパイルの打ち込みによる周辺地層の巻き込みのため，五条大路側溝と東二坊第一小路の側溝の切り合いについては明らかにできなかった。

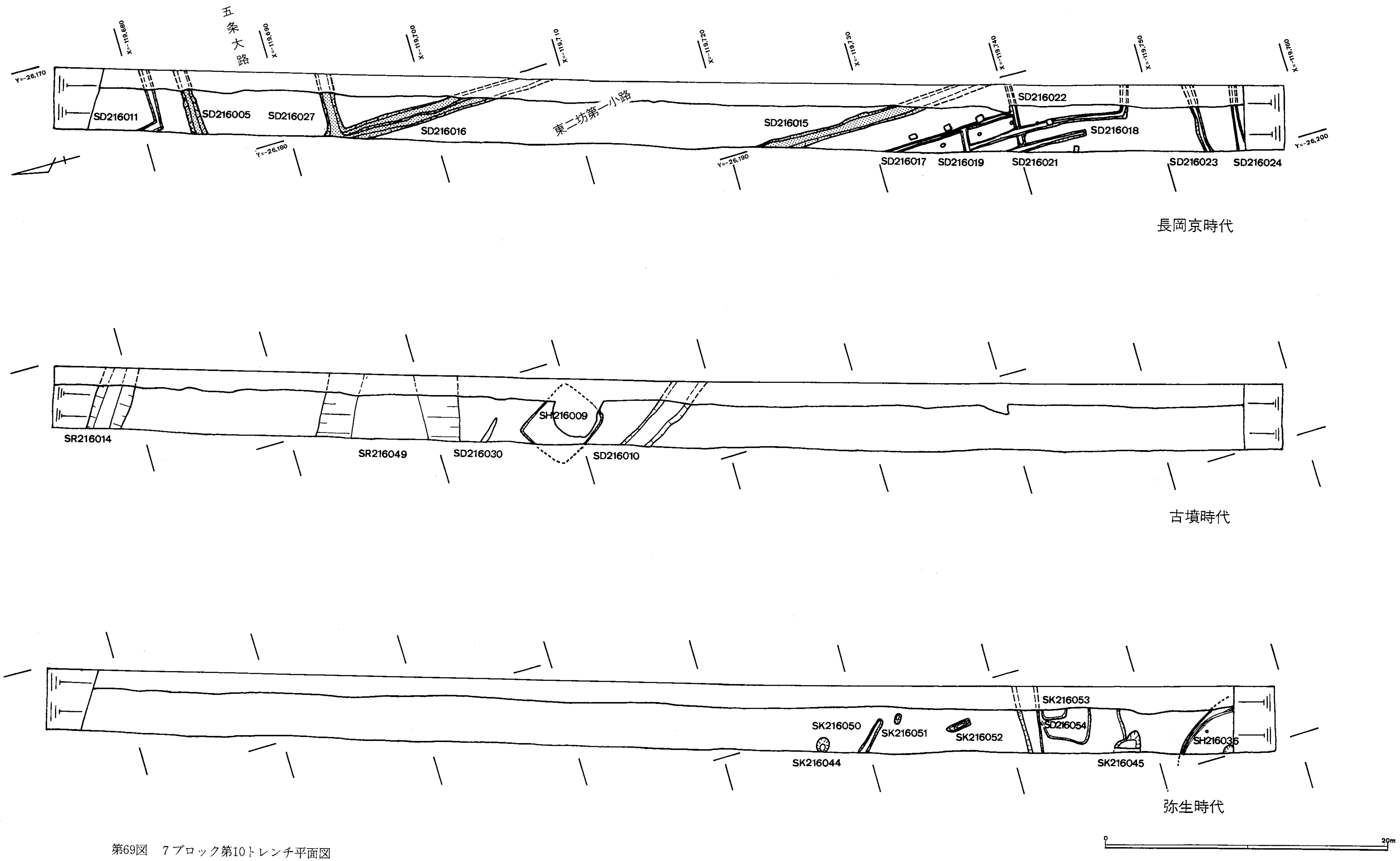
溝SD216015　トレンチ内を横切る南北方向の溝で，溝の座標値と出土遺物から東二坊第一小路西側溝と考えられる。検出長約10.6m・幅約1.0m・検出面からの深さ約0.18mを測る。座標値はX=-119,730.0で，Y=-26,190.5である。

溝SD216016　南北方向溝で，溝の東側は2段になりテラス面をもつ。諸条件を考えると，東二坊第一小路東側溝と考えられる。検出長約10.2m・幅約1.4m・検出面からの深さ約0.3mを測る。溝心の座標値はX=-119,700.0で，Y=-26,180.8である。東二坊第一小路の両側溝の心々間距離は約9.7mの小路幅を持つ。

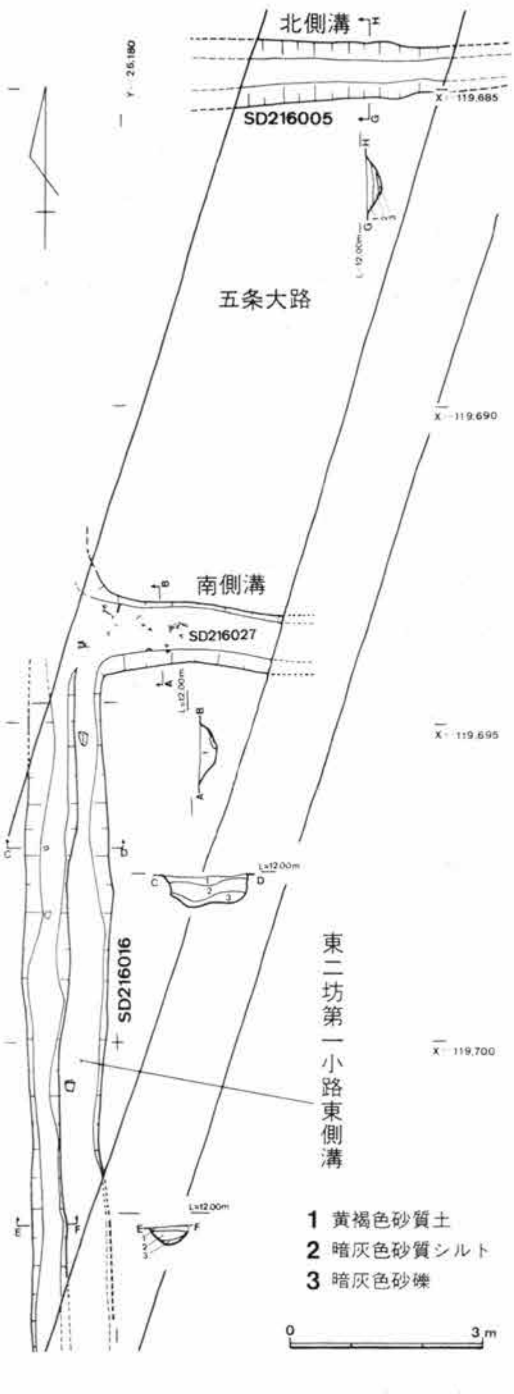
溝SD216011　五条大路道路側溝に並行する宅地内の溝である。トレンチ内で五条大路と東二坊第一小路の交差点北東隅で直角に曲がる。東西方向の検出長約2.95m・幅約0.6m・南北方向の検出長約1.45m・幅約0.5m・検出面からの深さ約0.14mを測る。

溝SD216017　南北方向の屋敷地内の溝で，東二坊第一小路西側溝に並行する。トレンチ内での検出長約9.2m・幅約0.9m・検出面からの深さ約0.22mを測る。

溝SD216018　南北方向の溝で，南で直角に東に曲がる。トレンチ内での南北長約4.2m・幅約0.4m・深さ約0.2mを測る。



第69図　7ブロック第10トレンチ平面図



第70図　7ブロック第10トレンチ長岡京条坊遺構(1)

溝SD216019　SD216017に取り付く東西方向の溝である。検出長約1.5m・幅約0.5m・深さ約0.10mを測る。

溝SD216021　南北方向の南端がトレンチ内で終わる溝である。検出長約1.95m・幅約0.41m・検出面からの深さ約0.07mを測る。

溝SD216022　トレンチを横切る東西方向の溝である。検出長約3m・幅約0.5m・深さ約0.21mを測る。

溝SD216023　東西方向のトレンチを横切る溝である。検出長約3.3m・幅約0.6m・深さ約0.14mを測る。

溝SD216024　東西方向のトレンチを横切る溝である。検出長約3.26m・幅約0.5m・深さ約0.17mを測る。

イ.古墳時代(第69・72・73図・図版第42・43-(1))

竪穴式住居跡SH216009　古墳時代中期の長方形を呈する竪穴式住居跡である。後世の攪乱と調査面積が狭いため，一部分しか検出できなかった。住居床面には周壁溝が巡っており，中央部には灰層が堆積していた。長辺の推定長約4.8m・短辺の推定長約4.2m・検出面から床面までの深さ約0.14m・周壁溝の床面からの深さ約4.6cmを測る。なお，柱穴は検出できなかった。

溝SD216010　SH216009の長辺に並行する溝である。古墳時代中期と考えられる。検出長約4m・幅約2.2m・検出面からの深さ約0.7mを測る。

旧流跡　SR 216014　トレンチ北端で検出した旧流路である。検出長約3.1m・幅約2.6m・検出面からの深さ約1.3mを測る。

溝 SD 216030　トレンチ内で終わる古墳時代前半の溝である。検出長約2.25m・幅0.25m・深さ約0.12mを測る。

旧流路 SR 216049　古墳時代中期の遺物を上限とする東西方向の旧流路である。土器を多く含み，木器も検出できた。検出長約3.4m・幅約10m・検出面からの深さ約1.8mを測る。

ウ.弥生時代(第69・74・75図・図版第43-(2)・44)

竪穴式住居跡 SH 216036　円形と考えられる弥生時代後期の竪穴式住居跡で，トレンチ南端で四分の一のみ検出した。住居内には中央に土坑が認められ，埋土には炭が多く含まれていた。検出した住居跡に柱穴が一つみつかったことから，4本柱の建物が想定できる。また，周壁溝の検出状況から同一規模の建物が少なくとも二回以上建て替えられたことがわかる。推定直径約7m・検出面からの深さ約0.18mを測る。

土坑 SK 216044　トレンチの西外にのびる土坑である。埋土には炭化物が含まれていた。出土遺物から弥生時代後期の土坑と考えられる。検出面からの深さ約0.2mを測る。

土坑 SK 216045　不定形の弥生時代後期の土坑で，西側はトレンチ外へのびる。

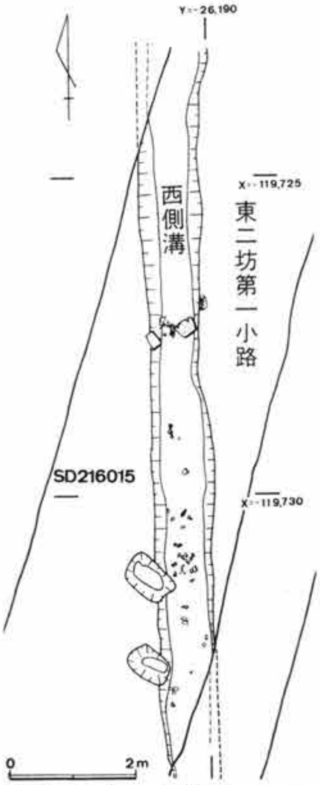
溝 SD 216050　南端がトレンチ内で終わる弥生時代後期の溝である。トレンチ内での検出長約2.6m・幅約0.6m・深さ約0.2mを測る。

土坑 SK 216051　楕円形の平面プランを持つ弥生時代の土坑である。検出面からの深さは約0.16mを測る。

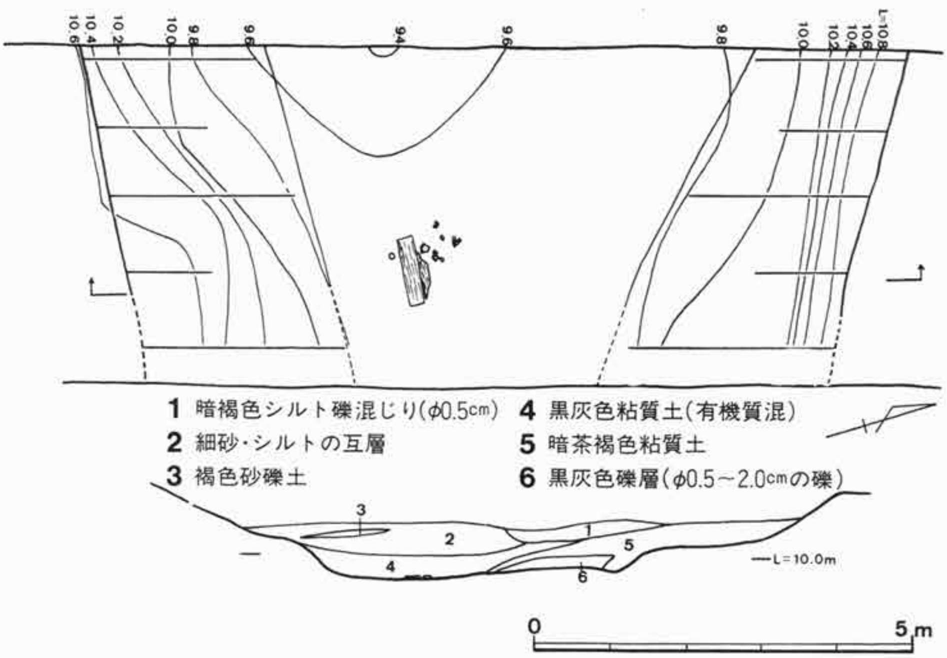
土坑 SK 216052　長楕円形を呈する弥生時代後期の土坑である。長軸の長さ約2.2m・短軸の長さ約0.58m・検出面からの深さ約0.09mを測る。

土坑 SK 216053　トレンチ内での断ち割りにより東半分が欠損した弥生時代後期の土坑である。検出面からの深さ約0.24mを測る。

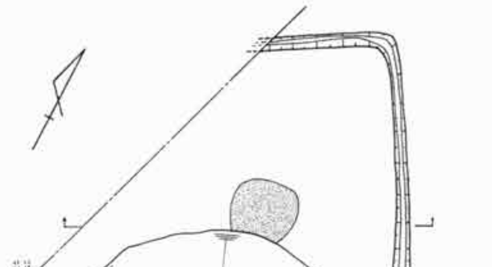
溝 SD 216054　SK 216053を囲む溝である。東半分は断ち割りのため明らかではないが，SK 216053が埋葬主体部状に見えるものの，第4様式の土坑 SK 216045によって切られていることから，SK216054は第4様式以前の遺構と考えられる。SK 216053とは明らかに時期差が



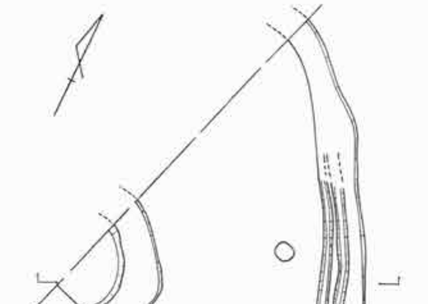
第71図　7ブロック第10トレンチ長岡京条坊遺構(2)



第 72 図　古墳時代河道ＳＲ216049 平・断面図



第73図　古墳時代竪穴式住居跡ＳＨ216009
平・断面図



第74図　弥生時代竪穴式住居跡ＳＨ216036
平・断面図

あるため別のものと考えた。検出面からの深さ約0.19mを測る。

②出土遺物

ア.長岡京期(第76図・図版第62)

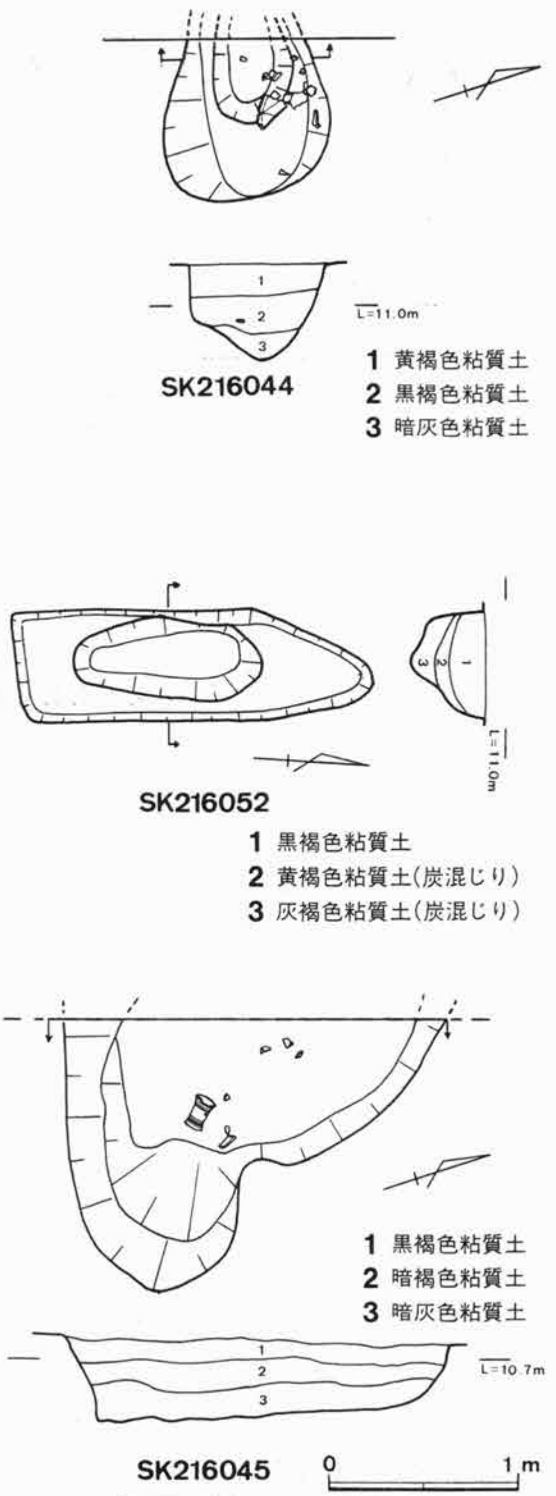
溝 SD 216015　1は土師器の椀である。2は土師器の杯である。1・2ともに内外面の調整は不明である。6・8は土師器の甕である。3は須恵器杯Aである。灰白色を呈し，軟質である。4・5は須恵器杯Bである。6は須恵器の皿Aである。底部には墨書により記号様のものが書かれている。9は須恵器の壺Aである。完形に復原することが可能であった。14は複弁八葉蓮華文軒平瓦である。薬師寺平城京東三坊大路東側溝で同型式と考えられる瓦が出土している。15は外区しか残存しないが，蓮華文軒丸瓦と考えられる。他には土師器では高杯，須恵器では蓋・鉢・甕，土馬の細片が出土している。

溝 SD 216017　10は須恵器の杯B蓋である。11は須恵器甕である。

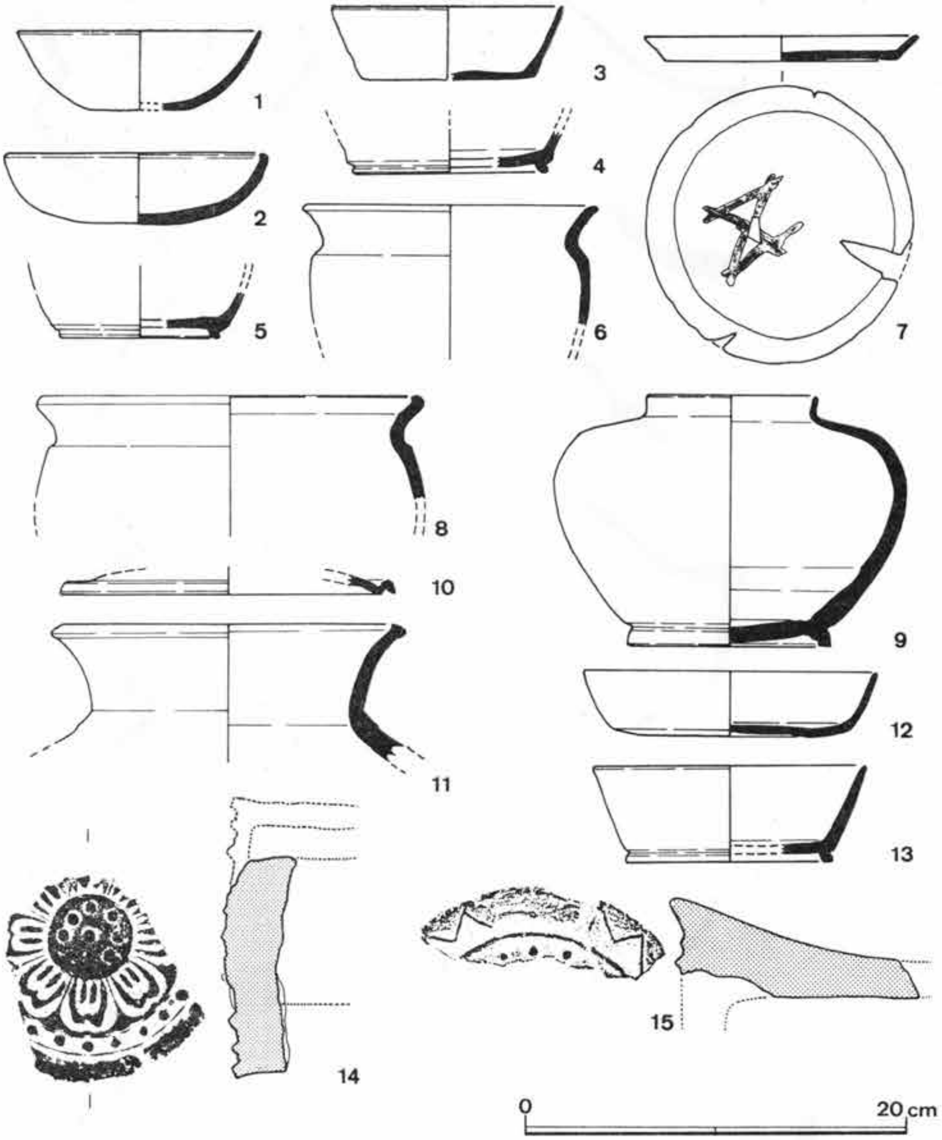
溝 SD 216027　12は須恵器杯Aである。軟質で口縁部外部が1cmほど黒変している。13は須恵器杯Bである。他に土師器の甕・杯・皿，須恵器の杯の細片が出土した。

イ．古墳時代(第77～80図・図版第62～64)

竪穴式住居跡 SH 216009　1は脚部の欠損した高杯の杯部である。口縁端部は横ナデによりわずかに外反する。



第75図　弥生時代土坑平・断面図

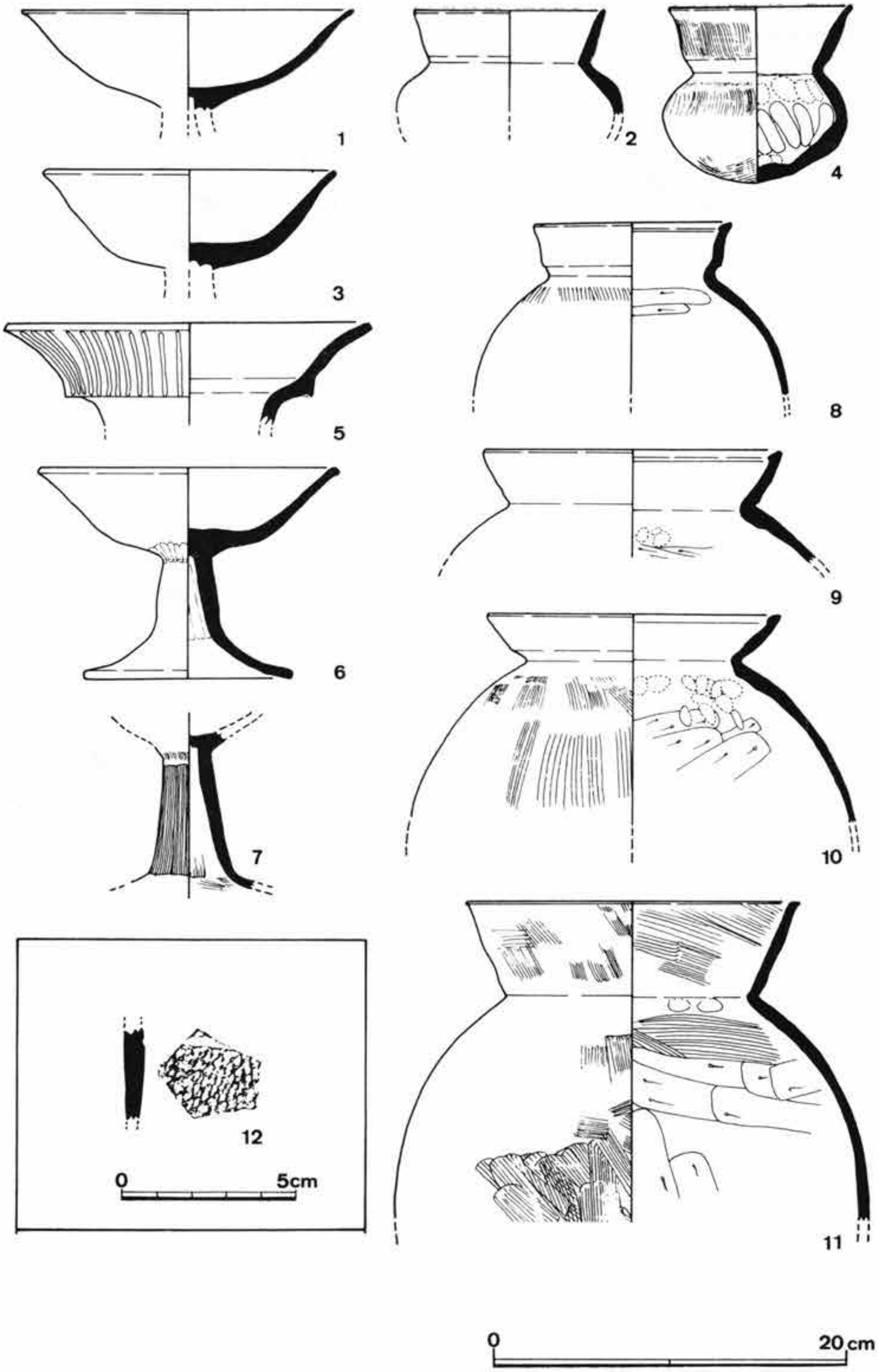


第76図　7ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(1)

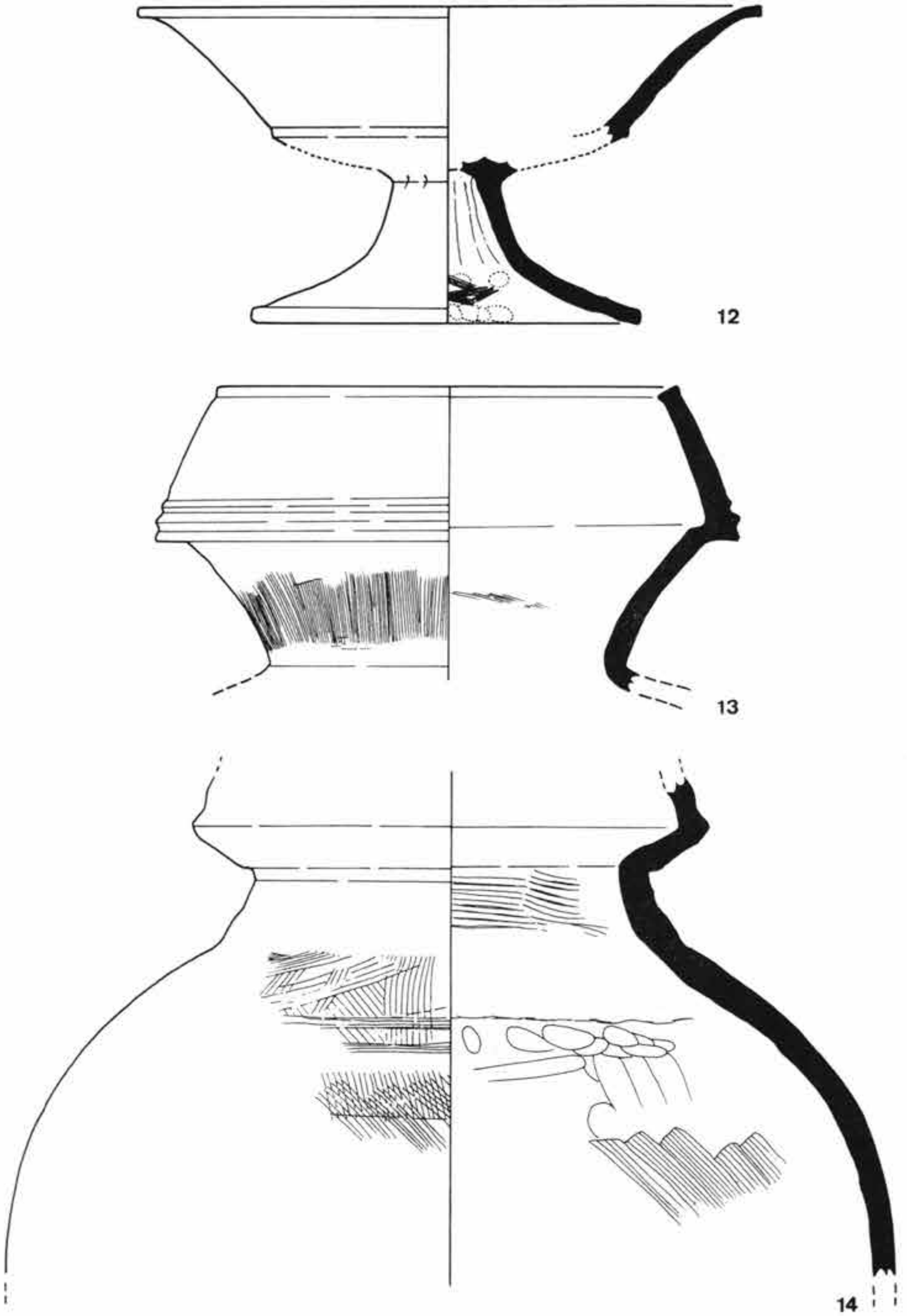
2は口径が大きいが，土師器の小型丸底壺と考えられる。頸部には強い横ナデが認められる。内外面の調整は不明である。2点の土器はいずれも布留式土器の範疇に入るものと考えられる。他に住居跡床面から平坦面をもち，打痕の残る台石状のものが出土した。

溝 SD 216010　3は土師器の高杯の杯部である。この他に古墳時代の土師器甕と考えられる細片が出土した。

旧流路 SR 216049　4は土師器の小型丸底壺である。口縁外面及び胴部上面には細かい縦方向のハケ目が見られ，底部はハケが荒くなる。内面には指頭圧痕と指によってかきあ



第77図　7ブロック第10トレンチ出土 遺物実測図(2)

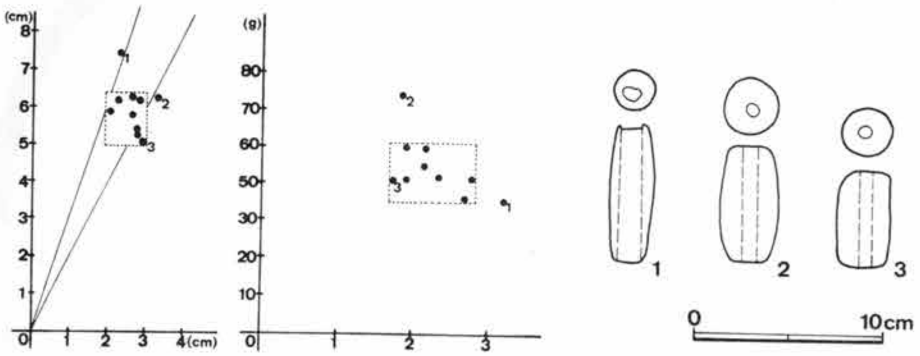


第78図　7ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(3)

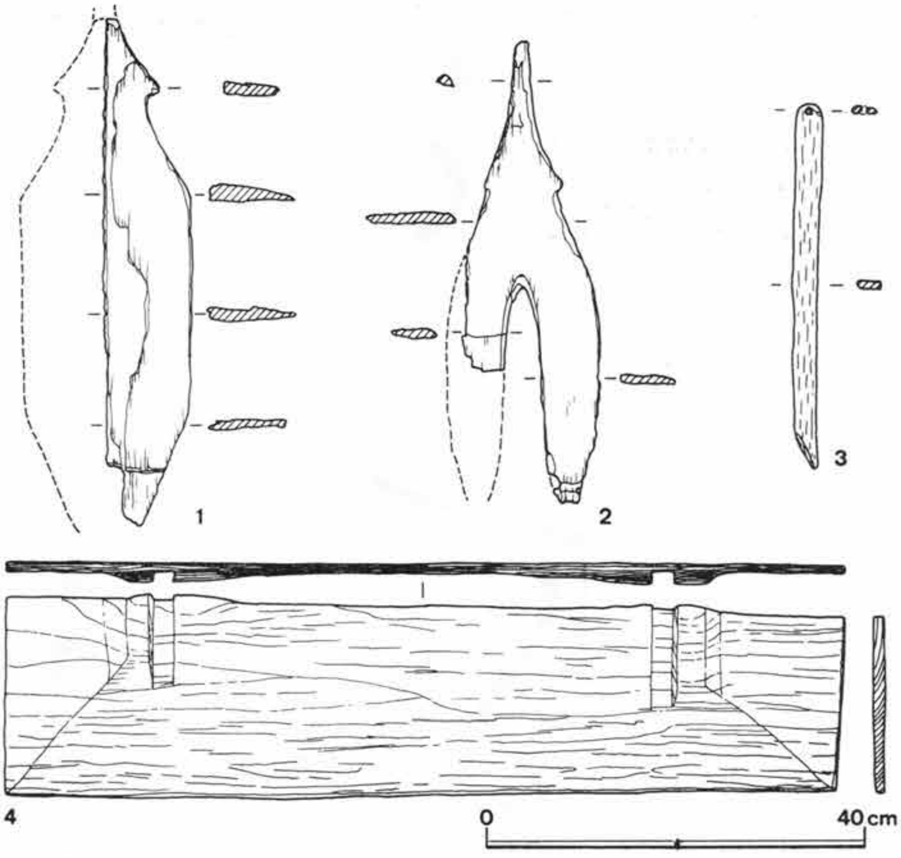
げた痕跡が残る。5は二重口縁壺の口縁部である。内面の調整は横ナデであるが，口縁部外面には縦方向のヘラ磨きが等間隔に認められる。6・7・12は土師器の高杯である。12は杯部に段を持ち，口縁部が外反する大型の高杯である。8・9・10は布留式甕である。13・14は中・西部瀬戸内系の甕である。13は内方へ二段に屈曲する口縁部を持つ。口縁部の一段目と二段目の接合部外面には三条の凸帯があるが，中央は貼り付け凸帯である。14もまた内方へ屈曲する口縁部を持つ甕である。甕の体部外面はハケによる調整が見られ，内面は木の木口によるイタナデ様の整形，指頭圧痕，カキアゲ，接合痕が認められる。また内面は全面に黒漆状の付着物が残存する。12は土師質の韓式土器である。外面は縄蓆文と沈線，内面はナデにより調整されている。胎土は細かく，焼成も堅牢である。

第79図の1・2・3は共伴遺物から古墳時代前期及び中期初頭と考えられる土師質の土錘である。1は細身で両端がしぼむもの，2は太めで両端がしぼむもの，3は端部と中央部の径が等しいものの3タイプが認められる。グラフ中に点線で囲んだものは3のタイプである。ルーズではあるが長さ・直径・重量に一定のまとまりが認められる。2・3のタイプは中心の穴の径が等しく同一の棒状の工具に粘土を巻き付けることにより作られた可能性がある。

第80図の1・2はいずれも広葉樹を加工したナスビ形着柄鋤である。両方とも傘状の着柄部分を持っているが，1は刃部が1つなのに対し，2は二股に別れ機能部位を2か所に持つ。3は針葉樹を用いた扁平な棒状木製品である。一端は丸く納まり穿孔されるが，もう一端は欠損している。4は板状の製品である。木表を上面とした木取りをし，裏面には両木口寄りに2か所の突起を削りだしている。突起の上端には幅12㎜・深さ6㎜の止めホゾを長軸に直交する形でそれぞれ設けている。木目の長軸方向に割れているため，全体を窺うことはできないが，木口の年輪の観察により残存の2倍程度の幅に復原できる。針葉樹が材として用いられている。図化した面の裏面(上面)は平坦なことから，ホゾに下駄歯



第79図　河道ＳＲ216049出土土錘実測・法量分布図



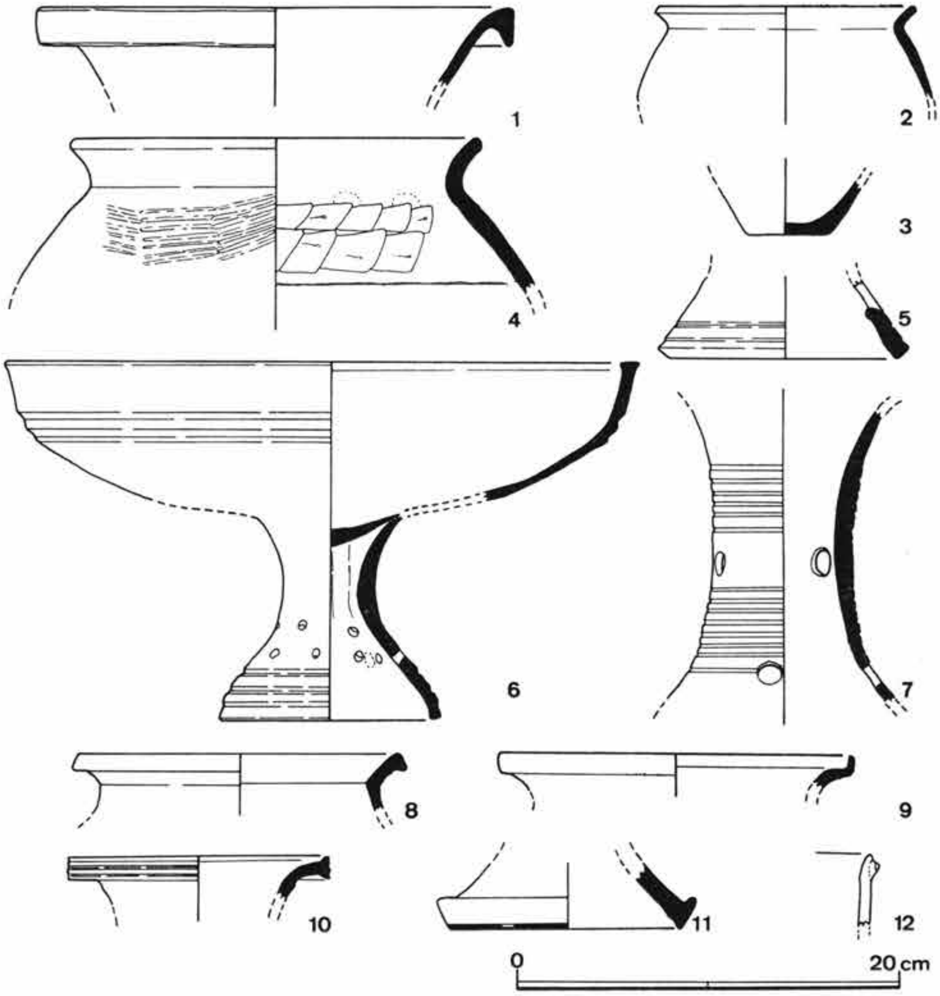
第80図　河道ＳＲ216049出土木製品実測図

状の2脚を取り付けて，案として用いられたことが想定される。

ウ.弥生時代(第81図・図版第65)

竪穴式住居跡 SH 216036　1は中央土坑埋土から出土した弥生時代後期前半の広口壺の口縁部である。胎土は生駒山西麓産と言われる胎土に類似する。第82図1は周壁溝内部から出土した砥石である。四面が作用部位として用いられ，木口は未使用である。白色のシルト岩系統の石を素材とする。2は埋土中から出土した全面を磨いたと考えられる粘板岩系の石製品である。断面は想定復原によるアーチ状を呈しており，一方の端面は研磨して平坦面を作っている。破損しているため全貌は明らかではないが，包含層から縄文晩期の土器が出土していることから，縄文の石棒が混入した可能性もある。

土坑 SK 216044　2・4は甕の口縁部である。2の内外面の調整は不明，3の甕の底部と同一個体の可能性が認められる。4は外面体部にはタタキが認められる。内面体部上半にはヘラケズリが施されるが，接合痕が消えずに残る。5は沈線の2条巡る脚部である円



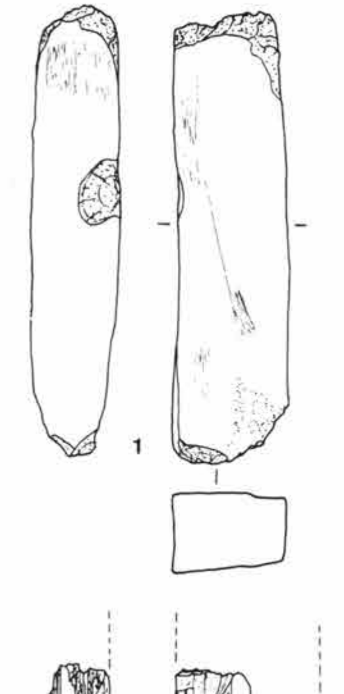
第81図　7ブロック第10トレンチ出土遺物実測図(4)

形の透かしが入るが，小片のためいくつ穿孔されていたかは不明である。6は高杯である。杯部の屈曲部に2本の凹線が巡る。脚の裾部にもまた凹線が3本巡り，二段にわたり多くの円孔が開けられており，内面には絞り目が認められる。

土坑 SK 216045　7は弥生時代中期後半の器台である。凹線と上下二段の円孔が認められる口縁部及び脚端部は欠損しているが，残りの部位は破損せず横になった状態で出土した。8は中期後半の甕である。

土坑 SK 216053　9は，受け口状の口縁部を呈する甕である。内外面の調整は不明である。弥生時代後期のものと考えられる。

溝 SD 216054　10は弥生時代中期後半の壺である。口縁端部は上下にやや拡張してお



第82図　竪穴式住居跡ＳＨ216036
出土石器実測図

り，端面に三条の凹線が巡る。11は高杯または鉢の脚台と考えられる資料である。10の資料と同時期のものと考えられる。

包含層　12は縄文時代晩期の長原式土器の深鉢の口縁部である。胎土は，いわゆる生駒山西麓の土を用いている。

d．第23トレンチ(図版第47・48)

五条大路を検出するためにトレンチを設定した。

①検出遺構

ア.長岡京期(第83・84図)

柱穴SK216012　トレンチ内の断ち割り断面に検出した柱穴である。南北0.6m・東西0.4m以上・深さ0.5mを測り，遺構内から須恵器甕片が出土した。

柵列SA216040　トレンチ幅が限られているため，柵列になるか確定できないが，ここでは南北方向の柵列として扱う。柱間は2.7mである。

溝SD216041　東西方向の溝で，座標値から考えると五条大路南側溝と思われるが，非常に浅くはっきりとしなかった。溝の南側には人頭大の礫が7個認められた。検出長約2.4m・幅約0.8m・深さ約0.11mを測る。

イ.古墳時代(第83図)

旧流路SR216013　古墳時代中期に埋没したと考えられる旧流路である。検出長約2.8m・幅約3.3m・検出面からの深さ約1.1mを測る。

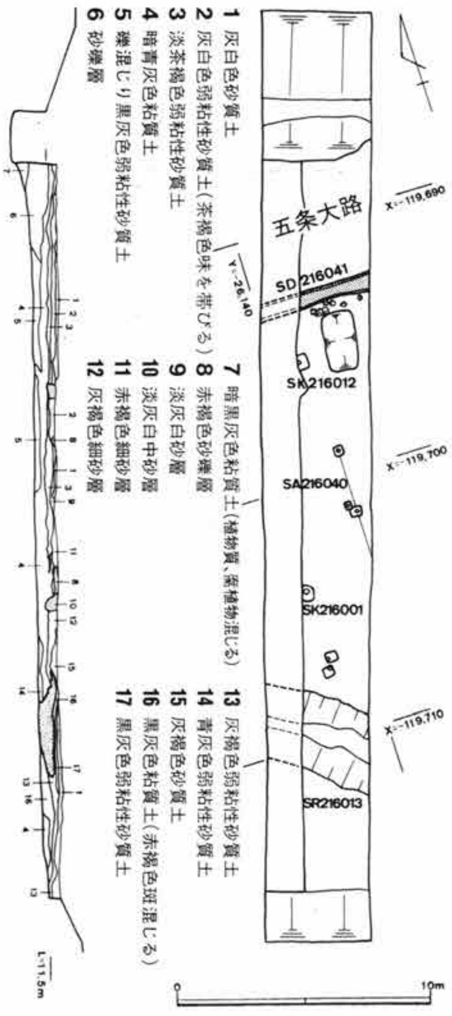
②出土遺物

ア.長岡京期(第85図・図版第65)

柱穴SK216001　1は土師器の甕である。外面はハケ及びナデによる調整，口縁部内面には横方向のナデが認められる。2は須恵器壺の底部である。底面には焼成前に入れた沈線が1条認められる。

イ.古墳時代(第85図)

旧流路SR216013　3は土師器の小型の甕である。外面の調整ははっきりしないが，内



第83図　7ブロック第23トレンチ平・断面図

第84図　7ブロック第23トレンチ
長岡京条坊遺構

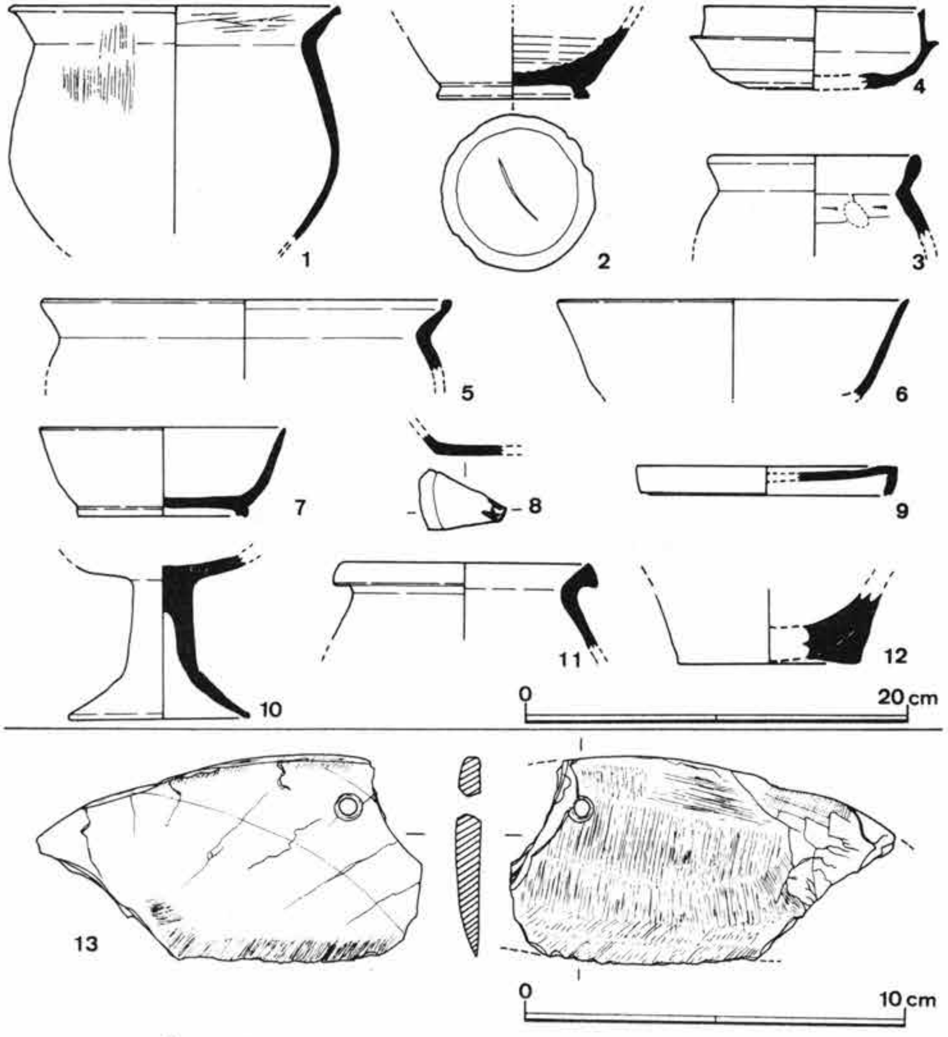
面にはヘラケズリと指頭圧痕が認められる。4は須恵器杯身である。口縁端部は内傾する段をもつ。古墳時代中期のものと考えられる。

包含層　5は土師器の甕である。6・7は須恵器杯B，8は底部に墨書のある杯Aである。文字が書かれていたようであるが，小片であるため判読できない。9は須恵器蓋Bである。以上の遺物はすべて長岡京期のものと考えられる。10は土師器の高杯脚部である。11は弥生時代後期の甕の口縁部である。12は弥生土器の底部である。13は淡灰色をした粘板岩を素材に用いた石庖丁である。片面は剝片分割時の素材面が研磨しつくされず残る。穴は両面からの穿孔である。

3) 長岡京工区8ブロック（7ANMKK-2地区）（第86・87・88図・図版第49～51）

神足の上八ノ坪で2か所のトレンチ各150㎡をそれぞれ設定した。五条第二小路の検出を目的とした調査区である。双方のトレンチともにコンクリート製の暗渠が埋没していたためトレンチを2つに別けて枝番号を付け，北から1，2とした(第86図)。第11トレンチは，8月19日より着手し10月6日までの期間を，第24トレンチでは8月21日より着手し11月1日までの期間をそれぞれ要した。調査の結果，長岡京期と考えられる掘立柱建物跡1棟を検出したのみで，条坊に関する遺構は確認されなかった。

第11トレンチでは，溝 SD 216067・SD 216069の2条と土坑状の落ち込み SK 216068を確認したのみで，遺構内からは時期を確認できる遺物は出土していない。



第85図　7ブロック第23トレンチ出土遺物実測図

第24トレンチでは，掘立柱建物跡SB 216070を検出した。ピットは，一辺40～50cmの方形を呈し，1か所で切り合いを持っており，当初時期差のある遺構と考えたが，これに対応するピットも検出していないので，切り合ったうちのいずれかによって，1棟の建物が建てられていたと判断した。下層では，調査地全体が川もしくは沼状を呈し，縄文土器と考えられる底部片を1点採取した。

a．第11-1・2トレンチ

地表面の高さは標高約13.7m，地表面から約1.5mまで盛り土である。包含層を精査し掘り下げることを繰り返したが顕著な遺構は，ほとんど認められなかった。包含層からは，須恵器，土師器，瓦が出土している。遺構面より下層は，沼状の堆積状態を示してい

た。

SD 216067 トレンチの軸に対してほぼ垂直に横切る溝である。検出長約3.1m・幅約0.9mを測り，深さは約0.12mを測る。この溝から顕著な遺物は出土していない。

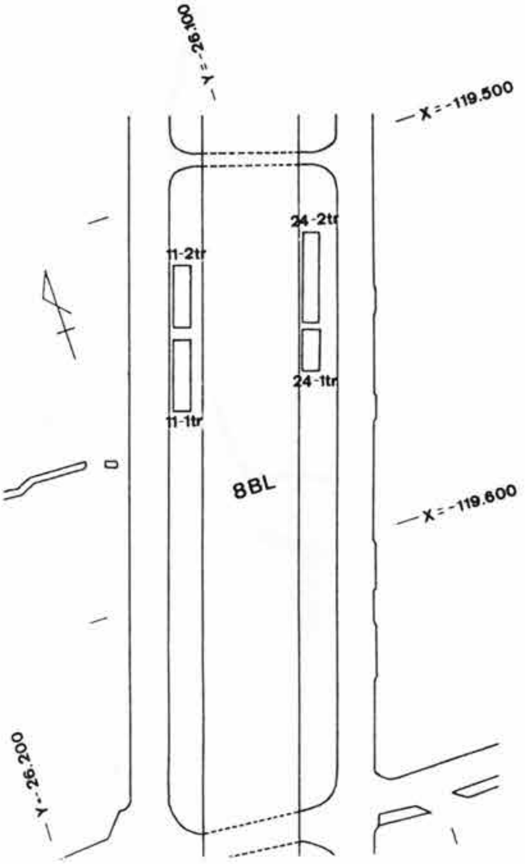
SK 216068 腐植質の黒色シルトを埋土とする落ち込み状の土坑である。検出面からの深さは，約0.15mを測る。出土遺物はない。

SD 216069 トレンチを横切って流れる溝である。検出長約1.9m・幅約2.4m・検出面からの深さ約0.4mをそれぞれ測る。この溝からは出土遺物は見つかっていない。

b．24-1・2トレンチ

①検出遺構

SB 216070 真東西，真南北に方向の合う方形掘形をもつ長岡京期の掘立柱建物跡である。東西方向の柱間20.3m，南北方向の柱間20.6mである。



第86図　8ブロック調査トレンチ配置図

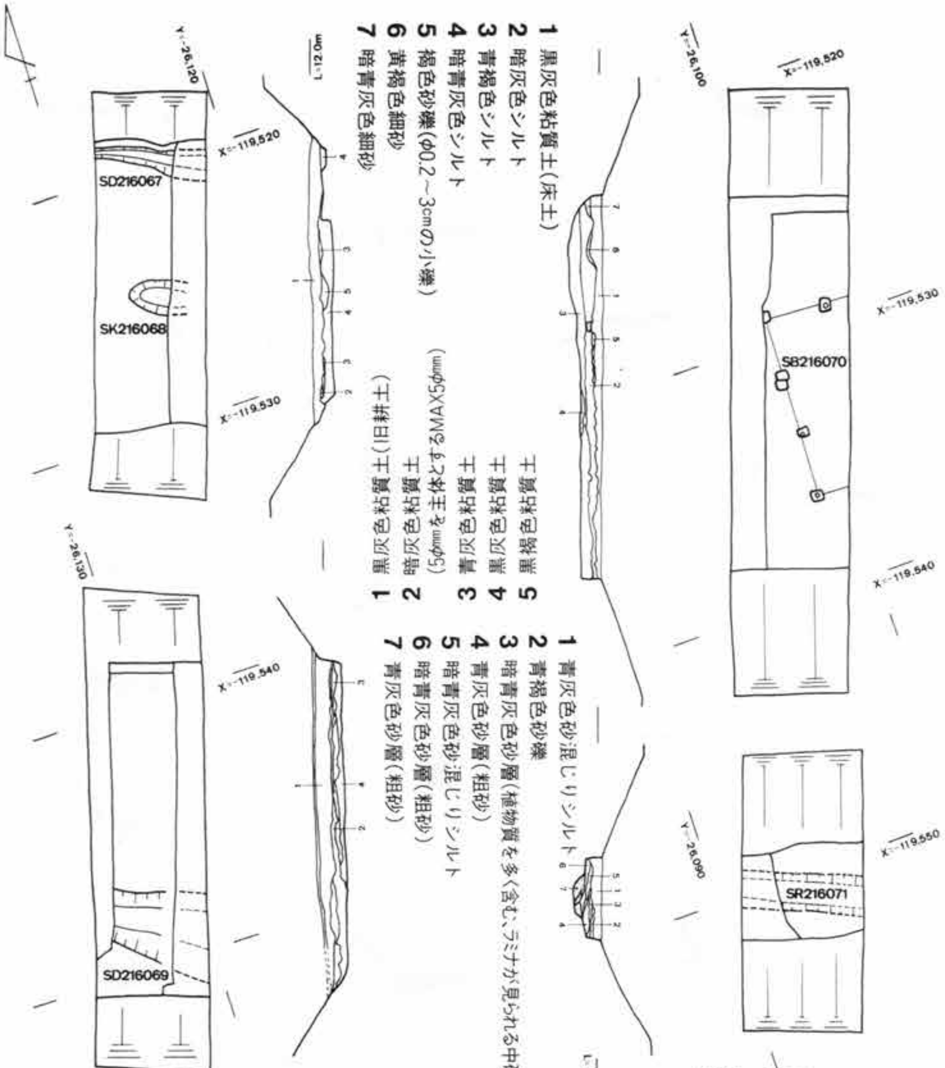
旧流路SR 216071 遺構検出のため精査作業を繰り返し行った結果，沼状の地層へと変わったため，トレンチ中央部に下層遺構確認のため断ち割りして確認した，砂礫を埋土とする旧流路である。幅約3.8m，検出面からの深さ約0.5mを測る。出土遺物は見つかっていない。

②出土遺物

第11トレンチ(第88図)

包含層から出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，1・2の杯Aが2点，3～6の杯B4点，須恵器壺A1点，壺E 2点と8の同蓋1点，9・10の壺L肩把手部及び底部，11の壺M 底部のほか，布目をもつ平瓦14点などがある。

中世の遺物としては，瓦器椀片2点，12・13の羽釜2点が出土している。17世紀後半～18世紀中葉の遺物として14の土師質の燈明皿，15の唐津系刷毛目椀，16の青磁椀17の天目

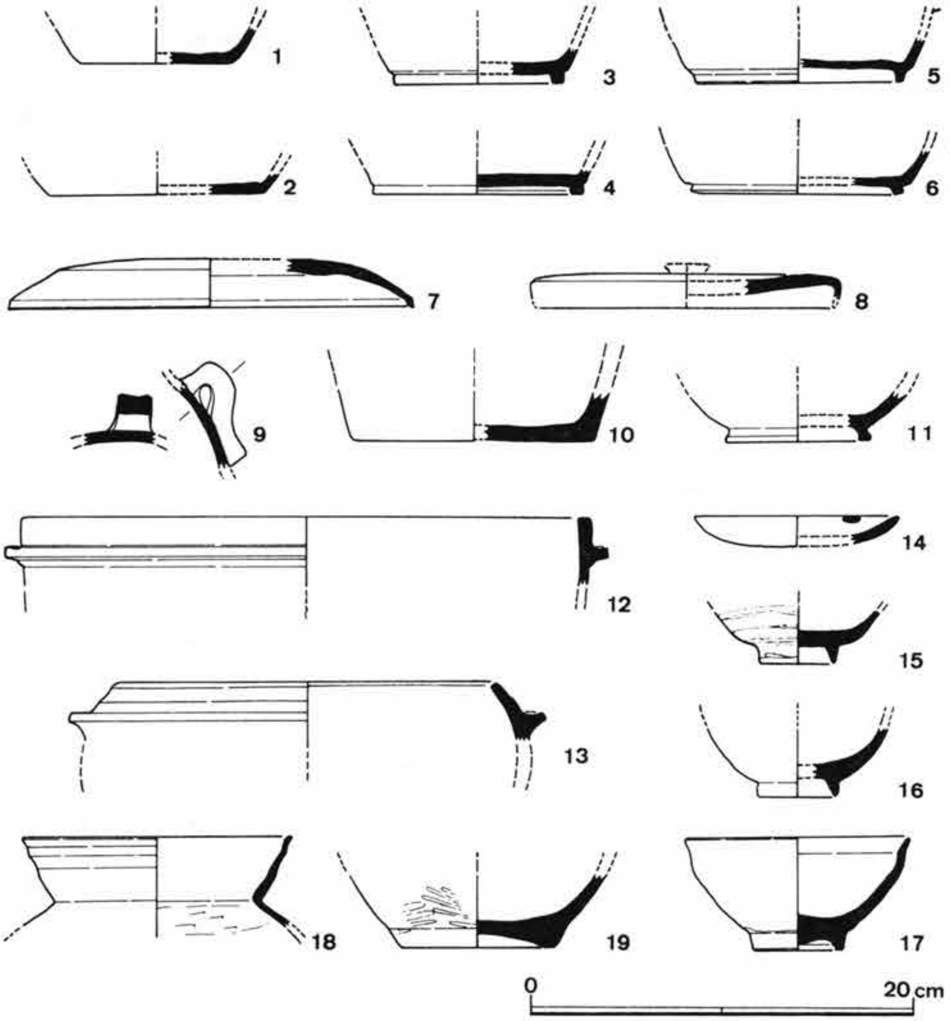


第87図　8ブロック調査トレンチ平・断面図

椀などがある。このほかに，18の古墳時代の布留式の甕，下層立ち割り部より出土した19の縄文土器などがある。

第24トレンチ(第89図・図版第65)

包含層から出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，1・2の杯Aが2点，3の杯B1点，4～6の須恵器杯B蓋3点，壺L1点，7・8の壺M底部2点，鉢D1点や9の土師器の甕1点，10の生駒西麓産の胎土を持つ羽釜1点のほか，布目をもつ平瓦



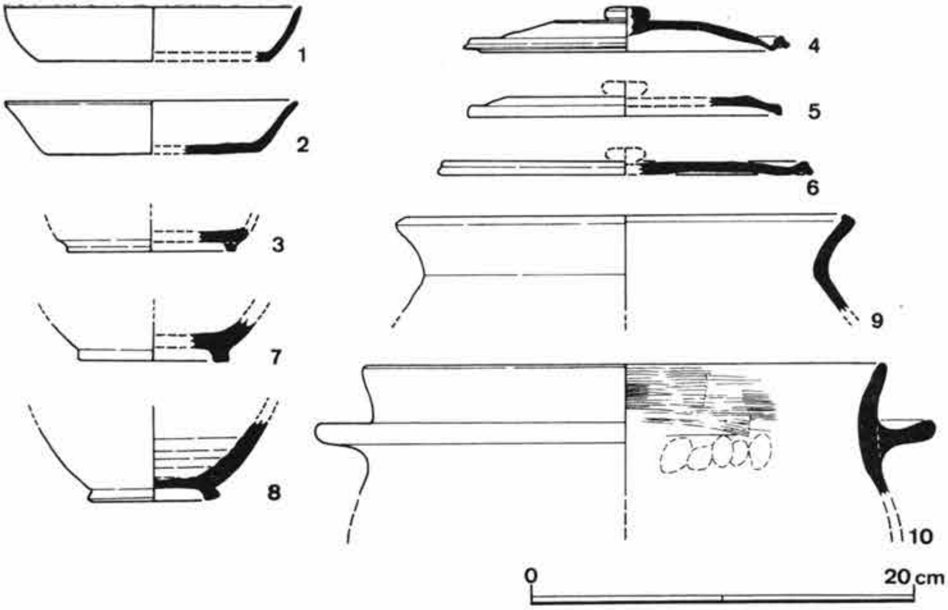
第88図　8ブロック第11トレンチ出土遺物実測図

13点などがある。

このほかに，弥生時代前期と考えられる生駒西麓産の胎土を持つ壷の体部片，古墳時代の須恵器杯片2点，中世の羽釜片などの遺物が出土している。

4）長岡京工区9ブロック（7ANLRB地区）（第90・91図・図版第52・53）

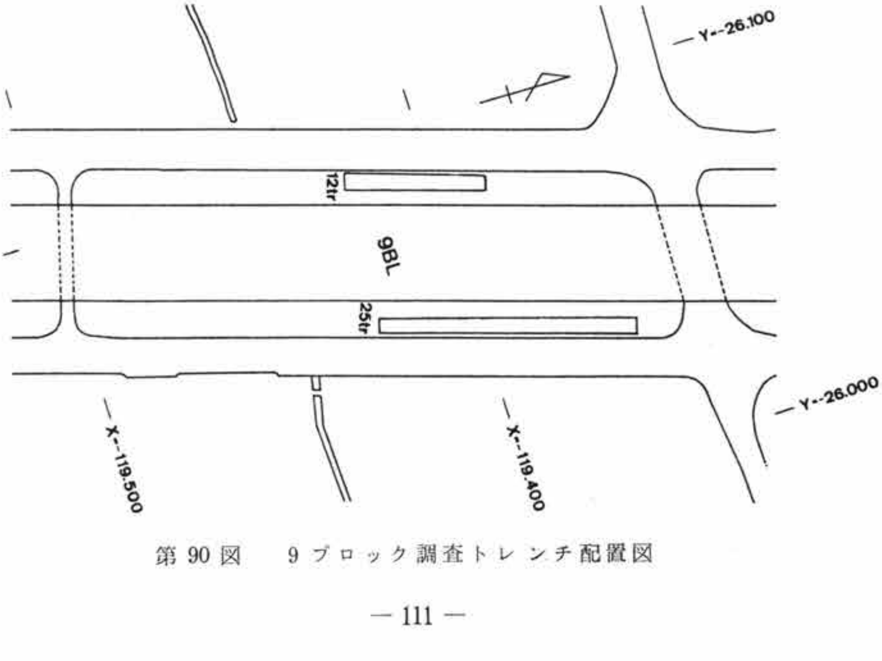
神足の上八ノ坪で2か所のトレンチを150㎡と300㎡を，それぞれ設定して掘削した。五条条間小路・東二坊坊間小路の検出を目的とした調査区である。第12トレンチは，8



第89図　8ブロック第24トレンチ出土遺物実測図

月19日より着手し12月8日までの期間を，第25トレンチでは9月4日より着手し，翌年1月25日までの期間をそれぞれ要した。

調査の結果，8ブロックと同じように，長岡京期と考えられる土器が数点出土したものの，全体的に氾濫による堆積層に覆われており，時代の明確な顕著な遺構は確認されなかった。



第90図　9ブロック調査トレンチ配置図

第12トレンチでは，古墳時代前期の河道（SR 216046）が北西から蛇行しながら南西へと流れており，土砂流により削り取られながら埋没していった様相を呈している。第25トレンチでは，第12トレンチと同様の状況であった。下層の検出面では沼状を呈し，全面に人の足跡が確認された。

出土遺物

第12トレンチ(第93図１～11)

包含層より出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，１の須恵器杯A，２の須恵器杯Bや，12の木製シャモジ１点などがある。

古墳時代の河道SR216046からは，小型丸底土器片，５・７の高杯脚部，３の二重口縁壺，４の甕，６の小型器台などが出土している。このほかに，弥生土器の壺８や，甕の底部９，外面にタタキ目をもつ甕体部片と10の底部などがある。

第25トレンチ(第92図13～16・図版第65)

包含層より出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，須恵器杯片や壺片，布目をもつ平瓦片・丸瓦片などのほか，底部にハケ目をもつ弥生土器14，甕の蓋と考えられる16がある。古墳時代と考えられる河道SR261061からは，土師器片2点と口縁の断面三角形を呈する壺13，底部にタタキ目をもつ弥生土器15などが出土している。

5) 10ブロック(7ANLMD-2地区)(第93・94図・図版第31・54)

神足の上八ノ坪で２か所のトレンチ300㎡と180㎡をそれぞれ設定した。

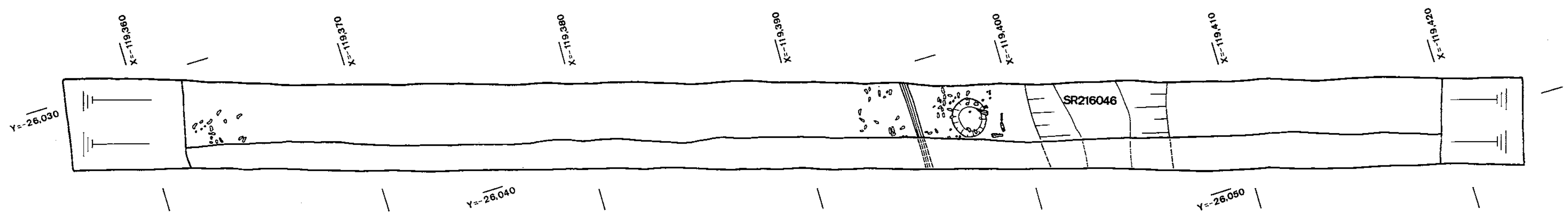
五条第一小路の検出を目的とした調査区である。第13トレンチは，１月26日より着手し２月13日までの期間を，第26トレンチでは11月１日より着手し，翌年２月13日までの期間をそれぞれ要した。

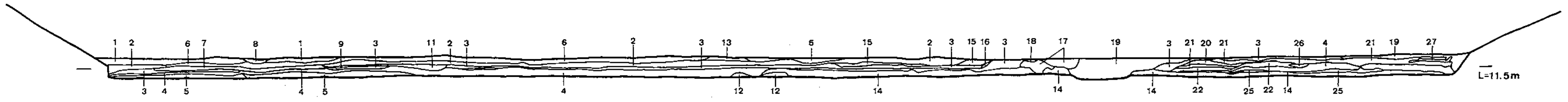
①検出遺構

a．第13トレンチ(第94図・図版第31・54)

調査の結果，第13トレンチでは，長岡京期と考えられる溝SD216066及び南北に並ぶ2基のピットと水田耕作に関係すると考えられる溝を検出した。検出した遺構の座標値は以下のとおりである。

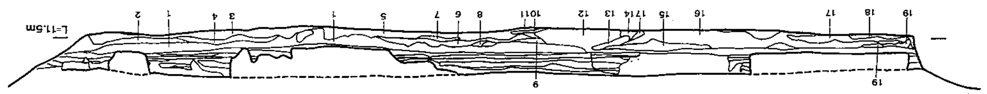
溝 SD 216066　26トレンチで検出した溝SD216063とX座標をほぼ同じくする東西溝である。トレンチ内の検出長約2.6m・幅約0.92m・検出面からの深さ約0.3mを測る。座標値はX＝-119,271.0，Y＝-26,002.0を測る。



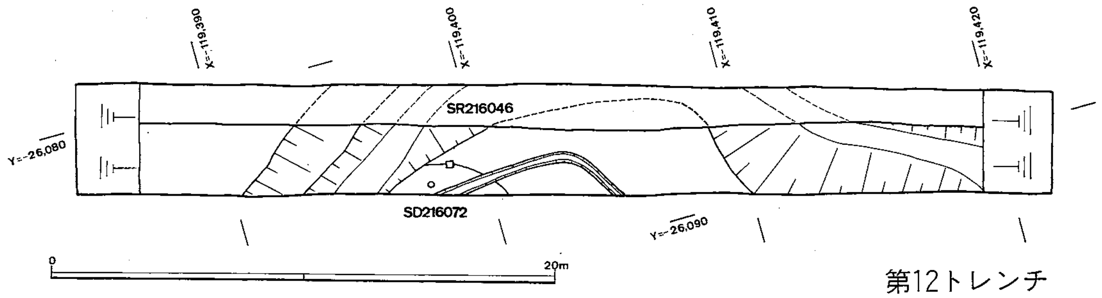


1 暗褐色砂質土
2 灰色砂混じり粘質土
3 黒灰色粘土
4 灰色粘土
5 灰色粘土（細砂混じり）
6 褐色砂質土（φ0.5～1.0cm小礫含む）
7 暗灰褐色砂混じり粘土
8 黄褐色粘質土
9 褐色土
10 褐色砂礫土
11 暗褐色砂礫土（φ0.5～1.0cm）
12 灰褐色砂礫土
13 灰色細砂
14 黄褐色砂質土
15 暗褐色砂礫層（φ0.5～1.5cm）
16 暗灰色砂混じり粘質土
17 暗黄褐色砂質土
18 灰色粘土
19 褐色砂礫層（φ0.5～7.0cm）
20 暗灰褐色砂質土
21 灰褐色粘土
22 灰褐色砂混じり粘質土
23 黄褐色砂質土（小礫含む）
24 灰褐色砂質土
25 灰色粘土
26 灰色砂混じり粘質土
27 褐色砂質土

第25トレンチ

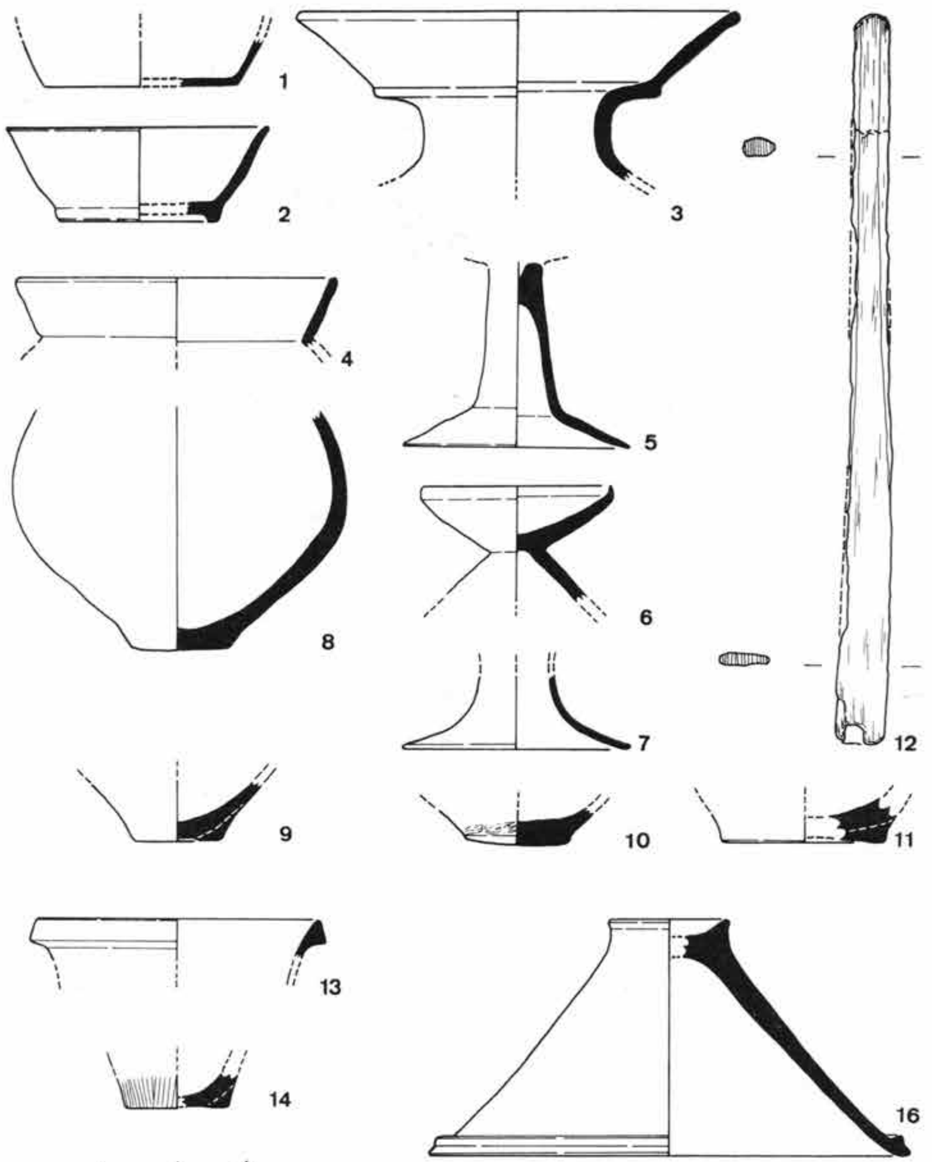


1 黒褐色礫層（φ1～5cm）
2 暗褐色砂質土（φ0.5cm小礫含む）
3 灰色シルト（細砂）
4 暗赤褐色砂礫層（φ0.5～3.0cmの礫）
5 灰色粘土
6 褐色粘質土
7 灰色砂混じり粘質土
8 暗褐色粘質土
9 暗黒褐色砂質土
10 黄褐色砂質土
11 青灰色粘土
12 暗灰色礫層（φ0.5～5.0cm）
13 暗褐色砂質土（φ0.5小礫含む）
14 灰色粘質土
15 灰色粘土
16 灰色礫層（φ0.5～5.0cm）
17 黒褐色砂混じり粘質土
18 黄褐色粘質土
19 黒褐色礫層（φ0.5～5.0cm）
上層は砂質土と粘質土の互層で流れ堆積の様相を呈す。



第12トレンチ

第91図　9ブロック調査トレンチ平・断面図



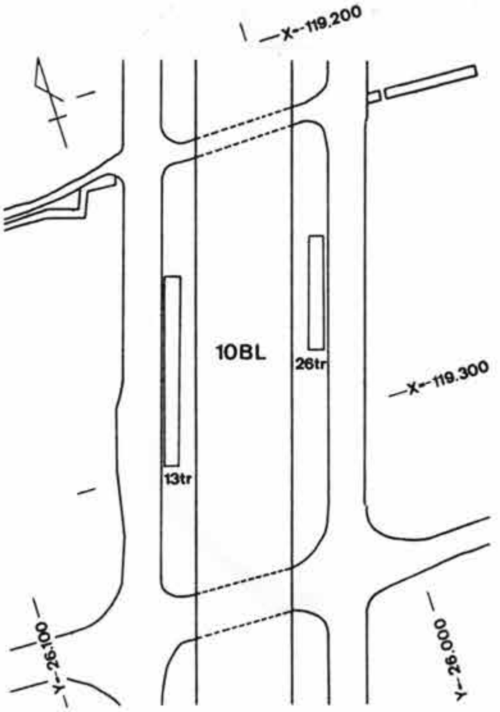
第 92 図　　9ブロック第12・25トレンチ出土遺物実測図

第26トレンチ(第94図・図版第31・54)

長岡京期と考えられる溝SD216062〜SD216065の4条と，溝SD216062の北側に並行する柵列と考えられるピット列SA 216073を検出した。検出した溝のうち，調査区北寄り(SD 216062)と南端(SD216065)は幅60〜70cmの細い溝，その内側では幅70〜110cmの広い溝となっており，道路側溝とその内側に付属する遺構と考えられる。

柵列ＳＡ216073　トレンチの北寄りで検出したピット２基からなる遺構である。南側で検出した溝SD216062に並行していることや，北及び南で連続するピットがないことから柵列と考えた。それぞれのピットは，東西方向に長軸をもつ不定形な掘形をしており，検出面からの深さ約0.1mを測る。座標値はＸ＝-119,265.6，Ｙ＝-26,002.00を測る。

溝　SD216062　４条の溝のうち北端で検出した溝である。検出長約4.5m・幅約0.36m・検出面からの深さ約0.1mを測る。溝の座標値はＸ＝-119,267.7，Ｙ＝-26,002.0を測る。



第93図　10ブロック調査トレンチ配置図

溝　SD216063　第13トレンチで検出した溝SD216066とＸ座標をほぼ同じくする東西溝で，検出した４条のうち，もっとも遺存のよい遺構である。トレンチ内の検出長約4.5m・幅約1.05m・検出面からの深さ約0.3mを測る。溝の座標値はＸ＝-119,271.0，Ｙ＝-26,002.0を測る。

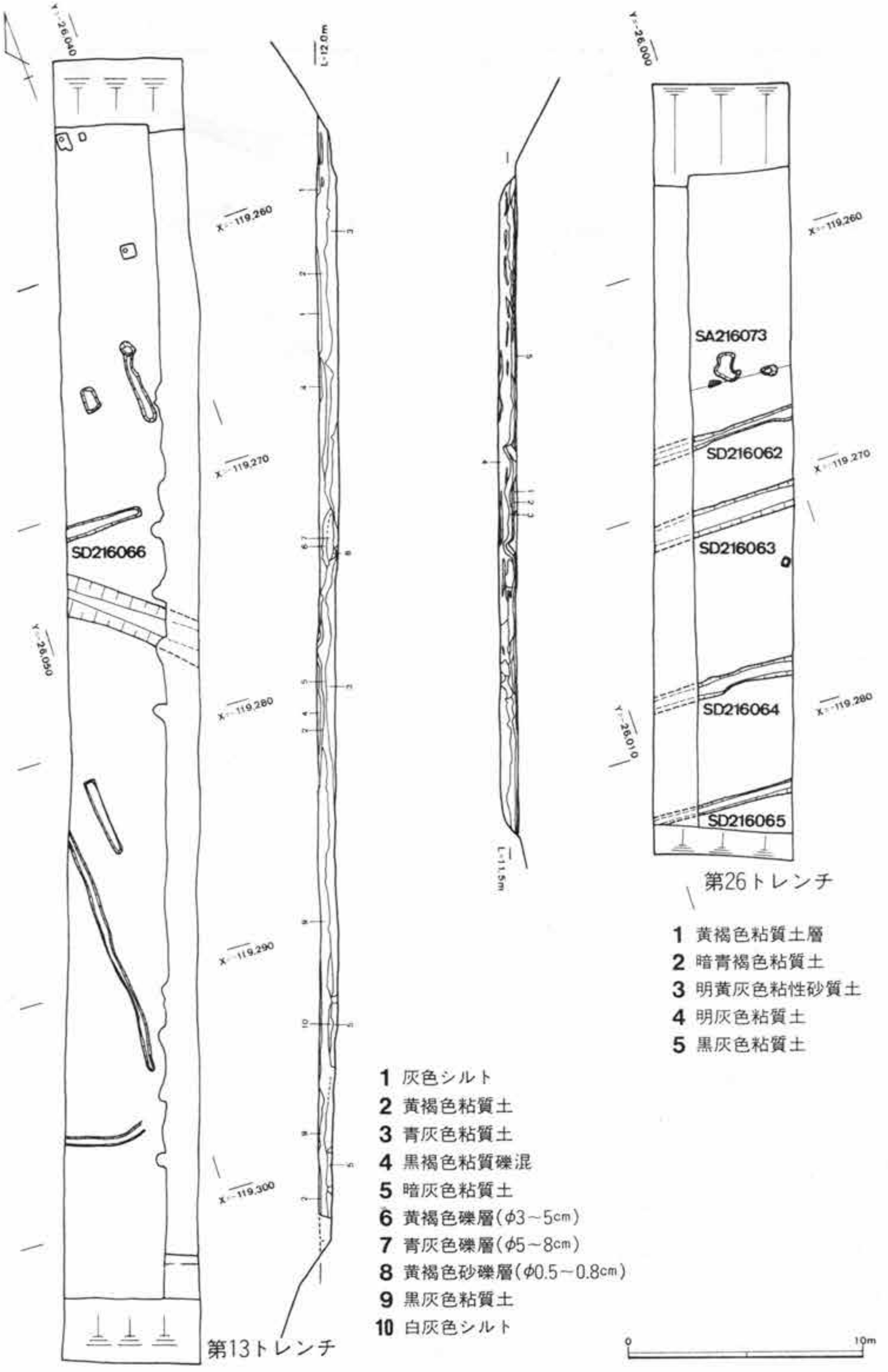
溝SD216064　北から３条目の東西溝である。トレンチ内で検出長約4.5m・幅約0.6m・検出面からの深さ約0.1mを測る。溝の座標値はＸ＝-119,277.8，Ｙ＝-26,005.0を測る。

溝SD　216065　トレンチ南端で検出した東西溝である。トレンチ内の検出長約4.5m・幅約0.3m・検出面からの深さ約0.1mを測る。溝の座標値はＸ＝-119,282.8，Ｙ＝-26,005.0を測る。

②出土遺物

a．第13トレンチ（第95図１～５）

包含層から出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，須恵器杯片や２の壺L，３・４の須恵器杯B蓋，布目をもつ平瓦片・丸瓦片などがある。このほかに５の古墳時代須恵器杯身が出土している。溝SD216066からは，１の土師器高杯の杯部，古墳時代と考えられる河道SR216061からは，土師器片２点が出土している。



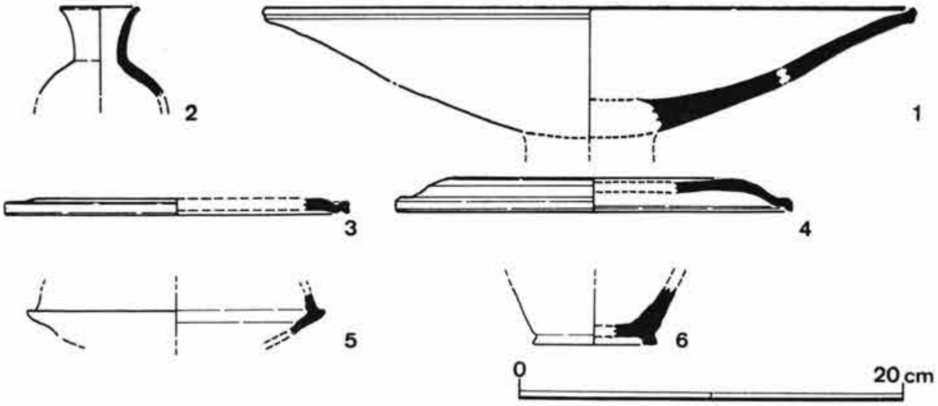
第13トレンチ

1 灰色シルト
2 黄褐色粘質土
3 青灰色粘質土
4 黒褐色粘質礫混
5 暗灰色粘質土
6 黄褐色礫層(φ3~5cm)
7 青灰色礫層(φ5~8cm)
8 黄褐色砂礫層(φ0.5~0.8cm)
9 黒灰色粘質土
10 白灰色シルト

第26トレンチ

1 黄褐色粘質土層
2 暗青褐色粘質土
3 明黄灰色粘性砂質土
4 明灰色粘質土
5 黒灰色粘質土

第94図　10ブロック調査トレンチ平・断面図



第 95 図　10ブロック第13・26トレンチ出土遺物実測図

b．第26トレンチ（第95図6）

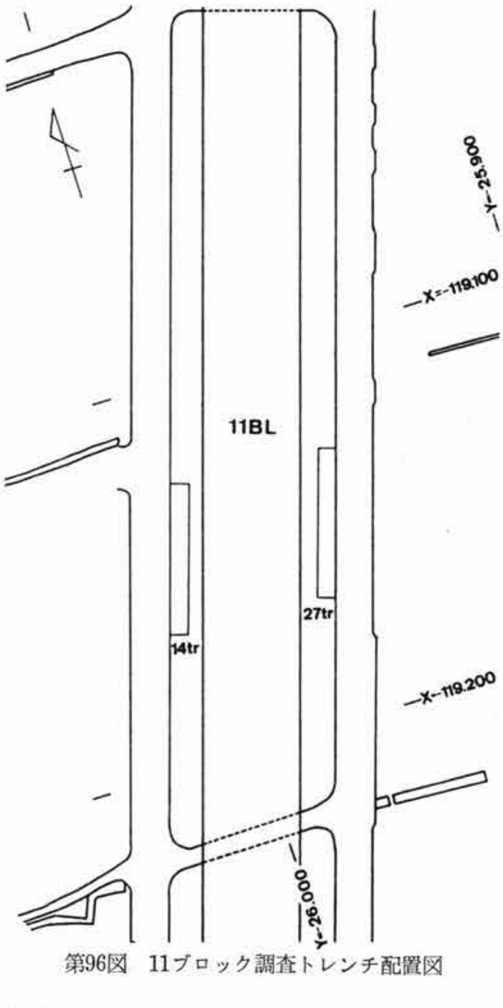
包含層より出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，6の須恵器壺M底部，布目をもつ平瓦片1点がある。溝 SD216063からは，土師器甕片，布目をもつ平瓦片5点が出土している。

6）11ブロック（7ANLMD—2地区）（第96・97図・図版第31・55・56）

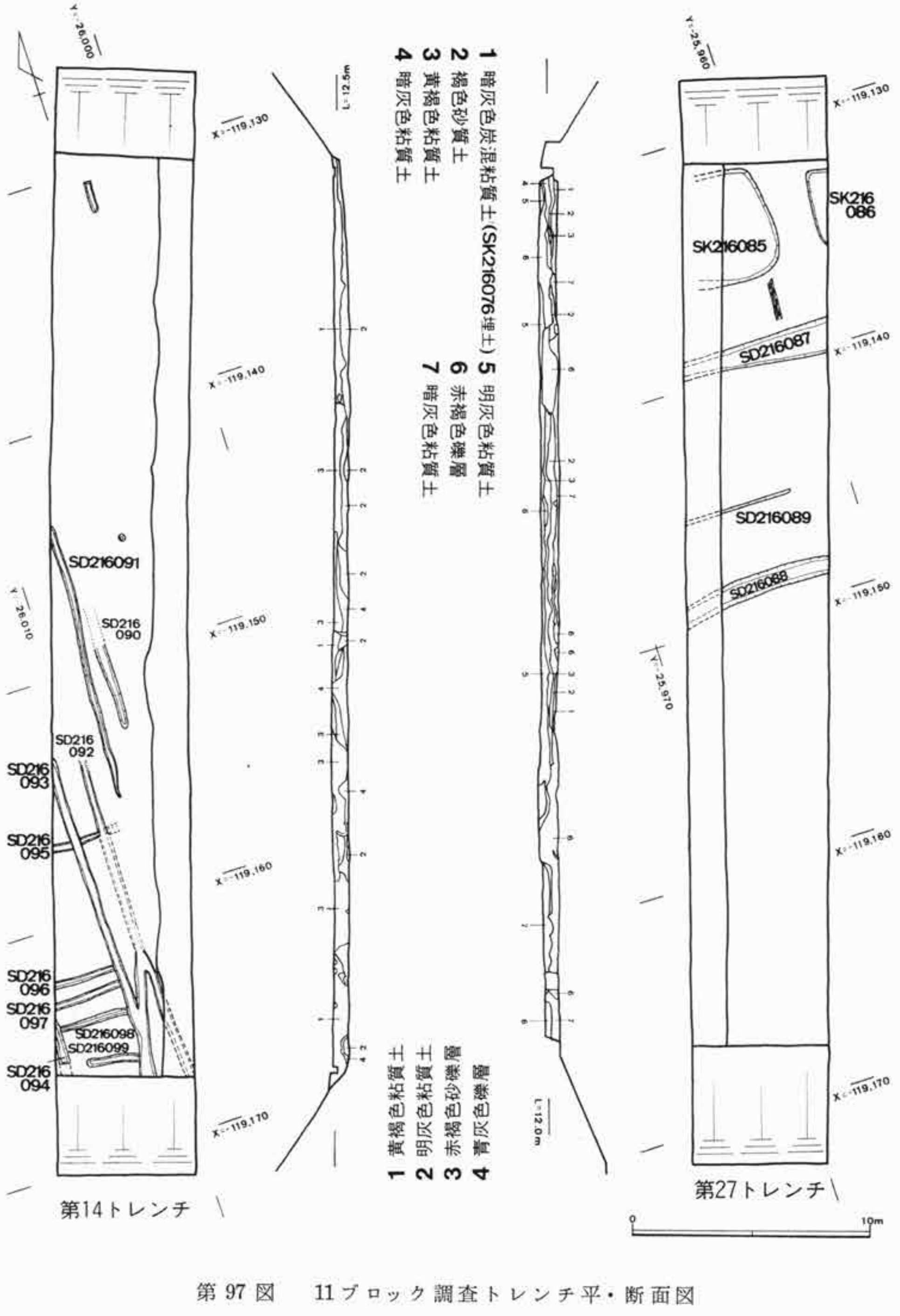
神足の上八ノ坪で2か所のトレンチ各240㎡をそれぞれ設定した。

四条大路の検出を目的とした調査区である。第14トレンチは，1月22日から着手し，3月9日までの期間を，第27トレンチでは1月26日より着手し，3月9日までの期間をそれぞれ要した。

調査の結果，第14トレンチでは，東西・南北の水田耕作に関係すると考えられる溝を検出した。溝は南北溝が新しく，東西溝は南北溝によって切られてい



第96図　11ブロック調査トレンチ配置図



第 97 図　11ブロック調査トレンチ平・断面図

る。溝幅は，南北溝が広く40～50cm，東西溝は南北溝より狭く30cm程度を測る。いずれの溝も概ね5～10cm程度の深さで，溝間の相関性を見いだせる状況になく，溝内からは土師

器の小片を出土するのみで，時期を確定するにはいたっていない。

第27トレンチでは，土坑２基及び溝３条を検出した。

土坑SK216085　南北4.8m・東西2.6m以上の隅丸の土坑である。土坑内からは土師器片が出土しているが，実測しうるものは認められない。

土坑SK216086　土坑SK216085に隣接する形で掘られた南北３m以上・東西１m以上の隅丸の土坑である。土坑SK216085同様の状況で遺物が出土した。

溝 SD 216087　トレンチ北寄りで検出した東西溝である。トレンチ内の検出長約4.5m・幅約0.6m・検出面からの深さ約0.2mを測る。溝の座標値はX＝-119.139.5，Y＝-26,963.0を測る。

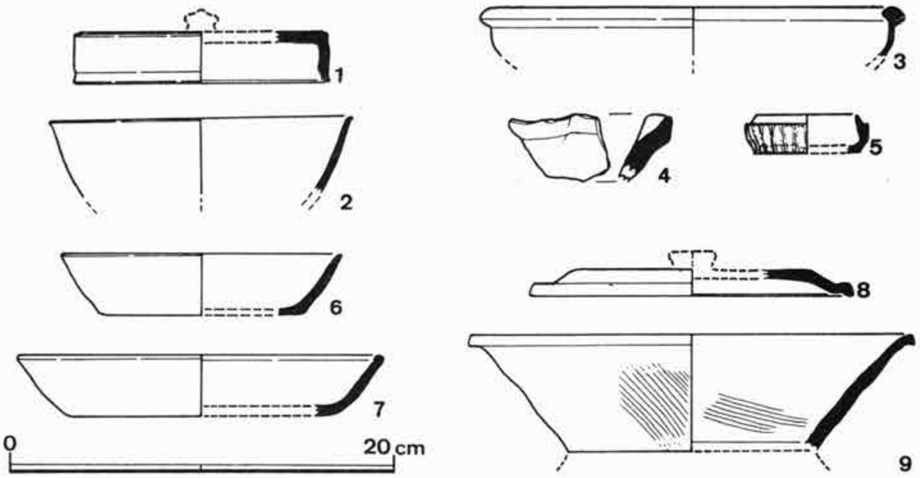
溝 SD 216088　トレンチ中央で検出した東西溝である。トレンチ内の検出長約4.5m・幅約0.3m・検出面からの深さ約0.1mを測る。溝の座標値はX＝-119,148.8，Y＝-26,963.0を測る。

溝 SD 216089　溝SD216087と溝SD216089の間で検出した細く浅い溝である。トレンチ内の検出長約2.6m・幅約0.1m・検出面からの深さ約0.1mを測る。座標値はX＝-119,144.0，Y＝-26,963.0を測る。

②出土遺物

第14トレンチ(第98図1～5)

包含層より出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，須恵器杯Ｂ蓋，１の壺Ｅ蓋，壺Ｌ・Ｔ，甕，布目をもつ平瓦片１点がある。このほかに，古墳時代の土師器甕片，弥生土器片などがある。３は，13世紀初の京都篠窯産の鉢，２は，12世紀の中国華南



第 98 図　11ブロック第14・27トレンチ出土遺物実測図

地方産の白磁の椀，4は，13世紀初めの魚住窯産の片口の鉢，5は，12・13世紀の中国産の青白磁の合子などがある。

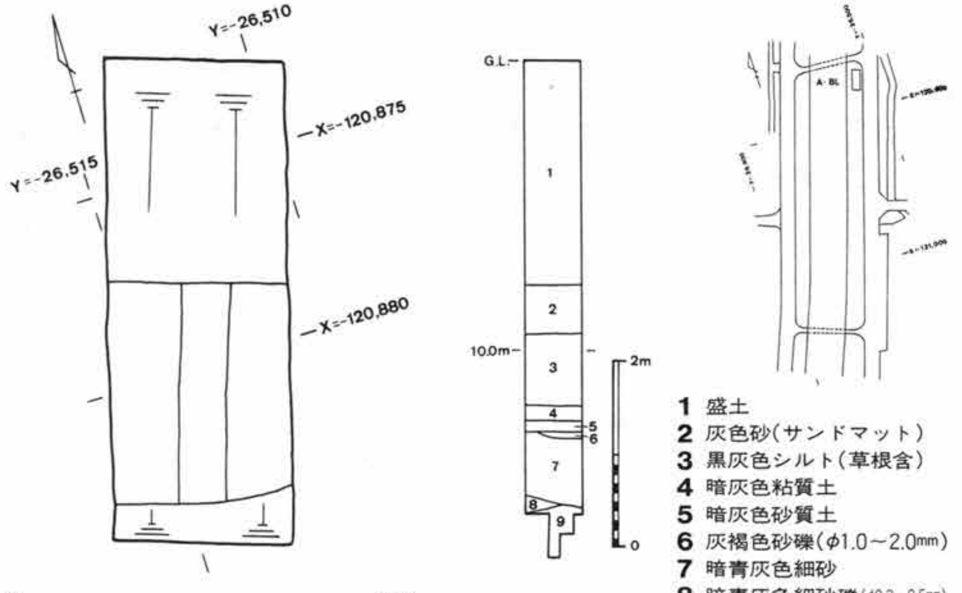
第27トレンチ(第98図6〜9)

包含層から出土した遺物には，長岡京期と考えられるものとして，8の須恵器杯B蓋，平瓶，7の土師器皿がある。また，古墳時代の遺物として9の山陰系の鼓形器台上半部が出土している。土坑SK216085からは，須恵器杯B・同蓋，土師器杯A，古墳時代の高杯・甕などが出土している。土坑SK 216086からは，土師器甕などが出土している。溝SD216087からは，6の須恵器杯A，布目をもつ平瓦が出土している。

7) **Aブロック**(7ANQMR地区，第99図)

勝竜寺の南川原田で地層の確認を含め，推定八条第一小路の検出につとめた地区である。当地点での調査は，想定される遺構面が大変深く，当初予定した調査幅を狭め，八条第一小路の北側溝推定地付近に限り設定した。

幅5.0m・長さ5.0mの調査範囲を設定し，深さ5.0mまでを機械掘削する設計で東西にシートパイルをうち，南北を則切りとした。地表面の標高が約12.4mで，地表下約2.5mまでが第1層盛り土・旧耕作土層(標高9.9m)，標高9.8m前後までが第2層暗茶褐色砂層，標高9.7m前後までが第3層褐色礫層，標高9.6m前後までが第4層灰色粘性砂質土茶褐色有



第99図　Aブロック調査トレンチ配置図　調査トレンチ平•断面図

機物混じり層，標高9.2m前後までが第5層灰色粘性砂質土層，標高9.1m前後までが第6層灰色砂層，標高9.1m以下が第7層黒灰色粘質土層と続く。調査の結果，第7層の黒灰色粘質土層の上面で若干の洪水堆積層と認められる面を確認したが，顕著な遺構や出土遺物は認められなかった。

3.小　結

長岡京工区の調査で検出した遺構のうち，長岡京の条坊に関するものとしては，第7ブロックで，五条大路・六条第一小路・東二坊第一小路を画する両側溝と宅地内を区画する築地もしくは柵列と考えられる柱列・溝群などがある。また，第6ブロックでは，六条条間小路の検出につとめたが，旧河道や溝などを検出するにとどまった。

今回検出した遺溝のうち，六条第一小路は，初めての検出例で，昨年度，長岡京市埋蔵文化財センターによって検出された六条条間小路とともに，五条以南における条坊解明の手掛かりを得たといえる。また，五条大路については，右京第11次(注5)・第96次(注6)・第314次(注7)調査で確認されており，とりわけ右京第96次調査では南北両側溝が検出され，両溝間の心々幅が約15mであることが明らかとなった。さらに，右京第314次調査では，大路推定ライン上には建物が立たないものの，空間地の幅が約9.8mと狭くなり，調査担当者は大路をまたぐ宅地割りがなされたのではないかと考えるに至っている。

今回検出した左京での南北両側溝は，溝心々幅が約9mと狭く，一つの条坊の中でも地点によって路面幅が違うことがうかがえるが，条坊施工を考えるうえで，今後の検討課題を提供したといえる。

下層で検出した遺構のうち，古墳時代中期のものとして，調査地の南寄りで須恵器を含む溝SD216055～216057(第22トレンチ)や，旧河道SR216042(第22トレンチ)・216043(第9トレンチ)などがある。古墳時代前期に関する遺構として，調査区の北寄りで竪穴式住居跡SH216009(第10トレンチ)1棟のほか，布留式土器を含む溝SD216010や，旧河道SR216013・216049(第10トレンチ)などを検出している。弥生時代中期に関する検出遺構としては，調査区の中ほどで，竪穴式住居跡SH216036(第10トレンチ)1棟のほか，土坑群(第10トレンチ)を検出した。前期の遺構としては，調査地の南寄りで溝SD216048(第9トレンチ)や土坑SK216047(第9トレンチ)・土器溜まり(第22トレンチ)などを検出した。各時代の遺構が少しずつ位置をずらしながら営まれていることがわかった。7ブロックの北及び南では遺構面が大変深くなり，当地が当時微高地であったことを示している。このように各時代の遺跡が営まれているのは当地の地理的条件が大変よかったことを示している。

（戸原和人）

(3) 長岡京跡右京第343次調査大山崎工区
(7ANSIR・SDD-3・SGE-2・SNM-2)

1.はじめに

今回の調査は，中央自動車道西宮線拡幅工事区間のうち，大山崎工事区間を対象とした。調査対象地には，平安時代の集落跡で，第三次山城国衙跡にも推定されている百々遺跡をはじめとして，古墳時代の集落跡の算用田遺跡・室町時代を主体とする金蔵遺跡などが所在している。調査に当たっては，これら遺跡の遺構や遺物の有無を確認するとともに，遺跡の性格や広がりを明らかにすることを主目的とした。

調査は，調査対象地内の随所に試掘トレンチを設けて行った。試掘トレンチの設定は，当初11地点を予定していたが，現地の状況により4トレンチ・11トレンチについては，調査を見送った。また，同拡幅工事に伴い移転する関西電力鉄塔移設関連の発掘調査を，5か所のトレンチを設定して行った。

試掘調査は，平成2年1月8日から11日までの間で重機による掘削を行った。以後，人力による掘削を行い，遺構・遺物の検出に努めた。遺構については，存在の有無を確認するだけに留め掘削は行わなかった。写真撮影・実測作業はその都度行い，2月8日には試掘調査を終了した。試掘調査終了後の2月9日に，関係者説明会を行った。関西電力鉄塔移設関連の発掘調査については，平成2年2月13日・15日・19日に重機による掘削を行い，その後人力による掘削を行った。写真撮影・実測作業はその都度行い，3月8日にはすべての現地作業を終了し，現地を撤収した。掘削面積は，試掘調査分で約740㎡，関西電力鉄塔移設関連の発掘調査分で約260㎡を測る。

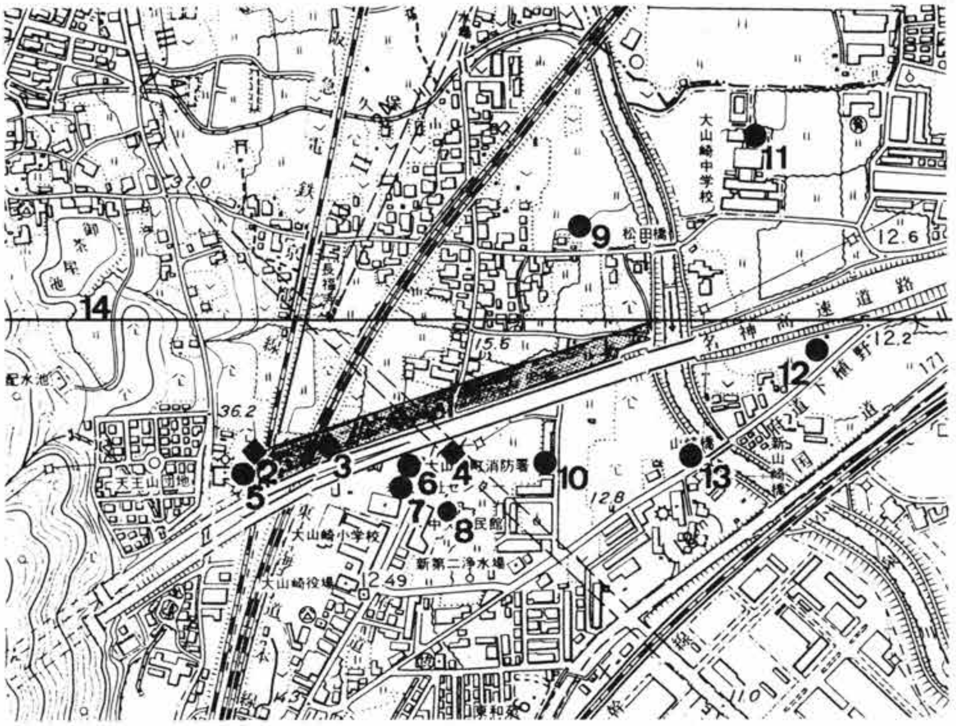
2.調査地周辺の状況

試掘調査区は，大山崎町円明寺井尻・百々に所在する。また，関西電力鉄塔移設関連調査地は大山崎町円明寺御所ノ前・百々・夏目に所在する。調査地付近は，京都盆地の南西部に位置し，西の天王山山地，南の男山丘陵に狭まれた狭隘部にある。近畿東部に源を発する河川の多くは，この付近で合流し，淀川となって大阪湾へと向かう。この淀川水系は，交通の大動脈として古くから活用されており，調査地付近も陸路・水路の要衝として繁栄してきた地域である。

周辺部では随所で発掘調査が行われている。調査地の南西部，旧西国街道の両脇で行われた長岡京跡右京第69次調査・第159次調査・大山崎町遺跡確認調査第2次の各調査では，

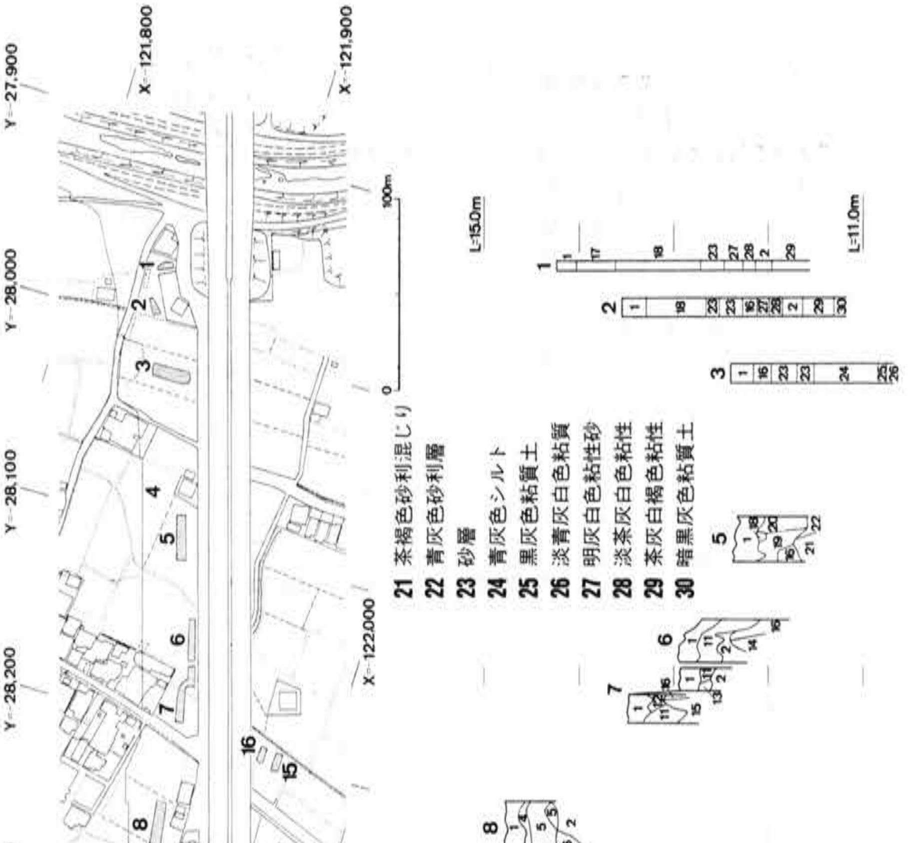
旧山陽道の側溝や平安時代を中心とする掘立柱建物跡などが検出された。これらの調査成果から，付近は第三次山城国衙跡に推定され，百々遺跡の名称で周知されている。調査地東部の北側及び南側では，長岡京跡右京第58次・第32次調査が行われ，流路跡や沼状地形が検出されている。また，小泉川沿いで行われた長岡京跡右京第192次調査では，現地表下４ｍ近い地点で古墳時代の竪穴式住居跡が検出されており，小泉川沿いの微高地に古墳時代の集落が営まれていた可能性が指摘されている。調査地の西側，天王山山麓では，長岡京跡右京第68次調査が行われているが，顕著な遺構・遺物は検出されていない。

なお，長岡京跡は，現在の条坊復原図によると調査地の北側に九条大路が推定されている。現在までの長岡京跡の調査成果によると，条坊復原図の上で，東西道路に二町分の誤差が認められるようになってきた。仮に二町分南に誤差の修正を行った場合には，調査地周辺も長岡京跡の条坊推定範囲内に取り込まれることになる。

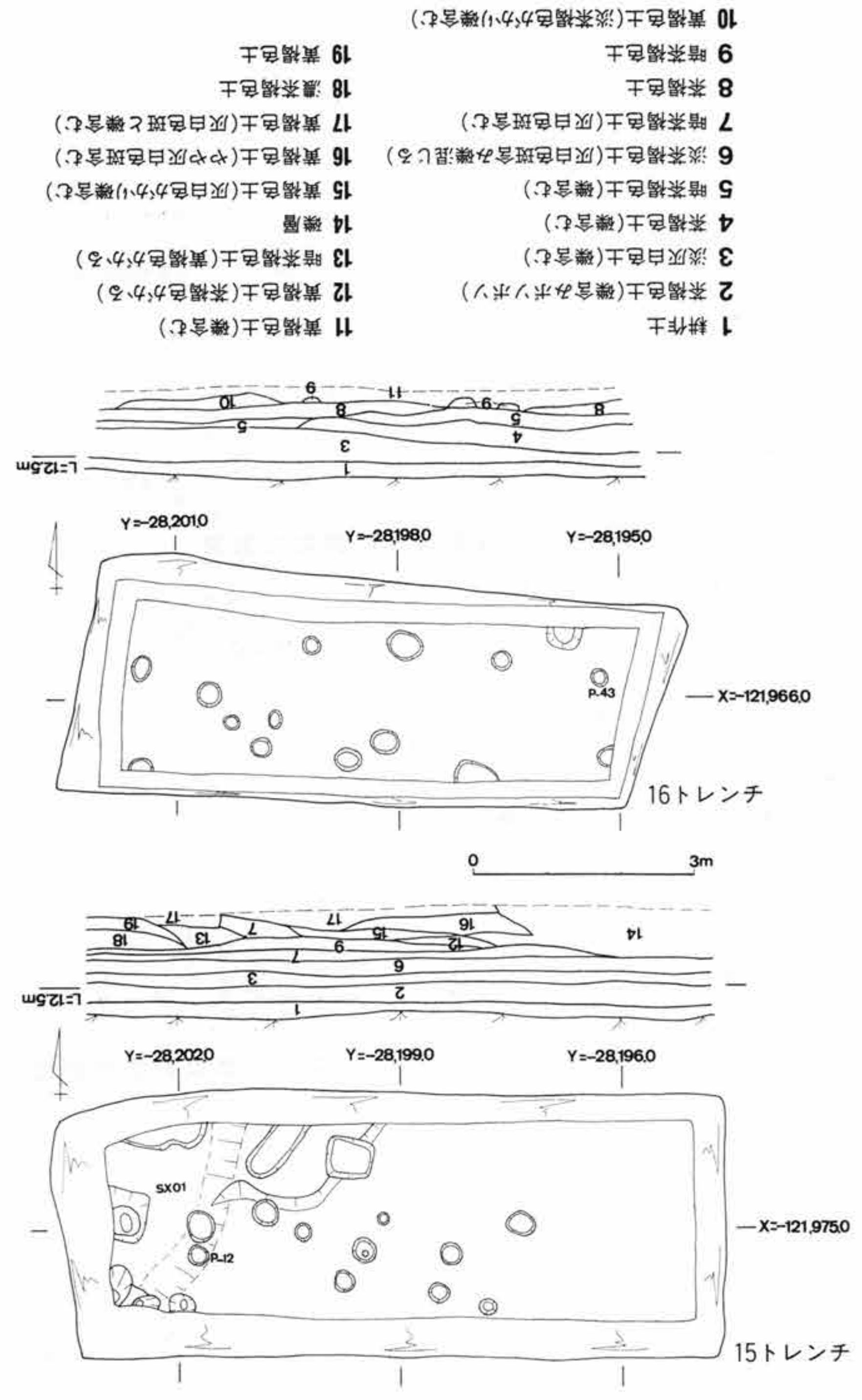


第100図　調査地周辺調査位置図（1/10,000）

1.試掘調査対象地　2･3･4.関電鉄塔移設関連調査地　5.長岡京跡右京第68次調査　6.長岡京跡右京第69次調査　7.長岡京跡右京第159次調査　8.大山崎町確認調査第２次　9.長岡京跡右京第58次調査　10.長岡京跡右京第32次調査　11.長岡京跡右京第42次調査　12.長岡京跡右京第188次調査　13.長岡京跡右京第192次調査　14.長岡京跡南限推定ライン



第101図　トレンチ配置図及び平面図・土層柱状図



第 102 図　15・16トレンチ平・断面図

以上概観してきたように，調査地周辺は，長岡京跡や山城国衙跡を知る上では非常に重要な地点であるとともに，古代から中世にかけての集落立地のあり方を考える上でも重要な地域であるといえる。

3．調査の概要（第102図）

トレンチは，1トレンチから11トレンチまでが，試掘調査に係わるトレンチで，12トレンチから16トレンチまでが，関西電力鉄塔移設に伴う発掘調査に係わるトレンチである。

1トレンチ・2トレンチ

小泉川沿いの調査区で，現地表下2.5m付近で暗黒灰色を呈する遺物包含層を確認した。この包含層からは土師器の小片が若干出土した。

3トレンチ

表土以下，砂利層・シルト層と続く堆積層を確認した。遺物が若干出土したものの，遺構は検出できなかった。調査地のなかでも最も低位にあたり，沼状を呈していたものと考えられる。

4トレンチは，現地の状況により，調査を中止した。

5トレンチ

耕作土の下に青灰色ないし灰白色の砂質土が認められた。これらの土層を掘削したところ，西半部が砂利混じり茶褐色粘性砂質土，東半部が青灰色砂利層となった。砂利混じり茶褐色粘性砂質土及び青灰色砂利層が多くの遺物を包含しており，この面を精査したところ溝状遺構や暗茶褐色を呈するピットを多数検出した。東側の青灰色砂利層は，東端で厚い堆積となっており，地形が東側へ向けて下がっていくことが予想される。

6トレンチ・7トレンチ

旧西国街道の東側に設けたトレンチである。6トレンチでは，耕作土・暗赤褐色土・淡茶褐色粘質土へと続き，部分的に砂利層の堆積が認められた。7トレンチでは，耕作土・淡黒褐色土ないし暗赤褐色土・淡青灰色粘質土へと続く。6トレンチ・7トレンチは，試掘調査区中最も多くの遺物が出土した地点であり，淡茶褐色粘質土層の面を精査した段階で，方形掘形の柱穴をはじめとするピット群を検出した。旧西国街道の東脇では，土器混じりの砂礫層を検出しており，側溝の可能性も考えられる。

8トレンチ・9トレンチ・10トレンチ

旧西国街道の西方に設けたトレンチである。8トレンチでは，耕作土・灰茶褐色土に続いて淡茶褐色粘質土となり，この面を精査した時点で，多数のピットを検出した。10トレンチでは，耕作土・青灰色粘質土に続いて，淡茶褐色粘質土となり，この面を精査した時

点で，多数のピットを検出した。9トレンチでは，限られた面積であったため，遺構の検出はできなかったが，土層の堆積状況は，8トレンチと同様の状態を示していた。

11トレンチは，現地の状況により，調査を中止した。

12トレンチ

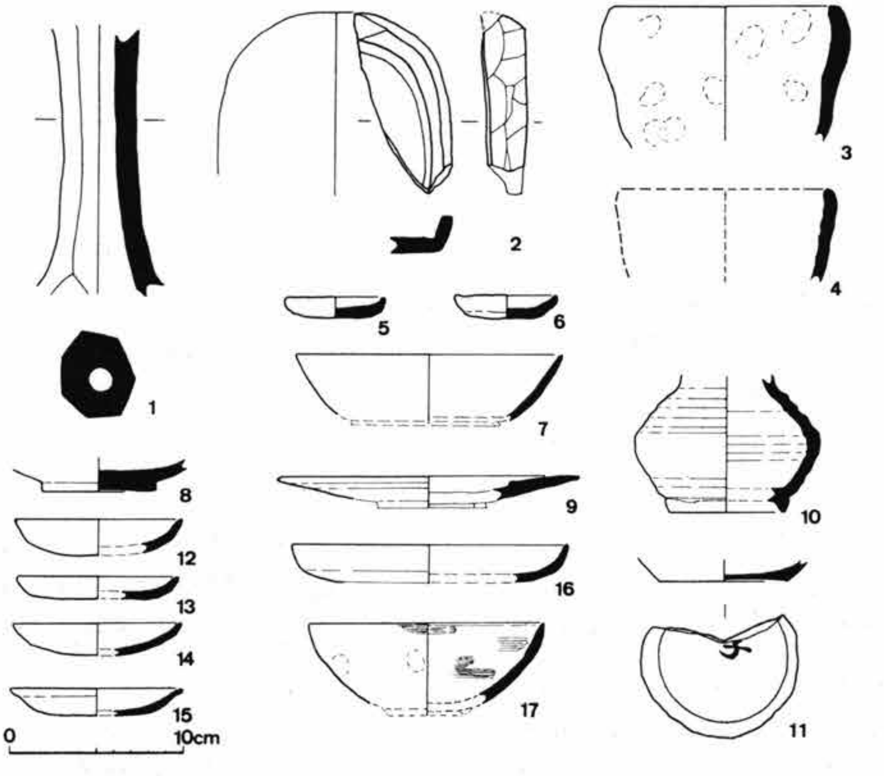
天王山の山麓に設けたトレンチである。このトレンチでは，竹林の表土下で地山となり，遺構を検出することができなかった。遺物は，土師器が若干出土しただけであった。

13トレンチ・14トレンチ

天王山の山際に設けたトレンチである。いずれのトレンチも，耕作土・青灰色砂利混じり粘質土下で地山となり，遺構・遺物は検出できなかった。

15トレンチ・16トレンチ(第102図)

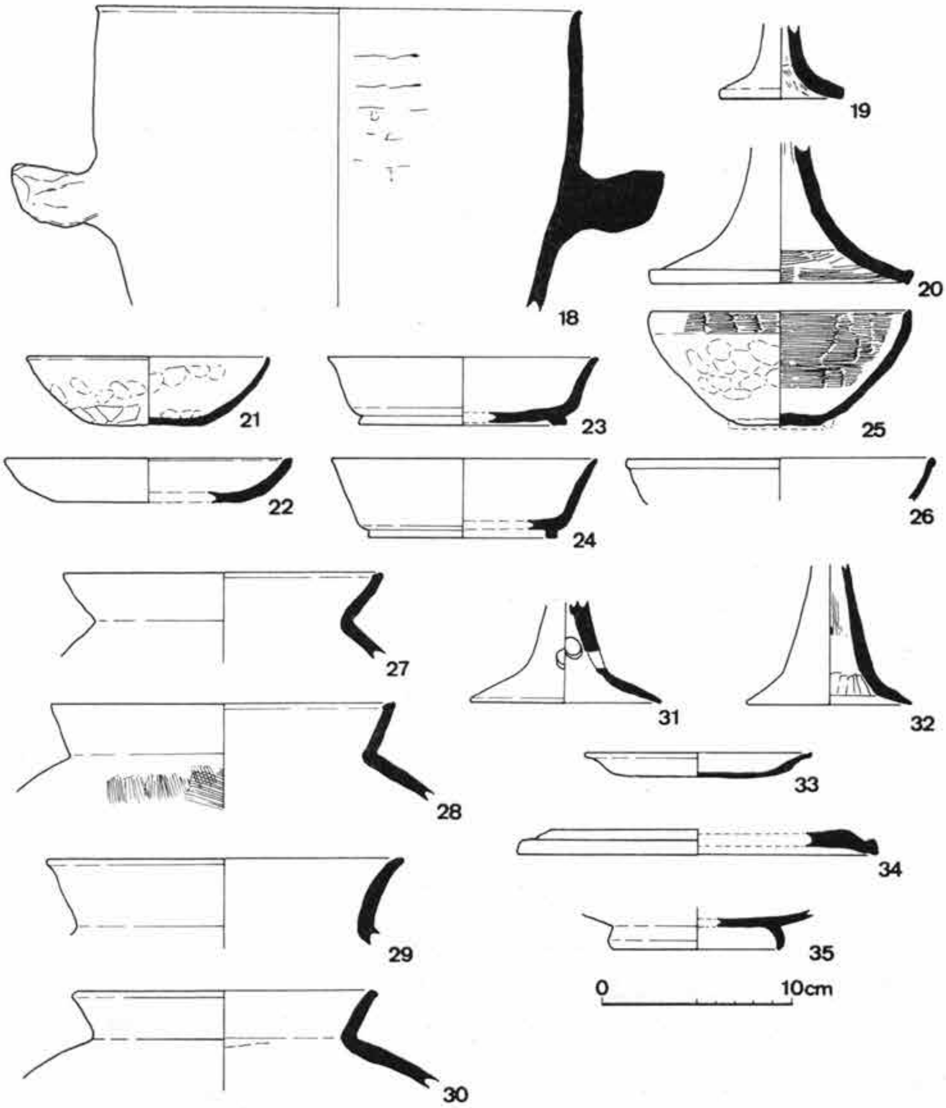
旧西国街道の東側に設けたトレンチである。15トレンチ・16トレンチでは，現地表下約1mで黄褐色土となり，この面を精査した段階で多数のピットを検出した。ピットの掘形は，多くが円形であり，若干方形のものが存在する。また，15トレンチの西側部分は，急



第103図　出土遺物実測図(1)

1～4.6トレンチ出土　5～11. 7トレンチ出土　12～17.10トレンチ出土　1・12・16. 土師器　17. 瓦器　3・4. 製塩土器　9. 灰釉陶器　5・6・13～15. 土師皿　8. 無釉陶器　10・11. 近世陶器　2.硯　7. 黒色土器

激に落ち込んでいくため，溝状ないしは土坑状の遺構の存在が予想される。15トレンチ・16トレンチで検出した多数のピットは，限定された掘削面積のため，構築物の復原は行えなかった。構築物の時期は，ピット内から土師器や須恵器・瓦器が出土することから，平安時代から鎌倉・室町時代にわたるものと考えられる。



第104図　出土遺物実測図(2)

18〜26.15トレンチ出土　27〜35.16トレンチ出土　18〜20.落ち込みSX01出土　25.P-12出土
18〜22・27〜32.土師器　33.土師皿　23・24・34.須恵器　25.瓦器　35.灰釉陶器　26.白磁

4.出土遺物

今回出土した遺物の総量は，整理箱約5箱であった。これらの大半は，旧西国街道両側の6トレンチから10トレンチ及び15・16トレンチの地域に集中していた。

6トレンチ出土遺物(第103図1～4)　1は，高杯の脚部である。脚柱部は中空で，7面の面取りされている。2は,深さ約1.3cmを測る風字硯である。3・4は製塩土器である。

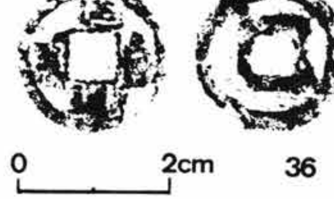
7トレンチ出土遺物(第103図5～11)　5・6は，土師皿である。いずれも完形で，口径約6cm・器高約1.3cmを測る。口縁端部には煤が付着している。16世紀から17世紀にかけての所産と思われる。7は，10世紀頃の内面黒色の土器である。8は無釉陶器の椀，9は灰釉陶器の段皿である。9は，9世紀後半と考えられる。10は，17世紀前半頃の唐津焼の小壷である。11は近代の磁器破片で，底部外面に「子」の墨書が認められる。内面には窯道具の痕跡があり，皿ないし鉢であろう。

10トレンチ出土遺物(第103図12～17)　12から16は，土師器の皿である。15は，「て」の字状口縁となるもので，10世紀末から11世紀初頭の所産である。17は瓦器の椀で，13世紀前半頃のものと思われる。

15トレンチ出土遺物(第104図18～26)　18から20は，下層西側の落ち込み部SX01から出土した。18は甑，19・20は高杯の脚部である。21は土師器の椀で，口径約13cm，器高約3.7cmを測る。調整は，上半に指押え，下半にヘラケズリが認められる。22は，土師器の皿である。23・24は，須恵器の杯身である。25はピットP-12から出土した高台を欠く瓦器の椀で，13世紀前半頃までの所産である。26は，白磁の椀である。玉縁部を折り返して成形していることから，10世紀頃のものと考えられる。

16トレンチ出土遺物(第104・105図27～36)　27から32は，包含層から出土した古墳時代前半の土師器である。27から30は，椀である。27・28は，口縁部が内湾ぎみに立ち上がり，口唇部内側を肥厚させるものである。29・30は，口縁部が外反ぎみに立ち上がる。31・32は，高杯の脚部である。31には2か所に透し穴がある。

33は土師器の皿で，「て」の字状口縁を呈する。10世紀後半の所産と思われる。34は，須恵器の蓋である。35は，灰釉陶器の椀で，9世紀後半頃のものである。36は，ピット(P-43)から出土した銅銭である。直径約2cmを測る。材質が粗雑で，判読しづらいが，「延喜通寳」(延喜7(907)年初鋳)と認められる。



第105図　出土遺物実測図(3)
P-43出土の延喜通寳

5.小　結

今回の調査の主目的は，本調査を実施するにあたり，遺構・遺物の広がりを確認することにあった。以下では，付近の調査成果をもふまえて，調査対象地内における遺跡の範囲を予想する。

小泉川西方に設けた1トレンチ・2トレンチでは，土師器を含む遺物包含層を確認した。南方で行われた長岡京跡右京第192次調査(注8)で確認された算用田遺跡や小泉川を隔てて北東側に位置する大山崎中学校校内で行われた長岡京跡右京第42次調査(注9)で確認された松田遺跡などの古墳時代の集落跡に関連した包含層であると考えられる。

調査地のなかで最も低位にあたる3トレンチでは，沼状の堆積が確認できた。北方で行われた長岡京跡右京第58次調査(注10)では小泉川に関連する流路の西肩が検出されている。また，トレンチ南方で行われた長岡京跡右京第32次調査(注11)でも沼状の堆積が認められている。これらのことから，3トレンチ付近では，流路が南下して沼状の地形が形成されていたものと考えられる。

旧西国街道の両側に設けた5・6・7・8・10・15・16トレンチでは溝状遺構及び多数のピットを検出した。近接して行われた長岡京跡右京第69次調査(注12)・第159次調査(注13)・大山崎町遺跡確認調査第2次の調査(注14)では，旧山陽道の側溝や平安時代を中心とする掘立柱建物跡などが検出され，百々遺跡として周知されている。一方，西方に設けた13・14トレンチ，東側の3トレンチでは遺構を検出することができなかった。また，山麓に設けた12トレンチや長岡京跡右京第68次調査(注15)では顕著な遺構・遺物が検出されていない。これらのことから，調査対象地内における百々遺跡の広がりは，旧西国街道を中心とした5トレンチから10トレンチの地域であることが確認できた。

なお，平成2年度事業として本格的な発掘調査が始められており，遺跡の性格については今後の調査に期待したい。

（三好博喜）

ま　と　め

今年度で名神高速道路各幅工事に係る調査は2年度目となる。調査の結果は，当初予想していたほどでなく，長岡京の条坊に関する遺構の検出については，必ずしも十分な成果を得たとは言いがたい。しかし，各地点での調査では，下層遺構をも含めいくつかの新しい資料を得ることができた。前項でも述べたように近年の長岡京の調査では，東西の大路推定地で小路幅の道路を検出しており，条坊の復原が南北2町分いずれかに移動するのではないかと考えられるようになってきている。

今回の調査地は，二条第一小路と，四条大路から五条条間小路までを対象としたものであったが，向日工区で唯一行った二条第一小路の検出を目的とした調査区では，調査地の中央を河道が走っており，両側溝を検出するには至らなかった。

また，大路幅の道路を想定した長岡京工区6 BLでは，長岡京期に流路があり，当初の目的を果たすには至っていない。しかし，五条条間小路については，本調査後，調査地の東約400mの左京第210次調査で長岡京市埋蔵文化財センターによって幅約24mの道路が確認されている。8 BL以北の五条第二小路から四条大路の検出を想定した11BLまでの調査では，条坊想定ライン上にトレンチを設定したものの，条坊を確定するまでには至らなかった。このような状況の中で，今回の調査中もっとも成果を上げた7 BLでは，五条大路・五条第一小路・東二坊第一小路の各遺構を検出することができた。五条第一小路は今回，初めて確認することができた遺構である。五条大路の検出では，前述のとおりの成果を収めている。

大山崎工区での試掘及び発掘調査は，来年度以降本格的に行われる本調査の予備的な調査であったが，十分な成果を収めることができた。

（戸原和人）

注1　調査参加者　現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである（敬称略）。
青木和人・青木　潤・青木葉子・赤池学博・赤沼謙吾・東　裕子・石津敦子・岡田典久・片山和子・北村　清・久保博昭・坂本英美・滝脇喜充・武田宏司・武村英治・田中あゆみ・田中牧・塚本映子・辻川哲郎・常脇由香子・十時奈津子・飛田浩一・中崎憲和・中原昌弘・長田康平・野田典枝・秦　光次郎・服部典子・早川文乃・原田光明・広瀬時習・船越裕介・別所寛康・松尾均子・水野　泰・宮本純二・山口昌彦・山根嘉久男・若松幹郎・青山恵子・小田栄子・竹内千賀子・竹谷和子・田村重野。

注2　「長岡京跡左京第200次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第35冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989）この報告の中で，検出した溝SD200001の座標値がX=-120,232.43であり，五条大路側溝との関係で南側溝の可能性を指摘している。

注3　この調査で，検出した溝の座標値がX=-120,231.90であり，調査トレンチ北で対応する溝が検出されなかったことにより北側溝の可能性を指摘された。

注4　左京第251次発掘調査により六条大路両側溝が検出され，北側溝の座標値がX=-120,232.70，南側溝の座標値がX=-120,242.50と報告された。

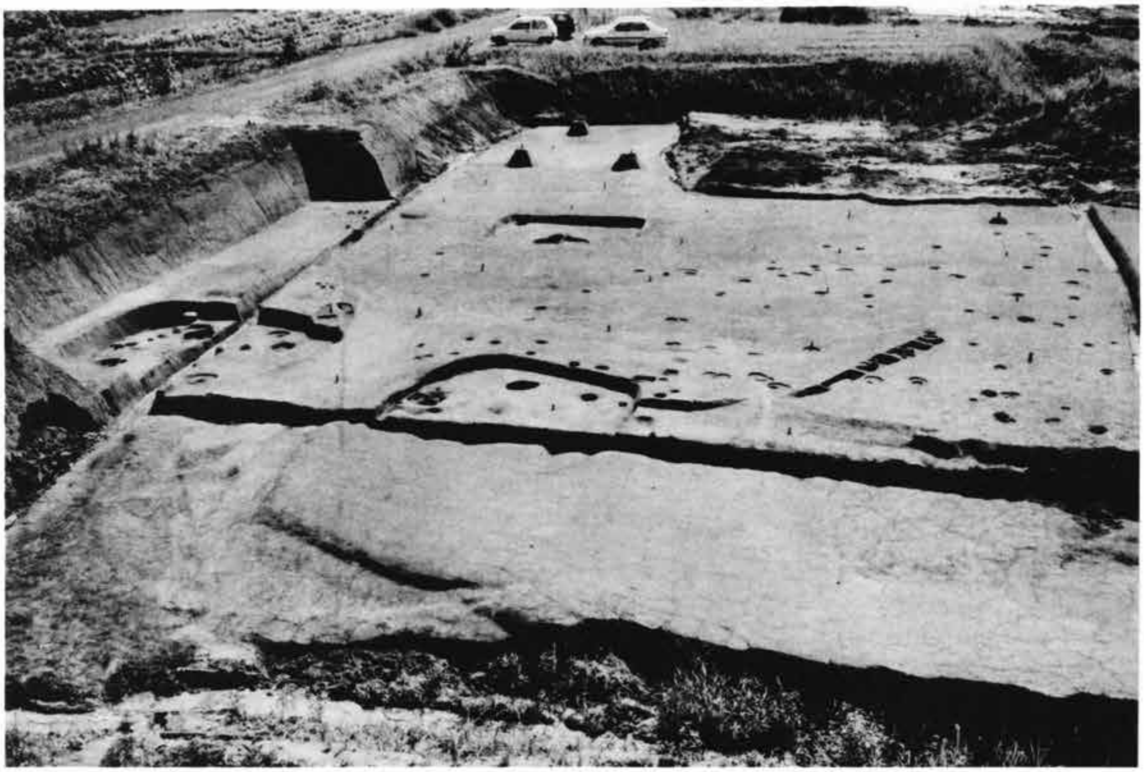
注5　戸原和人「産業文化会館建設にともなう発掘調査概要一長岡京跡右京第11次調査(7ANKUT地区)」（『長岡京市文化財報告書』第5冊　長岡京市教育委員会）　1980

注6　木村泰彦「長岡京跡右京第96次調査概要(7ANKUT—4地区)」（『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）　1984

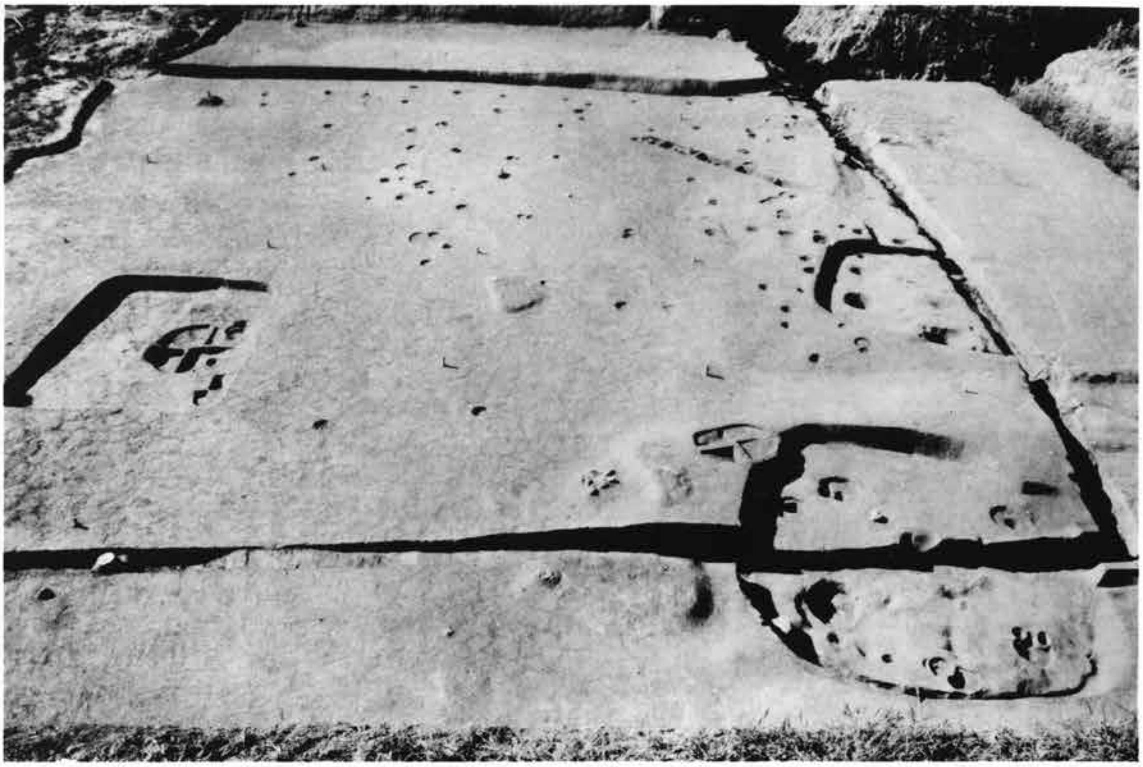
注7　小田桐淳「右京第314次(7ANKST—2地区)調査略報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）　1989

注８　『長岡京跡右京第192次調査現地説明会資料』大山崎町教育委員会　1985
注９　林　享「長岡京跡右京第46次（7ANSMD地区）発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）1984
注10　a，林　享「長岡京跡右京第58次（7ANSSG地区）発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第１集　大山崎町教育委員会）　1980
　　　b，林　享「長岡京跡右京第58次（7ANSSG地区）発掘調査・遺物整理概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第２集　大山崎町教育委員会）　1981
注11　林　享「長岡京跡右京第32次（7ANSNM-1地区）発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）　1984
注12　林　享・百瀬ちどり「長岡京跡右京第69次（7ANSDD地区）発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）　1984
注13　『長岡京跡右京第159次（7ANSDD-2）現地説明会資料』大山崎町教育委員会　1984
注14　『大山崎町史』本文編　大山崎町史編纂委員会　1985
注15　林　享「長岡京跡右京第68次（7ANSGE地区）発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）　1984

図　　　　版

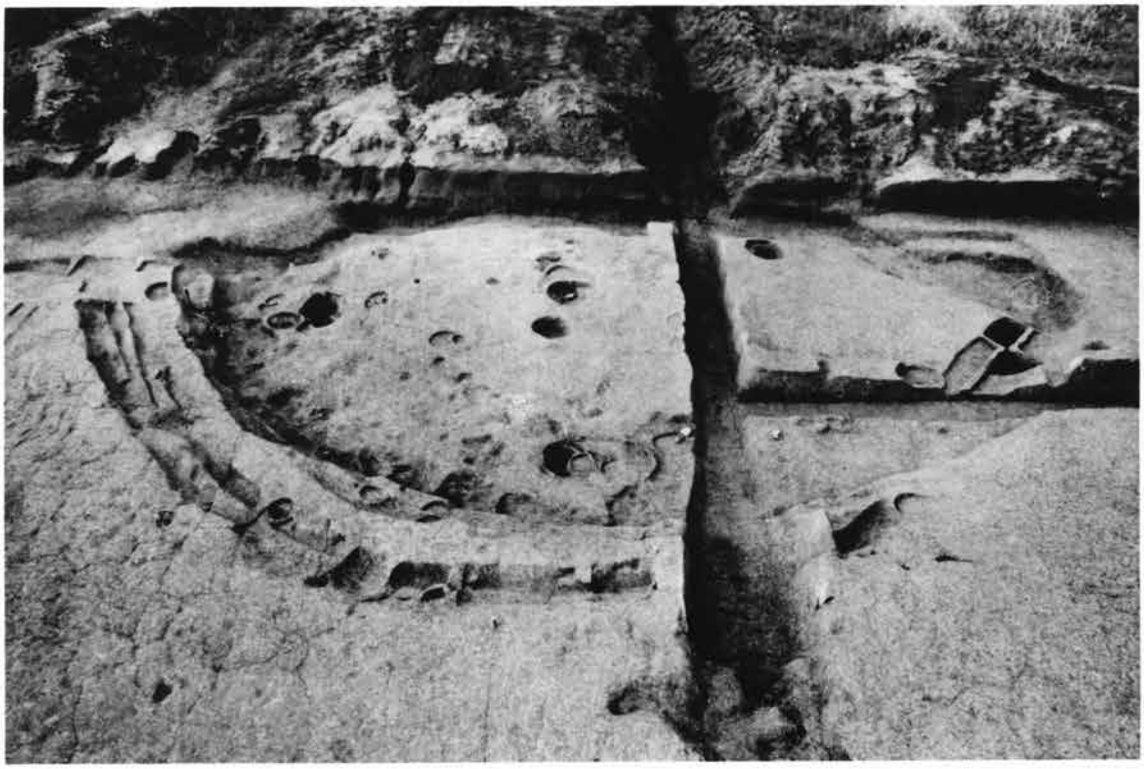


(1) 竪穴式住居跡11・12・13（東から）



(2) 竪穴式住居跡11・12・13（南から）

(1)　竪穴式住居跡13（南から）



(2)　竪穴式住居跡14（南から）

134

38

36

57

9

40

出土遺物(1)　土器

図版第4　桑飼上遺跡

137

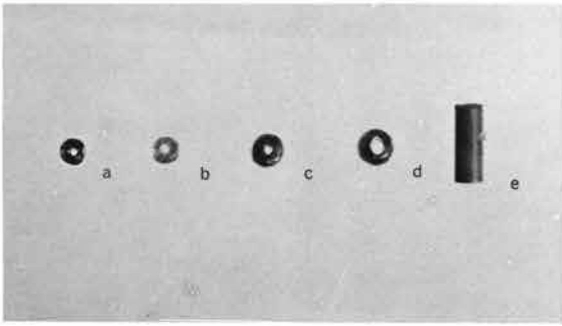
113

124

112

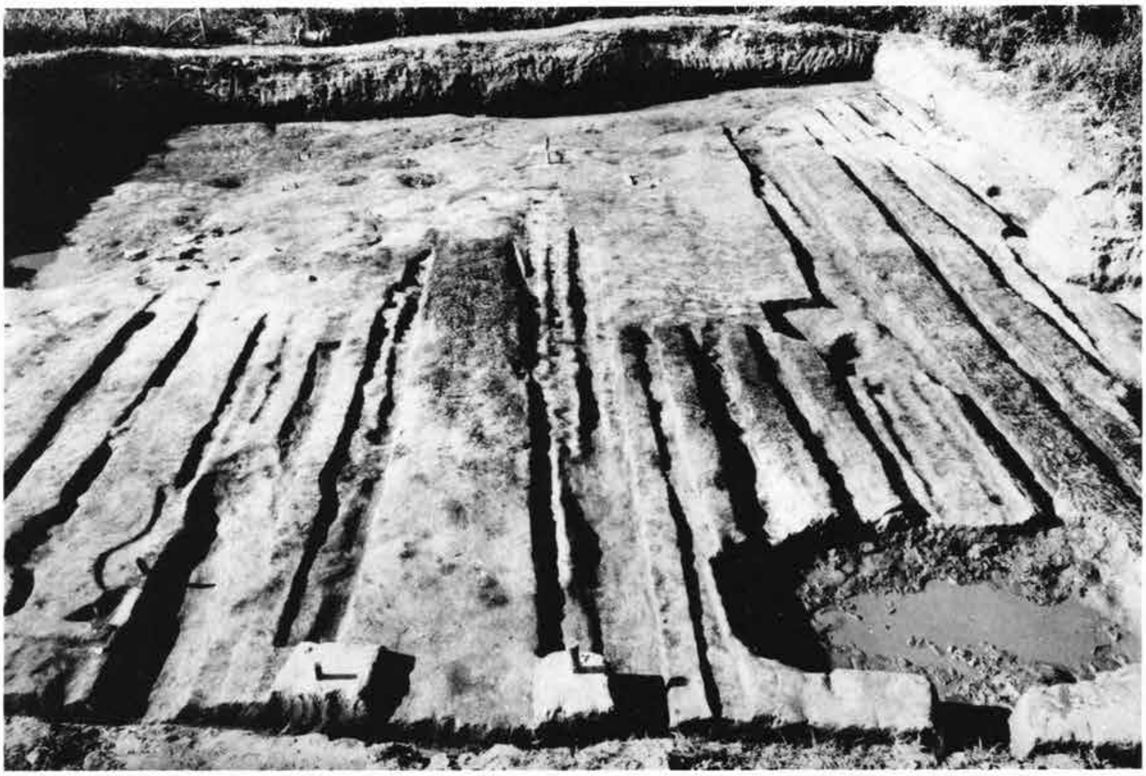
39

116



24

出土遺物(2)　土器・ガラス小玉. a～d,　管玉. e　　a・b・e. 竪穴14　d. 竪穴12　c. 下トレ包含層



(1)　29区　全景（南から）

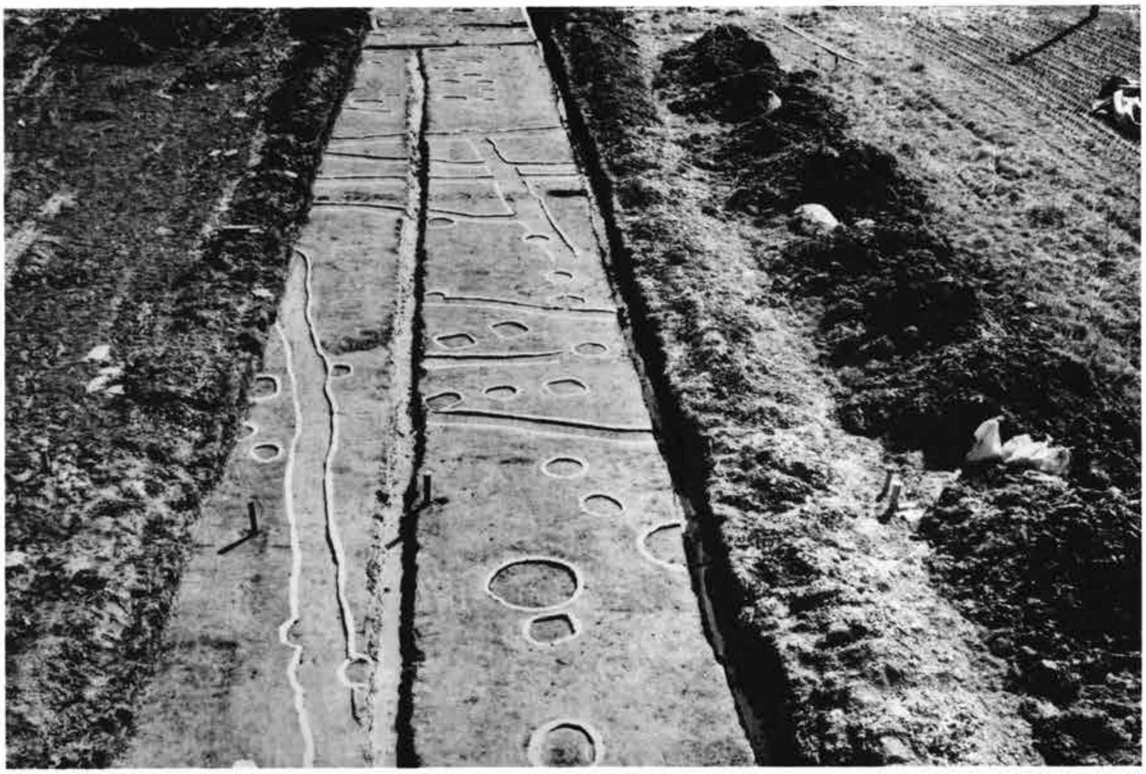
(2)　32区　全景（南から）

(1)　32区　柱穴完掘状況（北から）

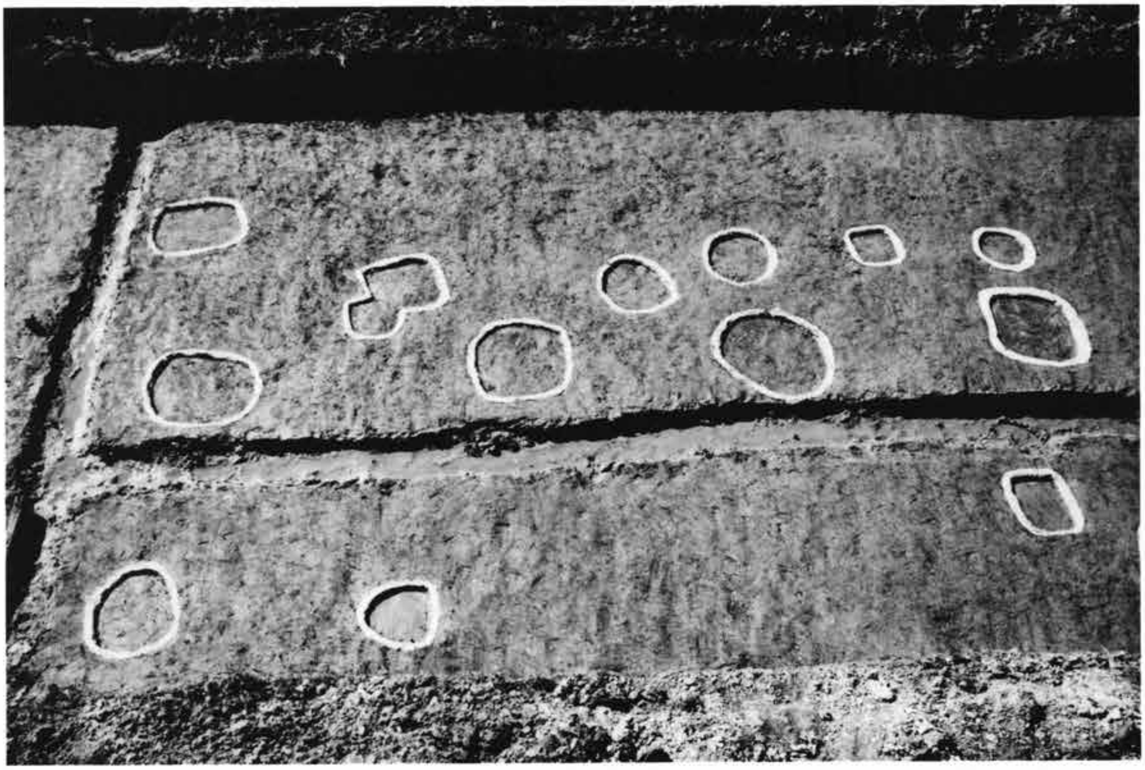
(2)　32区　島状部分南端完掘状況（東から）

(1) 調査地遠景（南西から：空中写真）

(2) 調査地遠景（南東から）

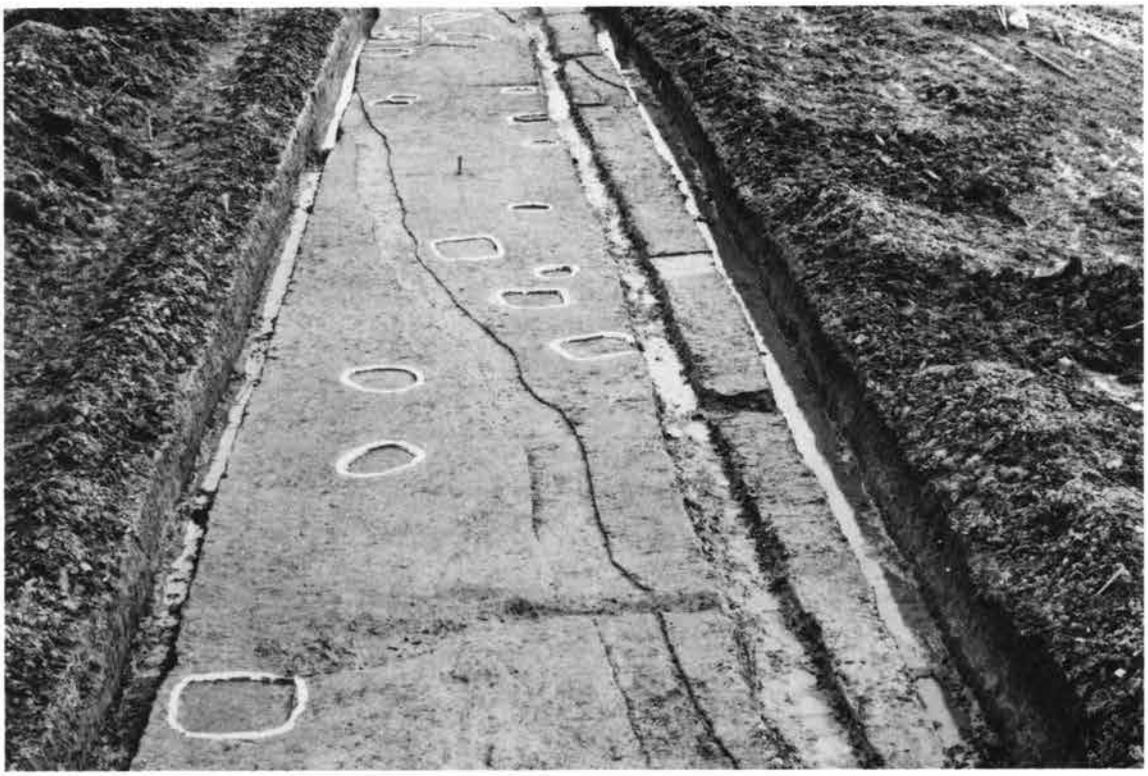


(1) №７トレンチ遺構検出状況（北から）

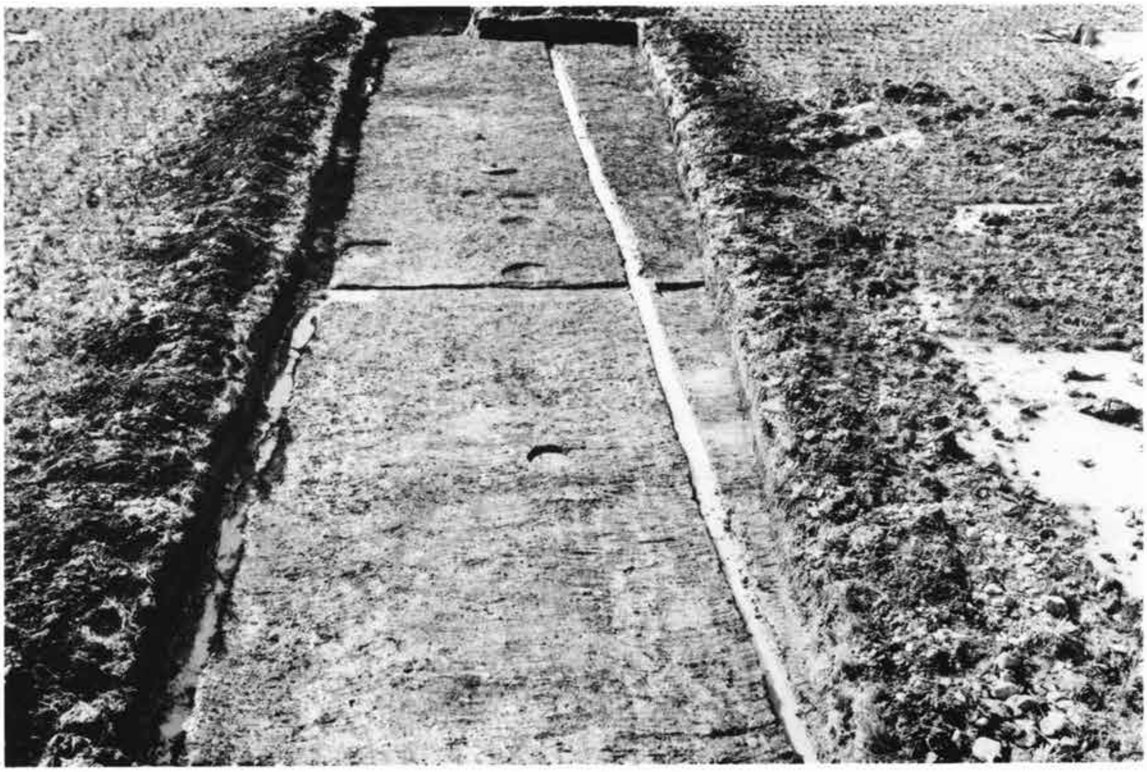


(2) №７トレンチ建物１検出状況（東から）

図版第9　　八 木 嶋 遺 跡

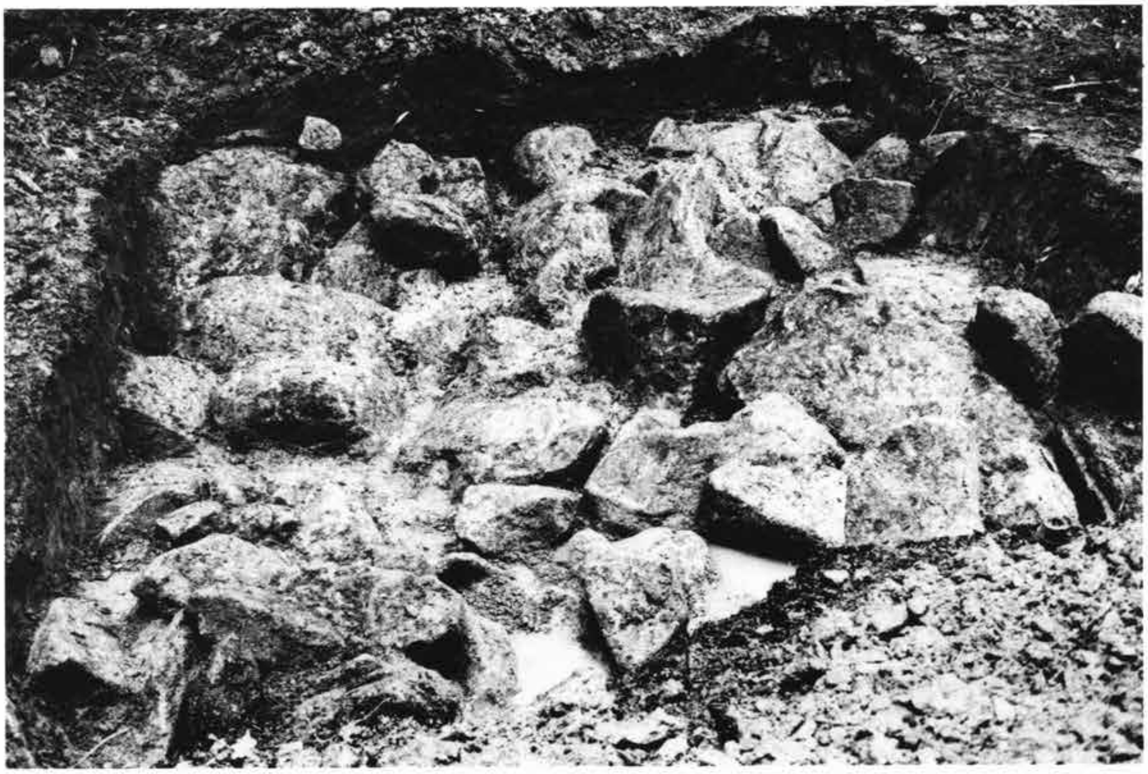


(1)　No.8トレンチ遺構検出状況（北から）



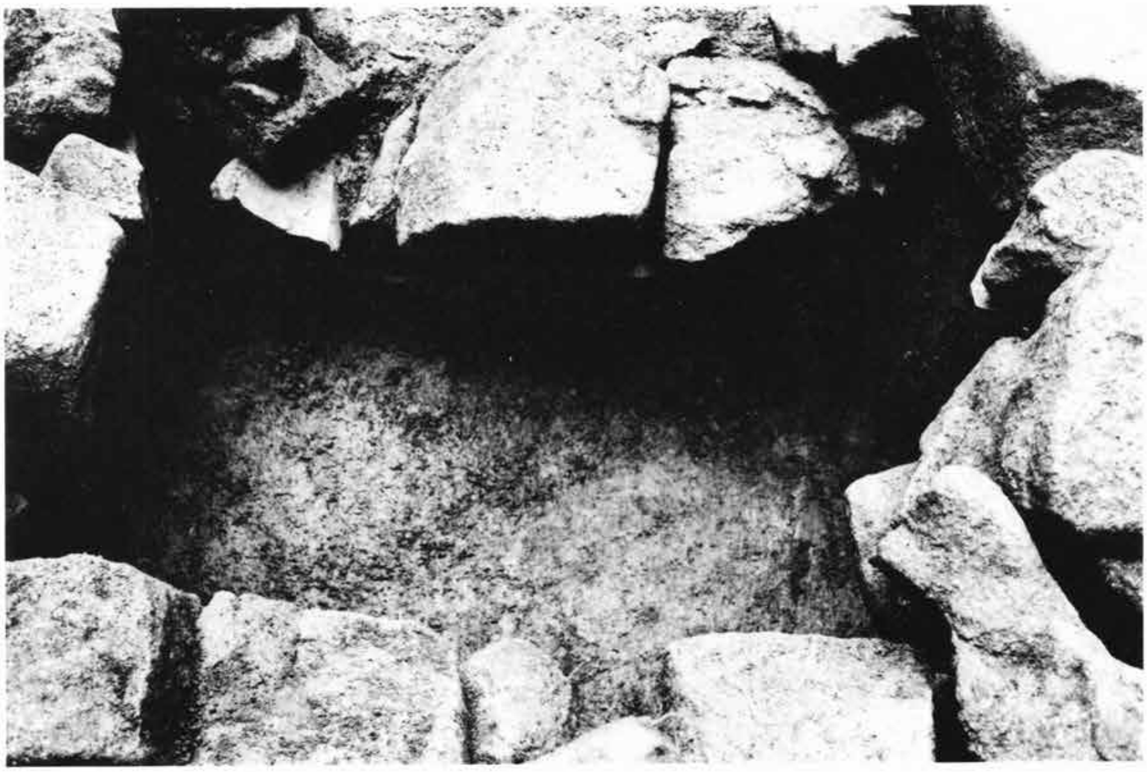
(2)　No.3トレンチ遺構検出状況（東から）

(1)　小谷遺跡調査前全景（北西から）



(2)　小谷遺跡７トレンチ（南西から）

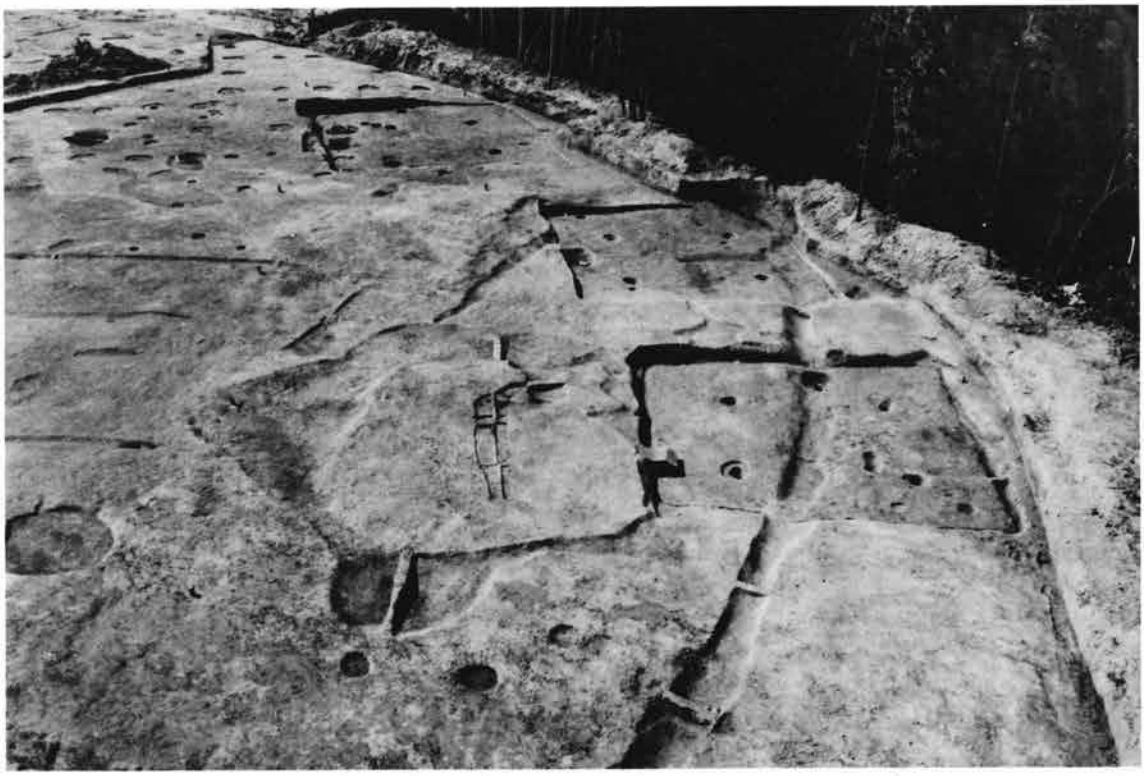
(1)　小谷17号墳調査前全景（北から）



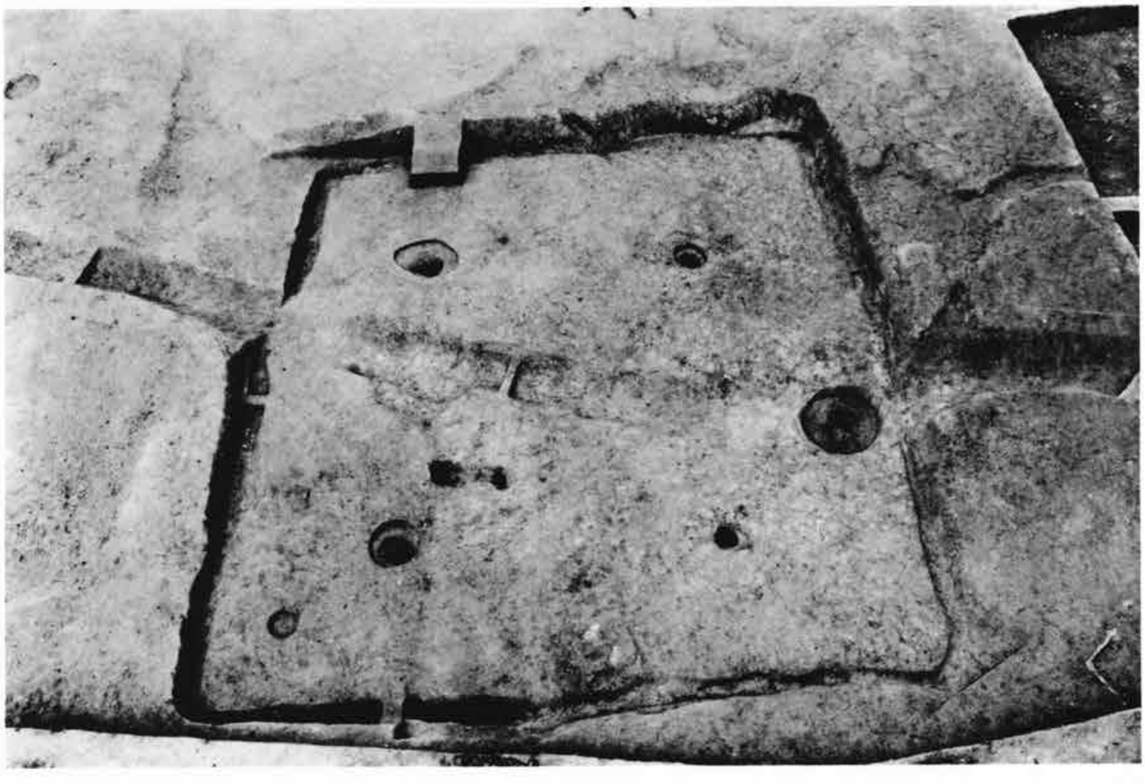
(2)　小谷17号墳玄室（北東から）

(1)　小谷17号墳玄門部（南東から）

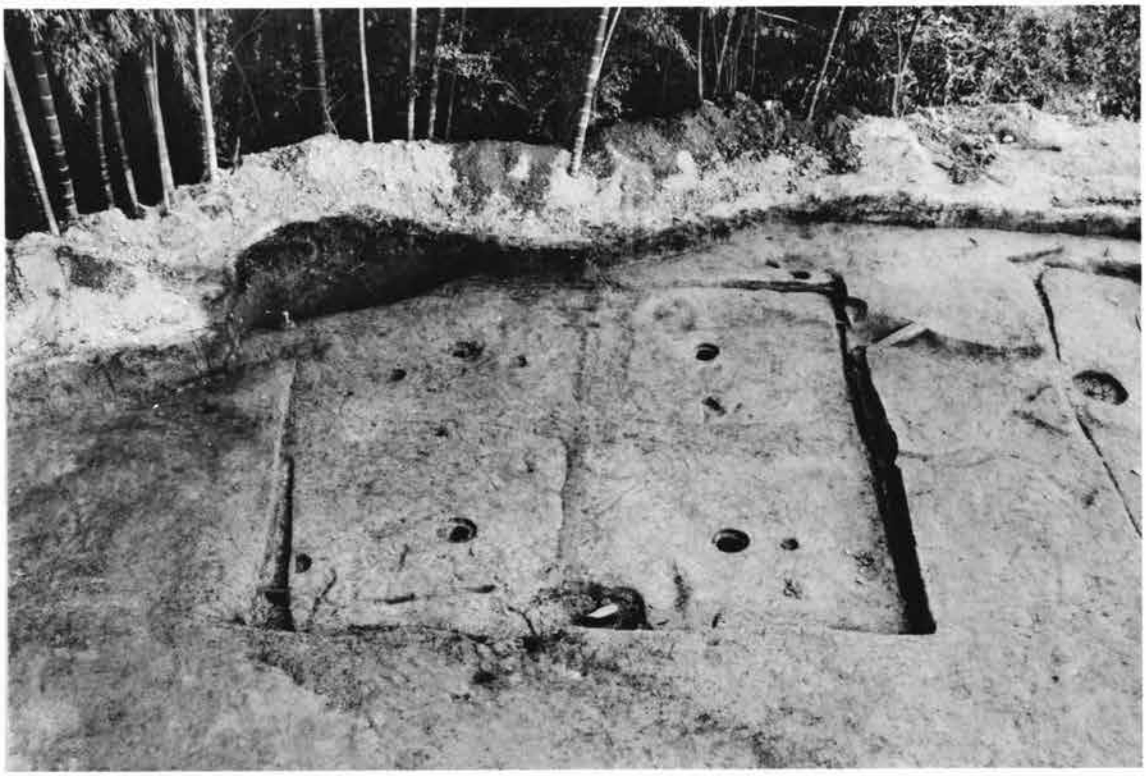
(2)　小谷17号墳閉塞石前遺物出土状況（北西から）



(1)　SH102・103・104及び19号墳全景（北から）

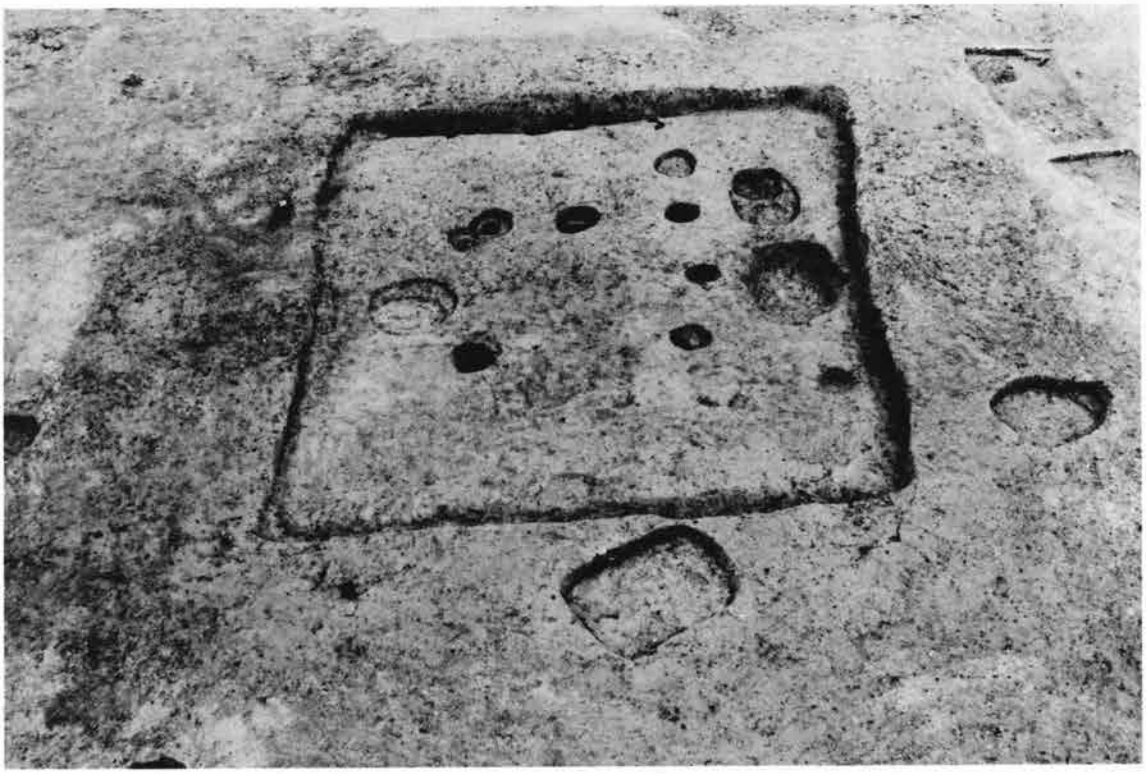


(2)　SH102全景（西から）

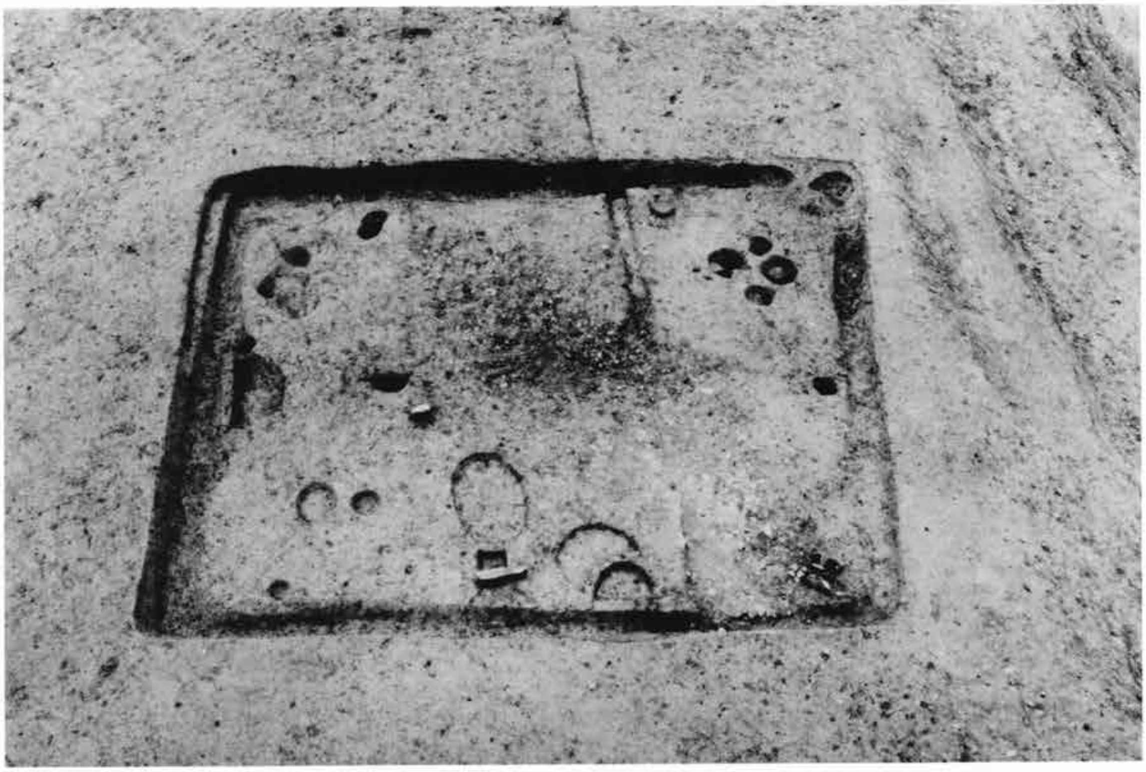


(1)　SH104全景（東から）

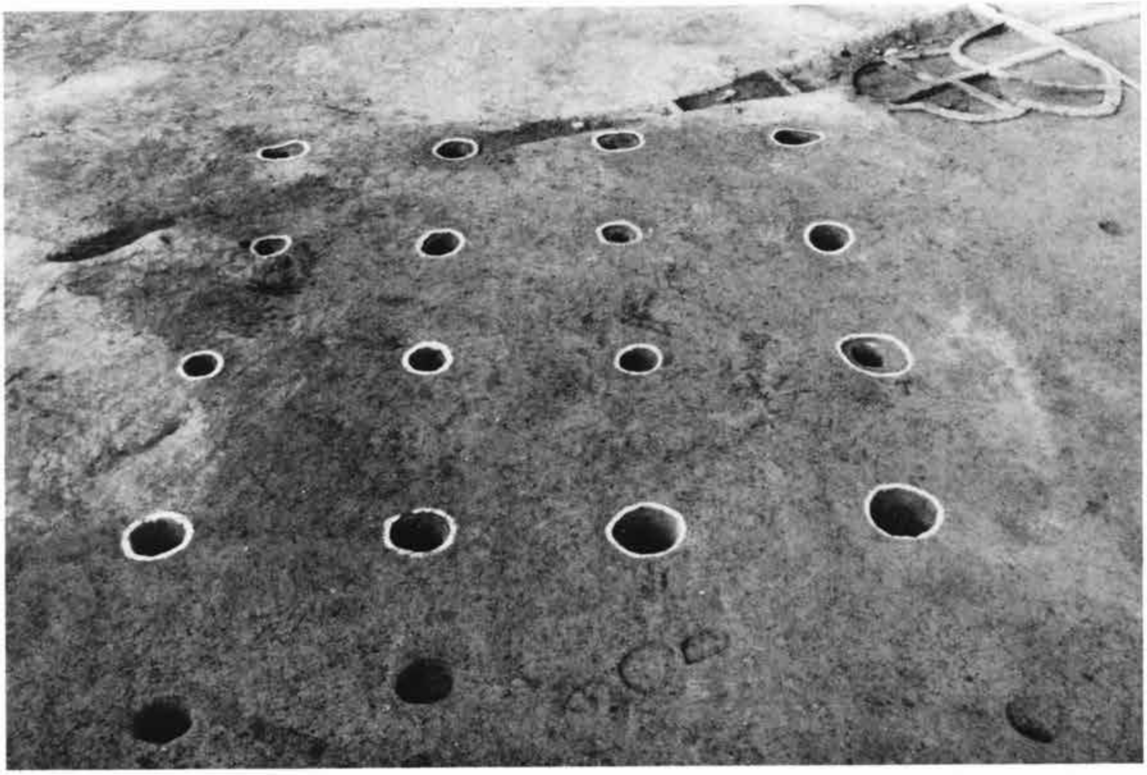
(2)　SH103全景（東から）



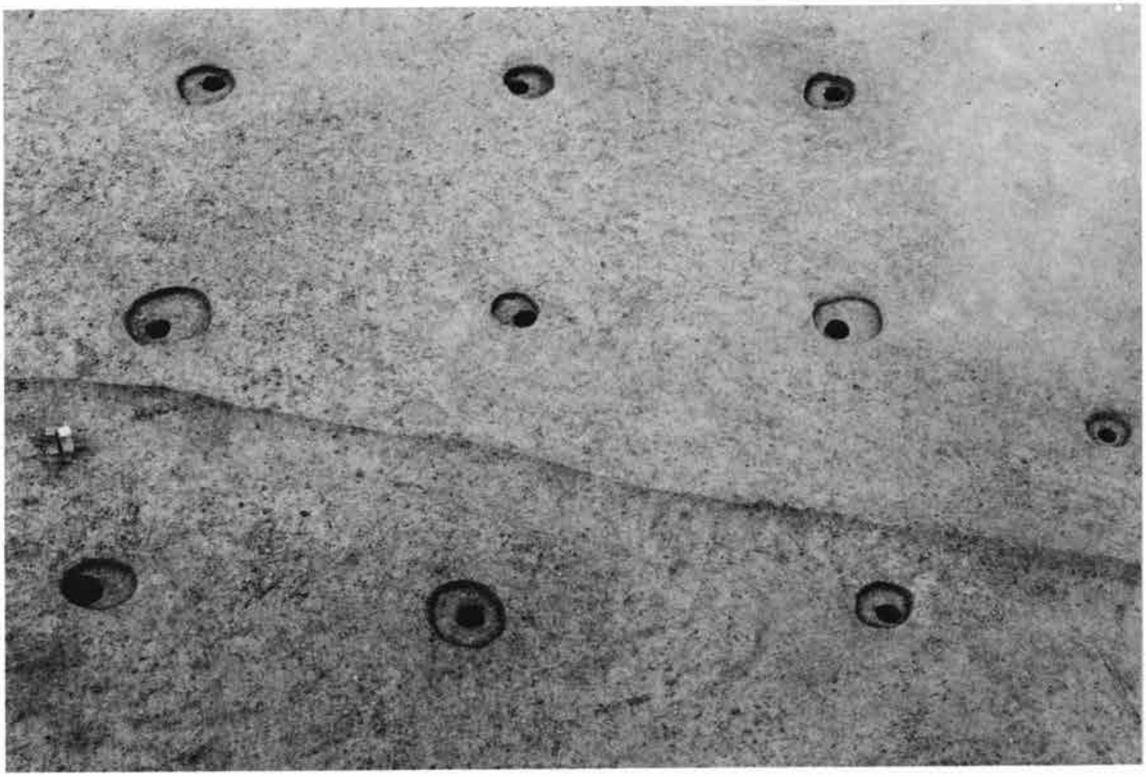
(1)　SH105全景（南から）



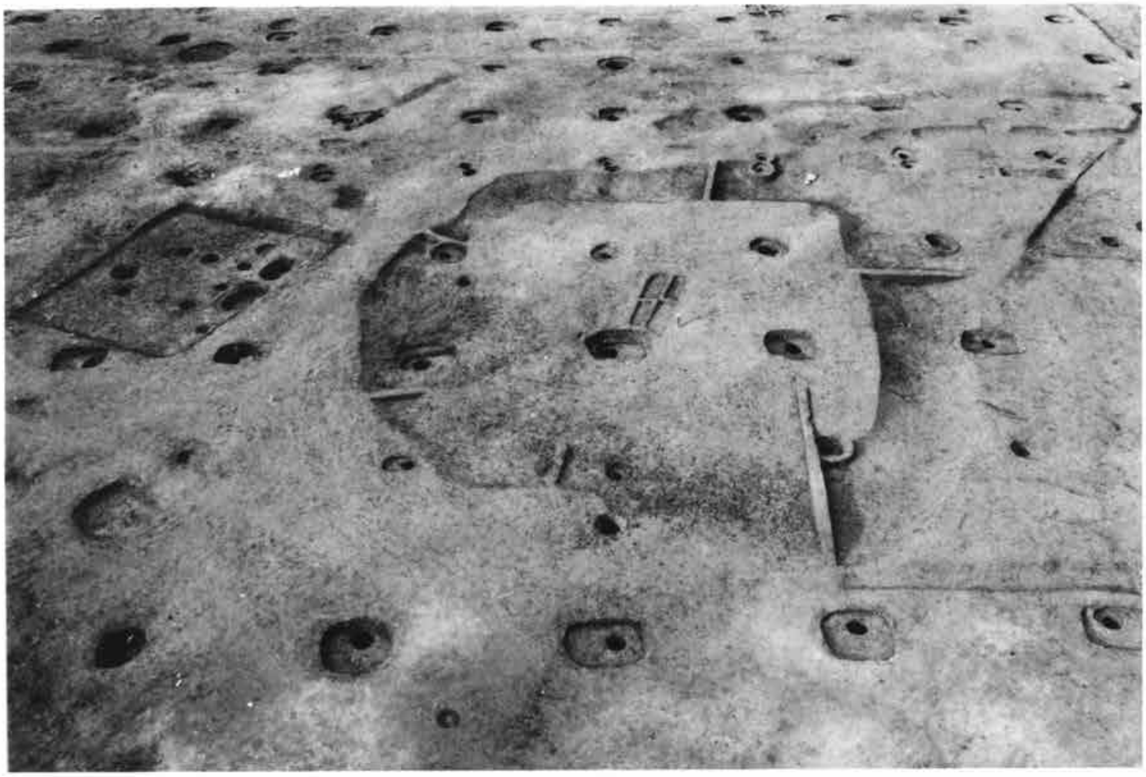
(2) SH133全景（南から）



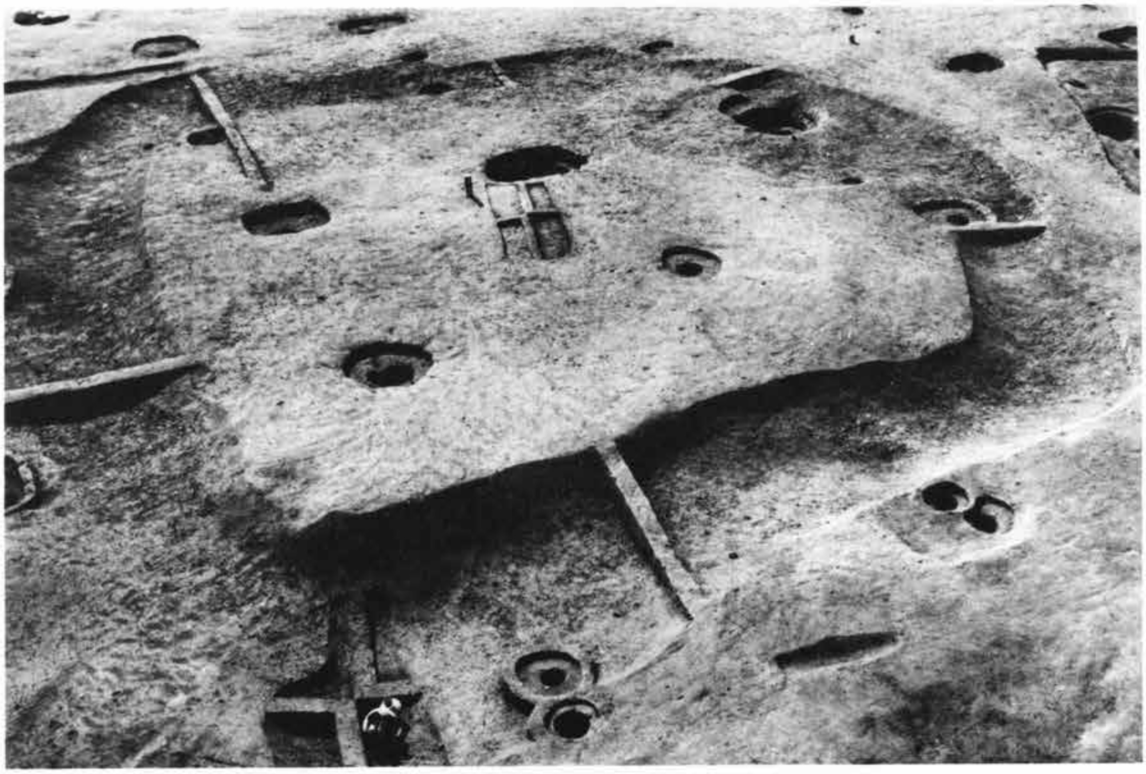
(1)　SB106全景（南から）



(2)　SB107全景（西から）



(1) 18号墳全景（南から）



(2) 18号墳完掘状態（北から）

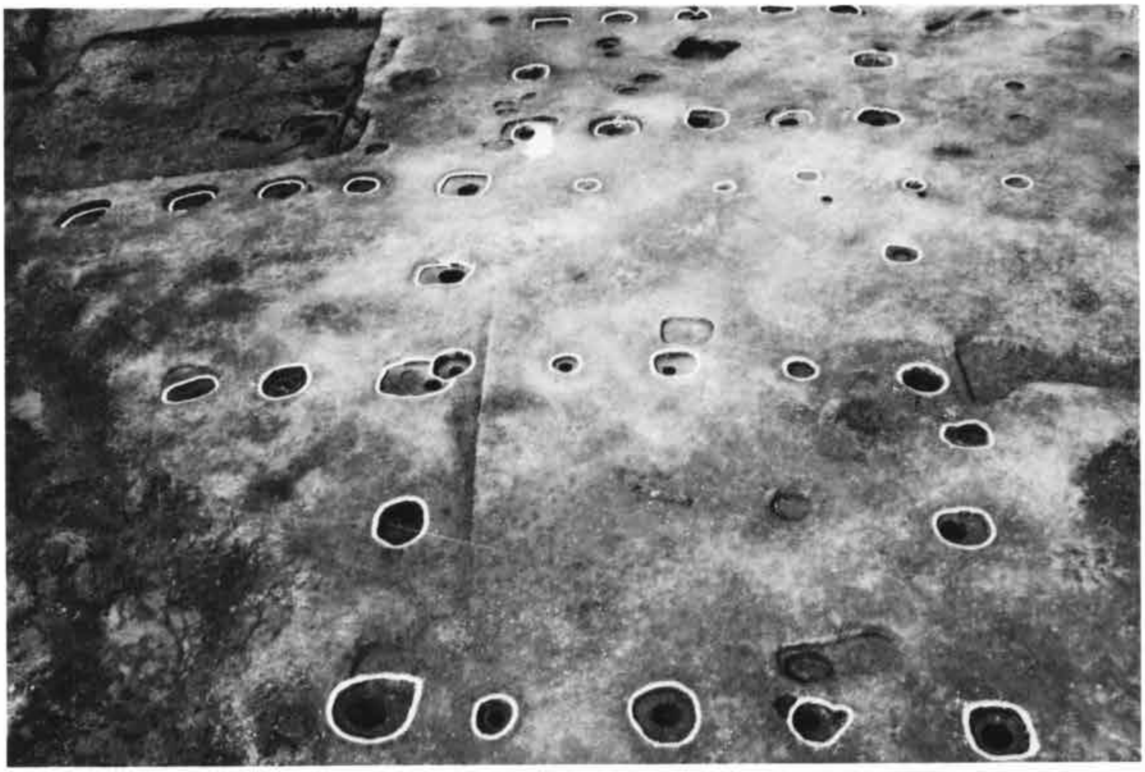
(1) 18号墳　鉄器出土状態（南から）

(2) 18号墳　周溝内土器出土状態（西から）

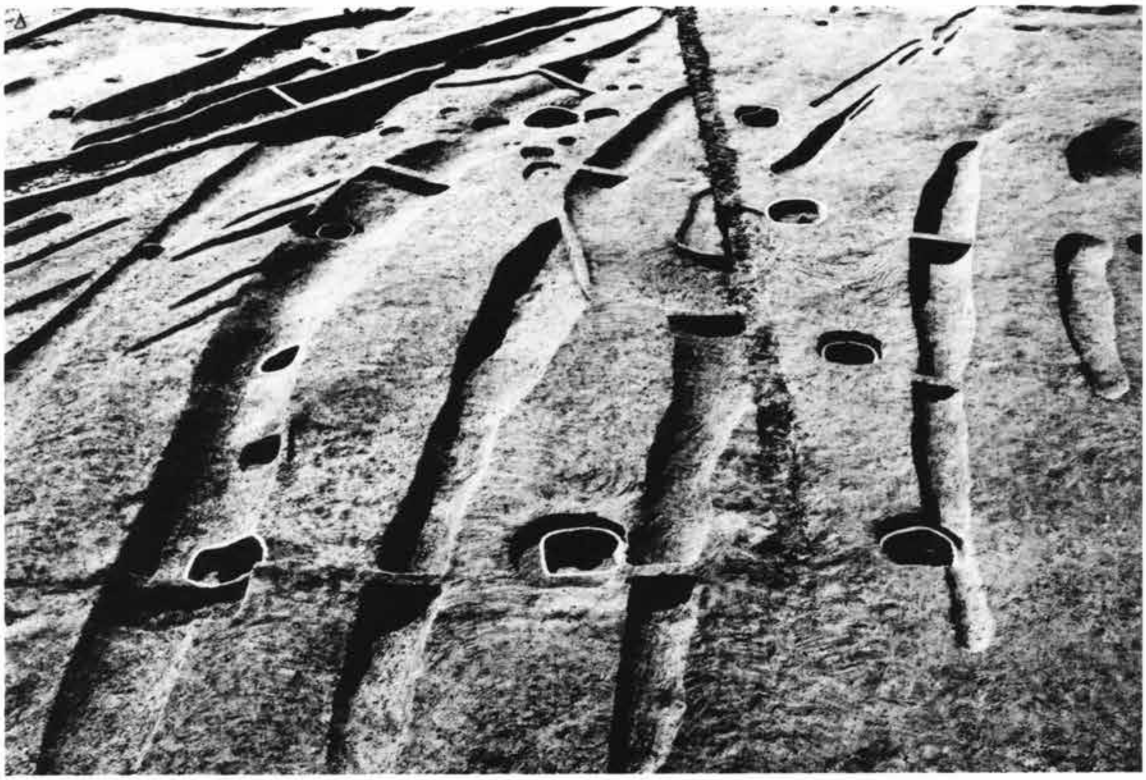
(1)　A建物跡群全景（南から）

(2)　SB304全景（西から）

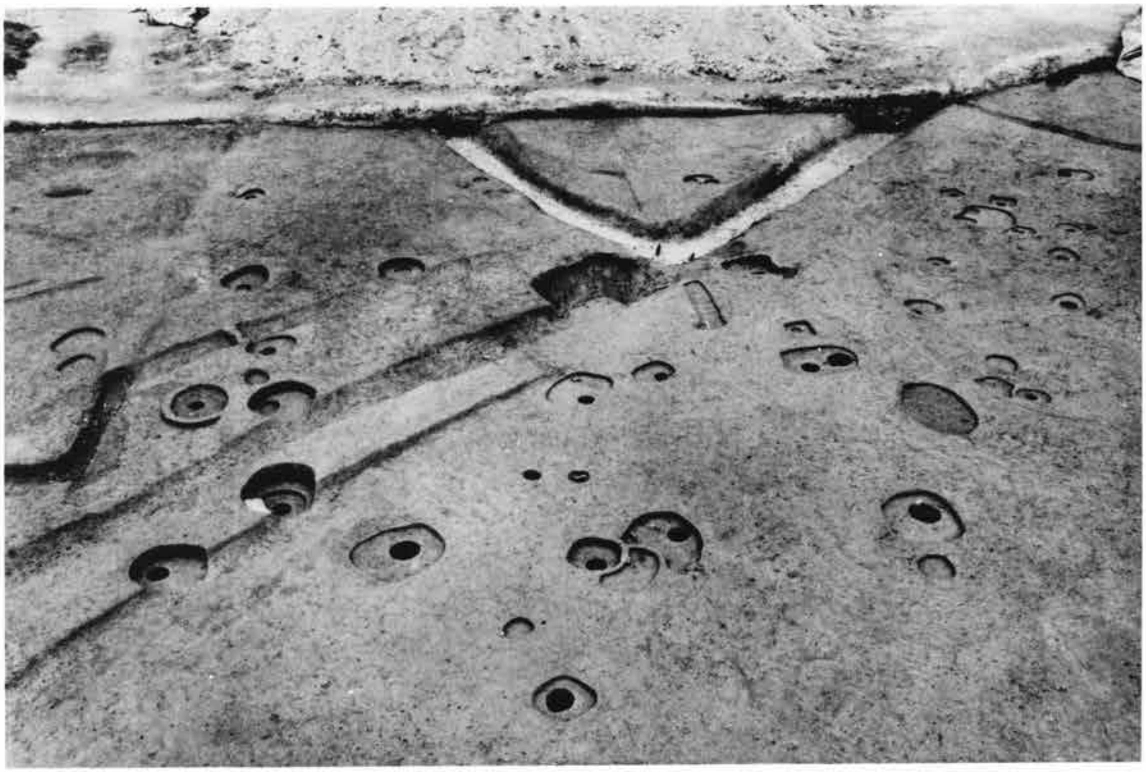
(1)　SB301・302全景（西から）



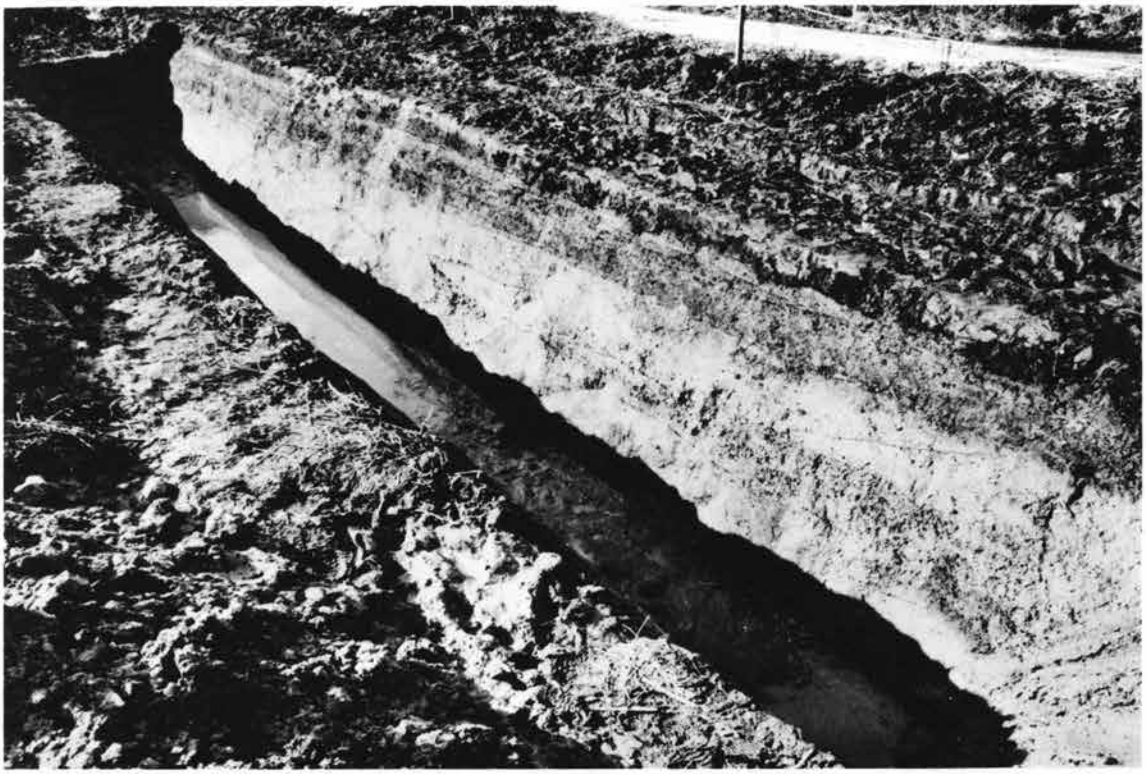
(2)　C建物跡群全景（南から）



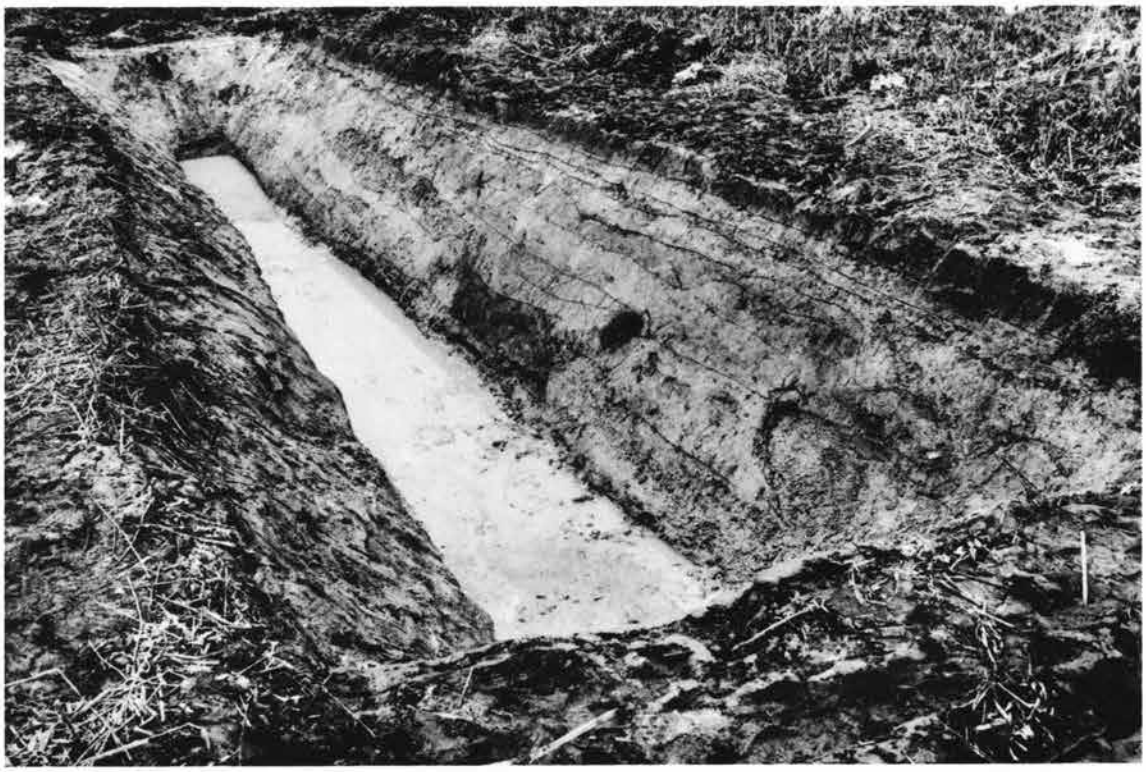
(1)　SB310全景（東から）



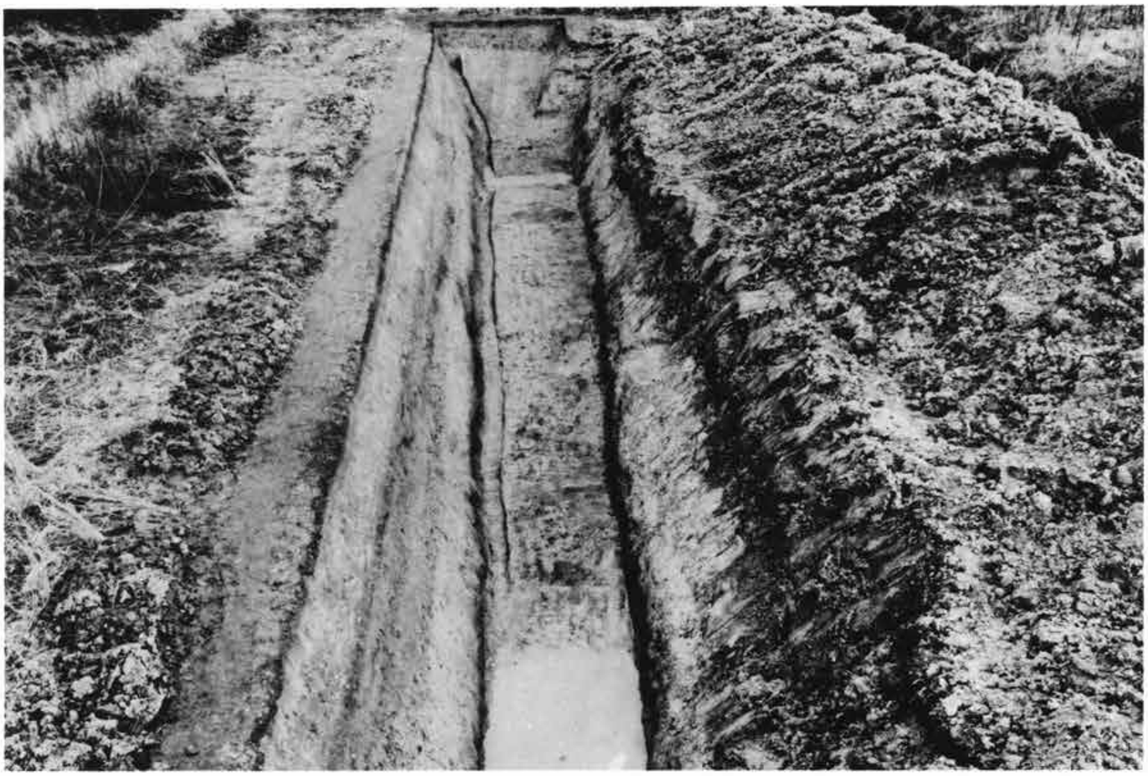
(2)　SB314全景（西から）



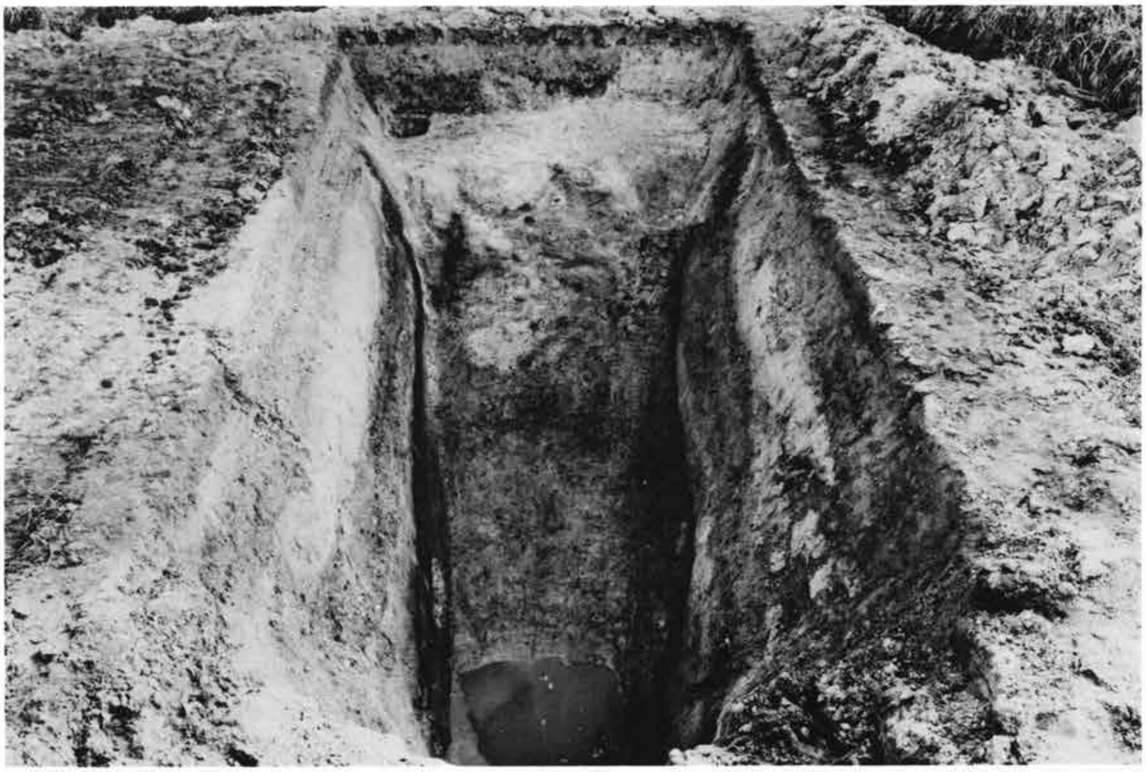
(1)　IKW4bt全景（南東から）



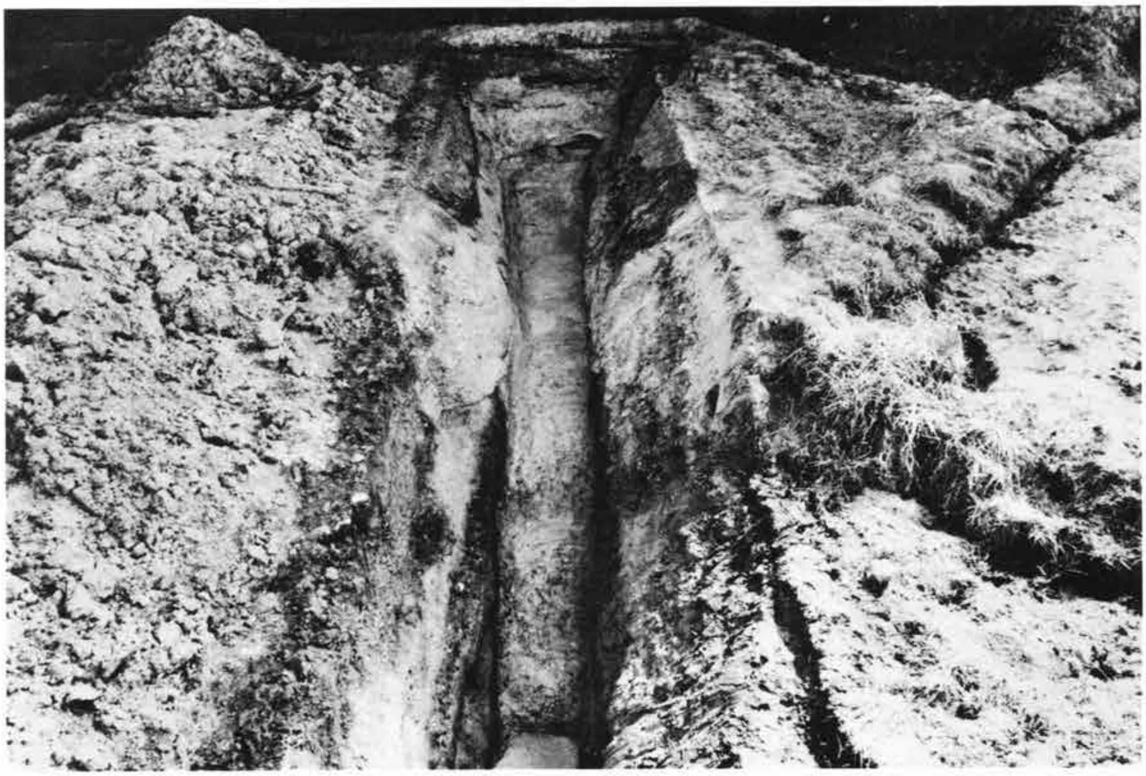
(2)　IKW5bt全景（南東から）



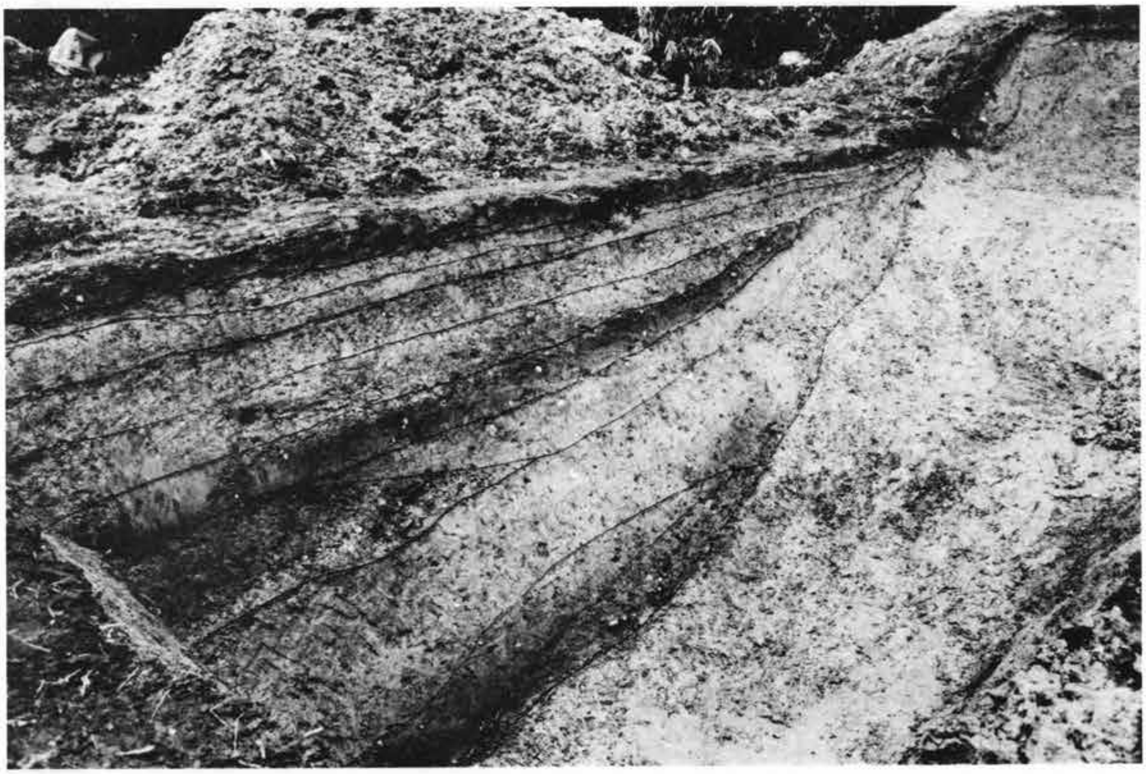
(1)　IKW24bt－1　全景（西から）



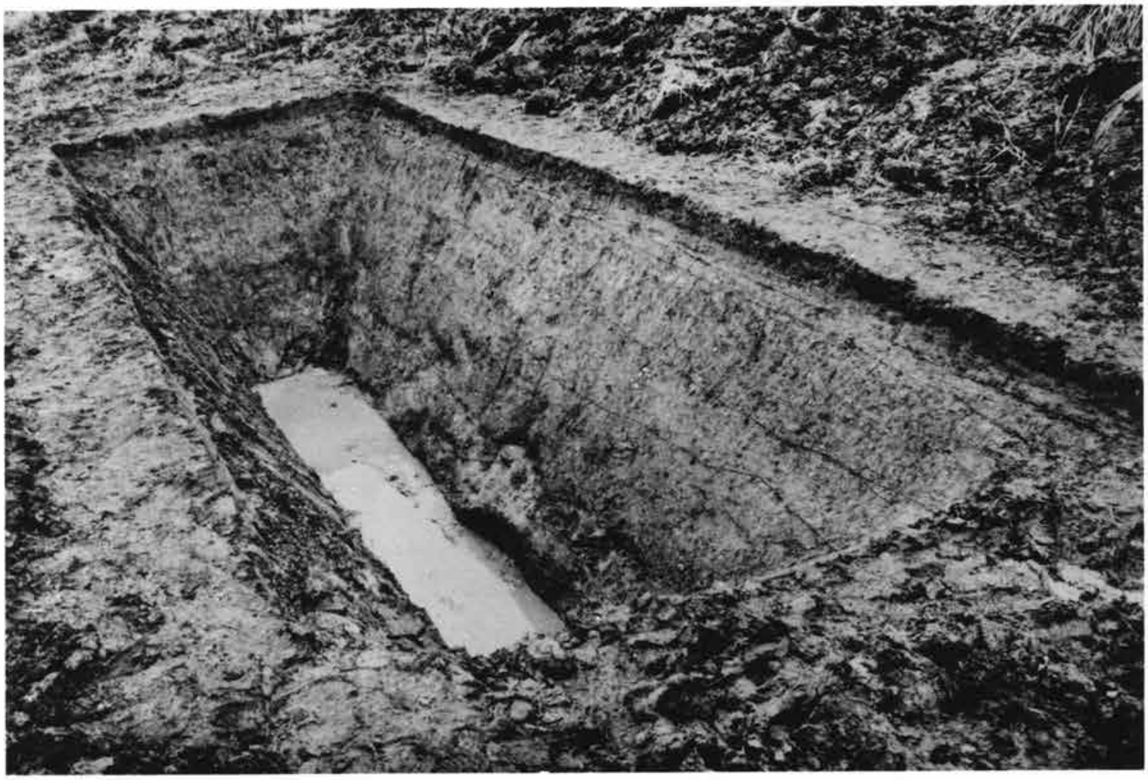
(2)　IKW24bt－2　全景（西から）



(1)　IKW24bt－3全景（北西から）



(2)　IKW28btトレンチ北壁断面（南西から）

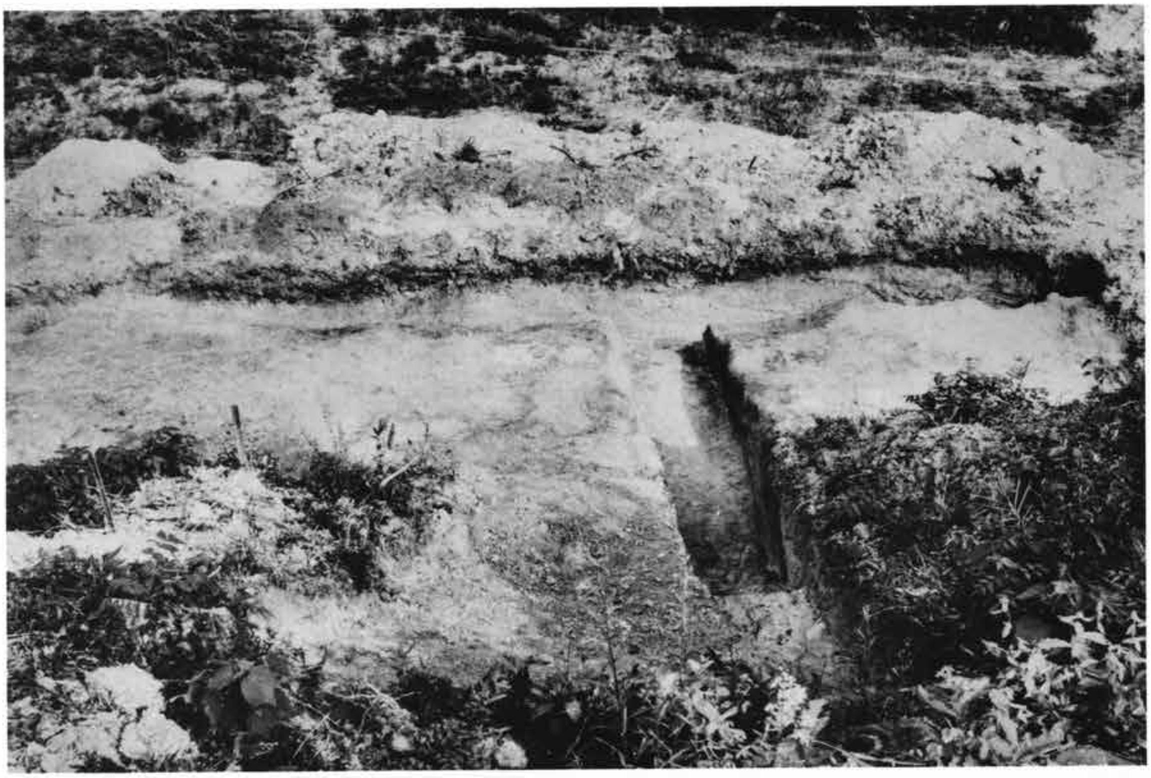


(1)　I KW27b t 調査区全景（南西から）

(2)　I KW75b t 木樋検出状況（南から）

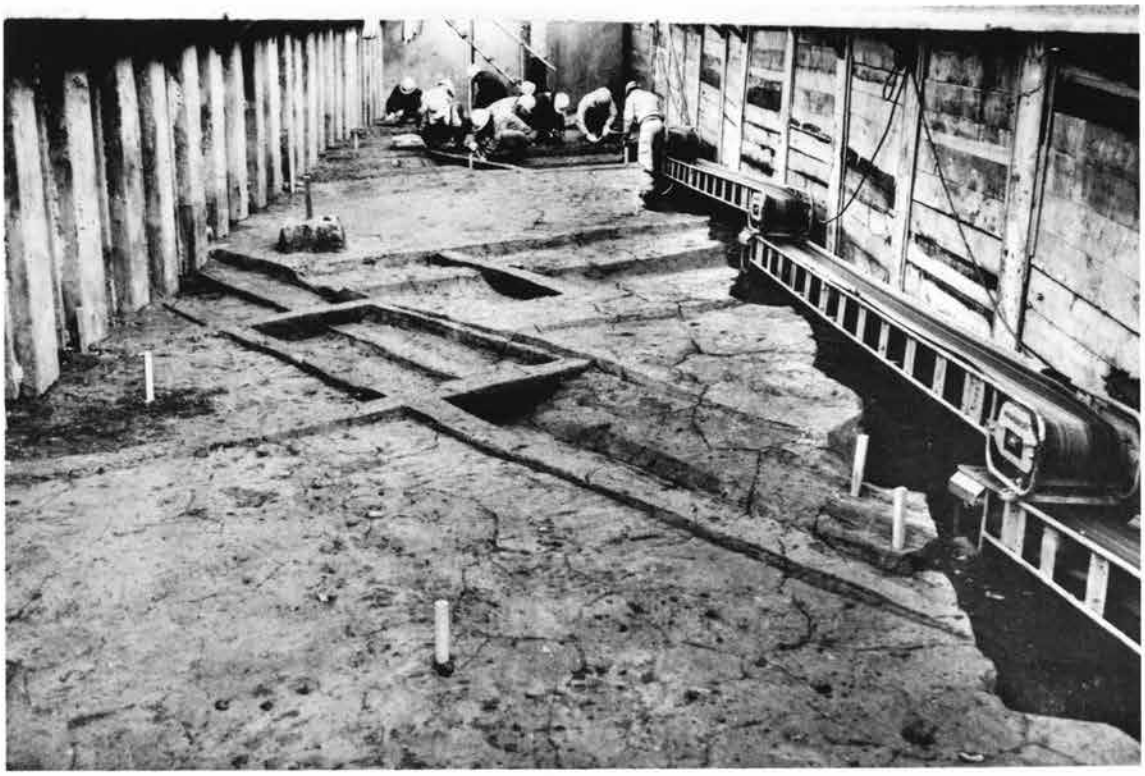
(1)　A－1トレンチ東端部全景（北から）

(2)　A－1トレンチ東端部溝内堆積状況



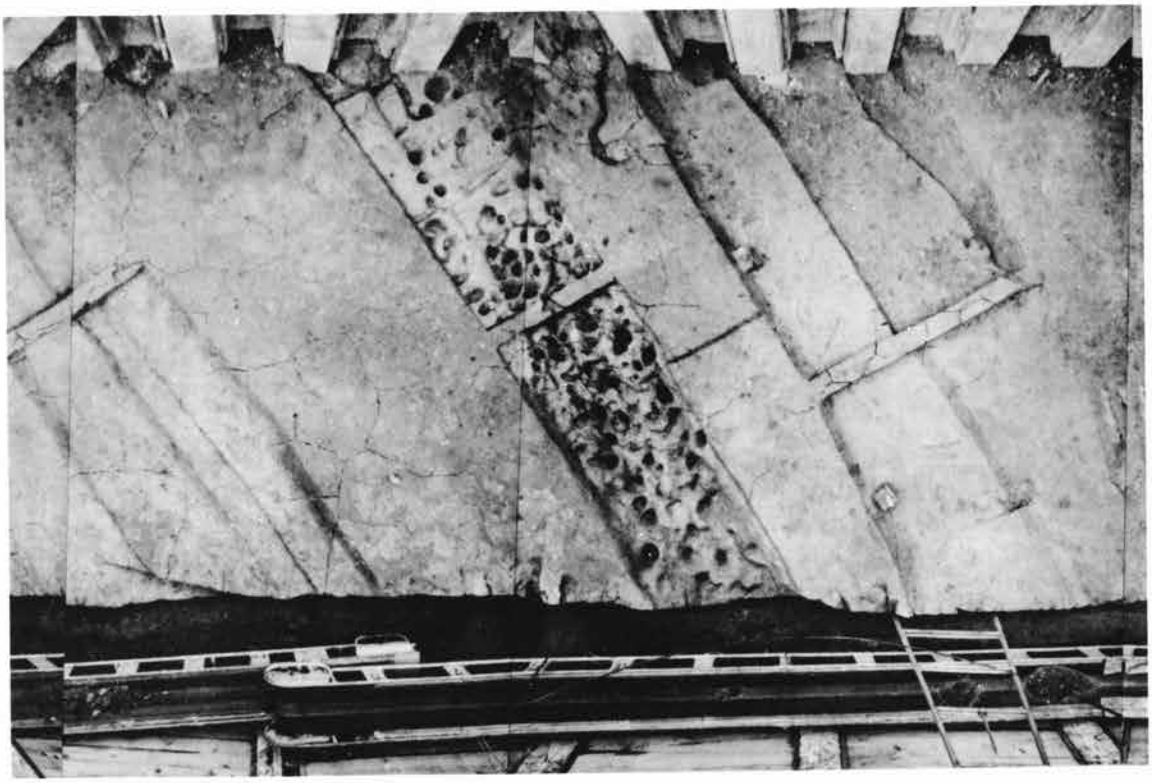
(1)　B－1トレンチ全景（西から）

(2)　C－1トレンチ掘削状況（北西から）

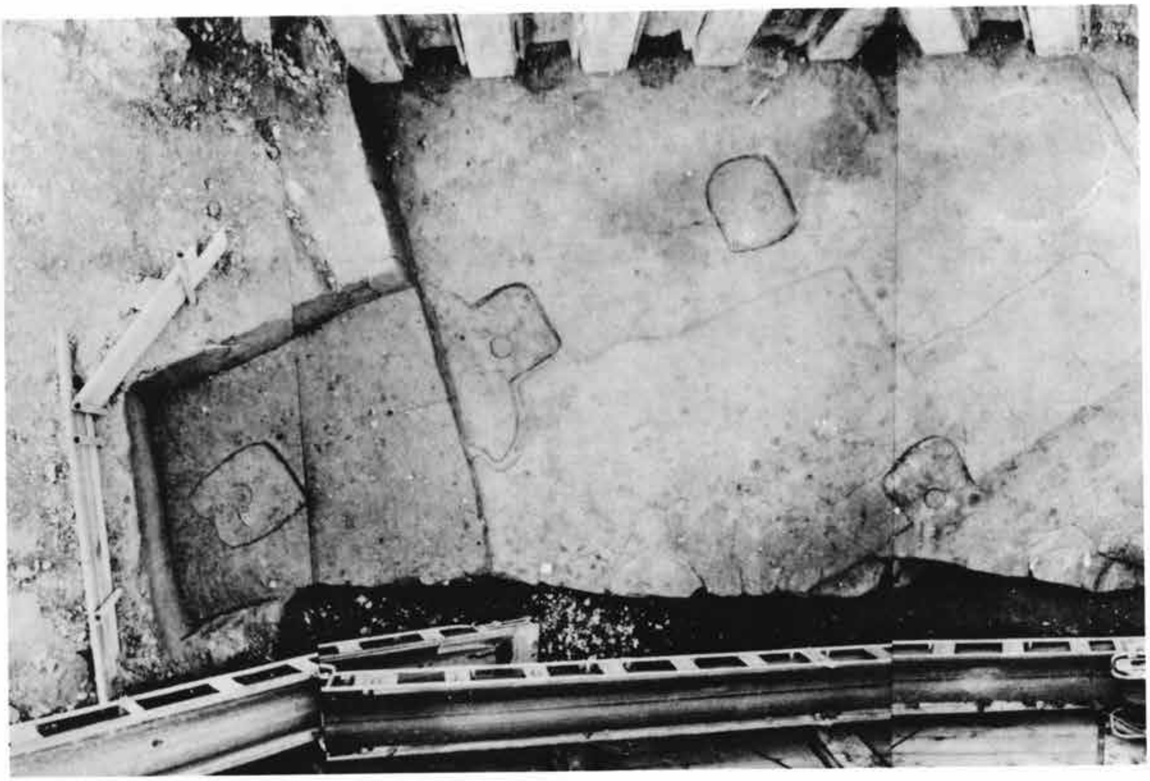


(1)　向日工区10ブロック　第12－1トレンチ

(2)　向日工区10ブロック　第12－2トレンチ



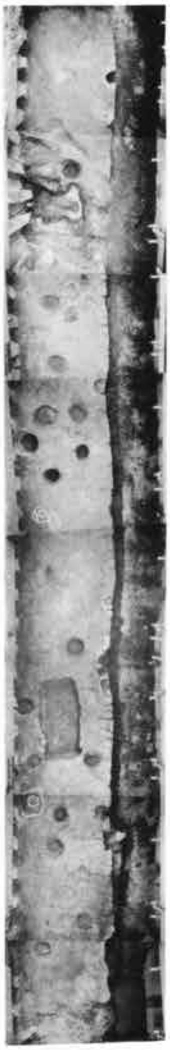
(1) 向日工区溝SD216101

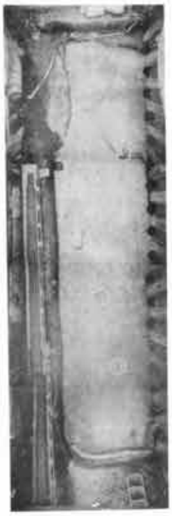


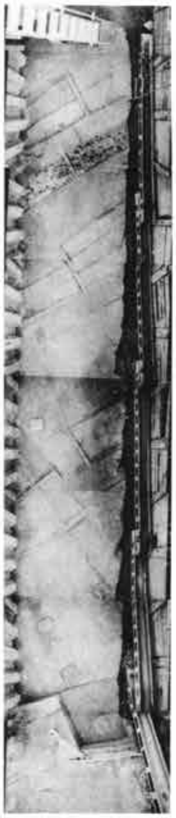
(2) 向日工区掘立柱建物跡SB216101

1

2

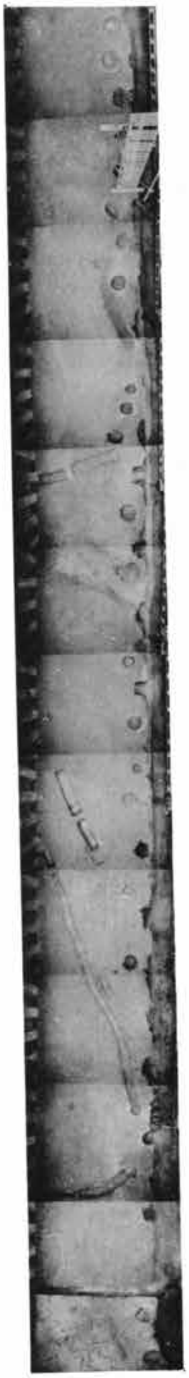

3


4


5

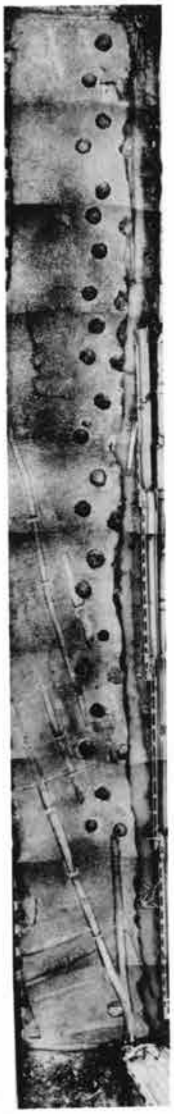
1．7ブロック第9トレンチ上層遺構
2．7ブロック第9トレンチ下層遺構
3．7ブロック第23トレンチ
4．8ブロック第24-1トレンチ
5．9ブロック第12トレンチ

長岡京工区　垂直写真(1)



1

2



3

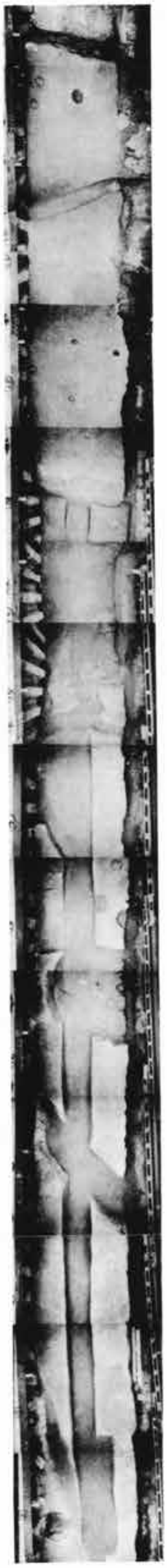
4

1．10ブロック第13トレンチ
2．10ブロック第26トレンチ
3．11ブロック第14トレンチ
4．11ブロック第27トレンチ

-A

A'-

1



-B

B'-

2

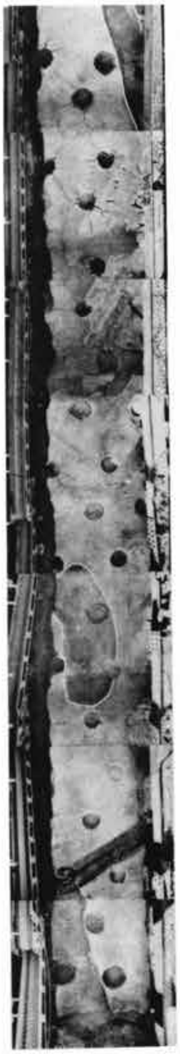
1．7ブロック第10トレンチ
上層遺構
2．7ブロック第10トレンチ
下層遺構

長岡京工区　垂直写真(3)

図版第33　　長岡京跡左京第216次・長岡京工区

-A

A'-



1

B-

B'-

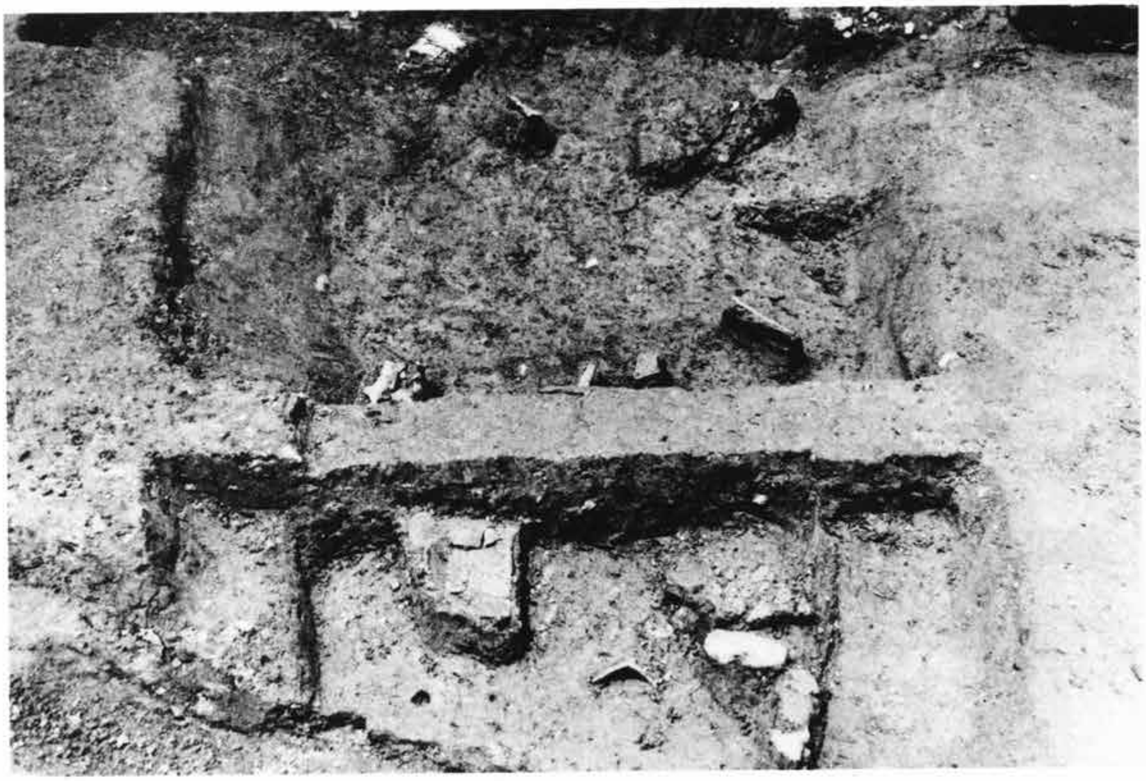
2

1．7ブロック第22トレンチ
　上層遺構
2．7ブロック第22トレンチ
　下層遺構

長岡京工区　垂直写真(4)

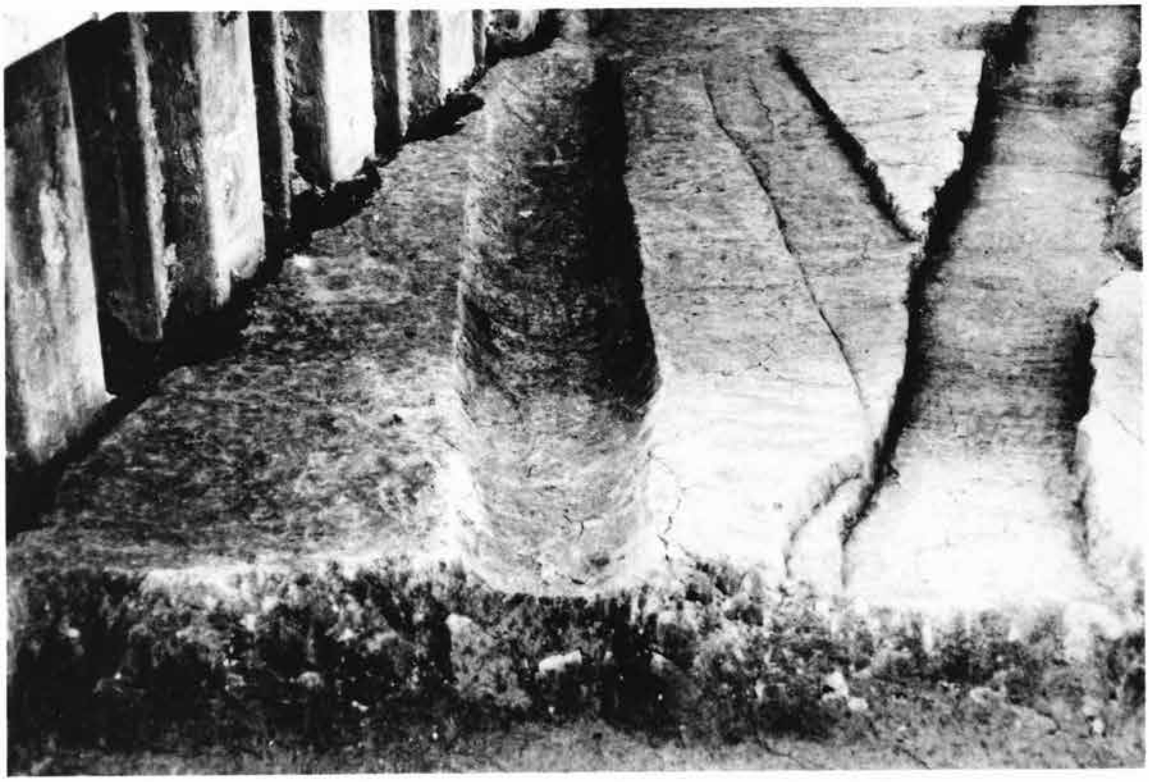
(1)　長岡京工区６ブロック第８トレンチ（北から）

(2)　長岡京工区６ブロック第８トレンチ河道SR216033（北から）



(1)　長岡京工区６ブロック第21トレンチ溝SD216034（東から）

(2)　長岡京工区６ブロック第21トレンチ溝SD216034（西から）



(1)　長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216002（南から）

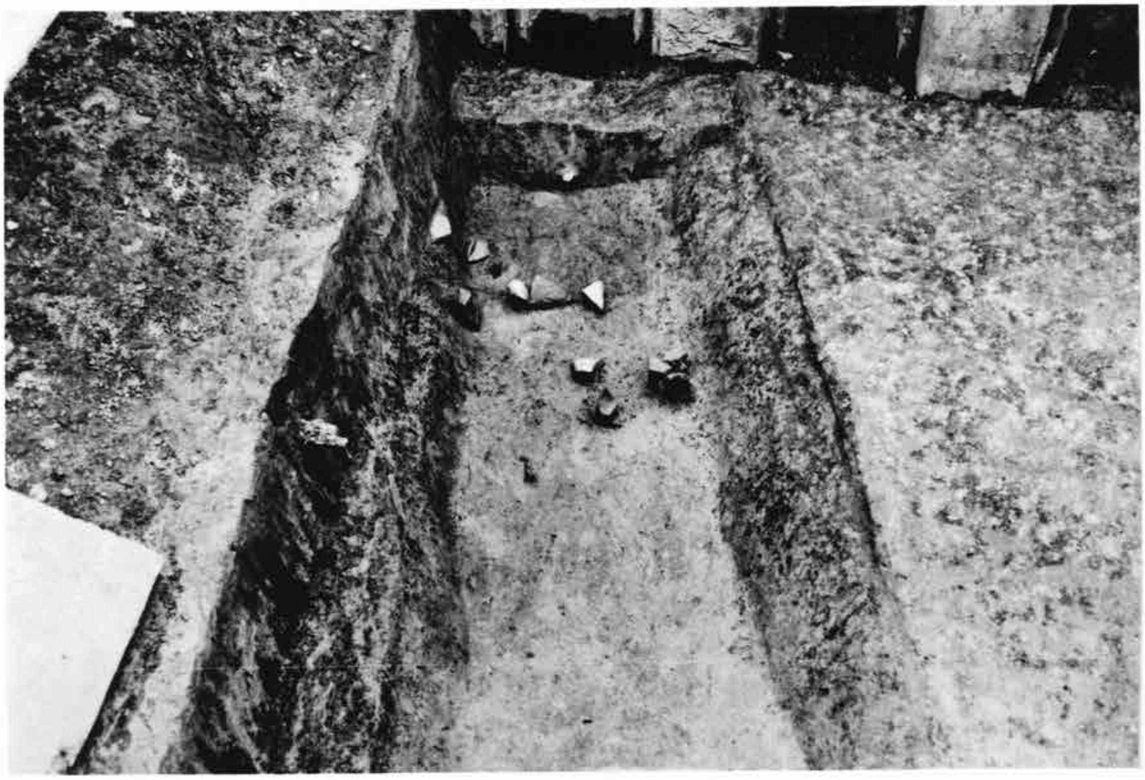
(2)　長岡京工区７ブロック第９トレンチ柵列SA216008（南から）

(1) 長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216003（東から）

(2) 長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216003（南から）

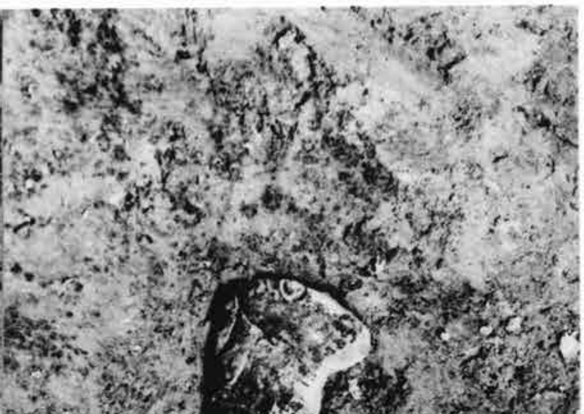
(1) 長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216004-1（東から）

(2) 長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216004-2（東から）



(1)　長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216004-3（東から）

(2)　溝SD216004出土円面硯（東から）



(3)溝SD216004出土土馬（東から）

(1)　長岡京工区７ブロック第９トレンチ溝SD216048・土坑SK216047（南から）

(2)　土坑SK216047遺物出土状況（南から）

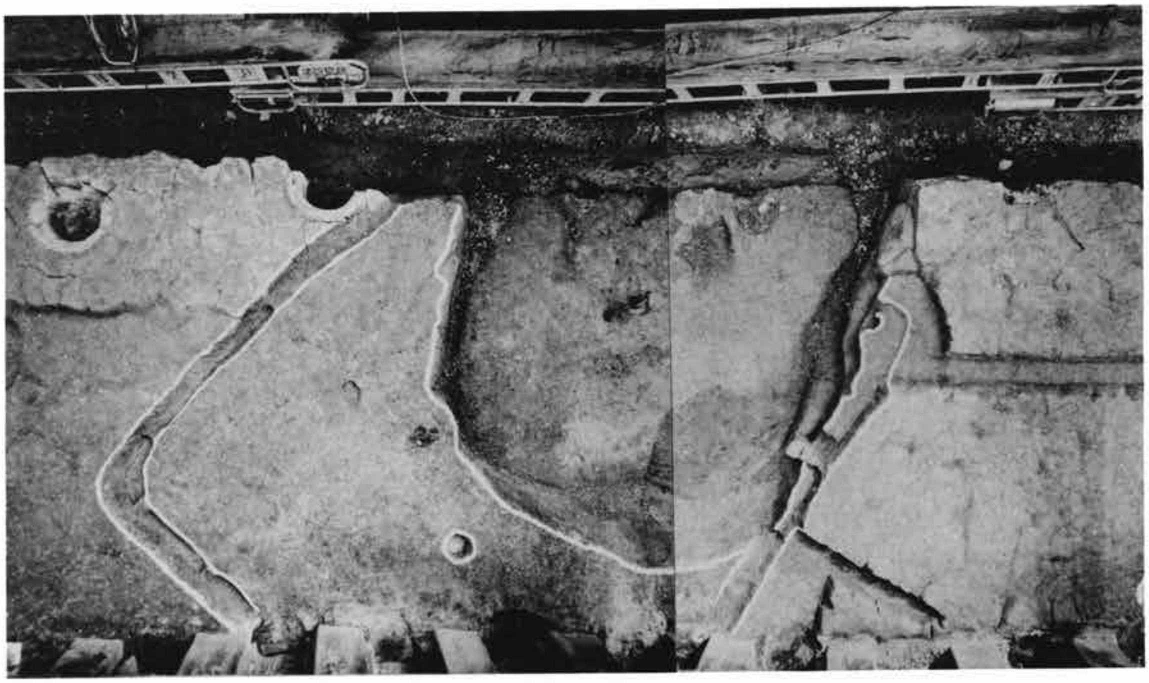
(1)　長岡京工区7ブロック第10トレンチ溝SD216015（南から）

(2)　溝SD216015断面（東から）

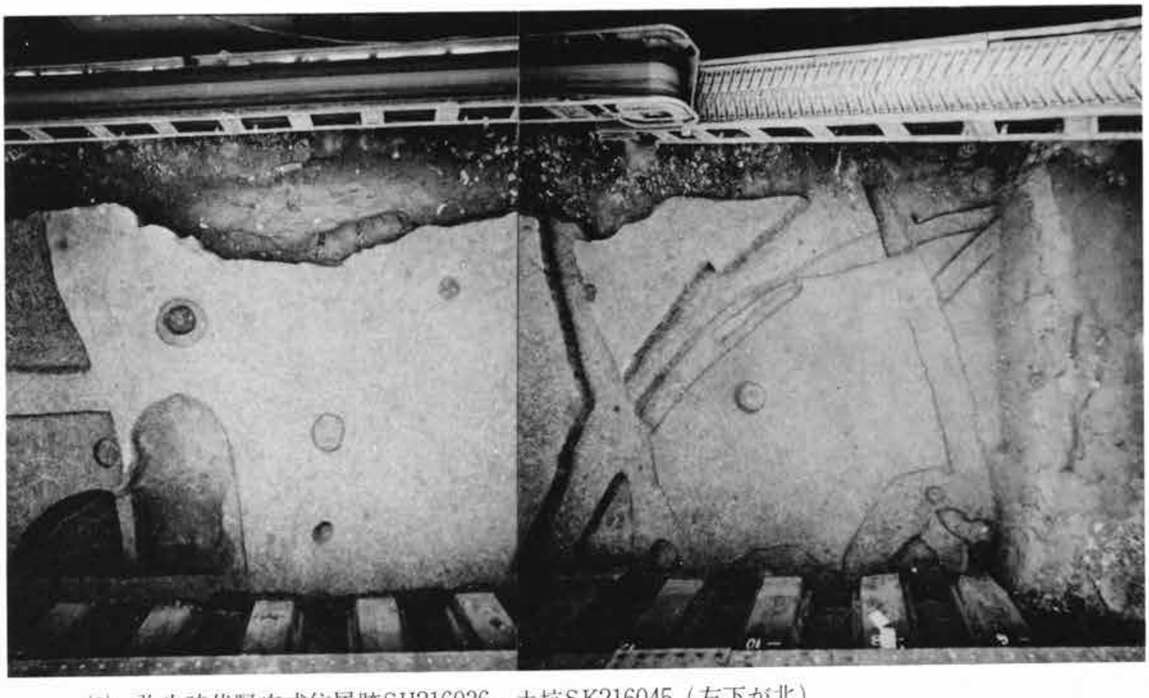
(1)　河道SR216049出土遺物-1（北から）

(2)　河道SR216049出土遺物-2（北から）

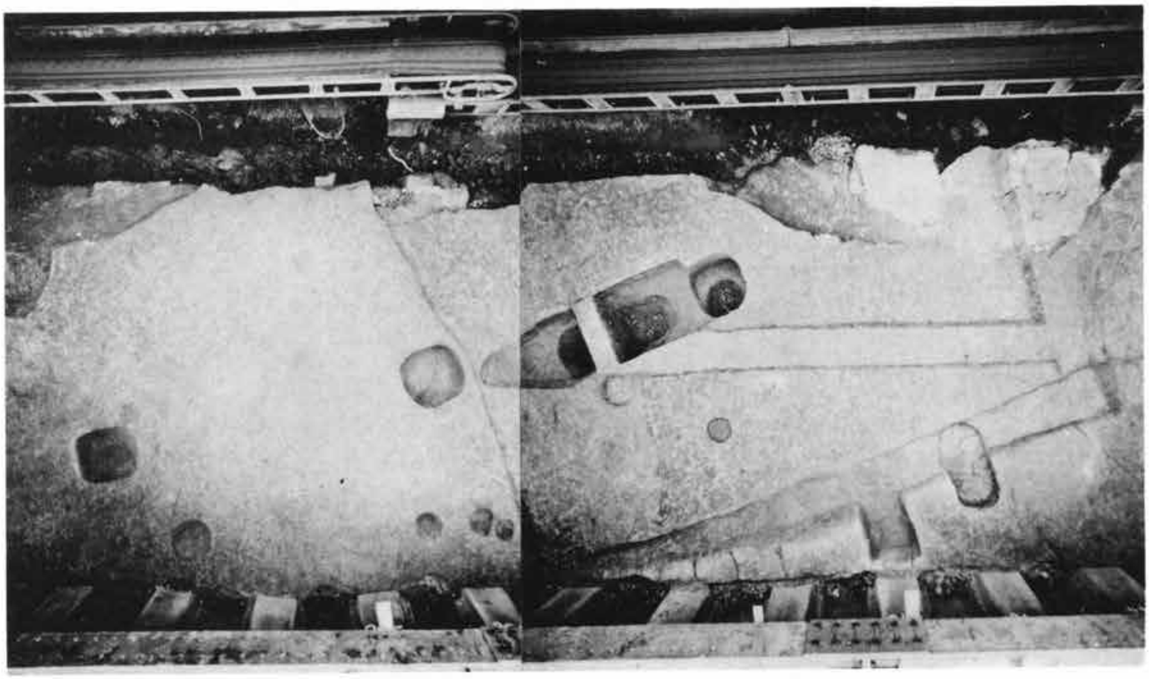
(3)　河道SR216049出土遺物-3（北から）



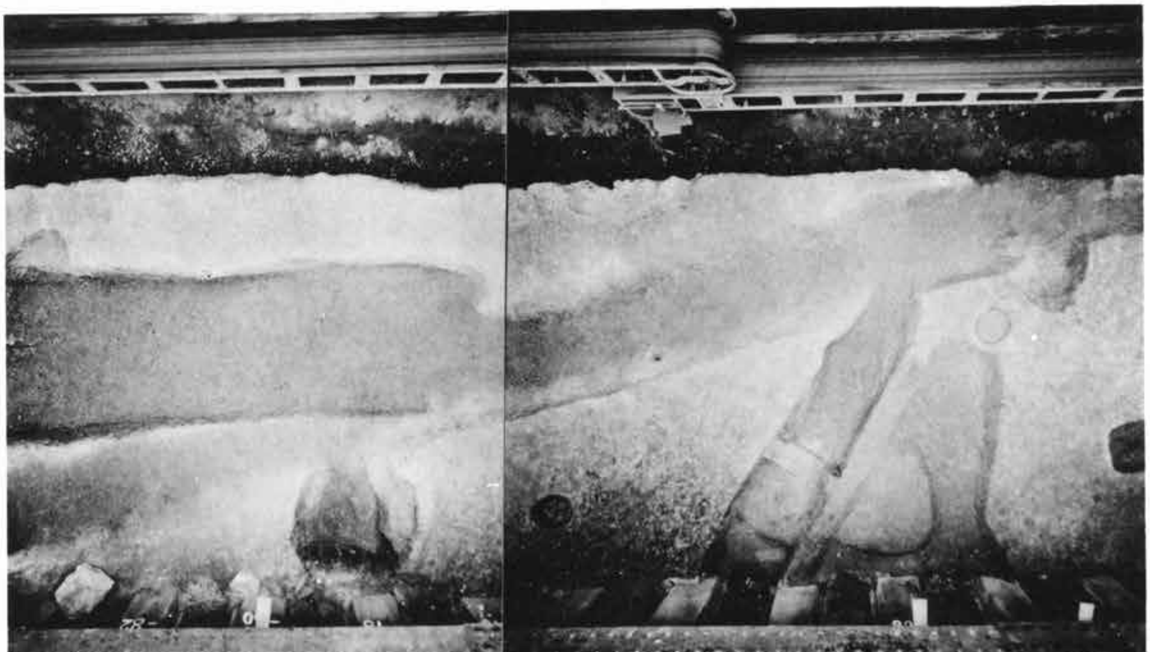
(1) 古墳時代竪穴式住居跡SH216009（左下が北）



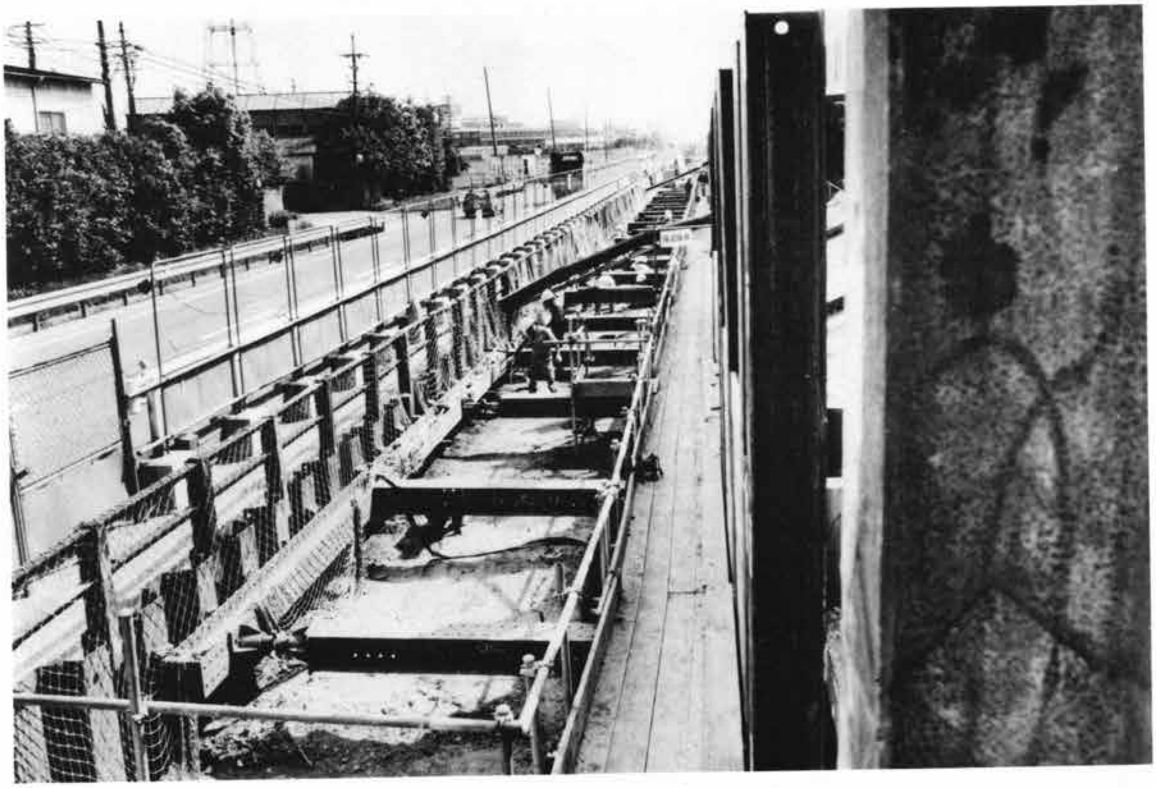
(2) 弥生時代竪穴式住居跡SH216036・土坑SK216045（左下が北）



(1)　弥生時代土坑SK216052（左下が北）



(2)　弥生時代土坑SK216044・SK216050・SK216051（左下が北）



(1)　長岡京工区7ブロック第22トレンチ全景（北から）

(2)　河道SR216042（南から）

(1)　環濠SX216060遺物出土状況-1（南から）

(2)　環濠SX216060遺物出土状況-2（南から）

図版第47　　長岡京跡左京第216次・長岡京工区

(1)　長岡京工区７ブロック第23トレンチ河道SR216013（南から）

(2)　長岡京工区７ブロック第23トレンチ（北から）

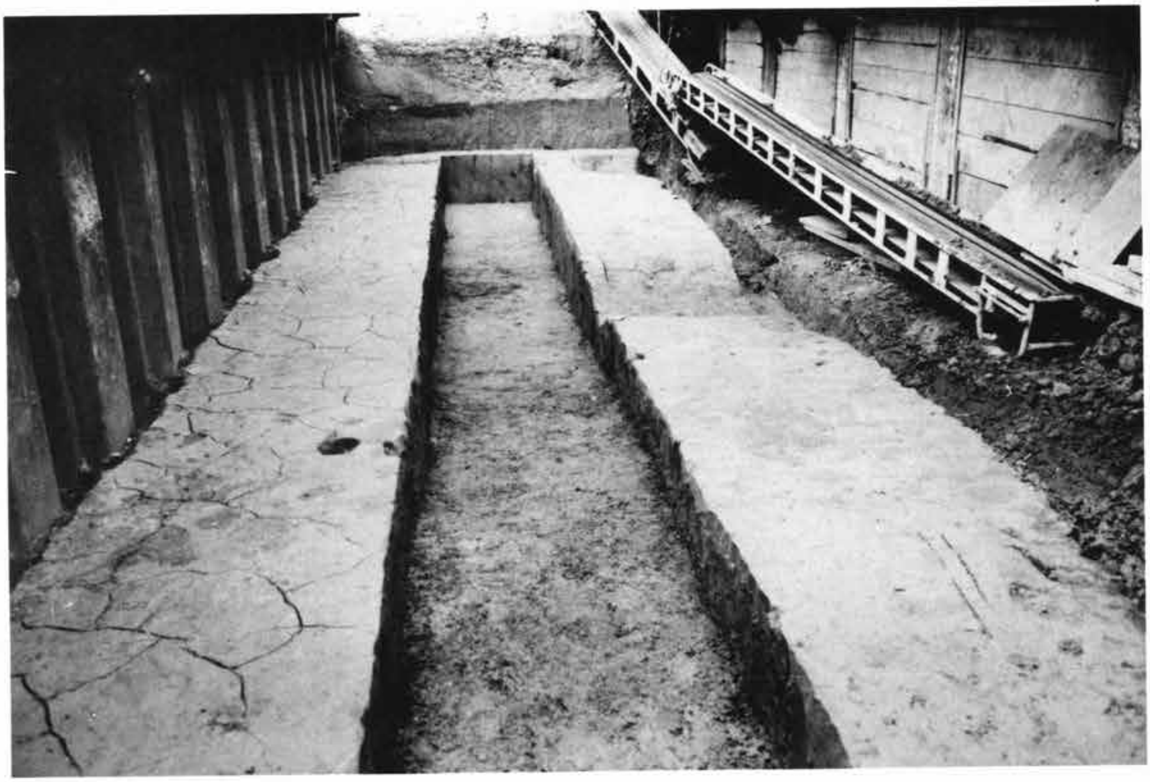
(1)　土坑SK216012-1（西から）

(2)　土坑SK216012-2（西から）

(1) 長岡京工区８ブロック第11-1トレンチ 溝SD216069（南から）

(2) 溝SD216069断面（東から）

(1) 長岡京工区８ブロック第11-2トレンチ 溝SD216067・土坑SK216068（北から）

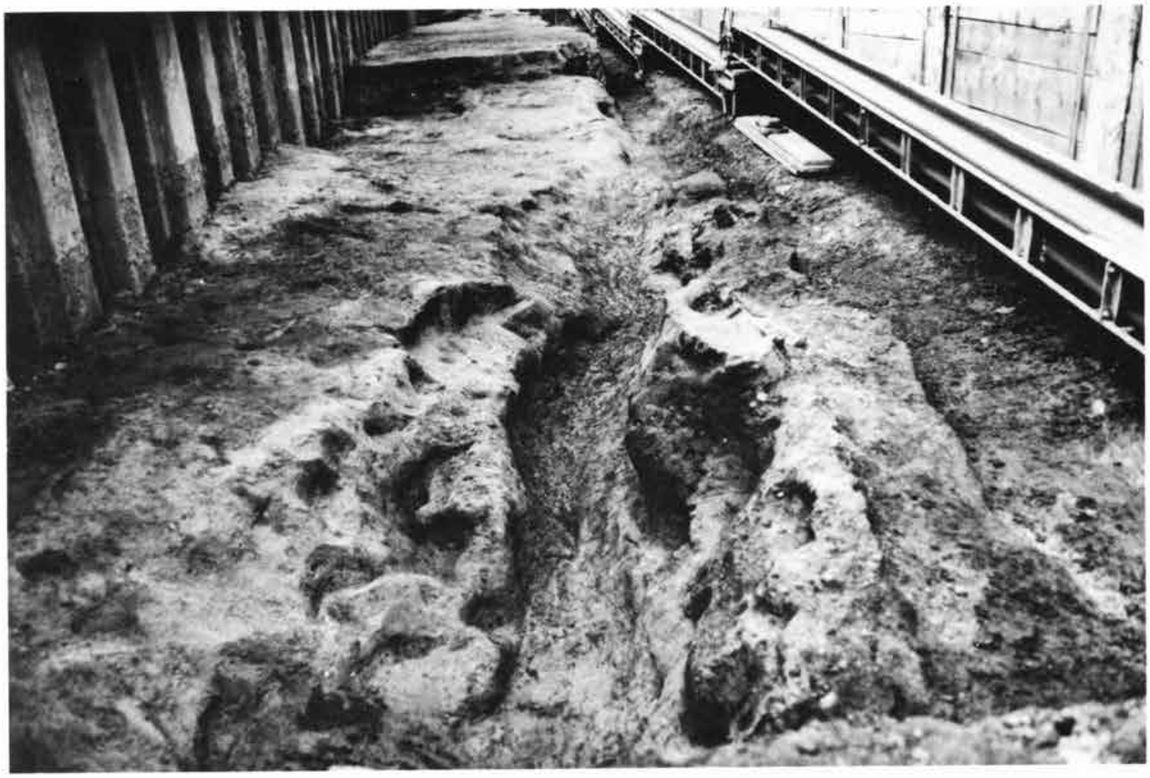


(2) 長岡京工区８ブロック第11-2トレンチ（南から）

(1)　長岡京工区８ブロック第24－２トレンチ（北から）

(2)　掘立柱建物跡SB216070（南から）

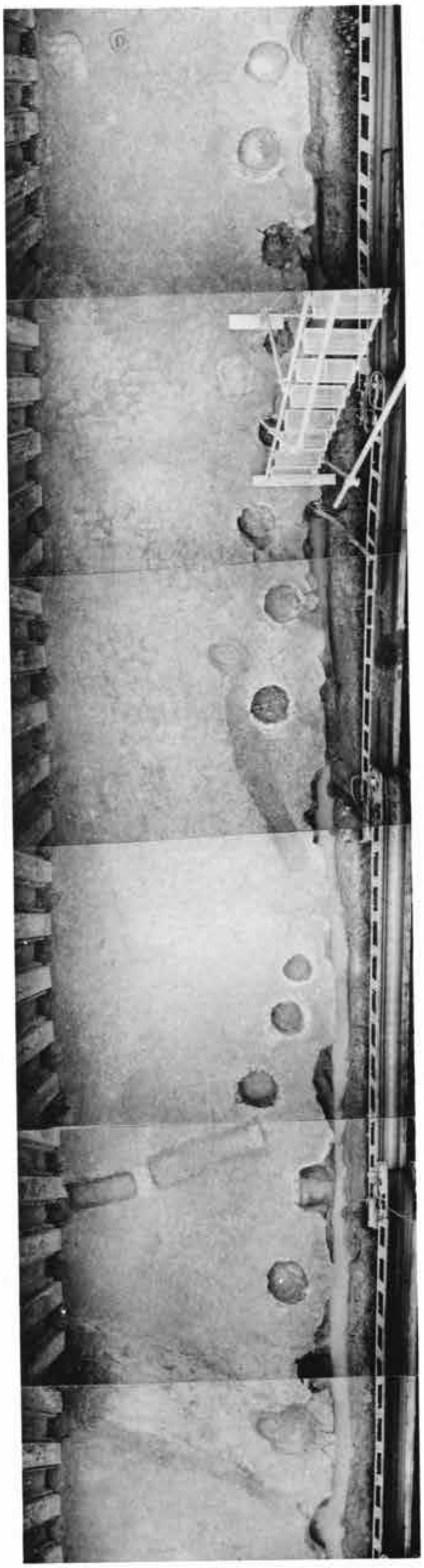
(1) 長岡京工区９ブロック第12トレンチ 溝SD216072（南から）



(2) 河道SR216046（南から）

(1)　長岡京Ｉ区９ブロック第25トレンチ（北から）

(2)　河道SR216046（南から）



(1)　長岡京工区10ブロック第13トレンチ（左上が北）(2)長岡京工区10ブロック第26トレンチ（左上が北）

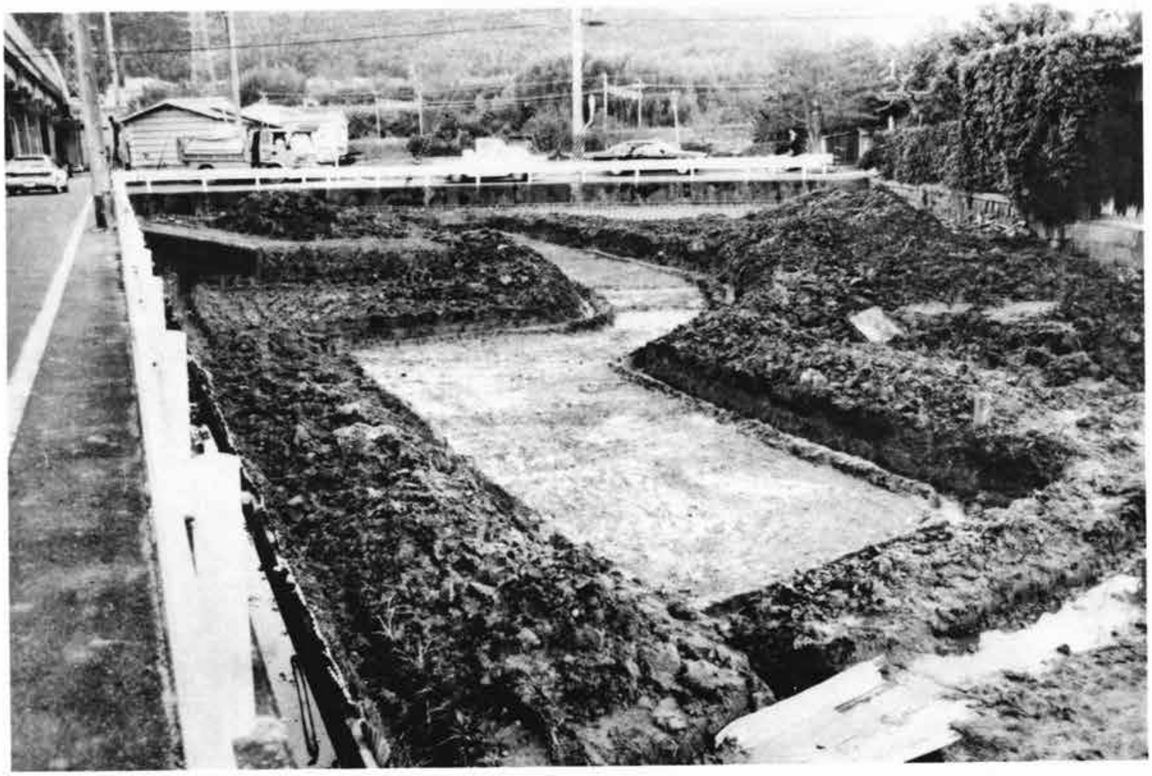
(1) 長岡京工区11ブロック第14トレンチ（南から）

(2) 長岡京工区11ブロック第14トレンチ中・近世溝（南から）

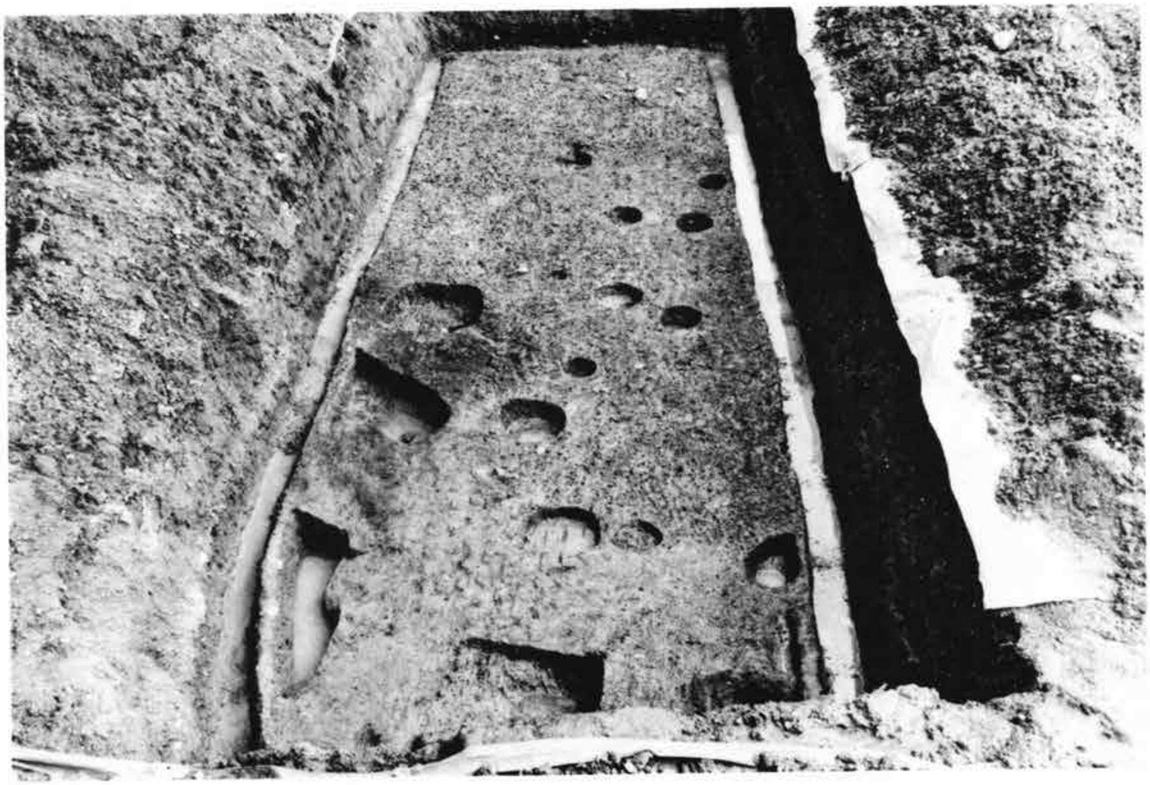
(1)　長岡京工区11ブロック第27トレンチ（南から）

(2)　土坑SK216085・SK216086（南から）

(1)　調査地遠景（南から）



(2)　7トレンチ掘削状況（南東から）



(1)　15トレンチ掘削状況（西から）

(2)　16トレンチ掘削状況（東から）

1

2

3

4

5

6

7

8

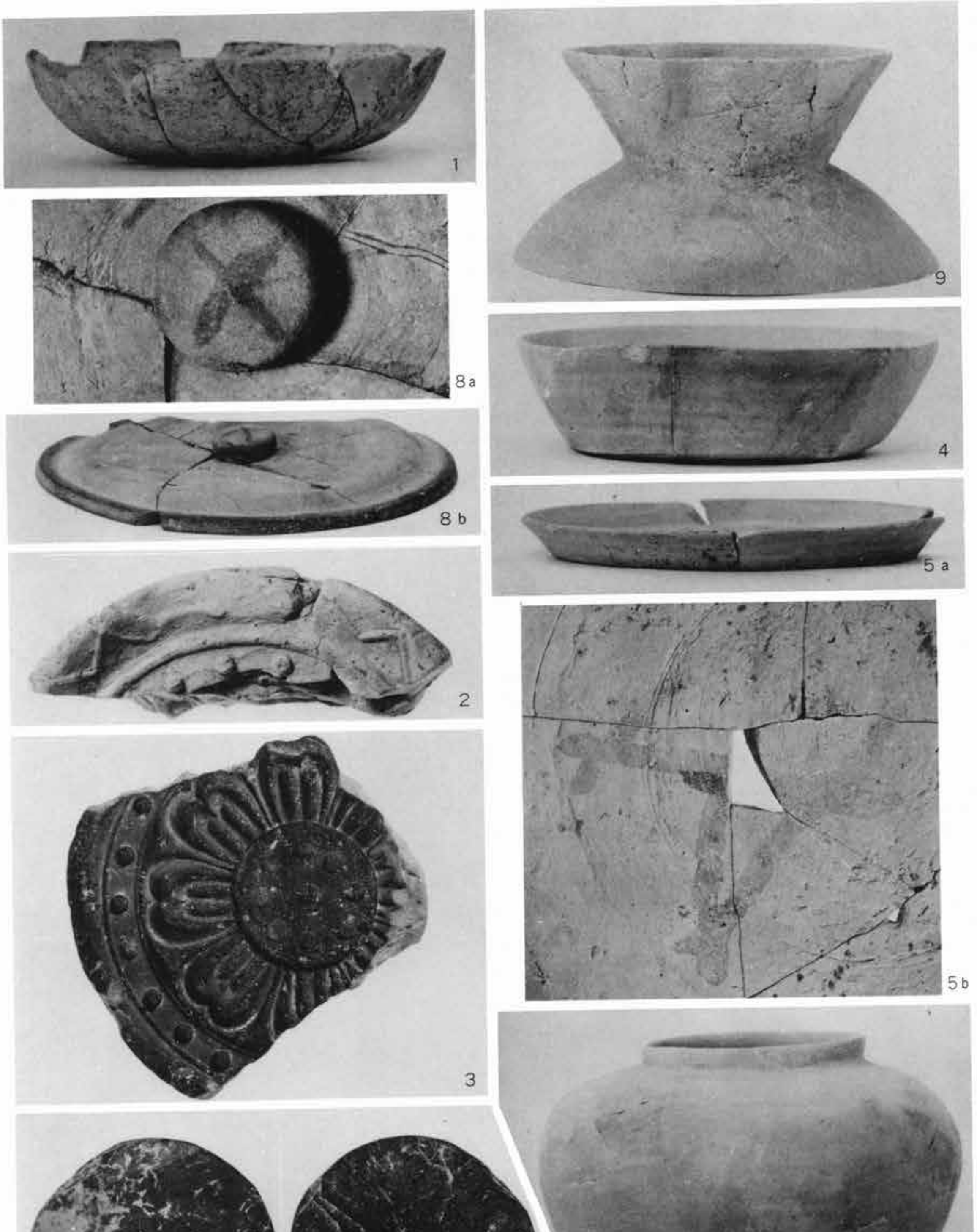
9

出土遺物１（１～７.第８トレンチ出土，1･4．SR216033，８･９.第21トレンチ出土）

出土遺物2 （1.第9トレンチSD216004, 2～4.同SR216043, 5・6.同SK216047, その他.同包含層）

出土遺物３　（第22トレンチ　1.包含層，２・３．SD216015，４．SD216040，５・６．SR216042，
７．SX216076，８．SK216078）

図版第62　長岡京跡左京第216次・長岡京工区



出土遺物４　(1～6．第10トレンチSD216015，７．第22トレンチSD216015，その他．第22トレンチ包含層)

1

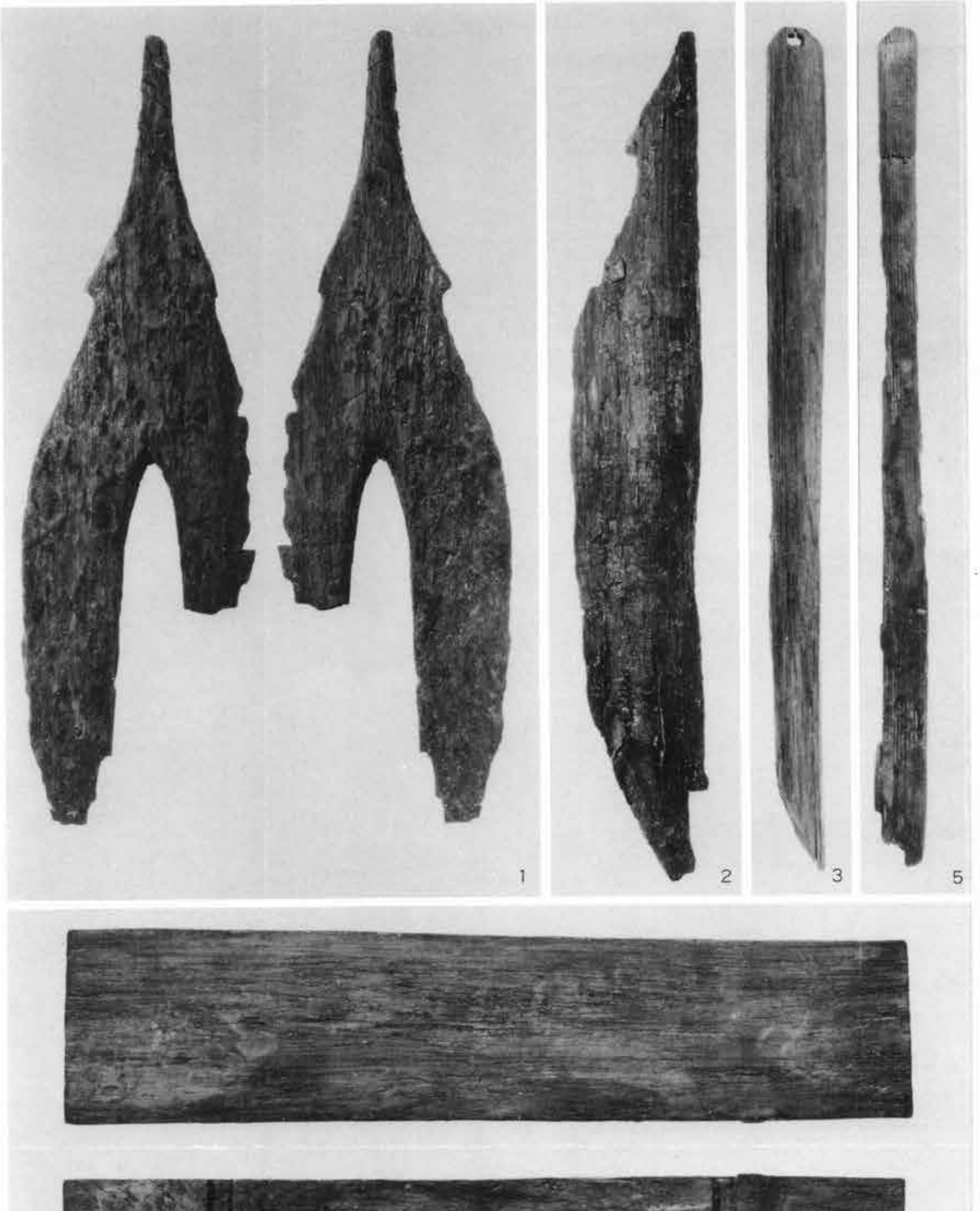
2

3

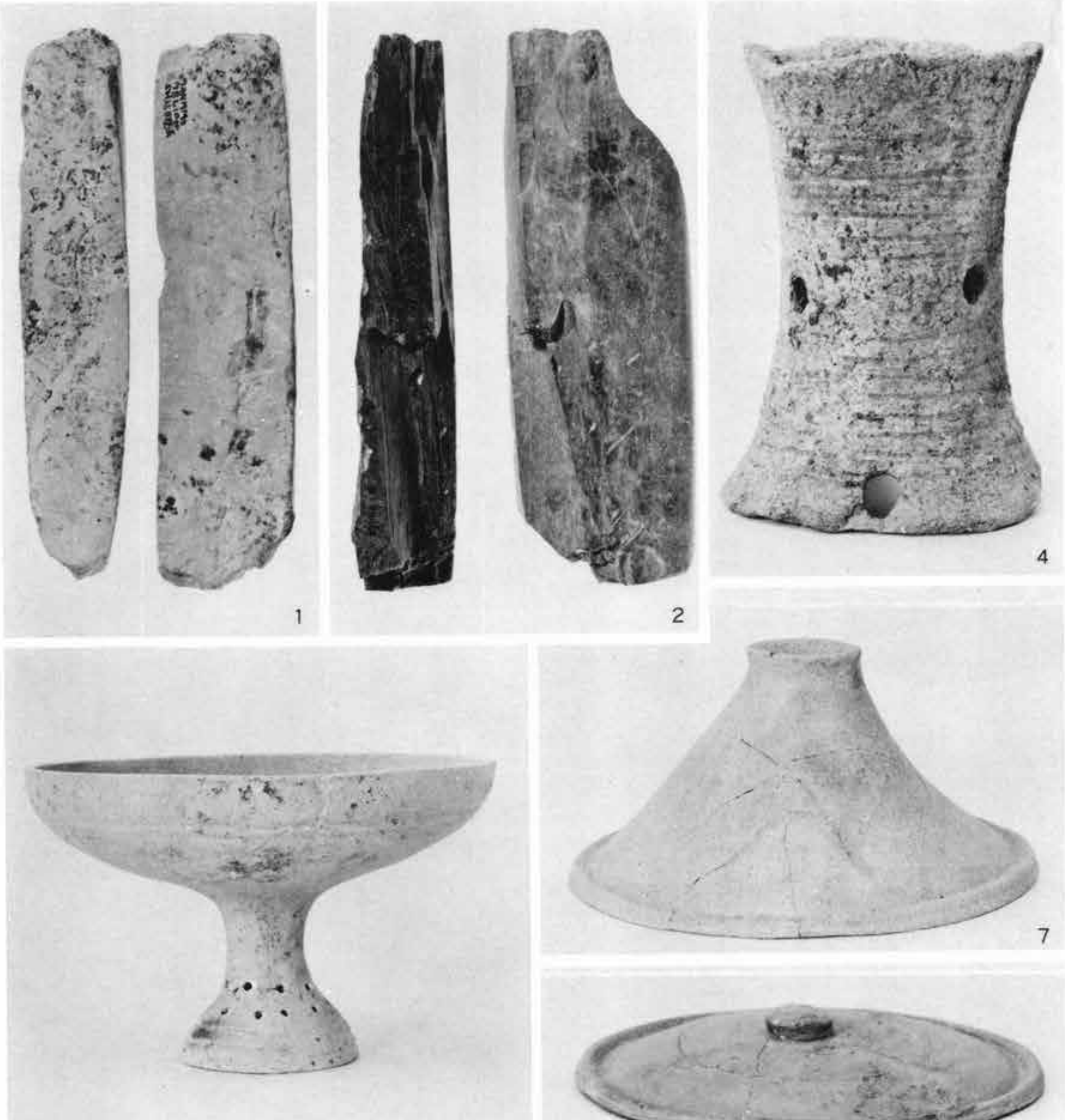
4

5

出土遺物５　（1．第10トレンチSH216009，その他，第10トレンチSR216049）



出土遺物６ （1～4．第10トレンチSR216049出土， 5．第12トレンチ）



出土遺物7　(1～4.第10トレンチ，5.第23トレンチ，6.第24トレンチ，7.第25トレンチ)

京都府遺跡調査概報　第40冊

平成3年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 京都府向日市寺戸町南垣内町40の3
TEL（075）933－3877（代）

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
TEL（075）256－0961（代）